巻き込まれ異世界召喚記

結城ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巻き込まれ異世界召喚記

【Ｎコード】
Ｎ５８８３Ｔ

【作者名】
結城ヒロ

【あらすじ】
楽しみにしていたスキー旅行に向かっていた優斗たち４人組。
夜行バスで白銀世界に向かっていたはずが、気付いたらお城の庭園に。
異世界に飛ばされた優斗はそこで魔法学院に通いながら様々なことに巻き込まれていく。

巻き込まれました、異世界召喚（前書き）

異世界召喚もので、半チートもいるファンタジーです。
恋愛あり学園ものなんで気を張らずの読んでいただけると幸いです。

巻き込まれました、異世界召喚

目の前に荘厳な城がある。
自分たちはそれを確認できる庭園に立っている。

「これって……あれかな？」

優斗は友人たちに同意を求める。

「まあ、そーじゃね？」

「た、たたた、た、たぶん！！」

「だと思う」

修、卓也、和泉の同意を得て優斗は軽くため息をついた。

「どうしてこうなったんかな？」

「知るか」

「し、し、知るはずがないだろ！」

「みんなに同じ」

誰も彼も返ってくる言葉は同じ。

「とりあえずはこうするか」

修はそう言うと、両手をあげた。

優斗ほか3人も彼に習って手をあげる。

そう、彼らの今の状況は――

剣や槍を持った兵士たちに囲まれていた。

巻き込まれ異世界召喚記

1話

『巻き込まれました、異世界召喚』

高校２年の冬休み、優斗たちはスキー旅行を予定していた。
優斗や修の部活が少し長い休みに入ったということもあるし、高校生なのだから友人だけで旅行に行きたい、といった願望もあった。
そうして優斗、修、卓也、和泉の４人は休みを合わせてスキー旅行に出ることにしたのだ。
夜行バスに乗り、友達４人だけで行く初めての旅行。
全員が図らずもテンションがあがった。
とはいえ、次の日の朝から迎える銀世界に向けて遅くまで起きているわけにもいかない。
他の乗客にも騒いでは迷惑だ。
夜中の１２時を過ぎたころには全員、静かに寝静まった。
そしてバスがあと１０分ほどでパーキングエリアに入り休憩を取る、というアナウンスがあったあとだった。
大音量ではないにしろ、その声は確かに優斗には聞こえていて、薄っすらと耳に残っているのは覚えている。
そして数十秒後、だっただろうか。
大きな揺れを感じた。

何だ？　と思ったときにはすでに目の前が真っ白な光に覆い尽くされていた。

そして……今へと至る。
取り合えず全員で手を上げると、彼らは無言で僕らを城の中へと導いていった。
自分たちを連れて行っている兵士たちは注意を４人に向けながらも戸惑った表情を浮かべている。
耳を傾けてみれば、何を喋っているのかがわかった。
なぜかはわからないが、彼らの言葉を『理解できる』という事実が

あったのが幸いだ。
兵士たちからは『まさか!?』とか『本物か?』などといった言葉が聞こえた。

「なんかあいつらの言葉が理解できんの、俺だけ?」

修が訊いてくる。

「いや、みんなわかるんじゃねーかな」

「僕もわかるけど……」

「オ、オレも」

まだビクビクしながら卓也がうなずいた。

「お前、いい加減落ち着けって」

「い、いや、だっておかしいでしょ!? スキーに来たはずなのに広場にいるし……っていうか城が目の前にあるなんて! しかも明らかに日本人じゃないのにオレら言葉わかるし!」

卓也が落ち着かないのもわかる。
兵士が口を挟みはしないものの、自分たちを見ている。
どうやら会話をするのは許されているようだ。

「そりゃ異世界召喚ものってそういうものだろ」

和泉が何事もないように言った。

「いや、そんなあっさり言うなよ」

「だよな」

「修も同意しない」

「でもそれ以外ねーし」

「まあ、そうなんだけどさ」

否定はできない。

「それに“一つなぎの大秘宝”にもあっただろ。『人が想像できるすべての事は起こりうる現実だ』ってさ」

有名な漫画に書かれてある台詞の一つを抜き出す修。

「そ、そんなんで納得していいの？」

卓也が優斗を見る。

「んー、一応はあれ実際いる有名な学者の台詞だし。実際にここにいるんだからしょうがなくないかな？」

自分以外の3人が落ち着いているのを見て卓也大きくため息をついた。

「……お前ら見てると、慌てるのが馬鹿らしくなってくる」

「修や和泉はともかくとして、これでも僕は驚いてるよ」

「顔に出せ！」

「無茶を言うな」

武器に囲まれているというのに、気付いたら変な場所にいるというのに、随分と余裕のある会話をしていると優斗は思う。
もちろん、それは友人たちが一緒だからなのだろう。
さすがに自分一人だけでこの状況だったのなら、卓也と同じになっていたのではないだろうか。

「さて、と。卓也も落ち着いたことだし、状況を考えよう」

優斗はまとめるように切り出す。

「たぶん、というよりほぼ絶対に僕らは異世界に飛ばされました。
理由はいくつかあるけど、確実なのは気候が違いすぎる」

雪国を目指していたのに、今の自分たちがいるのは温暖な気候。冬用の格好がことさら暑さを助長させている。
時計を確かめてみても、自分達が眠ってから1時間と経ってない。
さすがにこれでは何と言おうと国外説は無い。さらに外にいるから屋内でもない。いきなり逆の半球に行かないかぎりこうはならない。

「オレらが眠っているあいだにドッキリで――」

「それはないな」

修が否定する。

「なぜ！？」

「ロマンがない」

「……」

さすがにその返答はないだろ、と優斗は心の中でツッコミを入れる。

「それにギャルゲでもＲＰＧでもあるだろ。こういうの」

「いや、まあ……あるけどさ」

修の言葉に否定はできない卓也。

「お前、オタクが二次元設定を否定したら終了だろ」

「だからって自分の身にそれが起こると思わないじゃん！」

アニメはアニメ、ゲームはゲームだろ、と言いたい。

「そうなったときの想像ぐらいはしろよ」

「だよな」

修の言葉に和泉が同意する。

と、ここで兵士たちが止まった。

厳かな扉がゆっくりと開かれ、玉座が見えてくる。

「謁見の間ってやつか」

「だろうね」

和泉の言葉にうなずく優斗。

「ということはデフォルトな異世界召喚から考えると、罪人か勇者認定かのどっちかだろう」

「で、できれば後者がいいんですが」

「僕も後者に同意」

「まあ、話せばわかんじゃん」

卓也、優斗、修も流れはテンプレに沿ってるな、と思う。

はてさて、どうなることか。

玉座のすぐ近くまで通される。

そこには威厳ある王様、傍らには王妃、そして――お姫様がいた。

王が口を開く。

「君たちが異世界のものかね？」

威圧するわけではないが、聞いただけで『ああ、王様だな』などと思う声が４人の耳を通り抜けていく。
そして王の言葉によってここが異世界であることを確信する。

「おそらくは」

返答は優斗がした。
こういう、キッチリとした場面のときは基本的に優斗に任せるのが彼らの中での必然的な流れだった。

「そうか。呼び出してすまなかった」

「ということは貴方様が我々をこの地へ呼んだ、と解釈してよろしいのでしょうか？」

「その通りだ」

「なぜ？　とお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんだ」

王様は蓄えた髭を撫でると、４人を見回す。

「君たちの中に勇者の刻印を持つものがいる。その者にわが国の勇者になってもらいたいのだ」

「勇者の刻印、ですか？」

４人は総じて『後者来た！』と心の中で喜ぶ。

「そうだ。先代の勇者が老衰で亡くなり、後任を呼ばなければならなかった。我が国では代々、勇者の刻印を持つものを召喚して我が国の勇者になってもらっているのだが……」

そうして王様は少しだけ困ったように４人を見た。

「４人も異世界の人間が来るとは予想外だった」

「それはもしかして、その勇者以外の我々は……その……」

ふと、変な予感がよぎる。
というよりも確定だろう。

「巻き込まれた、ということでしょうか？」

「……そうだろう」

「ですか」

「勇者にも申し訳ないことをしているのはわかるのだが、巻き込んでしまったとなると、勇者以外の者にはさらになんと言えばいいのやら」

本当に申し訳なさそうな表情をする王様。
まさか巻き込まれた、というのは以外だったが自分ら４人が一緒に異世界に来た、というのは同時に心強くもある。

「いえ、気になさらないでください。それで勇者の刻印というものはどこにあるのでしょうか？」

さして気にした様子もなく優斗が尋ねると、王様はかぶりを振って気を取り直す。

「右手の甲だ。強く力を込めて念じれば浮かび上がってくる」

王様の言葉に優斗、卓也、和泉はまず修を見た。

「な、なんだよ？」

「主人公体質のお前だから確実に刻印持ってる。さっさとやれ」

和泉が促す。

「お前ら、リーダーの扱い悪くね？」

一応、優斗たちのグループでリーダー役になっているのは修だ。あくまで一応ではあるが。

「ご都合リーダーだからいいんだよ」

「そうだ。さっさとやれ、オレらのご都合リーダー」

「こういうときにこそ力の発揮どころだよ」

先ほども述べたとおり、修は主人公体質だ。

運動神経は抜群、そこそこ勉強もできるし顔もいい。

『何かを持ってる』と思わせる。

まあ、オタクなのが全てぶち壊しにしてはいるが。

それでも主人公体質なのは間違いない。

「わかったよ。まったく」

ぶつぶつ言いながらも、修は右手の甲に力を込める。
勇者の印は――あっさりと出た。

「やっぱり」

「オレらやるだけ無駄だよね」

「まあな」

優斗、卓也、和泉は無駄なことをせずに喜ぶ。

「王様、勇者の刻印を持っているのは彼――内田修というものです」

振り返り、優斗は結果を王様に告げる。

「他の3人――つまり私、宮川優斗、佐々木卓也、豊田和泉は何も力を持っていない異世界者ということになるのですが……どうすればよろしいでしょうか？」

「申し訳ないが召喚は一方通行であり、元の世界に返す方法は現在に至っても確立されていない」

ここに来て帰れない宣言が来た。
どうすんの？　と修以外の3人が視線を合わせる。
もちろん修を残して自分の世界に帰ることは、友達であるので考えてはいないものの、さすがに元の世界に帰る方法が確立されていないとは驚きだ。

「しかし、異世界の者たちは皆、優れた能力を持っていると聞いている。勇者の刻印がなかろうとな。そして勇者の年齢が若いということもある。できれば友人のそなたたちが勇者を支えてくれると助かるのだが」

つまりはよくある『異世界に来たら能力あがってる』というパターンか。

そして視線で卓也と和泉に王様の発言に乗っていいか確認を取る。

こくん、と二人から頷かれた。

「そのご提案の乗らせていただいてもよろしいでしょうか。我々も彼一人にするのは心配だったもので」

と、ここで気付く。

「そういえば修、お前はこの国の勇者になるんだよね？」

そういう方向性で優斗は会話を続けていたが、肝心な本人に確認をとることを忘れていた。

「そりゃ勇者やったほうが楽しいだろ」

ですよね。

「というわけで、よろしくお願いいたします」

◇　◇

王様との話が終わると、王様の傍らにいたお姫様が自分たちのところまで寄ってきた。

「貴方様が新しい勇者様なのですね！」

美しく、長い金髪。吸い込まれそうな碧眼。そして均整の取れたプロポーションを持つお姫様。
そんな彼女が修の手をしっかりと握った。

「ワタクシ、第一王女のアリシア＝フォン＝リライトと申します。アリーとお呼び下さい」

そして修の手を握りながら、他の三人にも頭を下げる。

「皆様もよろしくお願いいたします」

ペコリ、と三人も頭を下げる。
そしてすぐに直感がよぎった。

――あいつ、早速フラグが立ってるんじゃね？

勇者の刻印を持つイケメン。
そして同世代。
フラグとしては完璧だと思う。

「どう思う？」

「まあ、立ったんじゃない？」

「相手は三度の飯よりギャルゲが好きな修だぞ？」

「いや、お前も同じじゃん！」

「そうだけど」

「けど、お姫様に攻略できるのかな？」

「あいつ、リアル恋愛はお子様だからなぁ」

「それは全員がそうだろ」

「頑張れって応援だけはしてあげようよ」

こそこそと男三人で密談する。

「おい、何を喋ってんだ？」

「気にするな」

とりあえず、お姫様のお相手は修に任せるとして。

「じゃあ王様と話を詰めてこようと思う」

優斗が切り出す。

「いってらっしゃい」

「いってら」

「……お前らも来いよ」

と言いつつも、優斗は連れて行くのを諦めて王様と今後のことについて話し合うことにした。

◇　　◇

「とりあえずは分かった状況、決まった現状を全員で共有しようと思う」

まず自分たちは異世界に来た。
そして王様に修が勇者と認定された。
自分たちはそれを助けるために残る。

「さて、と。ここまでは修達も知ってる話。で、ここからが追加情報ね」

優斗は言葉を続ける。
自分たちはこれから魔法学院に通うということ。
寝食はそこの学院にある寮を使う。
異世界者ということは基本的に隠すこと。
まあ、基本的な異世界ものの流れだ。

「という感じかな」

「へぇ、やっぱり魔法あるんだ」

「ほんとに異世界なんだって実感するよ」

うんうん、と頷く。

「それでここからがちょっとしたバッドニュース」

「なんだ？」

「王様と話をしててさ、気付いたんだけど……」

つい先ほど、王様との会話を思い出す。

「僕たち、向こうの世界で死ぬ直前だったみたい」

「「「……はぁ？」」」

優斗の発言にハテナマークを灯す三人。

「王様に訊いたんだよね。『今まで勇者になることを断った人はいるんですか？』ってさ。そしたら『基本的に異世界の人間を召喚できる資格として人生に悲嘆した人物、もしくは死にそうな者』って言ってたんだよ。つまりはこっちに来ても問題がない人がこの世界にやってくるってことかな」

「……で？」

修が先を促す。

「少なくとも、スキー旅行に行く状況で僕らが人生は悲嘆するわけがない。ということは後者の『死にそうな者』に当てはまるわけで。こっちに来る直前に感じた揺れる感覚。あれってこっちに召喚される前触れっていうより、バスが横転しただけなんじゃないかと」

「要するに、俺らってあっちでは……」

「たぶん死亡扱いじゃない？」

「……マジ？」

「マジ」

卓也の確認に優斗は頷く。

「それで、まさしく死ぬ瞬間だった修がこっちに召喚されて、僕らは四人で固まって寝てたから他三人は巻き込まれてこっちに来た。というのが僕の予想」

「じゃあ、修様々ってわけか？」

「そういうことだね」

つまり修の主人公体質で助かった、というのが事の真相。

「まあ、僕は両親いないし、この世界にいたところで問題はないけど」

「俺は仲悪いし、なんか清々してそうだ」

「オレはあの家にいるのも結構キツかったし、別にこっちでいいし」

「うちはいなくなったところで『旅に出たんだな』で終わるぞ」

四人で顔を見合わせる。

「つまりは元の世界に戻れなくても問題ないってことか？」

修が結論付ける。

「だね」

優斗はう～ん、と伸びをする。

「だいたいこんなとこだけど、何か聞きたいことある？」

「そんじゃあ、質問」

修が手を上げた。

「魔法って簡単に使えんの？」

「みたいだよ。簡単なやつなら、どんな人でも魔法は使えるみたい」

「文字とかって読めるの？」

「読めない」

「……覚えろってか？」

「そういうこと」

と、ここで伝え忘れていることがあった。

「あ、でも僕らのために家庭教師を付けるって言ってたよ」

「へぇ、そうなんだ」

「うん。今のところ決まってるのは修の家庭教師だけ。他三人は明日中に王様が決めるってさ」

「何で俺だけ決まってるんだ？」

「僕が『姫様でいいんじゃないですか？』って言ったから」

「……おい」

「問題あった？」

「まあ……特にないが」

ただ、なんとなく釈然としない。

「そういうわけで、明日の予定は学院に通うための制服の採寸とかあるから、起きて朝飯食べたら王様のところに向かいます」

「りょーかい」

「オッケー」

「はいよ」

「それじゃ、寝ましょうか」

そうして四人は就寝する。

長い異世界での一日目は、こうして終了した。

家庭教師がつきました

異世界に来てから2日後。
優斗達は自らの家庭教師と対面するために城の一室へと集められていた。

「どんな人が来るんだろうね？」

「ざます、とかいう家庭教師が来なければ何でもいい」

「優しそうな人がいいなぁ」

「俺だけ、その楽しみがないんだけど」

「シュウ様。わたくしでは不満でしょうか？」

同室にいるアリーに少し悲しそうな顔をされて、修が慌てて否定する。

「い、いや、そんなことはないけど」

「それならいいのですが……」

と、アリーはここで表情を切り替える。

「家庭教師は同じ学院、同年代で信頼できる貴族の学生です。学院生活での何かしら不便なことが多いと思いますから、そのサポートも兼ねています。何かわからないことがあれば、遠慮なく申してくださいい」

そしてアリーは侍女に合図を送ると、侍女は扉を開けた。

しっかりとした足取りで優斗達と同年代の少年少女が制服姿で入ってくる。

「左からフィオナ＝アイン＝トラスティ。彼女はユウト様の家庭教師となります」

艶やかな黒髪が背中まであるストレートヘアー。出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいるモデルのようなスタイル。大和撫子を連想させる和風の美少女だった。

「よろしくお願いいたします、ユウト様」

ただ、その割には表情があまり動かない。
あまり感情を表に出さないタイプなのかもしれない。

「続いて中央、ココ＝カル＝フィグナ。タクヤ様の家庭教師です」

「あ、あの、よろしくお願いします」

同年代の少年少女と比べるとちんまりとしているが、栗色のショートカットと愛らしい瞳が身長と相まって可愛らしさを引き立てている。
卓也自身が同年代よりも少し小さいので、隣に立ったところで違和感は生まれないだろう。

「最後にクリスト＝ファー＝レグル。彼はイズミ様の家庭教師となります」

「よろしくお願いします」

キラリ、と白い歯を見せて微笑む。
何というか、金髪さわやかな王子様が絵本から飛び出てきたようだった。
二枚目ではあるのだが、同時に三枚目の要素も持ち合わせている、そんな感じだった。

「……なんでだ」

と、ここで和泉が声を震わせた。

「なんでなんだ？」

もう一度、同じことを言う。

「あ、あの、何か不都合があったのでしょうか？」

アリーが少しうろたえたようにしている。
家庭教師三人もどうしたのか、と。
何か自分達に粗相があったのかと不安が生まれる。
が、他の三人は何が言いたいのかわかったので、とりあえず代表して卓也が和泉の頭をはたいた。

「気にしないで下さい。自分だけが男の家庭教師だったので、なぜ『女の子』じゃないだと思っているだけですから」

優斗が説明して、

「特にあんたらが悪いわけじゃないから気にしないでくれ」

修がフォローする。

「それならばよろしいのですが……」

「よろしくない！」

頭をはたかれた和泉が勢いよく立ち上がる。

「なぜ！　なぜ俺だけがこんなイケメン家庭教師なんだ！」

褒められているのか貶されているのかわからないので、曖昧な表情を浮かべるしかないクリスト。

「なぜ、と申されましても……信用足りうる方を選別したあと、一番良い相性のペアを作っただけなのですが」

「どのようにですか？」

「我が国の宮廷占い師によって相性診断をしてもらっただけなのですが」

一応、この国の一番偉い占い師が行ったことなので間違いはないと思います、とアリーは付け加える。

「そういうわけらしいから、諦めろ」

隣では卓也が和泉の肩を優しく叩こうとする。

だが、

「いや、こんなイケメンなのだから女装をすれば――ッ！！」

トンチンカンな発言をしようとした和泉を、卓也が椅子ごと蹴り飛ばす。

あまりにとんでもない光景を目にして、どう対処していいか分からないアリー以下教師三人。

優斗は和泉が復活しないのを見届けてから、何でもないように言葉を続けた。

「相性のことについてはわかりました。こちらとしても色々と教えていただく立場です。なにとぞ問題は多いかとは思いますが、よろしくお願いいたします」

殷懃に優斗が頭を下げる。
それに習って修と卓也も頭を下げた。

「え、えっと、その……いえいえ、こちらこそ勇者様御一行に粗相がないように気をつけますので……」

言いながら、チラリとアリーは和泉を見た。
あれは大丈夫なのだろうか、と。

「皆様も和泉については気にしないで下さい。クリスト様もあんなのが生徒では苦労すると思いますが、是非とも見捨てないであげてください」

「い、いえ、それは異世界の方ですから丁重に扱わせていただくのですが」

「そんなそんな。和泉をそんな風に扱っては駄目です。ぞんざいに、テキトーにあしらう術を持ってください。でないとストレスになってしまいます」

「そうだな」

「その通り」

異世界組が頷く。

「というより、こちらが生徒なのですから丁重に扱われても困ります」

こちとら日本で言えば一端の平民だ。

貴族の方々に無礼できないのはこっちのほう。

「それに同じ学院の生徒ですし、私達としましても異世界から来たことを基本的には隠して過ごすことになっています。皆様に丁重に扱われるといぶかしむ人がいると思いますよ」

優斗にそう言われると、困ったような表情をクリスト達は浮かべた。元来、この世界では異世界から来たのは最高級の客人であり、貴族よりも位が高い方々だ。

「ですが――」

「あ～、もうやめやめ！！　丁寧すぎる言葉は駄目！　面倒なの禁止！」

と、ここで修が停滞しそうになった空気をぶった切る。

「同年代、同じ学院の生徒、それ以上でもそれ以下でもなし！　だから気楽に行こうぜ！」

そしてパパッと自己紹介をする。

「俺は内田修。勇者の刻印とかあって、この国の勇者をやることになった。こいつらからはご都合リーダーって呼ばれてる。修って呼んでくれ、よろしく！」

ポカン、とした表情を浮かべる家庭教師達。
優斗と卓也はクスクスと、次第に大きな声で笑った。
そう、これが修なのだ。
シンプルな考えが彼の真骨頂だ。

それに卓也も優斗も乗っかった。

「続いて佐々木卓也。料理が得意なので、この世界の料理を作れるように頑張ろうと思う。卓也でいいよ。よろしく」

「さらに続けて宮川優斗。本とかに興味があるので、早く読めるようになりたいと思います。優斗と呼んでください。みなさん、よろしくお願いします」

「で、こっちで倒れてるのが豊田和泉。バカ。以上」

修が簡潔に和泉を説明する。

「では、そちらも改めて自己紹介をお願いします」

笑って優斗はアリーから促す。

「あ、アリシア＝フォン＝リライトです。第一王女です。アリーって呼んでください。ど、同年代の友達募集中です！　次、ココさんお願いします」

急にふられてオドオドしながらココが答える。

「わ、わたしはココ＝カル＝フィグナです。ココと呼んでください。目標は身長をあと１０センチ伸ばすことです。よ、よろしくです！　つ、次はフィオナさん！」

フィオナも表情を微かに驚かせながら続ける。

「私はフィオナ＝アイン＝トラスティ。趣味は……読書。私も、と、

友達募集中……です」

顔をわずかに赤くしながら自己紹介をするフィオナ。
そして最後に、

「クリスト＝ファー＝レグルと申します。皆様からはクリス、と呼んでいただけると助かります。どうぞよろしくお願いします」

これで無事に全員の自己紹介が終わった。
優斗はこのまま、

「ではこれから、お茶会でもしましょう。そして親睦を深めたあと、最初の授業でもしましょうか」

◇　◇

「まず、この世界は『セリアール』と呼ばれています。３つの国が存在し、その全てが不可侵条約で結ばれています。今、シュウ様がいるのはリライト王国。他の国では珍しく四季というものが存在する国です」

「ってことは、春夏秋冬があるってことか？」

「そうです。年ごとに折々の風景を見せるのは旅人にとって絶好の観光になるようです。なので長期滞在者が多いのも特徴ですね」

修は難しいことを考えず、ようは日本と同じなんだな、ということで頭の中をまとめた。

「我が国の通貨は『ＹＥＮ』です」

「円？」

「少し発音が変な感じはしますが、その通りです。おそらくは物の売買システムも話を聞いた限りではイズミさんがいた世界と同じでしょう」

「へぇ～」

世界が違ってもあまり社会の構造に変わりは無いんだな、と聞き流しながら和泉は思った。

「この世界にはですね、魔物というものが存在します。え、えっと、とっても怖い存在なので、こういうのを討伐するのには王国軍とかギルドとかがあります。私達の学院の卒業生の７割は王国軍に入る

か冒険者となってギルドの依頼をこなして生活を送っています」

「や、やっぱり魔物とかいるんだ」

「はい。で、でも普段は絶対に関わらないですよ！」

そこで卓也は遠い目をした。

「ってことは、いつかは絶対に行くことになるよなぁ」

「ど、どうしてです？」

「修とか和泉とか修とか修とかがいるから」

こんな面白そうなことない、って言って連れていかれる未来が簡単に分かる。

「へぇ、文字は基本的に僕らがいた国の平仮名と片仮名を合わせたもの、と考えたほうが早いかな」

もちろん、文字は違う。

が、感覚的に似ているものがある。

「わかりやすい」

これならば数日のうちに会得できる。

「では、魔法についてお話いたしましょうか？」

「お願いします」

「僭越ではありますが、魔法についてお話いたします。魔法は基本的に４元素、火、水、風、土となっています。そこから様々に派生していき、多種多様な魔法が存在します。大抵の人は元素によって得手不得手がありますが、日々の生活を行う際には特に気にする必要はないと思います」

しかし、とフィオナは続ける。

「魔法学院では魔法を中心とした授業を行います。最終的には中級魔法を１つ、ないし２つ以上使えるまでになること、初級攻撃魔法いくつかの詠唱破棄を目標とします」

「やはり魔法によって階級が別れているんですか？」

「はい。初級、中級、上級、神話となっています。上級を使えるとなると兵士、ないしギルドの人間としても重宝されます。神話クラスは基本的にシュウさんのような方が使うような魔法です」

「そうですか。では詠唱破棄というのは？」

「魔法は言葉によって発動する、というわけではありません。言葉が意識を作り、イメージを呼び、魔力が反応します。言葉を使用するのが魔法を使う上で一番簡単なツールだからです。つまり詠唱というのは魔法を使うにあたって万人が共通してイメージを持てる台

詞だと考えてください。詠唱破棄とは、その簡単なツールを手放して魔法を使え、ということです。とはいえ、詠唱せずに魔法を行使すると大抵の人は威力が落ちます」

ただし、と付け加える。

「これはあくまで上級魔法に関してまでです。神話クラスは言葉によって制約を外し、神の如き魔法を呼び出します。つまり神話クラスからは言霊が必要になる……らしいです」

「らしい？」

「私も実際に見たことはないので、教科書の記述をそのまま言っただけです」

「了解です」

要はマンガやＲＰＧと同じなんだな。

◇　　◇

～翌日～

「とりあえず、基本的な魔法を使ってみましょう」

せっかく魔法を使える世界に来た、ということから４人集まって魔法を実際に使ってみることにした。

「みなさん、どちらの手でもいいので人差し指をまっすぐ前に突き出してください」

アリーに言われた通り行動する。

「そして火をイメージしてください」

卓也などはやりやすいように目を瞑った。

「その火が指先に集まり実在するイメージ」

たったそれだけで指先に火が生まれた。

「魔方陣すらも浮かびませんが、これが簡単な魔法です」

４人とも、指先から炎が出る。

「おお」

「なんか不思議だな」

「これは面白い」

「熱くないから変な感じがする」

魔法がしっかりと使えることに感動を覚える。

そして初級の攻撃魔法などを習い始める。

異世界の人間の能力が高いというのは本当らしく、初級の魔法は簡単に使えた。
続いて中級魔法でも習ったほうがいいか……としたところで和泉と修がふざけはじめた。

「お前ら見てろ。『俺のこの手が真っ赤に――』」

「燃やすな！」

「ならばフィンガー・フレア――」

「やんな！」

卓也と優斗が和泉と修の頭をはたく。

「あの、今のは……？」

アリーが一連のやり取りに混乱して、とりあえず訊いてきた。

「僕たちの世界にあるゲームやマンガの物真似ですよ。修とか実際にできそうな気がするんでやめさせました」

「そ、そうですか」

よくわからないが、取り合えずコントのようなものだったのだろうとアリーは結論付けた。

「一応、僕達初級魔法までは使えるようになりましたけど、このまま中級魔法も試していったほうがいいですか？」

「いえ、学院で魔法を使う分にはこれだけで十分です。あとはそれぞれの家庭教師の方と相談しながら魔法を覚えていったほうがいいと思われます」

と、ここで優斗に疑問が生まれた。

「ちなみに皆さんはどのレベルの魔法まで使えるのですか？」

「わたくしは基本４属性全ての上級魔法を使えます」

これはアリー。

「わ、わたしは土と水の上級魔法使えます」

ココらしい。

「私は風と水なら上級まで」

とはフィオナの弁。

「自分は火と土は上級まで大丈夫です」

最後にクリスが答える。

つまりは全員がトップレベルの魔法を使える、ということだろう。

「オレ達がそのレベルに行くのはどれくらいかかるの？」

「魔力総量や実力に左右されますので何ともいえませんが……異世界の方ですしシュウ様以外でもおそらく、２ヶ月ぐらいで使えてしまうのではないかと」

「ということは修はもう使えるのですか？」

「はい。勇者様ですから」

やっぱりチートの刻印持ちは優斗たちと最初の一歩が違う。

ただ、優斗はだからこそ面白いと思う。

追いかける甲斐があるというものだ。

◇　◇

そして優斗たちが異世界に来てから１０日後。

大体のことを習った彼らは、晴れて魔法学院へと編入することになった。

チーム結成

無事に編入できた異世界４人組。
１週間ほど家庭教師にはつきっきりで教えてもらえていたのも、当時は春休みだったからしい。暦は優斗たちがいた世界と考え方も特に変わりはない。
クラスは３クラス。生徒の数は３０人。
異世界からきた４人をフォローするためにも全員が同じクラスに固まった。
優斗たちは田舎から編入してきた、ということにしている。
特に問題なく始業式を終え、帰ろうとした。
その時、騒ぎが起こった。

「さて。帰りますか」

「だな」

別途で勉強もしなければならない。
優斗も鞄を持って席を立つ。

「アリー、クリス、ココ、フィオナ！！　お前らも一緒に帰ろうぜ

！」

修が同じクラスにいる家庭教師に声をかける。

――あっ。

やっちまった。

少なくとも優斗と卓也はそう思った。

教室がざわざわと騒ぐ。

『なに、知り合い？』『アリーって……アリシア様のことよね？呼び捨てなんて何考えてるの？』『公爵家になんてぞんざいな口の利き方なんだ、あいつは』

などなど、礼儀のなってない馬鹿扱いされる。

すると、だ。

一人の煌びやかな装飾をした男が修の前に歩み寄ってきた。

「おい、そこの田舎者」

「なんだ？」

「王族や公爵家の者に対して口を慎みたまえ」

「お前、だれ？」

ピクリと眉が動いた。

――怒ってるな、あれ。

修の空気の読まなさには慣れている。
このあとの展開も大体読める。

「わ、私を知らないのか！？」

「田舎者なんだから知るわけないだろ」

そりゃそうだ、と優斗と卓也はしみじみ思う。

「私は貴族、パリーニュ子爵の息子であるラッセルだ！」

「そうか。で？」

「口を慎みたまえ、と言ったのだ。貴族に対して無礼だぞ」

「そんなものはあいつらが決めることだ。お前に言われることじゃない」

ばっさりと切り捨てる。

「そんじゃ帰るか」

彼の通り抜けて歩き出す修。
それに付き添う他の３人。

「お前らも行こうぜ」

ニッ、と屈託のない笑みを浮かべる。
アリーは少し顔を赤くしながら、ココは慌てた表情で、フィオナは無表情、クリスは苦笑しながら彼に従って歩き出す。

後に残ったのは……怒りに顔を歪めるラッセルと、戸惑った表情を浮かべるクラスメートだけだった。

◇　◇

「あの……俺はいつまで正座をしていれば――」

「もちろん、いつものように僕が許可したら正座やめていいよ」

「……了解」

優斗がそう言うと、黙って正座を続ける修。

現在、彼らはリライト公園という、国の中でも一番大きい公園の中にいる。

「あの、わたくし達には害があるわけではありませんし、あのように接していただいて嬉しかったのでそろそろ勘弁していただけると」

「アリーさん、それはぬるいです。あいつがやったことは確かにアリーさん達にとって褒められることではありません。けれどですね、その後の対応が最悪なんです。それを反省させるためにも正座は続行させます」

「けれど……勇者様に正座をさせるというのは、なんとも恐れ多いというか」

「だいじょうぶ。勇者の前に“馬鹿その2”である修だから」

そうして卓也は遠い目をする。

「懐かしいな。後先考えずに修が不良から女の子を助け出したら、案の定翌日に不良8人に囲まれたの」

「僕も懐かしい。修が浮き輪で流されてる子供を見つけて、ロープも何も持たずに飛び込んでいったことが今でも腹立つくらいに思い浮かぶよ」

その他、あれやこれやとエピソードを出す優斗と卓也。

「そ、それってシュウさんがすごい人助けをしているってことですよね？」

ココがフォローするように言葉を発する。

「違います。あいつが何も考えずにやるからフォローするのが大変という話です」

「事件を解決しようとするのはいいんだけど、その後が大変なんだよ。主に優斗、次にオレが被害にあってるんだ」

「ふ、不良に囲まれたとき、とかですか？」

「ええ。あの時は修が4人、僕が3人、和泉と卓也で1人を受け持ったんです。学校にばれたら停学になるんじゃないか、などなど考えて裏路地で潰しましたけど、あれは心臓に悪いので勘弁ですね」

二度とやりたくない。

「そういうことがある度に『もっと考えて行動しろ』と言っているのですが、あいつも懲りずに事を起こすので、何かやらかしたら正座させることにしているんです」

「まあ、修のやつは良いことやってるから怒れないしな」

「まあね」

悪いことはしていないのだから、確かに怒ることはできない。

「で、ではイズミさんはどうなのでしょうか？」

そこでクリスが心配そうに話しかけてきた。

修がこの扱いなら、馬鹿1号である和泉はどうなのか、と。

公園の草むらで豪快に寝ている和泉に視線を向ける。

「和泉は基本的に害が無い馬鹿ですから心配しないでいいですよ。言動は頭のネジが1、2本ほどぶっ飛ぶときがありますが、ほとんど無害です」

「時折、修より酷いのをやらかすけど、まあ……修より稀だからその時は罵倒して蹴りでもかまして終了って感じ」

「よ、よろしいのですか、そのような扱いで？」

「いいんです。和泉のお守りはこれからクリスさんの役割ですから。前にも言いましたが普段のネジがぶっ飛んだ発言は強制的に終わらせたほうがクリスさんの身のためです」

◇　　◇

「それにしても皆さんは、仲がよろしいですよね」

今までの話からしてもたくさんエピソードがある。

長年の付き合いなのだろうか？

「まあ、かれこれ４年ほどの付き合いになりますから」

「最初からみなさんは仲がよろしかったのですか？」

ココがそういうと、卓也と優斗は顔を見合わせて噴き出した。

「ど、どうしたんですか！？」

「い、いやいや、オレらの出会いを思い出したら可笑しくって」

「だよね。あんな出会い方、誰が予想できるんだって話だよ」

ゲラゲラと笑う２人。

不思議そうに見つめるのは家庭教師４人組。

「オレらの出会いってさ、４年前のクラス替えのときだったんだよ」

懐かしむように卓也は語る。

「それで最初はお互い、クラスメートであって友達じゃなかったわけ。部活も違うし」

「ぶかつ、というのは？」

「同じ趣味、同じ運動をする人が集まって大きな大会で優勝を目指すグループ、と考えてください」

アリーの疑問に優斗が答える。

「それで、みんながクラスに慣れてきた１ヶ月後だったかな。放課後になって部活に行こうとしてた和泉がオレのとこに来てさ、『屋上で待っている』って告げてきたんだ」

「よく知らないのが唐突にそんなこと言うもんだからさ、僕は変人ってイメージが和泉に定着したよ」

笑いながら優斗も茶々を入れる。

「もちろんオレだっていぶかしんだけど、とりあえず行ってみるかと思って屋上に行ったんだよ。そしたら先に修と優斗がいて、フェンス越しに下を見る和泉がいた。で、呼び出した全員が集まったときに言ったのが強烈だったんだ」

「なんと言ったのでしょうか？」

興味津々でココが尋ねる。

「オレらの世界にアニメっていう動く絵の作品があるんだけど、そ

の中の台詞を使ったんだよ」

ああ、本当に懐かしい。

予想外すぎる台詞だった。

「『見ろ、人がゴミのようだ』ってさ」

あの時はマジでビックリしたのを覚えている。

「それは国民全員が知っているような悪役の台詞なんだけど、そんなもの突然言うと思わないじゃん。当然、オレも優斗も修も大笑い。腹がよじれるほど笑って、ようやく息が整ったときに和泉がこっちを振り返って言ったんだよ。『ようこそ、同士諸君。私は君たちのことを歓迎しよう！』って」

「……それは、なんというか……酷い、ですね」

ココが少しだけ引いたそぶりを見せる。

「でしょ。さすがにオレらも引いたんだ。そしたら和泉、掴みを失敗したことに気付いたらしくて『あ、ちょ、そうじゃなくて！　俺は君たちが同属だと思ったからこういう演出をしたまでで！』なんてあたふたし始めてさ。そんなあいつの姿を見て、また大笑い」

ようは同じオタクの匂いを感じたので友達になろう、といった用事なのだが。

何をどうしてそう思ったのか、演出過多でそれを伝えてきた。

「それで、話してみたら似たような趣味を持ってるっていうのがわかって、オレらは仲良くなったんだ。そっから一つ上の学校でも同じところ入って、相も変わらず一緒につるんでるってわけ」

懐かしい。もう4年も前の出来事になるのか。

「きっかけはイズミさん、ということなのですね」

ココが眠っている和泉に視線を向ける。

優斗も一緒に和泉を見た。

「ええ。馬鹿っぽいきっかけですが――」

それでも。

あの時の自分達にとっては。

「――最高の出会い方でしたよ」

「だね。あいつがいなかったら、今のオレらはないよ」

そういう意味では和泉には本当に感謝している。

「みんなはそういったことないの？」

さすがに自分達クラスのはないとしても、ちょっとしたことぐらい。

と、卓也は思ったのだが……甘かった。

そこにいた4人全員が一斉に暗くなった。

「え、と……地雷踏んだ？」

「だと思う」

特にアリーとフィオナは友達募集中とか言ってたし。
ココとクリスは友達いそうな感じがするけれども、暗くなっているということは何かしらあるのだろう。

「わ、わたくしは友達……いません。王族なので恐れ多いと思っているのでしょうね、きっと」

「……私もいない。公爵令嬢だし、基本的に無口だし、愛想がないから」

「わ、わたしもです。喋ってくれる人はいるんですけど、基本的に遠慮されてるというか……。やっぱりお父さんが公爵ですから」

「自分も公爵の子息だからでしょうか。女子とは少しばかり話すのですが、男子は突き刺さるような視線しか貰いませんし。愛想はよくしているつもりなのですが……」

そう言って、４人ともさらに暗くなる。
優斗は優斗でやっぱり、と思う。
まあ、自分達のことを知らせられる貴族の御子息令嬢となれば、貴族でも高位の存在とは思っていたけれども、全員が全員、公爵の家とは思わなかった。

――というか全員友達がいないって。

いくらなんでも作り下手すぎる。

――っていうか、だ。

はぁ、とため息をつくと、優斗は修を呼び寄せる。

「正座は終了。こっち来て」

「りょ～かい」

パッ、と立ち上がると修は優斗たちの近くまで寄ってくる。

「話は聞いてたよね？」

「もち」

「卓也は和泉を……っと。さすが、もう連れてきてくれたんだ」

「優斗が何を言うかはわかりきってるよ」

「さんきゅ」

和泉は何もわからないだろうが……まぁ、空気を読んで合わせてくれるだろう。

「まずは全員、円になって」

優斗の言うことに修と卓也は納得しながら、他の面々は意味がわからずにではあるが言われた通りに円になる。

「右手を出してください」

貴族組が戸惑う。

だからまず、修が最初に手を出した。
続いてノリで和泉が修の上に手を重ねた。

「ほら、早く手を出してください」

優斗が急かす。
慌てながらアリー、フィオナ、ココ、クリスが手を重ねていく。
最後に卓也、優斗が手を重ねた。
そして視線で修に優斗が合図を送る。

「まず、お前らには最初に言っとくけど……」

修がまずは話し始める。

「俺はお前らと友達だと思ってた。けどさ、お前達はそうは思ってなかったんだな」

だからさ、と修は続ける。
改めて言葉にして伝えた。

「俺らと友達になってくれねぇかな」

そう修が言うと、４人の目が驚きに溢れた。

「これはもちろん俺ら異世界組の総意だ」

視線を配らせれば3人とも頷いた。

「だから俺らが馬鹿やりそうになったとき、困ったとき、色々とあるだろうけど、その時は『異世界の人』だからじゃなくて、『家庭

教師』だからじゃなくて、『友達』として助けてくれねぇかな。今日、早速だけど馬鹿なことしちまったし」

ホントだよ、と優斗が茶々を入れる。

全員が少しだけ笑った。

「そんでさ、俺がやった馬鹿とは別の意味で一緒に馬鹿なことやろうぜ」

「そうそう。買い食いだってなんだって付き合うよ。やったことないでしょ？」

卓也が訊けば、４人とも頷いた。

「俺らみたいに一緒に旅行へ行くのもありだと思うぞ」

和泉の言葉にさらに４人は頷く。

「そして世の中には便利な言葉があります。『友達の友達』は『友達予備軍』だと」

ぐるりと貴族の４人に優斗は視線を走らせる。

「修たちがあれほど言ったんです。皆さんは僕らのこと、友達だと思ってくれますか？」

アリーもフィオナも、ココもクリスも頷く。

「なら、アリーさん達は貴方達だけで『友達予備軍』です。僕らを介している『友達の友達』なのですから。どうせなら、お友達にな

ってはどうでしょうか？」

驚いたように４人が左右を見る。

「貴族ですから、何かしら難しい問題があるかもしれません。ですが、そうなっても叩き潰すから大丈夫です。主に修の力を使って」

「俺かよ！？」

「そういう時のためのご都合リーダーだよ」

また、全員が小さく笑う。

「つまり、回りくどくなりましたが、要は難しいこと考えずに全員で友達になりましょう……ってことです」

優斗がまとめると、全員で頷いた。

「でも、ここまで大人数だと軍団って感じがするな」

和泉が口を挟む。

「軍団はおっかないから『チーム』でいいんじゃない？」

「卓也、それ採用！　なんかいい！」

修が全員を見回す。

「いいか、みんな。これから俺らは『チーム』だ！　たくさん遊んで、たくさん馬鹿やって、たくさん勉強……はしたくないが、とに

かく全員で楽しく過ごそう！」

修が元気よく号令をかける。

「じゃあ」

「いくよ！」

そして集めていた右手を卓也と優斗が少し押し下げる。

「えっ？　なにするんです？」

「ど、どうするんですか！？」

「え？　え？」

「どうするんでしょう？」

貴族４人が戸惑う。

「よっしゃ！」

「任せろ！」

が、そんなの無視して次の瞬間、下から今度は和泉と修が勢いよく全員の手をうえに押して弾き上げた。

これが８人にとっての結成式。

友達として。
そして、この先何十年とリライト王国を繁栄させる『チーム』が生まれた瞬間だった。

他の家庭教師がどのように授業を進めているのかが気になって、アリーは女の子を集めて訊いてみた。

「普段はどういう勉強をさせてるんですか？」

「わたしは基本の魔法講座とか、リライトの歴史とかを教えてます」

「私は魔法の理論とかを主に」

「そうなんですか。わたくしはシュウ様の覚える気がないらしくて、雑談程度に授業をしてます」

「へぇ～、苦労してるんですね」

ココががんばってるんだなぁ、といった感じで呟く。

「いえ、シュウ様は言ったことを大体覚えてくださるので、特に困ったり苦労はないんですよ。真面目に聞いてくれないのが難点ですが」

「逆にクリスさんは大変みたいですよ。イズミさんの相手をするの」

「確かに大変そう」

しみじみと全員が頷いた。

「フィオナさんとココさんは特に苦労なさそうですね」

「タクヤさんは一生懸命な人ですから。わたしが困ることはしませんし」

「ユウトさんは……非常に真面目です。物腰も柔らかくて穏やかで、とても同年代とは思えません」

「あっ、それはわたくしも思っていました」

「でもタクヤさんによると、あそこまでのレベルだと“作っている”みたいですよ。基本的には変わらないけど、もうちょっと言葉も砕けてるって」

そう言われてアリーは彼が仲間と話している様子を思い出す。

「……確かに私達以外と話しているときはそうですね」

「時間が経てば変わるらしいので、しばらく待ってあげてくれって言ってました」

「そうですね。いきなり異世界に飛ばされて苦労もたくさんあるでしょうし、基本的にはユウト様が皆様をまとめているようなものですから」

あれほど個性の強いメンバーを従えるのは大変なはずだ。

「でも、リーダーってシュウさんのはずじゃ……？」

「それはわたくしも気になって『シュウ様がリーダーではないのですか？』と尋ねましたら『こんぐらいだったら優斗がやってくれる。根は真面目キャラだからな。けど、もっと面倒になったら俺にぶん投げられる』と仰っていましたね。そこがご都合リーダーと呼ばれる所以とも」

「……二人とも、よく知ってますね」

続々と出てくる友人達の情報に、フィオナが少し落ち込む。

「私はあまり、勉強以外でユウトさんと話すこと……ないです」

「なんでです？」

「お喋りするの……苦手だし、ユウトさんも真面目に勉強してくれているので迷惑かな、と」

「そんなことないと思いますよ。話しかけてみたら、きっとユウト様もお喋りしてくれるはずです」

「……そうでしょうか？」

「そうですよ。がんばってください」

◇　◇

「――ということ、なんですけれど……」

先ほどあった話をアリーが修に伝えてみる。

「あいつは別に根が真面目ってだけで、普段は真面目ってわけじゃないぞ」

「そうなのですか？」

どうみても、異世界組の中では真面目だ。

「真面目なやつが俺らの友達なわけないじゃん」

「でも、授業をしているときは真面目だと」

「魔法を習うのが楽しいっていうのもあるんだろうけど、そうしないと緊張しちまうんだろーよ。フィオナ、もの凄い美人だし」

とはいえ、少しフォローはしてやらないと。

「とりあえず任せとけ。どうにかしといてやるから」

「お前さ、フィオナと話したりしてんの？」

学院寮で不意に修が優斗にそんなことを言ってきた。

「何を突然？」

「俺とかは雑談しながらやってるけど、なんかお前とフィオナだとそんなイメージが沸かなかった」

「……まあ、その予想は当たってる」

長年の付き合いだし、それぐらいはわかるのだろう。

「緊張するのか？」

「まあね。彼女と二人きりの空間というのは非常に緊張する」

「……馬鹿かおまえ？」

「い、いや、だってさ、あれだけの美少女と二人でいるんだよ！そんなの今までの人生になかったからどうしていいかわかんないし！！」

顔を赤くしながら言い訳するように言葉を吐き出していく。

普段は冷静沈着なくせに、どうしてこういうことには弱いのか。

「……なんつーか、典型的なオタクみたいな態度だな」

「否定はできないけどさ……。これでも頑張ってるんだよ」

彼女の前では顔を赤くしないようにする、などなど。

「そんで真面目面してあまり会話をしないようにしてる、と」

「……文句あるのか？」

「ねぇよ。ただ、フィオナも口下手そうだからな。そんな感じでいつも授業とかしてると息が詰まると思うぜ。これからもずっとな」

「……」

「時には脱線してもいいんじゃねぇの？　のんびり話しながら時間が経てば、お前だってフィオナの美少女っぷりに慣れるかもしれないだろ？」

「かもしれない」

「頑張れよ。異世界から来たやつと美少女ってのはくっ付くのが相場だぜ？」

ニヤリと笑って修がからかう。

「お、おいっ！」

「なんてな。ま～頑張れや」

パンパン、と優斗の背中を叩いて修が出て行く。

彼が出て行く姿を見て、優斗は少しだけ姿勢を崩した。

「……さんきゅ」

◇　　◇

とはいえ、どうしたらいいのか。

特にきっかけもなく、いつも通りに授業を行う優斗とフィオナ。

基本的な魔法学の話が終わり、少し一息つこうとしている時だった。

「あの……」

不意にフィオナが声を発した。

「その……」

視線を右に左にさ迷わせながら、何かを言いたげだった。

「……良い……天気です……」

そう言った瞬間、ぶんぶんとフィオナが頭を振った。

「そうじゃなくて、ですから……えっと……」

ぐっ、と力を込めて何か声を発しようとして、

「……ですから……」

何かを言おうとして、

「……なんでもないです」

ぐっ、とそれを飲み込んだ。

「フィオナさん」

けれども、その姿を見た優斗が逆に彼女に声をかける。
彼女がしたかった意図だって分かっているつもりだ。

「勉強するのにも疲れたので、雑談の相手をしてもらってもよろしいですか？」

たぶん、この言葉を言おうとして言えなかった。
そうだと思う。
答えは、

「……はいっ！」

彼女の返事と、華のような笑顔で。
当たっていたことがわかった。

――そっか。

納得したように、優斗は思った。

ここにいるのは。
とんでもない美人だけれども。
それ以上に。
同学年で。友達で。
何よりお喋りをしようとするのに、こんなにも可愛らしく勇気を振り絞る女の子なんだ。

――馬鹿だな、僕は。

彼女は初めて友達ができて。
たくさん、やりたいことだってあるだろう。
それに数多く応えてあげられるのは、彼女と接する機会が一番多い自分だというのに。

――美人だから緊張する、だなんて。

あまりにも酷い話だ。
思えば、そんな彼女のために修だって昨日自分にああいうことを言ったのだろう。

「フィオナさんは何かやりたいことってありますか？」

「……？」

「こないだ、卓也が言っていたでしょう？　買い食いでもなんでも、やりたいことをやろうって」

そう、だから。
こんな緊張ばっかりの自分は全力で押しつぶして。
彼女がやりたいことをやってあげたい。

「フィオナさんはどんなことをやりたいですか？」

「……ただ……ゆっくりとお話ができれば……いいんです」

フィオナは途切れ途切れにそんなことを口にしながらも、心はもっと貪欲だということを知っている。

――嘘だ。

本当はもっとたくさん、やりたいことはある。

でも、これ以上願うのは贅沢な気がして。

口に出すことは憚られた。

「……フィオナさん」

そして、それに気付かない優斗じゃない。

「僕には言っていいんですよ。気を使うなんてこと、しないでください」

「……そんな……ことは……」

「あるんでしょう？」

絶対的確信を持って訊いてくる優斗に、フィオナはこくんと頷いた。

「とはいっても、すぐに色々なことをやろうとするのは無理かもしれません。僕は女の子と一緒にいると緊張する性質なので」

笑って、優斗は大きく深呼吸をする。

「ですから、ゆっくりでいいのでやっていきましょう」

雑談したり買い食いしたり。

「僕達のペースでたくさん、楽しいことをやっていこうよ」

「……はい」

フィオナはただ、頷いた。
嬉しかった。

――きっとこれは。

友達だから、とかではなく、チームだからというわけでもなく。

――ユウトさんが心からそう言ってくれているから。

こんなにも嬉しいんだ。
ならば、自分も精一杯に答えよう。
きっと。
こういう時にする表情はこれ、だろう。

「よろしくお願いします」

満面の笑みを浮かべて。
フィオナは優斗に返事した。

「なんだかんだで、皆さんってすごいと実感させられますね」

クリスが改めて実感するように言う。

「ですね。全員が４属性の中級魔法を覚えちゃうんですから」

「異世界の人がやはりすごいと言われていても、目の前でやられると唖然としてしまいますわね」

驚嘆、といってもいいかもしれない。

「その中でも凄いのは、やはりシュウさんですね」

「詠唱をしてもしなくても威力は変わらず。あげくに上級魔法まで平然と使えますから」

クリスは本当にすごいと感嘆する。

「神話魔法も使おうと思えば使えるのでは？」

フィオナがアリーに尋ねる。

「おそらく使えると思いますわ。それが『勇者の刻印』の力ですか

ら」

最初からレベルが違う。

「……お父様が勇者を召喚せざるを得ない理由がここにあるのですね」

他国の牽制と、自国を守る。
そのための最大限の存在。
今現在、彼の存在を認識しているのはリライトの上位貴族と他国の王族のみ。
彼らの存在が秘匿されている理由は王様のとある理由。
まだ若いのだから、今はゆっくりと遊んでほしい。
そんな謝罪まがいの理由だ。

「もう1ヶ月……経ちますか。あの方々が来てから」

クリスがしみじみと話す。

「わたくしはこんなにも友達ができるなんて思っていませんでした」

「わたしもです。公爵であることが……今は本当に良かったって思ってます」

「ですね。自分も和泉様の馬鹿騒ぎに巻き込まれるのは大変ですが、それ以上に充実した日々をすごしていると実感しています」

「私は……」

と、ここでココが気になっていたことをフィオナに訊く。

「そういえば、フィオナさんはこの間のことはどうなったんですか？」

それにアリー常々気になっていたので乗っかった。

「優斗様と話せるようになれたのですか？」

「……はい」

フィオナが顔を真っ赤にしながら頷く。

「私たちのペースで一緒に楽しいことをやっていこう。そう言ってくれました」

やさしく、落ち着かせるような声音で。

「今度、一緒に買い食いをしようって誘っていただいて……」

だから少しだけ困った。

「それで皆さんに相談なのですけれど」

つまるところ。

「買い食いって……どうすればいいのでしょうか？」

買い食いの“作法”がわからない。

「わたくしはまだやったことがありません」

「わたしもです」

「自分は和泉様に連れられて何度もやっていますが」

クリスが肩をすくめる。

「ど、どんな感じなのですか？」

「そのように肩肘を張る必要はないと思いますよ。あれが気になるから食べてみよう、これがおいしそうだ、という感じで食べながら雑談する形です」

「でも、何かしら粗相を働いたら……」

それでもし、優斗に嫌われたりしたら困る。

「でしたらこの後、全員で買い食いするのも一興ではないでしょうか。皆さんなら喜んで行ってくれますよ」

名案のようにクリスが言う。

「こっちでの食べ物は彼らの世界のものとほとんど差異はないと仰っていましたが、それでも作られてるもの料理は違いがあるようですから」

興味が沸くだろう。

と、ここでアリーが気になった。

「……異世界の料理ってどういうものなのでしょうね？」

「おむらいす……という卵を使った料理が卓也さんが作る料理では一番おいしいって言ってました。かなりの頻度で卓也さんのアルバイト先に行っては食べてたらしいですよ」

ココが言ったことは何気なく会話の一端として流しそうになったが……アリーははっ、と気づいた。

「……皆さん」

急に神妙な面持ちでアリーは3人に話しかける。
何事かと不可思議な表情をされたが、アリーは構わずに続けた。

「わたくし、前に2週間ほどリライトから離れたことがあるのですが、それでもこの国の料理が恋しいと思いました」

やはり自分の食べてきた料理が一番合っていると感じた。
でも、そういうことではなくて。
それよりも事態は深刻で。

「……あの方達はどうなのでしょうか？」

料理だけではなくて。
大切な何かをあの世界に残していたりはしていないのだろうか。

「やはり元の世界に戻りたいと思うときがあるのではないでしょうか？」

戻りたいと思えるほどの物があるのではないだろうか。

「もう元の世界には戻れない。それでもやはり……」

そう考えてしまっている人もいるかもしれない。

それは郷里に何かしらの愛着があればしょうがないことだ。

「……今まで、どうしてこのような考えに至らなかったでしょうか？」

1ヶ月も一緒に時を過ごしてきたのに。

なぜだろう。

「お客様、だったからでしょうね」

クリスが答えた。

「……和泉様達は異世界から来た客人という扱いでしたから」

貴族よりも大切なお客様として扱ってきた。

「今は違います。大切な『チーム』で、大事な友達です」

クリスが断言する。

「だから友達のことだから心配で」

心配で。

「どうにかしてあげたいと。困ってはいないかと……そう思ってしまうのではないでしょうか」

特に初めての友達だからこそ。

「で、でも、そうと決まったわけでもないし」

ココが努めて明るい声を出す。

「も、もしそうだった場合はわたし達が頑張って帰してあげる方法を考えればいいことだから」

「……そうですわね」

自分たちがどれほど考えたところで、真実は彼らの胸中だ。

「確認してみないことには始まりませんわね」

◇　◇

適度に適当に魔法を使って遊んでいた異世界組はちょうどお昼時、というときにアリーに呼ばれた。

「そろそろ昼飯の時間か？」

「今日はどんな料理が出てくるんだろうね？」

「辛いやつじゃなかったらオレはいいかな」

「卓也は辛いものが苦手だな。俺みたいに辛いものが好きなやつからすると可哀想だ」

「和泉は逆に甘いものが苦手じゃんか」

和気藹々とアリー達に近寄る。
が、ふと異変に気づいた。
アリーを始めとして４人の表情が皆一様に硬い。

「どうかしたのか？」

いぶかしむように修が訊く。
それを皮切りに、アリーが口を開いた。

「皆さんに尋ねないといけないと思います」

唐突な真剣な声音に優斗達が身構える。
アリーは訊くのが怖いと思いながらもしっかりと４人を見た。

――これは王族が一番抱えなければいけないから。

彼らは突然、縁も何もない場所に飛ばされてきた。
今まであったものが突然なくなったも同然のこの場所に。
強制的に引き離されるといった、理不尽なことが行われた。

「ユウトさん達が来てから、もう１ヶ月も経ちます」

でも、友達になり仲良くなった。

いつも気にかけてもらっていた。
1ヶ月しか経っていないけれども大好きな人たちだと思えた。
だからこそ、尋ねないといけないと思う。

「やはり元の世界に帰りたいと……思いますか?」

実際には無理なのだとしても。
帰る方法なんてないのだとしても。
気持ちは……別なのではないかと考えてしまう。

未練はないから

アリー達、元々この世界にいる４人は皆が神妙な面持ちで優斗たちを見ていた。
優斗は不意に嬉しくなる。

――たぶん。

４人がそんな表情をしてくれているのは、本当の友達になったからなのだろう。
友達になって遊んで、笑って、そして――気づいた。
ふとした拍子だったのかも知れない。
それでも、考えてしまったのだろう。

自分達は無理やりに４人を連れてきてしまったのではないか。
元の世界に本当は帰りたいのではないか、と。

口を開いたのは優斗だった。

「そんなことはありませんよ」

「本当ですか？」

不安げにアリーが聞き返す。

「ええ。本当です」

自分たちは元の世界に未練なんてない。

――そんなものがあるほど、あの世界に執着するものなんてなかったんだから。

優斗は考えをまとめる。

そして、修と卓也と泉を見た。

3人とも頷く。

「そろそろ、皆さんに話してもいい頃でしょうね」

これは声を大にして話すことじゃない。

むしろ、話す必要性なんてものはどこにもない。

それでも真摯に自分たちの気持ちを考えてくれた彼女たちには。

話そうと思う。

「僕たちはね、全員が元の世界にある自分たちの国では恵まれた境遇というわけではないんです」

あくまで自らの国の中での境遇があまりよくなかっただけのこと。

ただ、それだけのことだけれども。

そこの一般から考えれば自分たちは大いに不幸だった。

「似たような僕たちだからこそ、あんな馬鹿なことがあってから一緒にいた。誰もが同情するわけでもないし、嫌悪も侮蔑も抱くこと

がなかった」

紛れもなく“自分”でいれた。

「一人ずつ、お話しましょうか」

４人で視線を巡らせると、和泉から口を開いた。

「俺んとこは何もない。本当に“何も”ない。両親共々、冒険者で放任主義者。まともに顔を合わせることなんてそうそうないし、いなくなってもどうにかして生きろ、としか思わないだろう」

何一つ受け取らずに和泉は生きてきた。

だからこそ、誰かと繋がりがほしくてあんな馬鹿なことをやったのかもしれない。

次に口を開いたのは修。

「うちはな、両親の仲がすごく悪いんだ」

その原因が修にある。

「母親が変な男と作った子供でな、父親とは血が繋がってない。だから父親は俺のことを鼻から無視してるし、母親も母親で俺を産んでから後悔したのかなんなのか知らないけど俺のことをいないもののように扱ってる。それでも離婚しないのは世間体の問題とかがあるらしいけどな」

どっちにせよ、異物として扱われている。

「……」

「……」

「……」

「……」

異世界４人組の表情が固まった。
修はそんな彼女らの表情をほぐすため柔らかい笑みを浮かべる。
が、続いた言葉は、

「俺でそんなに引いてたら残り二人はもっと聞けなくなるぞ」

修がそう言うと、続いて卓也が話し出す。

「オレは……児童虐待って言ったらいいのかな。父親にも母親にも暴力振るわれててさ、そのうち父親は蒸発。母親からは相変わらず暴力受けながら育ったんだけどね。中学の時はどうにかして部活と隠れてバイト。高校からはもっと金がかかるようになってさ。それでバイトに専念してきたってわけ。こっちに来る前に行こうとした旅行は皆が金出してくれてね、初めての旅行だったって感じ」

どこにも行ったことがなくて、何も買ってもらったことがない。
全てを自分で揃えて自分でやってきた。
だからこそ、友達と行く初めての旅行は楽しみに満ちていて……その結果が異世界に飛ばされるというのは驚いたけれども、それも旅行としては楽しい出来事だったと今は思える。
そして最後は優斗。

「僕は卓也ほど酷くないですけどね。元々嫌いだった両親が目の前

で殺されて、その後は舞い降りてきた大金に目が眩んだ親戚一同を適度に追い払って、現在に至るってところです」

優斗が言葉を濁しながら話す。

正確に言えば、その過程において一番酷かったのは優斗だろう。

でもそれは彼らに伝えるには……まだ綺麗すぎる。

もっと大人になってから正確なことを伝えることができればいいと思う。

「いや、お前が一番強烈だろ」

「そうかな？　確かにいろいろと端折ってるけど、そのときの心情や過程とか入れる必要性もないでしょ」

「ま、そうだな」

修が納得する。

「という感じで、僕たちは特に元の世界に未練があるというわけでもないし、大事な友達は一緒にこっちに飛んできています。ゲームが出来ないのは少し悲しいですけど、この世界なんてゲームみたいなものですから楽しめます。何も問題はありません」

アリーも、ココも、フィオナも、クリスも。

何と言っていいかわからなかった。

「そんな顔すんなって。俺らはお前らだから喋っていいと思ったんだぞ」

にかっ、と修が笑う。

「でも……」

「アリー、もう一度言うぞ。俺らはお前らだから話していいと思った」

だよな、と修が言うと、

「大事な友達だし」

「そういうことだ」

「貴方たちには隠すようなことでもないですから」

卓也、和泉、優斗が何でもないように言う。

彼らが異世界組にそう声を掛けると、不意に……4人の瞳から涙が溢れそうになっていた。

「えっ！？　ちょ、なんで泣きそうになってんのお前ら！？」

「だってそれほどのことを言ってくれる皆様が、本当に嬉しくて、でも嬉しいけど悲しくて、なんだか涙が出てきたんです」

他の3人もこくこくと頷く。

「大事な友達なんて言われたら、もう……嬉しいんですよ～！」

「これほど大切なことを伝えていただける友人になれたことが喜ばしくて」

「……でも、内容が悲しくて」

泣きそうになる。

「あ～、もうストップ！　泣くの禁止！　これから昼飯なんだから。湿っぽいの禁止！！」

修がわ～、と騒いでどうにか和ませようとしている。

その姿が少しだけ可笑しくて、５分もした頃には全員が全員、笑みを浮かべていた。

「そんで、だ。お前ら、午後の予定とかはあんの？」

お昼ごはんを食べながら修が確認する。

「わたくし達もどうしようか、と話していましたので何も決まってはいませんね」

「そんじゃ、どうしようかね」

う～ん、と唸る修。

と、ここでココが、

「あの、わたしはタクヤさんの“おむらいす”を食べてみたいです」

パッと手を上げてココが発言する。

「おお、それいいじゃん」

修が同意した。

「皆もそれでいいか？」

全員が首肯した。

「それじゃ――」

と、そう言いかけたところでアリーが修の服を引っ張った。

「どうした？」

「あのですね」

修の耳に顔を近づけて、何かしら内緒話をしている二人。

ふむふむ、と頷く修の表情がだんだんと悪巧みをするような顔に変わっていく。

全てをアリーが伝え終わった頃には完全にいやらしい笑みに豹変していた。

「おっし、決まったぞ。今日はこの後、城で卓也のオムライス講座だ。参加するのは俺、アリー、卓也、ココ、和泉、クリスの６人だ」

２人抜けている。

「……おい、ちょっと待て」

「なんだい？」

「どうして僕とフィオナさんが抜けているのかな？」

「いや～、なんかお前ら一緒に買い食いするなんて言ってたらしいじゃん。だったら今日の午後はそれをやるんじゃないかな、という俺のナイス判断」

「お前な、僕は別にいいけどフィオナさんだってオムライスを食べたいかもしれないだろ？　そんな風にノリで決められても――」

「あの、私は……買い食いで……大丈夫です」

恐る恐る、といった感じでフィオナが答える。

“おむらいす”という食べ物も確かに気にはなったが、それ以上に優斗と買い食いするのを楽しみにしていたのだ。

それを断る理由などない。

「だってさ、優斗」

「……わかったよ」

優斗は大きく息を吐く。

周りを見ればフィオナ以外はニヤニヤとしていた。

――こいつら、絶対に楽しんでやがる。

自分だって緊張はするが、フィオナとどこかに出かけるというの嬉しくないわけがない。

それをこんな形で実現させられるのは少しだけ腹が立つ。

――まあ、でも。

フィオナが本当に嬉しそうな表情をしているのだから。

これはこれでいいか、と思ってしまう。

買い食い、そして訪問

フィオナはお昼を食べた後、王城を後にした。
普段の制服と違って私服で市場を動き回ったりするので、ドレスのような丈の長い服装だと動き回りにくく一度、家に帰ることにした。

「ただいま戻りました」

そうすると、母親がフィオナを出迎えに来た。

「あらあら、今日は帰りが早いのね」

「いえ、今日はこのあと街に出ますので、着替えに戻りました」

「そうなの」

「はい。初めて買い食いをするので、とても楽しみです」

「皆様と？」

「いえ、ユウトさんと二人で」

フィオナがそう言うと、また母親があらあら、と言った。

「デート？」

「デ、デート！？」

瞬間で顔が真っ赤に染まる。

「ち、違います！　私が楽しみにしていたので、ユウトさんが一緒に行こうと言ってくださっただけで！」

目一杯、全力で否定する。

そんな姿を母親は微笑ましく思う。

――我が娘ながら、本当に初心なのよね。

ここ最近の娘の変化には本当に楽しい。

同じ公爵の子息どころか、王女とも友達になった。

そして異世界から来た方々とも友達になった。

その中でも富に会話に出てくるのが“ユウト”という人物。

あまり表情を変えない娘がころころと表情を変化させる。

――気になるわね。

母親として。

「優しいお方なのね、ユウトさんは」

「それはもう。ユウトさんの家庭教師で本当によかったと思います」

赤い顔から一変、心底嬉しそうな表情に変わる。

「じゃあ今日はこの後、連れて来ちゃいなさい」

「……え……？」

「街で買い食いが終わったら、そのまま彼を家まで連れてきなさい。夕飯に招待しましょう」

「……お、お母様？」

「気になるのよ。あれだけフィオナから話を聞いているんですもの」

どんな人物なのか。

「で、でも急に家にお連れするというのは失礼に値しないでしょうか？」

「大丈夫よ。私が言い出したのだから」

「そういうものでしょうか？」

「ええ、だからフィオナは是非ともユウトさんを連れてきてね」

◇　◇

いざ着替えようとすると、何を着ていこうかひたすらに悩んでいる自分がいた。

あれでもないこれでもないと服を出しては考え、自分の姿に合わせ

て鏡を覗く。
途中から侍女と母親が参加して、みんなで試着を繰り返してしまった。
そうして着ていく服がようやく決まり、家を出る。
できる限り駆け足で。
かつ服装が乱れないように走る。
そうして優斗との待ち合わせ場所に着いたのが約束の3分前。
フィオナが約束の場所に近付くと、そこにはすでに優斗が待っていた。
彼の視線がフィオナに合う。
優斗が笑みを浮かべた。

「す、すみません。待ちましたか？」

「いえ。約束の時間前ですし、全然待っていませんよ」

二人でゆっくりと歩みだす。

「何を食べましょう？」

「歩いているうちに見つかった物を食べるのも、こういうものの醍醐味ですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。予期せぬものに出会っておいしいという感動を味わえるのも、買い食いの魅力のひとつです」

ものすごくオーバーに言っている感はあるが、これも間違いではないはず。

優斗は心臓を軽く跳ねさせながら会話を交わす。

――本当に困るよな。

基本的に平然を装うのは得意だ。

そうせざるを得ない状況だって昔から多々あった。

しかし。

しかし、だ。

こんな美少女と二人で歩くなんてことは今までの人生にあるはずもなく。

挙句の果てにデートっぽい感じのこんな状況などもあったことはない。

要するに、

――死ぬほど緊張する。

ただでさえ慣れていないのだから。

いつも通りの様子を保つとなると、かなりの労力を必要とさせられた。

フィオナを意識しないように周囲に視線を巡らせる。

一つ、気になる店が目に入った。

「あれって何ですかね？」

優斗がある方向に指をさす。

カラフルな色合いのお店に、幾人かの若い人たちが並んでいた。

「あれは……なんでしょうね？」

頭にハテナマークを浮かべるフィオナ。

二人とも疑問系のまま目が合った。
ふっ、と笑い声がお互いに零れる。

「では、さっき言った通り」

「買い食いをしましょう」

揃って目当てのお店に向かい、並ぶ。
横から見てみると、どうにも見覚えがある食べ物だった。

「……クレープ？」

看板を見てみると、実際にクレープと書いてある。
実際の物も元いた世界と何ら変わりはないようだ。

「どういうものですか？　そのクレープというのは？」

「原材料はよく覚えていませんが、とりあえず甘いものを薄い生地で包んだ食べ物、といったらいいでしょうか。女性に人気があって美味しいんですよ」

「甘いんですか？」

「もしかして、苦手だったりとか」

「いえ。甘いものは大好きです」

「それならよかった。きっと気に入ると思いますよ」

列が捌けていき、優斗とフィオナの順番になった。

優斗はチョコカスタードクリーム、フィオナはイチゴクリームを頼む。
手際よく作る店員にフィオナが感嘆の声を上げながらクレープが出来上がる。
フィオナが恐る恐るクレープを手に取るのを確認すると、優斗は歩き出した。
慌ててフィオナを付いていく。

「それでは、初めての買い食いですね」

「それはそうなのですが……その、質問よろしいですか？」

「何でしょう？」

「フォークやナイフ、スプーンなどはないのでしょうか？」

いきなりの質問にさすがの優斗も少し面を喰らった。が、少し考えたらああ、と納得した。

「これはこのまま、ぱくっと食べるんです」

「……本当ですか？」

信じられないようなものを見る目つきでフィオナと問い直す。

「世の中、そういうものもあるんですよ」

「……ユウトさんが言うなら本当なのでしょうけど」

今までそんなことをしたことがなかったのだから心なし不安だ。

「とりあえず実践してみせましょうね」

そう言うと優斗はクレープにぱくりと食いつく。

思ったとおりの美味しさで嬉しさが浮かぶ。

「こんな感じです。こういうのは出来立てが一番美味しいんですよ」

「……がんばります」

フィオナも優斗の姿を目にして、心を決めた。

少しばかり逡巡したあと、意を決してクレープを口にした。

「……おいしい」

「でしょう？　こういうのがあるから楽しいんです」

彼女の様子に満足する。

「まあ、問題点があるとしたら食べ過ぎてしまって夕飯が食べれなくなることがある、くらいですね」

そう言う優斗にフィオナが奇妙な表情を示した。

――あれ？　変なことは言ってないと思うけど。

「どうしました？」

「あのですね。今日、このあとの予定は空いていたりしますか？」

「まあ、特に予定が埋まっているわけではないですよ」

「でしたらうちに来ていただいてもよろしいですか？」

一瞬、互いに沈黙が生まれた。

特に優斗は不可解の極みに陥っていた。

「……説明を要求してもよろしいでしょうか？」

そう尋ねると、フィオナは理由を話し始める。

全て聞き終えると、ようやく優斗は納得した。

「つまりお母様が僕に会いたい、ということですか」

「はい。私の友人ということもそうですが、やはり異世界から来たのに興味を持たれたのではないかと思います」

「でしょうね。自分も同じ立場ならば、興味を持ったと思いますから」

異世界から来た、というのは格好の餌のようなものだろう。

「あの、でも無理にというわけでもありませんから、嫌でしたら断っても……」

「大丈夫ですよ。フィオナさんのお母様なのですから、無理にどうこうしてくることもないでしょうし」

特に心配は要らないはずだ。

「ですから行きますよ。安心してください」

優斗がそう言うとフィオナもほっ、とした表情になる。

「そう言っていただけると、私もうれしいです」

安心したのかフィオナはクレープを食べ始める。

小さい声で「おいしい」と呟いて、また一口と食べる。

優斗は彼女の姿を見て、一緒に買い食いができてよかったと思った。

――たとえ、このあと修たちにからかわれるとしてもね。

買い食いのことにしても、フィオナの家に行くことについても。

それでもこの瞬間を得られたのは、本当に喜ばしかった。

◇　◇

「ここが私の家です」

フィオナがそう言って示したのは……まごう事なき豪邸だった。

「……すごいですね。このような家を見たのは初めてです」

城を見たときも思ったが、この豪邸も本当にすごい。

1ヶ月経ったにしても改めて異世界に来たことを実感させられる。
庭に花壇。それに特大の家が存在するのはテレビの中でしか見たことがない。
それが実際に目の前にあると……圧倒される。
門にも警備の人がいる、というのがまた凄い。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

警備の初老男性はフィオナの帰りに頷くと隣の優斗に目をやった。

「この方は？」

「私のクラスメートでお友達のユウト・ミヤガワさんです。今日はお母様の招待で来て頂いたんです」

「ああ。この方がそうなのですか」

優斗が頭を下げる。
男性も頭を同様に頭を下げた。

「今後とも、お嬢様をよしなにお願いいたします」

彼が優しそうな表情を浮かべる。

「こちらこそフィオナ様にはお世話になりっぱなしで、こちらから何かしてあげられたらいいと思うのですが」

「いえいえ。貴方と出会ってからというもの、お嬢様が日に日に輝

かれています。私にとってはその日々の輝きを見るのがとても嬉しいのでございますよ」

「バ、バルトさん！！」

真っ赤な顔をしてフィオナが叫んだ。

「いや、なに。お嬢様が仰っていたのがこの方なのでしょう？　でしたらトラスティ家の守衛としてあいさつをしておくのは当然かと」

「そ、そうかもしれませんがその言い方では――ッ！」

「まあまあ。あちらで奥様がお待ちになっておりますよ」

バルトはフィオナと優斗を玄関へと促す。

そこに……いた。

「初めまして、ユウトさん。私はフィオナの母でエリスと申します」

一目でフィオナの母親だと分かった。

黒い髪を短く纏め、フィオナをそのまま年老わせれば彼女のようになるのだろう。

ただ、それでも美しさは鳴りを潜めてるわけではなく、年齢とともに円熟していった魅力というものが彼女にはあった。

「こちらこそ初めまして、エリス様。ご存知とは思いますが自分が宮川――いえ、ユウト・ミヤガワと申します。この度はご招待していただきありがとうございます」

「あら？　そんな畏まらないでくださいな」

「公爵の奥様にそんなことはできません」

「フィオナにはそんな言葉を使わないのに？」

「フィオナ様はお友達ですから」

「なら、母親である私も同じことよね？」

……どういう理論だそれは。

というか一般市民が公爵に慇懃な言葉を使うなとか何という無茶振りだ。

「……でも、しかし――」

「それに位としても異世界人である貴方のほうがこの国では高いのだから、せめて堅苦しい言葉を改めてくれないと私も困るわ」

そういえば、と思い出す。

この国では王族の次に異世界の人間が位が高いと。

だとしても、少なくとも目上に対してぞんざいな口調なんて出来ない。

「……わかり……ました。努力はしますから、今日はある程度で勘弁していただけると嬉しいのですが」

「しょうがないわね。今日はこれくらいで許してあげるから今度来た時にはもっと柔らかくなって頂戴ね」

「……はい」

なんというか……負けた気分だ。
丁寧な言葉を使ってはいけないってどういう貴族様なんだろうか。

「それでは中に入りましょうか。今日は家政婦が腕によりをかけてご馳走を作ってくれているから」

◇　◇

食事をする広間へと案内される。
思っている以上の料理に驚かされた。
席に座って食事を取ろうとして……ふと優斗は気付く。

「すみませんが料理の作法というものを知らないのですが……大丈夫でしょうか？」

元の世界でも知らなかったのに、こっちの世界の作法なんて知っているわけもない。

「あら、気にしないでいいのよ。堅苦しい場でもないのだから」

エリスがそう言ってくれるので優斗は安心する。

「そう言っていただけると助かります」

改めて優斗は食事を取る。
あまり乱雑にならないよう、丁寧にナイフとフォークを使う。
サラダや魚料理、肉料理の美味しさに舌鼓を打つ。
休み無く食べ始めていたので、一旦手を休める。
するとエリスが話しかけてきた。

「今日は来てくれてありがとう。いつもフィオナが話しているものだから、私もユウトさんのことが気になってたのよ」

「僕もエリス様とお話できて――」

「エリス“様”？」

睨まれる。

「……エリスさんとお話できてよかったですよ。貴族のお屋敷というものも中に入れましたし」

「貴方がいた国では貴族がないのよね？」

「そうですね。昔は存在しましたが、今はいません」

「では華族は？」

優斗は瞬間、ドキリとした。

――なんでだ？

そんなもの、まだ誰にも話したことなどない。

「……どうしてそれを知っているのですか？　友人の誰かが貴方に話しましたか？」

「違うわ。私たちは“元々”それを知っているのよ」

「それは――」

どういうことだ、と問いかけようとして……気づいた。

「今までにやって来た勇者からの知恵ということでしょうか？」

「そうとも言えるし、そうでないとも言えるわ」

「どっちなんです？」

いまいち要領を得ない。

「今までに我が国に来た勇者の風貌を聞いたことはある？」

「ありません」

「今まで来た異世界の人々は、総じて黒髪に黒い瞳を持っていたというの。それは先代も先々代も同じ」

歴代、リライトに召喚された人物はみな同じ風貌をしていた。

これは数百年に及ぶ歴史から分かっていることだ。

「つまり……今までの勇者は僕たちと同じ世界、同じ場所からやって来たというお考えで？」

「そうよ。今まで勇者がどこにいたのか、なんて考える人はいなかったわ。誰もが異世界の人間は総じてそのようなものだと考えている。少し考えれば分かることなのにね、この世界だけでも様々な容姿を持つ人間がいるのに、どうして異世界というだけで容姿が同じでなければいけないのかって」

そこが疑問の始まりだ。

つまり召喚とは、ある特定の世界――特定の場所としか繋がっていないのではないか。

「ではどうして、エリス様はそこに疑問を持たれたのですか？」

優斗の問いにエリスは笑って答える。

「我が家は異世界の血を取り込んでいるからよ」

突然の爆弾発言に、エリスとフィオナの容姿を改めて確認してしまった。

――なるほど。確かに。

最初に抱いた感想は“大和撫子”のようだと。

そう感じた自分はそこまで間違いではなかったのか。

「先祖に異世界の人がいる、ということですね」

「ユウトさんは理解が早くて助かるわ」

エリスは続ける。

「私より3代前、我が家は勇者の刻印を持つ方と結婚をしたわ。そして公爵まで上がっていった。私が産まれた頃にもご健在だったから幼い頃は時折、異世界についての話を聞いていたわ。この世界とは違うことを聞けるのが楽しくってね」

夢物語のようだった。

「では、その続きが気になって今日は僕を呼んだのですか？　たったそんなことのために？」

刺すような優斗の言葉をエリスは軽くいなす。

「あらあら、違うわよ。私が興味を持ったのはあなた自身。フィオナの会話にあれほど出てきたのは後にも先にもあなただけだから。母親として興味を持つのは当然でしょ？」

「でしょうね。どうにもエリスさんは悪い意味での毒気がないですから」

今まで自分が相対してきた大人はもっと狡賢くて、狡猾で、酷い。

「というわけで、今日はフィオナとの馴れ初めとか聞かせてもらうわよ？」

「お、お母様！！」

フィオナが声を張る。

「フィオナさんは今日、よく叫びますね」

優斗とエリスが笑う。
この後、優斗はエリスに尋ねられるがままにフィオナと出会ってからのことを話し始めた。

◇　◇

その頃、別のメンバーは王城にある厨房の一つを使わせてもらってのオムライスパーティーをやりながら、

「今日、あいつらの仲が進展したと思う人、挙手」

賭けをやってきた。
修がオムライスを頬張りながら採決を取る。
……が、誰も手を上げなかった。

「お～い、誰かが手を上げないと賭けにならないぞ」

「そんなこと言っても、優斗とフィオナだし」

「期待するだけ無理無理」

卓也と和泉が手を上げることを拒否する。

「そ、そんなことはありません。フィオナさんと優斗様だって二人っきりでデートをすれば少しぐらい意識するはず――」

「じゃあアリーは手を上げるか？」

「……それは、その……」

そう問われると、さすがに反論もあやふやになっていく。

「んじゃ、進展するほうに賭けるやつがいなかったから、今回の勝負はなし。次回のプリンはじゃんけんで勝ったやつが多く食べれるってことでいいか？」

「「「「賛成」」」」

こうして6人の夕飯は進んでいく。

優斗とフィオナを会話の肴にして。

闘技大会、参加します

優斗たちが異世界に来て2ヶ月と少し。
生活にも慣れて、魔法もある程度は自在に操れるようになってきった頃。
その話は出た。

「闘技大会？」

「はい。2週間ほど後になりますが、学生による闘技大会というのがあるんですよ」

アリーから面白い情報がもたらされた。
興味を持った修が尋ねる。

「参加資格は何なんだ？」

「中級魔法を一つでも使えることです」

「じゃあ、ここにいる全員にその資格があるわけだ」

「そういうことになりますね」

修とアリーがぐるりと8人を見回す。

「誰か出られてはいかがですか？」

学生の闘技大会と言えば学院でも大きなイベントのうちの一つだ。

「全員で出るのも馬鹿らしいし、1人だけ出ればいいだろ」

「じゃんけんで決めるか」

和泉の言葉に賛成。異議なしと次々と同意を得られる。

「じゃあ、はじめるぞ」

修を合図に全員が構えを取る。

「「「「最初はグー」」」」

「じゃんけん――ッ！！」

◇　◇

「はい。それではこれで、闘技大会参加ということになります。後日、通達などがありますので確認を怠らないようにお願いいたしま

す」

優斗は頷く。
傍らにはいつものようにフィオナが付き添っている。

「分かりました」

「それでは、これにて登録受付は終了となります」

受付係にそう言われて、2人は踵を返して教室へと向かう。

「2週間後から大会が始まるのか」

「これからは魔法の練習に力を入れます？」

これまでもやってきてはいたが、より一層に力を入れたほうがいいだろうか？
そう思ってフィオナは訊いてみた。

「ああ、そのことなんですけど――」

「おや？　君も参加するのかい？」

その時だった。
ちょうど目の前にラッセルがいた。
これ見よがしに声をかけてくる。
優斗は心の中で嘆息する。
出会いが最悪だったからなのか、修を中心とする異世界組にはどうにも八つ当たり気味のことをしてくる。
そこまで大きなことはやってこないから問題はないが、面倒なこと

には変わりなく出来るだけ関わりたくない人物だ。

「はい。僭越ながら参加させていただこうと思っています」

「そうなのかい。実は僕も闘技大会に出るんだよ」

鼻で笑って優斗を値踏みするように睨め付ける。

「僕ほどの実力者が参加するんだ。田舎者なのに参加して怪我しても知らないよ？」

そうだそうだ、と後ろの取り巻きがはやし立てる。

「ラッセル様。こちらとしてもまだ、学院に来たばかりの若輩者ですので対戦することになった場合には胸を借りるつもりで勝負させていただこうと思っています」

あくまで下手に出て優斗が対応する。

異世界組の中でもとりわけ丁寧に接する優斗には、ラッセルも気分が良いようだ。

「それは良い心がけだ。せいぜい僕と当たるまで負けないようにしたまえ」

「ありがとうございます」

慇懃に頭を下げる。

「それはそうとフィオナ様。今度ディナーでもご一緒にいかがですか？」

ニヒルな笑顔を浮かべて会話の対象をフィオナに移す。

「結構です」

「そうですか。ではせいぜい、貴族の嗜みというものを忘れないでいただきたいものだ。そんな平民風情に構っているのならね」

「――なっ！？」

唐突なことに思わず反論しそうになるフィオナだが、ラッセルに気付かれないように優斗が制した。

「ラッセル様。フィオナ様は田舎から出てきた我々に都会での暮らし方、そして学院での過ごし方を教えてくださっています。それも良き貴族としての在り方と存じておりますので何卒、ご理解をお願いします」

「まあ、それなら仕方がない。平民には優しく在るのも貴族というものだしね。だからといって勘違いしてはいけないよ。君達は施しを受けているのだということを」

「重々、承知しております」

「それならばいい。せいぜい、迷惑をかけないように」

高笑いをしながら手下を引き連れて去っていくラッセル。
廊下の曲がり角を曲がって、姿が消えていく。
とたんにフィオナが怒り出す。

「ユウトさん！　どうしてあんなことを言われて何も言わないのですか！？」

「無駄な争いは面倒なだけですしね。修が蒔いた種ですけど、標的は全員みたいですから。実害がない限りはスルーしておこうかな、と」

「……でも私は……ユウトさんが悪く言われるのは嫌です」

「そう言っていただけるだけで嬉しいですよ」

それにしても、と優斗は続ける。

「ラッセルって強いんですか？」

なんか自信ありげだった。

授業で見ている限り弱くはないと思うけれども。

「少なくとも学院で１０本の指に入るほどの強さは持っているかと思われます」

「すごく強いんですね」

「しかし、あんなやり方で強くなっても……」

納得いかないようにフィオナが眉をひそめる。

「どういうことです？」

「魔法具です」

「……ああ、そういうことですか」

今まで習っている中にあった。

魔法具――アクセサリー、武器の類に特性付与が付いている物だ。

「彼は貴重な魔法具を幾つも使っています。それは彼自身に実力などがなくても、上級魔法が使える……といったようなものです」

「だから強くとも、実力はないんです」

元々、魔法具にインストールされているものを使っているだけなのだから、彼自身の強さというわけではない。

「本人がそれでいいなら良いと思いますけどね」

それにそんな人物なら。

――なんとかなるか。

戦う相手としては楽そうだ。

そう思える。

「あ、そういえばさっきの話の続きなんですけど」

「魔法の練習の話ですか？」

「ええ。２週間の時間がありますが、最後の１週間は自主練習をしようと思っています」

「どうしてですか？」

不思議そうにフィオナが問いかける。

「ちょっと試したいことがあるんです。けれどフィオナさんに見せるのは恥ずかしいので」

頬を掻きながら、照れくさそうに言う。

「基本はフィオナさんのおかげでほとんど完璧に出来てますから、少し応用にも走ってみようかと」

◇　◇

魔法というのは、やはり本人によって得手不得手が出てくる。

修は『勇者の刻印』なんてものを持っているから特にないけれども、修は例外だ。

優斗も特に問題なく魔法を習得している。その中でも風とは相性が良い、とフィオナが言っている。

卓也はどの属性が、というよりは攻撃魔法が苦手で防御魔法が得意。

聖属性の防御魔法も使えるのでは、とはココ談。

和泉は……魔法に関しては興味がなく、どちらかといえば魔法科学のほうに多大な興味を持っていた。なので得手不得手で考えれば魔法が苦手、ということになるのかもしれない。

そんな最中、

「お前、何やってるの？」

闘技大会1週間前、自室で黙々と魔方陣を作っては変なことをして、色々と試行錯誤している優斗に和泉が尋ねた。

「いや～、上級魔法と昔のマンガにあった魔法をたくさん試してたんだけど」

「マンガってどの魔法？」

「極大消滅呪文のやつ」

優斗は、とある大魔道士が使っていた魔法を実際にやってみようとしていた。

「氷の魔法を炎の魔法を合わせて、エネルギーを発生させるやつだったか？」

「そうそう。だけど、いくらやっても氷が溶けて終了」

魔方陣から出てくる炎と氷をぶつけたところで、さっきから結果は同じだった。

「お前だったら、それ試すよりもっとお気に入りの魔法があるだろ？」

詠唱すら覚えてるやつが。

「もうやったよ」

「結果は？」

興味津々で和泉が訊いてくる。

が、優斗はにっこりと笑って、

「ないしょ」

そう告げた。

闘技大会、始まりました

「こりゃ凄い」

闘技大会当日、町はお祭りムード一色になっていた。
出店が並び老若男女が揃って闘技場目掛けている。

「リライトでも大きなお祭りのうちの一つですからね」

年に数度あるイベントのうちの一つだということをアリーが異世界組に教えてくれた。

「それにスカウト陣営も張っていますから、お祭りの他にも違った一面があるのが闘技大会の特徴でしょうか」

兵隊になるには基本的に志願制だが、ギルドに所属してチームを組んでいるものは闘技大会を観戦して、早めに金の卵を発掘しようとしていることもある。
学院に通っているものにとっては、自分を見せる場の一つとしてもなっている。

「だとしても、参加人数が少ないくね？」

「しょうがないですよ。中級魔法をしっかりと使える人はあまりいませんから」

計３２名が闘技大会にエントリーすることになっている。
ラッセルとは順当に行けば準決勝であたることになった。

全員は客席に集まって最前席で観戦することにした。
優斗も呼び出しがかかるまではそこにいる。

「それで？　あの馬鹿に勝てんの？」

不意に修が優斗に訊いてきた。

「どうにか頑張るしかないよ」

「俺としては、あの馬鹿をぶっ倒してくれればそれでいいや」

面倒なのかうざいだけなのか、未だに修とラッセルは相性が悪い。

「それをやるとなると、僕はこの学園で１０番目以内に強い奴じゃないといけないんだが」

「何か問題でもあるのか？」

あっけらかんと修が言った。

「ないよ」

修は優斗が優勝すると信じている顔だ。
自分が出ていないのだから、当然だろうと。
暗にそう言っている。
アナウンスが流れた。
優斗の出番がそろそろとなる。

「それじゃ、行ってきますね」

席を立ち、控え室へと向かって歩いていく。

「……あの」

その時だった。

すっ、とフィオナが寄ってきて、服の裾を小さく握った。

「無理、しないでくださいね」

「……はい」

「怪我したら……駄目ですよ」

「わかってます」

「がんばってください」

「りょうかいです」

お互いに笑顔を浮かべて、ヒラヒラと手を振って優斗は改めて控え室に向かう。

「なんつーか、こう……むずがゆいのは俺だけ？」

そのやり取りを見ていた、他のメンバー。

「オレも」

「自分もです」

次々と頷いていく。

「かといって、好きなんじゃ？　って茶々入れるような場面じゃないんだよなぁ」

「友情とか恋愛を飛ばして夫の出立がとっても心配です、みたいな」

「そうそう、そんな感じ」

ココの感想に卓也が同意する。

「ただ、それがとてもむずがゆいんだよな」

優斗とフィオナのやり取りに気を取られているうちに試合の一つが終わっていた。

そうこう話しているうちに目の前で行われていた試合が終わる。

次の次は優斗の出番だ。

「そういえばユウトさん、緊張とかしないんですかね？　これだけ観客に囲まれると、わたしなら緊張しちゃいますよ」

少し疑問に思ったココが修たちに尋ねる。

「あいつは緊張しないって」

卓也が答えた。

「そうなんです？」

「だってあいつ、こういう場面に慣れてるし」

◇　◇

「それではミヤガワさん。出番となりますのでよろしくお願いします」

「わかりました」

運営委員に促されて優斗は闘技場内へと踏み入れる。

『――さあ、初出場同士の対戦だ。彼に対するのは2年F組、ユウト・ミヤガワ！！』

優斗が踏み出すと、すでにそこには対戦相手がいた。

データによれば一つ上の学年。

さして有名な名前というわけでもなく、この点では優斗と一緒だった。

周囲を見回す。

修たちが、幾人かのクラスメートが、見知らぬおじさん達が、頑張れと声をかけてくれていた。

――懐かしいな。

部活をやっていたころ、大会に出ていたときはこうだった。
屋内球技の卓球だったけれども、こんな感じだった。
勝ち上がっていくにつれて、同じ学校じゃなくても応援してくれる人がいたというのは今となっては本当に懐かしい。

『さあ、それでは早速始めてもらおうか。審判、お願いしまーすっ！！』

対戦相手と優斗が闘技場中央に向かう。
そこには一人のごついおじさんがいた。
王国でそこそこの実力者らしい。

「制限時間は１０分。決着がついたと思ったらその時点でオレが止める。それ以上の攻撃を行った場合は反則だ。最低限、命さえあれば治してやれるから、存分に戦え」

審判の説明がかなり物騒だった。
自分も対戦相手も頷く。

「それじゃ、開始線まで離れて」

優斗と対戦相手が１０メートルほどの距離で向かい合った。
一呼吸置いたあと、審判が宣言した。

「始めっ！！」

◇　◇

「始まりましたね」

アリーが緊張した面持ちで優斗を見る。

「ユウト様はどう動くのでしょうか？」

「とりあえず初戦だからな。まずは体をほぐすためにもゆっくりと始めるんじゃねえかな」

修が自分の予想を告げる。

「あっ、ショートソードを抜いて……右回りに動き始めましたね。魔法は使わないのでしょうか？」

「どうだろうな？　さすがに内容までは考えつかないぞ、特にあいつの場合は」

「おお、相手は炎の玉を作り出したぞ」

初級の魔法ではあるが、オーソドックスな魔法ゆえに誰もが最初に牽制ではこれを使う。

「優斗が構えたな。足も止めたし……」

「ちょっと待った。あいつもしかして」

卓也があることを考え付く。

「何をするか分かったんですか？」

アリーが訊く。

「あいつさ……切るんじゃないかな。魔法を」

卓也がそう言った瞬間、相手から優斗に炎の玉が撃ちだされる。
優斗はぐっ、と腰を入れて構えると、そのまま横一線、ショートソードを振りぬく。

「……切りましたね」

クリスが呆然とし、

「切ったな」

和泉が笑いそうになり、

「すごーい」

ココが感嘆し、

「「……」」

アリーとフィオナが絶句し、

「やっぱりな」

卓也が納得し、

「当然だろ」

修が当たり前という表情をした。

「と、当然じゃないですよ！　魔法を切るなんて一流の剣士でもないと出来ませんよ！！」

「アリー、よく見てみろって。剣技だけじゃなくて、ちゃんと魔法を使ってるぞ」

修にそう言われてアリーは目を凝らしてみる。

ショートソードの周りに、何かが渦巻いているのが見えて……消えた。

「属性付与？」

「違う。純粋な魔法だ」

ショートソードはそこらへんにあるただの武器。

「風の魔法を纏わせて、切り裂く。単純といえば単純だろ。魔法的にも簡単だしな」

「で、でもそれをするには度胸とタイミングが――」

「あるんだろ」

それが当然だというふうに修が答える。

「それにたぶん、これからの戦いの牽制の意味も込めてるんだろうし」

「……？」

アリーが首をかしげた。

「普通に見たら、だ。アリー達みたいに魔法を切れる一流の剣士に見える。何かに気付いたとしても属性付与のついた剣を使っているように思える。これからあいつと対戦することを考えると、初級の魔法程度は使えない。そう思わされる」

つまり、と修は続ける。

「使える手の内が一気に減らされる。実際、あいつがどのレベルの魔法までぶった切れるのか知らんけどな。今後の戦いを楽にするためにもそうしたんだろ」

驚きの表情を浮かべるアリーとフィオナを尻目に、優斗が動いた。

「ゆっくりやると思ってたけど違ったな。決めに行くぞ、あいつ」

飛び込むように対戦相手に駆け出す。

対戦相手は慌てて詠唱し始める。

炎の中級魔法の一つだ。

しかし、遅い。

優斗が袈裟切りで対戦相手に襲い掛かる。

すんでで相手が詠唱をやめ、かわす。

「かわされた！？」

「いや、これで終わりだ」

アリーの驚きを修が否定する。

事実、優斗は勢いそのままに間を詰めた。

そして攻撃をかわして体制を崩した相手に左手を軽く押し当てる。

瞬間、相手が吹き飛んだ。

壁に叩きつけられ……崩れ落ちる。

「勝負あり！！」

審判が宣言した。

歓声が沸く。

『決着――ッ！　初参加同士の勝者は魔法を切るという大技を見せた、ユウト・ミヤガワ！！』

◇　◇

「とりあえず、１回戦突破おめ」

「サンキュ」

応援席に戻った優斗にそれぞれ労う。
その中でもフィオナは優斗の隣まで歩いていく。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

「怪我しなくてよかったです」

ほっとした表情をフィオナが浮かべた。

「無茶はしなかったでしょう？」

「このあとも、です」

「相手がだんだんと強くなっていくので難しいと思いますけど……できる限り気をつけます」

「はい」

怪我しないのも、無理しないのも不可能だろうけど。
せめて心配だけはかけないようにしたい、と。
そう思う。

その後の試合は修の予想通りと言うべきか、相手が優斗の実力を懸

念していたおかげか特に問題なく勝ち進んだ。
そして準決勝。
トーナメントの戦いぶりから大方の予想通り、優斗とラッセルの勝負となった。

「へぇ、ここまで勝ち上がるなんてやるじゃないか」

「ありがとうございます」

「せいぜい、1分は持たせてくれよ？　すぐに決まってしまっては客もしらけるからね」

あくまでも自分が絶対優勢だとラッセルは思っている。
だからだろうか。

「だから君が頑張るためにも賭けをしないかい？」

「賭けですか？」

「ああ、そうだよ。君が負けたら……フィオナ様をこっちに譲ってもらおうか」

「……なぜでしょうか？」

「君たちのところには少々、貴族が集まりすぎているからね。一人ぐらいいなくなってもいいだろう？」

「それを決めるのはフィオナさんですよ」

努めて落ち着いて話す。

心中では……イラッと来ていた。

「それにあの美貌。この僕にふさわしいと思うからね。今のうちに未来の夫のそばにいさせてもいいだろう？」

こっちの言葉を聴く気がない。

話が繋がっていない。

さらには前に話したときと態度が違う。

――ただ、それよりも。

フィオナを譲れだとか。

――物のように扱って。

ふざけるのも大概にしてほしい。

「君が勝ちあがってくれてよかったよ。おかげでこんな提案を思いついたのだから」

「……」

プチ、と来た。

◇　◇

「何か話してるんでしょうか？」

「みたいだけど……優斗、なんか切れてるっぽい」

「ユウトさんがですか？」

クリスが驚きを表した。

あの冷静沈着な人物が怒ってる。

なんてことを言われても、信じかねる。

「あいつの大事なモンの何かをぶしつけに扱ったんじゃね？」

「でないとあいつが切れるってないからな」

修と和泉が長年の付き合いから判断する。

「だとしたら5秒かな？」

卓也が言う。

「8秒だろ」

修が別の秒数を言って、

「10秒で」

和泉がまた、別なことを言った。

「何の話です？」

ココが気になって尋ねる。

3人は笑って、

「決まってるだろ。ラッセルが倒される時間だよ」

◇　◇

開始線までお互いが離れた。

優斗の中で怒りが渦巻いてはいるが、それは闘争心に変えるだけ。

あくまでも心と頭は冷静に落ち着かせる。

「始めっ！」

宣言された瞬間だった。

優斗は炎の玉を瞬時に現すと、ラッセルの手前に叩きつける。

爆炎と砂煙でラッセルの視界が一瞬にして閉ざされた。

優斗自身も煙の中に飛び込んでいき、観客からはどちらの姿も見えなくなる。

「いけ」

さらに人の大きさ程度の石の塊を魔法で作り上げ、正面に飛ばす。

優斗はそこまですると、風の魔法を使って大きく跳躍した。

「えっ!?　なんだ!?」

瞬間芸に驚きを隠せないラッセルを尻目に、空中でさらに二度、魔法を使って空気を蹴り上げ自身の身体を加速させる。

――さあ、どうなる。

ここでラッセルは先ほどの石の塊をほんの僅かでも自分と勘違いしてくれているなら。

「そ、そこか!!」

煙で薄っすらと影しか見えないラッセルの姿だが、手を石にかざしているのは見える。

――かかった。

小さく笑う。

さらに風の魔法を使ってラッセルの真後ろ、直下に降り立つ。

そして反応する間も与えずに優斗は短剣を首筋に押し付けた。

……煙が晴れる。

僅か数秒の出来事。

その結果が。

優斗がラッセルの首筋に剣を当てている、ということだった。

審判がすぐさま判断する。

「しょ、勝者、ユウト・ミヤガワ！」

瞬間、歓声がスタジアムに上がる。

準決勝での圧勝劇。

『な、なんと毎年白熱する準決勝がわずか8秒。8秒で決着がついてしまいました！！』

アナウンサーが興奮しながら喋り倒す。

優斗はラッセルに一瞥もせずに戻っていく。

ラッセルが何か審判に言っているようだが、それもどうでもいい。

――とりあえず戻ろう。

少しチームの人たちと話して、落ち着きたかった。

なぜだ、なぜだ、なぜだ。
どうしてだ。
あんな奴にどうして負けなければならない。

「なぜだ……」

どうしたって負けるはずがない。
自分はあの平民に勝ち、フィオナを手に入れるのではなかったのか。

「なぜだ……」

審判でも買収していたのか。

「……ははっ」

そう結論付けてしまえば、全てがスッキリしてくる。

「ならば罰を与えなければならないな」

貴族である自分を不正を使い負けさせた。

「報いを」

そうだ。

でなければ。

「でなければ僕が負けるわけないじゃないか」

◇　　◇

「決勝の相手、誰だっけ？」

フランクフルトを頬張りながら、修が今更のように訊く。

「レイナ様ですわ」

「誰？」

「我が学院の生徒会長をやっている方です」

呆れたようにアリーが答えた。

「女性なのに学院で一番強いんですよ。わたしの憧れです」

ココがうっとりする。

「……そんなのと対戦する僕は大丈夫なんだろか？」

「だ、大丈夫ですよ。たぶん骨の一本か二本ぐらいで……」

……何も大丈夫じゃない。

「とりあえず、出来る限りは頑張りますよ」

とりわけ楽天的な口調をする優斗。

『もうまもなく決勝の始まりとなります』

「それじゃ――」

優斗が立ち上がると、修を始めとした全員が一斉に握りこぶしに親指を立てて優斗に向けた。

卓也あたりが教えたのだろうか、全員が綺麗にやってくれていた。

意味を分からずともやってくれる４人がうれしかった。

優斗も同じポーズを取る。

「行ってきます」

◇　◇

「君がミヤガワくんか」

目の前にショートカットの美女が立っている。

決勝の相手だ。

「準決勝は爽快だったよ。あのラッセルをわずか8秒で倒したのだから」

「ありがとうございます」

「いや、なに。あいつの性格もほとほと困っていたからな。いい薬になっただろう」

笑って、一息入れたあと……レイナは目をギラつかせた。

「君はまだ、初級魔法程度しか使っていない。まだ底が知れぬということだ」

一つ上のレベルの魔法はどんなものが使えるのか、誰もが判断できない。

もしかしたら上級まで使えるのではないか、と期待もしている。

「楽しみだよ。実にね」

……好戦的。

と考えてよさそうだった。

「あまり期待しないでくださいね」
ただ、それだけを伝えて。
優斗とレイナは距離を取った。

『さあ、学院で一番と呼ばれる実力の持ち主の生徒会長と、準決勝を圧勝した最強の新人が今、激突する』

「それでは――」

審判が宣言しようとした瞬間。
“それ”は唐突に現れた。
どこからともなくカラン、と音を立てて現れた正六角形の板。

「なっ、あれは!?」

音に反応した闘技場内の3人だが、いち早くその場にあるものに気付いたのはレイナだった。
次いで審判が気付き、2人して物体に飛び込んで板を砕きにいく。

「くそ!」

だが……遅かった。
その板を中心に六芒星が地面に描かれる。
そして始まるは……召喚。
六芒星から徐々に人間ではない、明らかに異種族の身体がせり上がってくる。

「……竜」

思わず優斗が呟いた。
しかも姿は見目綺麗なものではなく、黒い体に歪な棘がついている。
大きさも１０メートル、といったところか。

『――――ッ！！』

竜が咆哮を上げた。

「逃げろ！！」

審判が優斗とレイナに怒鳴る。

「非常事態だ。１０秒後には強力な結界魔法を使う規則になってる。
取り残されたらお前達でも出れなくなるぞ！！」

審判もレイナも優斗も反応は早かった。
言われたと同時、３つある闘技場内への出入り口に向かってそれぞれ駆け出す。
が、それをみすみす逃すモンスターでもなかった。
審判と優斗とレイナを見回し、一番近かったレイナを標的にする。
竜の様子を逐一見ていた優斗にはそれが見て取れた。
傲慢なまでの鉤爪がレイナを狙いを定めて掲げられる。

――やばい。

優斗は立ち止まる。
反射的に炎の玉を竜目掛けてぶつけた。

威力はないが注意を引くには十分だ。
そのまま2発、3発、4発をぶつければ完全に竜の視界には……優斗がいた。
優斗が他の出入り口を確認すれば審判もレイナもすでにたどり着いている。
自分が最速で出口に向かえば残り2秒ちょっとだとしても、確実に――。

「……マジで」

無理だった。
すでに結界は張られ、完全に閉じ込められた。

「10秒経ってないのに」

とは言ったところで、張られてしまったものは仕方がない。
改めて竜と対峙する。

「どうにかするしかないか」

◇　◇

竜が現れた瞬間、優斗とクリスが戦闘態勢を取った。
しかし竜の視界に映ってるのは闘技場内にいる3人だけ。

その中でレイナが標的にされているのが分かったため、修とクリスは観客席に張られている簡易防御魔法を突破してでも魔法を放とうとしたが……杞憂に終わる。
優斗が竜の気を逸らしたからだ。
そして安堵したのもつかの間、今度は強固な防御魔法が張られ、その中で困ったように立っている優斗がいやに印象的だった。

「……カルマがどうしてここに」

アリーの呟きに修がすかさず反応する。

「あのカルマってのは強いのか？」

周りの観客が兵士に先導されて逃げる最中、チームのメンバーは逃げることなくその場にいた。

「シュウ様なら普通に倒せるとは思います。しかしながらカルマはAランクのモンスター。上級魔法を使えるのが最低は3人いないと倒す、ということすら難しいです」

アリーの説明を聞いた瞬間、フィオナもココもクリスも青ざめる。
特にフィオナの表情が一番酷かった。

「この結界も上級魔法すら防ぐ結界。細かい制御は出来ずに闘技場の中を全て包み込むから出入り口も防御されてるんです」

観客だって全員が逃げ切るには少なくとも1分以上かかる。
その間、カルマは結界魔法から出してはいけない、というのは子供だって分かる図式だ。
けれどその間、優斗は一人でカルマと対峙しなければならない。

まだこの世界に来て2ヶ月しか経っていない優斗に。

「なんだよ。それだったら話は簡単じゃん。優斗があれをぶっ倒せばそれで終了だ」

安心したように修が戦闘態勢を解く。

その光景がアリーには信じられなかった。

「だってカルマは上級魔法を使える人が最低3人はいないと――ッ！」

「でも俺なら普通に倒せるんだろ？」

特に慌てた様子もなく修が尋ねる。

「そ、それはシュウさんが『勇者の刻印』を持っているから」

絶望した表情のまま、フィオナが答える。

「それに私、まだユウトさんには基本属性の中級までしか教えてないんです。それなのにあのモンスターを倒せるはずないです。ですから観客が逃げたあと、シュウさんが結界を破ってでもユウトさんを助けに行っていただくしか……」

どうして修がそんな悠長に構えているのか。

修でしか普通に倒せないと言ったはずだ。

少し非難交じりにフィオナは視線を向ける。

アリーもココもクリスも同意している。

そんな彼らを見て修はこれみよがしにため息をついた。

「その考えが甘いんだよ」

「何がですか！？」

アリーが噛み付いた。

「お前らは今日、あいつの何を見てたんだ？」

中級魔法一つ使わずに勝ち進んできたじゃないか。

「それに優斗は俺の親友やってんだぜ」

まともなわけがない。

「俺は基本すらぶっ飛ばすけど、あいつは基本を完璧に習ったらはっちゃけるぞ」

「つまり？」

クリスを先を促すように相槌を打つ。

「俺より性質悪いときがある」

ニヤリと修が笑う。

それに何よりも大きな間違いが一つ。

「大体、俺が普通に倒せるの奴を優斗が倒せないわけないだろ」

修の宣言に、その場にいたアリー、フィオナ、ココ、クリスが首をかしげた。

「それはどういう意味ですか……？」

代表でアリーが尋ねる。

「言った通りだ」

意味はそのまま。

何一つ変更はない。

「お前ら、優斗をなめすぎだ。あいつは俺と同等だぞ」

「それは実力的に、でしょうか？」

「そうだ」

「まさか！？」

アリーが驚く。

『勇者の刻印』を持つものと同等だなんて。

おとぎ話の登場人物でしかお目にかかることなんてできない。

「その『まさか』を実現させるのが優斗なんだって」

卓也が苦笑する。

「こんな『勇者の刻印』なんてものもらってる俺でもな、あいつとガチで勝負したら普通でもイーブン。良くても勝率は６割ぐらいだぞ」

実際に向き合って闘ってはいないけれども、それぐらいは分かる。
親友でもあるけれど、それ以上に修が唯一認めた“ライバル”だからこそ。

「それに、いつも冷静沈着な感じで穏やかだけど――」

熱量なんて持ってなさそうな性格をしているけれど。

「――決めたことに対しては極度の負けず嫌いだ。そんで、勝つために限界まで努力することを怠らない」

つまり、だ。

「俺がチートなら、あいつは化け物だ」

◇　◇

カルマと対峙してから、３０秒ほど経った。
警戒されているのか何なのか、まだ攻撃してくる気配はない。
着々と時間が過ぎていけば観客だって逃げていける。
少なくともその時間は稼ごうと思っていた。
が、視界の端に修の姿が映る。
カルマを指差した後、親指だけ突き出して首を切る仕草をした。

――倒せってか！？

カルマを改めて凝視する。

気配、圧力、感じるもの全てを鑑みて。

――まあ。

確かに“倒せない”わけがなかった。

「仕方ない」

観客が全員逃げるのも、あと十数秒で終わる。

出入り口を見ればレイナが結界を叩いているのがわかった。

少し笑えた。

「それじゃあ」

あらためてカルマと対峙する。

「倒すか」

意識を切り替える。

ショートソードを抜いて、戦闘態勢を取る。

また、さらに２０秒ほど経過する。

気付けば観客は全員が逃げ出しているが、優斗の視界にはすでに映っていない。

ただ、時間の計算からいっていなくなっていると理解しているだけだ。

『――ッ！』

動いたのはカルマだった。
一度羽ばたき、突進してくる。
優斗は風の魔法を足元に集め、それを使って一気に跳躍する。
そうしてかわしたも束の間、カルマの口の中に炎の球が生まれているのを見た。
違わずして発射された上級魔法と同威力の球を優斗は空中にいながらショートソードを振りぬいて切る。
着地すると即座に手をかざした。

「求めるは地の縛り、重き懲罰」

闘技場で優斗が初めて詠唱する。
優斗が唱えた瞬間にカルマの動きが止まる。
地面に円状の窪みが現れ、カルマが歪んで見えた。

――まだまだ。

右手を振りぬき、ショートソードを風の魔法を纏わせて全力で投げつける。
弾丸のように飛び出していった剣はカルマの腹部に突き刺さった。

――そして。

これで、最後だ。

◇　◇

「地の上級魔法……」

その中でも重力操作の魔法は特に難しいとされる上級魔法だ。

「それをいとも簡単に」

これが自分で特訓していた1週間の成果、なのだろうか。

気付けばフィオナの表情は少しだけ良くなっている。

が、それでも修の言葉を信じ切れてないのか、不安な様子は消えない。

「目を離すなよ、ここからだ」

「こ、ここからって……！？」

修の言葉にフィオナは驚きを表す。

――だって、上級魔法をすでに使ってるのに。

なのに修はそこから、さらに何かがあると言っている。

――そんなこと……。

いくら異世界から来たとしても。

魔法を習い始めて2ヶ月ちょっとしか経ってない。

どんなに凄いと言われても。

これ以上のことを。
できるはずがないと。

『天光満つるところに我はあり』

今の今まで、思っていた。

――これは……詠……唱……？

まさか。

「ユウトさん……？」

彼は足を肩幅に開き、目の前のカルマを見つめていた。
ゆっくりと彼の口から新しい言葉が紡がれる。

『黄泉の門開くところに汝あり』

それはフィオナが……いや、この世界の誰もが聞いたことのない詠唱の始まりだった。

◇　◇

『天光満つるところに我はあり』

大好きなゲームの魔法詠唱だ。
かっこよくて、繰り返しこの魔法を見たものだ。

『黄泉の門開くところに汝あり』

自分が好きな魔法。
ならば、使いたい。
使えるように努力をした。

『来たれ』

カルマを中心に魔方陣が広がり、

『神の雷』

さらに天空へと魔方陣が幾重にも連なって浮かび上がる。

――これで終わりにする！！

さあ、轟け。
剛雷。

『インディグネイション』

白光、と呼べばいいだろうか。
闘技場一面を白く染め上げる雷がカルマへと降り注ぐ。
結界魔法すらも壊す稲妻が甲高いノイズを響かせて闘技場に届く。

「――――ッ！！」

白煙が消え、闘技場を包み込むほどの光が消える。
そこにいたのは優斗のみ。
皆が恐れていたはずのＡランクモンスターは、

「……うん、勝った」

消し炭すらも残っていなかった。

◇　◇

「……これが……」

修が言っていた実力。

彼の自信の根源。

「神話クラスの……魔法」

そんなものを使える、優斗。

勇者と同じ強さを誇る……自分の生徒。

「……だけど」

どれほど強くたって。

勇者と同じくらいに強いのだとしても。

「……それでも」

この気持ちは拭えない。

「えっと……」

優斗がフィオナ達に近づいてくる。

「やりすぎた？　これでも威力は抑えたんだけど……」

少し困ったように、そして何でもなかったように皆のところに辿り着いた優斗にフィオナは、

「ユウトさん！！」

飛び込んで抱きついた。

「へっ！？」

素っ頓狂な言葉を出して、優斗は固まった。
後ろでは6人が感嘆の声をあげている。

「……無理しないって……言いました」

「え、いや、あの……」

「……心臓が止まるかと思いました。ユウトさんがカルマの気を引いて、結界魔法に囲まれたときは」

自分が今、心臓が止まりそうですとは間違っても優斗は言わない。

「そ、それは、でも、そうしないと――」

レイナがやられていた、というのはフィオナだって理解できている。
けれど、

「ユウトさんが強いのは分かりましたけど！　それでも心配で怖かったんです！！」

目じりに涙が溢れてくる。
先ほどの怖さがまだ心に残っているから、優斗の存在を感じていたくて強く抱きしめる。

「えっと、その、ですね……」

優斗がどうしようかと考えていると、後ろでニヤついている連中から囃し立てられる。
ふざけんな、とも思うがフィオナがこうして抱きついている以上、

何かしてあげたほうが安心するのも理解していた。
意を決して、恐る恐るではあるが右手で頭を撫でる。

「ごめん」

「……」

「生徒会長は逃げるのに必死だったし、僕は少なくとも死なない自信はあったから、ああやって竜の気を引いたんだ」

「……」

「閉じ込められたのは予想外だったけど、それでも時間稼ぎどころか倒せるぐらい簡単にできるのは自分で理解できてた」

「……はい」

「でも、フィオナを心配させたのは謝るよ。あと――」

ごめんと言うだけじゃなくて。

「ありがとう。フィオナがそう思ってくれていることが、本当に嬉しいよ」

自分が認められていると。
誰かの大切になれていると。
そう思えるから。

「それで、オレらはあとどれくらい見てればいいんだ？」

唐突な卓也のツッコミに優斗の腕の中にいるフィオナがビクリ、と驚いて離れた。

優斗は小さく笑って答える。

「とりあえずフィオナさんが落ち着いたから、これ以降はないよ」

そう優斗が答えると、フィオナが不満げな表情を浮かべた。

「どうかしましたか？」

「フィオナです」

「……フィオナさん？」

「違います。フィオナです」

そう言われても優斗には理解不能だ。

「……えっと……？」

意味が分からず周りに助けを求める。

「お前さっき、口調が違ったんだよ」

卓也が助け舟を出した。

「そうですね。さらに“フィオナ”って呼び捨てしてましたよ」

ココが付け足した。

「マジで？」

「マジです」

クリスが駄目押しをする。

「そろそろ、その口調も変わるときが来たってとこだろ」

「……みたいだね」

優斗は修に同意する。

「もう一度、呼んでください」

フィオナが要求する。

「えーっと……あー……うー……」

先ほどは意識していなかったから出来たが、あらためて意識して呼び捨てというのはかなり恥ずかしい。

だが、フィオナが呼び捨てじゃないと今後は認めてくれないのもなんとなく分かる。

恥ずかしさをぐっ、とかみ締めて呼ぶ。

「フィオナ」

ただ、そう名前を呼ぶだけで。
花が咲くような笑顔が返ってきた。

「はい、優斗さん」

闘技大会、終わりました

結局のところ、あんなモンスターがいたのだから全てはうやむやのまま終わってしまった。

「何であんなものが出てきたのか、分かってるだろ？」

帰っている最中、それとなく修が話題に出した。

「まあね。状況から考えたら“あいつ”しか考えられないし」

状況的にも展開的にもあまりに分かりやすくて罠かと思えるぐらいだ。

「潰すか？」

「いや、いいよ。次に何か仕掛けてきたら、その時は容赦なくやるけど」

「今回はお前のミスだからな」

「分かってるよ」

自分がキレて容赦なく叩き潰したのが原因だ。

「何を言われたんだ？」

「……フィオナをもらうって言ったんだ。あの容姿は自分にふさわしいとかふざけたこと抜かしてさ」

「そんでキレたわけか」

「そういうこと」

修がそれを聞くと、軽く伸びをした。

「まあ、でも少し安心はした」

「何が？」

「お前の中であいつらも『大切』のうちの一つに入ってたところが、だ」

そう言って優斗と修は視線を前に向ける。

前のほうではアリーとフィオナが笑って何かを話していた。

「……そうだね」

「俺らの中で一番、大切なものを作らないのがお前だからな」

“作れない”のではなくて“作らない”。

そうしないと……失うものに耐えれなかったから。

「……うん」

「俺ら全員、歪んでるけどよ。それでも俺らは俺らなりに大切なも

の――信じられるモノを作ってもいいんじゃないかって思ってんだ」

その中でも特に優斗は。

もう少し誰かを信じられるようになってほしい。

「これからこの世界で……もっとできればいいんだけどね」

「できるだろ」

修は空を見上げながら答える。

「あっちとは違う世界なんだからよ」

自分たちが嫌いだったあの世界とは……違うのだから。

◇　◇

「もしかしてタクヤさん達もあれぐらい出来ます？」

「無理」

ふとしたココの疑問に卓也が瞬間的に答えた。

「即答ですね」

クリスが苦笑を浮かべる。

「そりゃそうだろ。俺たちは優斗ほど頑張ってもないし。あいつほど頑張れたら出来るかもしれないけど……まあ、無理だ」

和泉がそう言うことにココとクリスが首をかしげる。

「あいつの努力ってのは身を削るのだって当然って感じだからな。自分を省みないレベルはさすがにきつい」

だからこそ部活でも今回の闘技大会でも強いと思えるのだが、さすがにあそこまでやろうとは思わない。

「今回も今回だったし。きっと服の中はあいつ、痣だらけだよ」

上級魔法はともかくとして、あいつが使った神話クラスの魔法。あれを使いこなすのに平穏無事であったとは思えない。

「そんな姿、わたし見てないですよ」

「努力してる姿を見られるのが嫌いだから、優斗は」

いつも影で努力して、誰かにその姿を見られることを厭う。照れ屋ということもあるが、それ以上に弱みを誰かに見せたくないというのが心情だろう。

「どうしてそこまでするんですかね？」

当たり前のようなことをココが疑問に思った。

「……あいつはどんな時でも強くならないといけなかったから。戦うために」

しょうがないんだよ、と卓也は付け加える。

「誰とでしょうか？」

クリスの問いに……卓也は少しだけ悲しそうな顔を浮かべた。

「大人たちと」

◇　◇

「優斗さん、すごかったんですよ」

フィオナは家に帰ると、興奮冷めやらぬままにエリスに今日の顛末を伝えた。

「カルマを瞬く間に倒したのよね」

「知ってるんですか？」

「さすがにね。学生主催の闘技大会にAランクのモンスターが出れば問題になるわよ。マルスも現場にいたから」

「お父様も？」

少しだけフィオナが驚く。

「ええ。ユウトさんが神話クラスの魔法を使ったのだって知ってるわよ。まあ、これに関しては緘口令が敷かれたから、これ以上広まることはないでしょうけど」

「どうしてですか？」

「王様の配慮よ。神話クラスの魔法を使えるのが学院にいるなんて知られたら、それだけで注目の的だから」

本当はその他もろもろ、大きな事情があるがそれはここで話すことでもないだろう。

「そうですね」

納得したように頷くフィオナ。

「ふふっ、それにしてもマルスが驚いていたわよ」

貴族の一人として観戦をしていた旦那が倒したあとの光景に驚愕していた。

「フィオナったらユウトさんに抱きついたんですって？」

「な、なんでそれをっ！？」

いきなりのエリスの発言にフィオナは顔を真っ赤にする。
先ほどより時間が経った今で考えれば、大それたことをやってしまったと自覚している。

「ガラガラの観客席に残ってるだけでも目立つのに、そこにユウトさんが歩いていけば余計に。そして注目が集まった場所であなたが抱きついてれば完璧よ」

数少ない人数とはいえ、その場にいたほとんどがその光景を目にしたといっても過言ではない。

「……ぁぅ……」

「物語のワンシーンだった、と言ってたのはマルスだけどね」

まるで勇者と姫君のようだ。
旦那はそう語っていた。

「今度、機会があればユウトさんと酒でも酌み交わそうと思ってるみたいだから、都合が合ったら呼んでね」

顔を真っ赤にして、小さく縮こまりながらもフィオナはしっかりと頷いた。

「……はい」

生徒会長、来ました

闘技大会が終わって1週間。
7月に入り陽気も暑さに変わり始めたころ、彼女はやって来た。

「ミヤガワくんはいるか？」

優斗たちのクラスを覗き込んで開口一番、レイナは用件を伝えた。
クラスの大半がいなくなっており、数少ないところに偶然、和泉とクリスがいた。

「彼なら用事があるとかでつい先ほど、帰られましたよ」

「そうか。ありがとう」

優斗がいないと分かるや、踵を返して教室を後にしようとする。
が、嫌な予感がした和泉が呼び止めた。
この人物は闘技大会のとき、優斗と決勝を争うはずだったことは鮮明に覚えている。

「ちょっと待った生徒会長。あんた、どうして優斗を探してる？」

「決まっているだろう。決勝があのような形になってしまった以上、再戦を申し入れにきたんだ」

やっぱり、と和泉は心の中で呟いた。
和泉は優斗の性格を考える。
――再戦はないな。
すぐに結論が出た。彼女に余計な手間を取らせるのも悪いと思ったので、
「あいつ、めんどくさがりだからやんないぞ。それに勝てない勝負はするもんじゃないだろ」
まごうことなき事実を述べた和泉の発言が……見事にレイナの逆鱗に触れた。
「勝てないって……やってみなければわからない！」
「いや、わかるって。あんただってあの戦いを見てたんだろ？」
だったら理解してしかるべきだ。
「あんたは“アレ”を一人で倒せるのか？」
「それは……」
「倒せない以上、圧倒的に実力で負けてるんだよ」
なんでこんな単純なことが分からないのか。
子供でも分かる図式だ。
「しかし私は――ッ！」

「あんたは優斗と戦える場所に立ってない」

“勝負”という範疇に入っていない。

「あの時だって全力じゃないんだ。あんた相手なら絶対に優斗は手加減するぞ」

あのモンスターよりも格下である以上。

「手加減せざるを得ないからな」

そして、その事実を知って。

「それをあんたの矜持は許すのか？」

生徒会長をやっていて、こんな真面目を絵に描いたような堅物っぽい人間が手加減を許すとは思えない。

「言いたいことはわかった」

レイナは和泉の助言に返事をする。

「至極真っ当な意見をどうもありがとう」

きっと彼の言うことは正しくて、真実なのだろうと思う。

「……だがそこまで言われる筋合いはない」

初対面でどうしてそこまで言われなくてはならない。

「それはどうも。まあ、俺の好みはツンデレ美女なんだ。生真面目堅物女に好かれようとは思わない」

和泉は半ば挑発とも思えるような言葉を返した。

「とはいえ、ちゃんと忠告はしたからな。断られても文句は言うなよ」

去っていくレイナの言葉を掛ける。

そんな様子をクリスが見て一言。

「イズミ様が真面目に誰かと話すって滅多に見ないですよね」

「……俺、いつもそんなに不真面目？」

「それはもう。だからこそレイナ様と真面目に話してる姿は貴重でしたよ」

「そいつはどーも」

◇　◇

レイナが学院を出て少しすると、優斗とフィオナの姿が見える。

「ミヤガワくん！」

名前を呼ぶと、優斗とフィオナが二人して振り返った。

「……レイナ様？」

「どうかされたのでしょうか？」

二人してハナナマークを頭に浮かべる。

レイナは呼び止めた二人の前に立つと、即座に自分の要望を伝えた。

「ミヤガワくん、勝負をしてくれ！」

「……この間の続き、ということでしょうか？」

「そうだ」

目を爛々とさせているレイナ。

前回は好戦的と評したが、もしかしたら戦闘狂の間違えだったかもしれない。

「申し訳ありませんがお断りします」

「なぜだ！？」

「やる理由がありません」

丁重に断りを入れる優斗。

「理由がないって……。では君はなぜ、闘技大会に出た!?」

あの場に立っていた以上。

少しは戦いを好むものだと思っていたのに。

「じゃんけんで負けたから闘技大会に出たんですよ」

優斗がそう言った瞬間、呆気な表情を浮かべたレイナがいた。

「……それだけ?」

「あの大会に関して言えば、それだけです」

「そう……なのか」

レイナの表情があまりにも呆気に取られすぎていて、少し笑える。

「闘うことが嫌いなわけではないですけど、必要以上のことをやるのは労力使いますし」

つまるところ、大会は終わっているのにレイナと闘うのは面倒だというのが結論だ。

「なのですみませんが、闘いたいのならば他を当たってくれると嬉しいのですが」

優斗がやんわりと断る。

するとレイナが、少し自嘲するように笑った。

「……やはりトヨダの言ったとおりになったな」

「和泉が何かレイナ様に無礼なことを？」

「いや、君が決勝の続きを受けないと言っていた。私はそんなことはないと思ったのだが、奴の言ったとおりになった。ただ、それだけの話だよ」

とはいえ。

「まあ、笑える話だ」

はっはっは、とレイナは全く面白くなさそうに笑い声を出す。

逆に優斗は感嘆の声を上げた。

「どうしたんです？」

フィオナが優斗の様子を疑問に思う。

「いや、珍しいなって思ったんだ。和泉が変人と思われないなんて」

「それもどうかとは思いますけど……」

フィオナが苦笑する。

「ただ、それ以上に意外なこともあったけど」

「なんだ？　トヨダの行動が以外なのか？」

レイナが不気味な笑い止めて会話に加わる。

「ええ。和泉がレイナ様に“手間を取らせないように”なんて考えたのが以外です。あいつ、どうでもいい人物は放っておくタイプですから」

別にレイナの目的ぐらいなら、優斗に害があるとも思わなかっただろう。

普段の和泉なら「勝手にしろ」で終われせているはずだ。

「……まさか惚れたのかな？」

呟いた優斗の台詞にレイナが鼻で笑った。

「それこそ、まさかだ。奴は自分で好みは『つんでれ美女？』とか言っていたぞ。私のような堅物で生真面目な女は好みじゃないとな」

レイナが不機嫌そうに言った。

けれど優斗はそれを聞いた瞬間から笑いが止まらない。

「どうしたのだ？」

レイナが困った表情をしていたが、笑いは止まってくれない。

――よく言うよ。

何が好みはツンデレ美女だ。

「優斗さん？」

「いや、実は和泉の好みなんですけど」

なんとなく、これは伝えたほうが今後“とっても面白くなる”という確信があった。

「逆ですよ。好みが堅物生真面目な女の子。嫌いなのがツンデレです」

優斗がそれを伝えると、今日一番の呆けた表情をしたレイナがいた。

◇　◇

「優斗さん」

レイナと別れてからというもの、すごく気になっている単語があった。

「どうしたの？」

「“つんでれ”って何ですか？」

フィオナが気になっていたのは、先ほど優斗からも発せられた単語。

ツンデレなるもの。

「えっと……男が好きな女性の性格の一つだよ」

「性格？　どういう性格なんですか？」

フィオナはさらに突っ込んで尋ねる。

「普段はツンツンして無愛想なんだけど、ふとした拍子にテレたりする性格。そのギャップが男心をくすぐるんだよ」

そんなことを言われて……フィオナは少し焦る。

『男が好きな女性の性格』だと言っていた。

――もしかしたら優斗さんも？

彼もそうだったらどうしよう。

「優斗さんもですか？」

「いや、僕は騒がしいのが苦手だからね。落ち着いてる性格が好み」

優斗がそう言うと、フィオナは安心した。

――あれ？

ただ、どうして安心したんだろう、と。

フィオナは自分で疑問に思う。

――なんで？

けど、その答えが分かるのは……もう少し先のお話。

教えてください

夏休みもあと少し、と迫った頃。
優斗はフィオナに誘われてトラスティ家へとお邪魔していた。
兼ねてからマルス――フィオナの父が優斗と飲みたいと言っていたのが発端で、今は優斗とマルスが二人でテラスにいた。

「ユウト君は飲めるかね？」

フィオナの父、マルスがビール瓶を傾けて尋ねた。

「いえ、あちらの世界では飲酒は２０歳以上でしたので、あまり飲んだことはありません」

「そうか。なら果実酒にでもしておこう」

手元にあるビール瓶を戻し、代わりに家政婦から葡萄酒を持ってくるように伝える。

「本当は息子も欲しかったんだ。こうやって歳離れた子供と男同士で飲み交わすのが夢の一つでな」

家政婦が酒を持ってくる間に、自分はビールをとくとくと自前のコップに注ぎ始める。

「ただ二人目は恵まれなくて。フィオナが婿をつれてくるまでは出来ないと思っていたのだが、ちょうど家内からも娘からも君という人物を聞いていたし評判がいい。実際に会うついでに夢の一つを叶えたく思ったんだ。面倒だとは思うが、おじさんのくだらない夢に付き合ってはもらえないだろうか」

言われた通りに家政婦が葡萄酒を持ってくる。
優斗は受け取って感謝の意を述べた。
そしてマルスに向き直ると、あらためて答える。

「もちろん、喜んで叶えさせていただきます」

キン、と甲高い音を響かせてコップ同士を打ち合わせた。
まずは一口、含んでみる。

――おいしい。

ビールのような苦味がなく、軽い。
これなら好きになれそうだ。

「君を初めてしっかりと見たのは闘技大会の日だったのだがね。本当に驚かされたものだよ」

それまで、幾度か遠くから見たことはある。
書類上でも読んだことはある。
しかし、あれほど長い時間、彼の存在を意識することができたのは初めてだった。

「君のあの魔法は初めて見たよ」

「だと思います。向こうの世界にある物語の魔法ですから」

「物語の中でもあれぐらいの威力なのかい？」

「いえ。もう少し威力は上がります。少なくとも魔王と呼ばれるものを倒せる威力は持っていますから」

「ふむ。本当に神話魔法と大差がない」

むしろ新しい神話魔法と認定してもいいのではないだろうか。

彼が成長した暁には宮廷魔道士にでもなってもらい……と、ここまで考えてマルスは頭を振った。

「いや、今はこんなつまらないことを話しても仕方ない」

マルスは話題を変える。

明るい口調でフィオナのことを話し始めた。

「娘は明るくなった。よく話すようになったし、喜怒哀楽も前よりずっと顕著に現れる」

あの無口で無愛想だった娘が、だ。

「3ヶ月前から比べたらずっと素晴らしい女性になった」

とても魅力的になった。

「君のおかげだと聞いているよ」

マルスが言ったことに優斗は笑って否定する。

「僕だけじゃないです。周りに皆がいたから、フィオナはあれほど変わったんだと思います」

そうだ。

決して自分だけじゃ無理だった。

「僕だけだったらきっと、緊張ばっかりしてるだけで何の影響も与えられなかった」

「そんなことはない。君だけのおかげじゃないかもしれないが、それでも君が一番フィオナに影響を与えてくれたのだ」

それは親として嬉しい。

素直に彼を賞賛できる。

「ありがとう」

ぐしゃ、と頭を撫で回した。

「おっと、少し馴れ馴れしかったか」

エリスからは良い子だということをいつも聞いており、フィオナからは素晴らしい人だということを聞いているせいか、どうにも初対面という感じがなくて距離感が掴めない。

「いえ、大丈夫ですよ」

いきなり頭を撫で回されて虚を突かれた優斗だが、嬉しそうに笑う。

「あと、裏工作も一段落してね。君たちも貴族の爵位を持つ家柄となった」

そういえば、と伝えようと思っていたことを二つほど思い出す。
これは最初に言っておけば良かった、と少し後悔する。

「シュウ君は伯爵の家系、他は全て子爵の家系ということだ」

「なぜですか？」

「メリットがあるから、だろうと思う。いずれ異世界からの客人ということが発覚すれば、パーティーなどにも呼ばれることが多々あるだろう。その時のために今のうちに慣れておいてほしい、ということ。そしてもう一つは――」

マルスが言おうとして、少し言いよどんだこと。
優斗はそれだけで何となくではあるが、理解できた。
続きを言葉にする。

「絶対防御としての役割、ですか？」

「……そうだ。不特定多数が集まるパーティーで君たちがいてくれれば、何かあっても対処ができる」

「修の勇者としての役目がある以上、仕方ないことではありますね」

「とはいえ、そういう状況は滅多にない。つまりはパーティーマナー向上のための爵位と考えてもらうのが一番だ」

これが伝えることの一つ目。
もう一つは、

「あと、私とエリスが正式にユウト君の後見人になったからよろしく頼む」

「……はい？」

優斗が驚いた表情をさせた。
マルスは笑って答える。

「爵位を得たことによってね、今まで仮だったのが正式になったのだ」

それぞれ、家庭教師を請け負っている公爵家が彼らの後見人となっている。

「……迷惑じゃありませんか？」

「まさか。こうやって酒を一緒に酌み交わせるのに、何が迷惑なものだ」

ぐいっ、とビールを煽る。
優斗も一口飲んでから、この言葉を“当然のように”した。

「できる限り迷惑はかけないようにしようと思いますので、よろしくお願いします」

優斗が口にした『迷惑をかけない』という台詞。
マルスは一蹴した。

「駄目だ」

「え？」

「できる限り迷惑をかけなさい」

最大限、そんなものはかけていい。

「君はまだ子供なのだから」

遠慮することはない。

一方で優斗はじわり、と胸の中が暖かくなるのを感じていた。

――なんで、こうやって。

この人は。

――ほとんど初対面なのに。

簡単に胸の中に入ってくるのだろう。

たくさん大人の相手をしてきたから。

何が嘘で何が本当かどうかは分かる。

――この人は信用するに足る人だ。

そんなことが分かってしまう。

「僕はまだ……大人に頼ったことはありません。全力で迷惑をかけない生き方をしてきましたし、頼れるような大人もいませんでした」

「本当か？」

「……ええ。それに僕は『大人』という人種を信じてませんから」

そう言うと少し語弊があった。

「いや、というよりも信じられる人生を過ごしていませんでした」

これが正しい。

「僕の周りにいたのは、僕を道具として扱う両親。ハイエナのごとく集る親戚。そんなのばかりでした」

ろくでなしばかりだ。

「とはいっても、大人全員がそうじゃないってことも分かってます」

だったら社会が正常に作用しているはずもない。

「むしろ僕の周りにいたのが特殊すぎるのも理解できています」

そう言って優斗はマルスを正面から見つめた。

「だから――」

思ってしまった。
いい機会だから。
やってみようと。

「教えてください。迷惑の掛け方を」

「……ユウト君」

「マルスさんが今まで会ってきた大人と違うのは分かりますから」

「……そうか」

迷うことなく言い切った優斗。
それをマルスは……疑問に思う。

――なぜだろうな。

大人というものを信じてこなかった彼が、どうして自分は信じてくれたのか。
マルスは自分だけの功績だと思えるほど傲慢にもなれない。
どうしたって初対面の人間に彼がこれほど信頼してくれるとは思えないからだ。
そう考えると、

――やはりフィオナ、か。

行き着いたのは娘の存在だった。
あの子の父親だということが、大きな力になってくれているのだろ

う。

――“フィオナの父親”というだけで、彼は信頼してくれている。

我が娘ながら凄い、と感心する。

――いいコンビなのだろう。

互いに影響を与えている。

それも良い方向に。

――もしかしたら。

ふと思い出す。

あの時に見た光景。

――ユウト君がカルマを倒したあとに見た、あの一枚の絵のように光景は。

勇者と姫君に見えた、あの場面。

あながち間違いではない、と。

マルスは今更ながら、そう思った。

森と魔物と龍神の赤ん坊

「なんでさ」

草木を踏みながら卓也は一人ごちる。

「夏休みは海に行くんじゃないのか！？」

「和泉が勉強すらもほったらかして魔法科学なんかに嵌まってたから追試受けてんだし、クリスは和泉を縛り付けて講習中。仕方ないじゃん、海に行くときはあいつらも連れてかねぇと。だから今回は森に来てみたんだ」

「なぜ！？」

どうしてそこで森に行く、なんてことが出てくる。

「おもしろそうじゃん」

というわけで今回、６人で森の探索をやることになった。

「魔物は？」

「ほとんどいないルートを通るから大丈夫だって」

あっけらかんと言う修だが、それを卓也が信じるわけもない。

「卓也、絶対に何かあるから慌てるだけ無駄。諦めたほうが精神的に落ち着くよ」

「……そうだな」

今までの経験上、何もないなんてことはありえない。
そんな二人の気苦労を知ってか知らずか、修はアリーに声を掛ける。

「アリーは大丈夫か？」

「はい。まだ大丈夫ですわ」

王族だからこそ、こういったことをやったことはない。
だから新鮮で楽しい。

「薬草やら原石やら、いろんなものが落ちてるもんだな」

「採取を本業としているギルドが来るくらいですもの」

修は何かを拾ったり見つけたりしては面白そうに眺める。
その点に関しては他の5人も同じなのだが、いかんせん動き回る範囲が修一人だけ違っている。

「おっ！　なんか洞窟っぽいところ発見！」

早々、修が一人で掛け始める。

「あいつの元気はどこから来てるのか、時折気になるんだよね」

「それは言えてる」

優斗と卓也が苦笑する。

と、そこで先ほどの場所まで行った修が全員を呼び寄せた。

「お前ら、ちょっとこっち来てみろよ。面白いのあるぞ！」

大きなゼスチャーで手招きする。

5人は呼ばれるがままにその場所へと向かった。

「あっ、洞窟じゃなかったんだ」

「違う違う。面白いのはそこじゃなくて」

洞窟かと思ったそこは、洞穴だったようだ。

おおよそ5メートルほど掘り進められており、その一番奥では。

「卵？」

「……光ってる」

卓也とココが不思議そうにそれを見た

「これ、絶対に何かあるぜ！」

光ってる卵なんてもの、確か“何か”はあるだろう。

と、ここでフィオナが思い出したように言った。

「……もしかして龍神の卵？」

「フィオナ、知ってるの？」

優斗が訊けば、フィオナは昔読んだ書物の内容を思い出しながら伝えた。

「おそらくこれは龍神の卵だと思います。周期は分かりませんが、数十年から数百年に一度……龍神は卵を産み落とします。歴史上でも幾度か人間が育てていますから、記録が残されていますし、今回の状態も生まれる寸前のものと一致しています」

とはいえ、そんなものがこんなところにあるとは。

本当に思いがけない出会いだ。

けれどその一方で、優斗と卓也は眉をひそめる。

「龍神の卵なんて珍しいものを見つけた。ということは」

「嫌な予感しかしないんだよな」

フラグ、と言っていいだろう。

大抵の場合はこの後、何かしらの騒動が起きる。

「あら？　なんでしょうか？」

その騒動の先走りに、最初に気付いたのはアリーだった。

「地面が揺れてませんか？」

言われてみて確認すると、確かに揺れている。

「……来たね」

「これが嫌なんだよ」

言った途端にこれだ。
さすがに修だと思わざるを得ない。

「みんな、戦闘準備してください。厄介なのが来るよ」

優斗が言い切る。
全員して洞穴から出てみれば、そこにいたのは……

「3匹で一斉に来ることないだろ」

「大方、この中の卵を狙ってきたってオチなんだろうね」

面倒くさそうに優斗が呟いた。
10メートル級が2匹と5メートル級が1匹。

「アリー、どれがどんな魔物か分かるか？」

「サ、サイクロプスにシルドラゴン。それにオークキングです」

一つ目巨人と銀色のドラゴン。そして豚の人型巨大バージョン。

「サイクロプスとシルドラゴンはAランク。オークキングはCランクです」

正直な話、このメンバーでなければ絶望するランクだ。

「チーム分けすっか」

気軽に修が決める。

「オークキングは卓也とココでなんとなるだろ。サイクロプスは俺とアリーが担当。シルドラゴンは優斗とフィオナでどうにかしてくれ」

この魔物が集まってチーム分けなんてやれるのが凄い。
アリーもフィオナもココも、内心そう思う。

「……分かった」

「りょーかい」

卓也と優斗も来てしまったものは仕方がない、と従う。

「それじゃ、まずは」

吹き飛びやすそうなサイクロプスとオークキングに修と優斗は手をかざす。

「「求めるは風切、神の息吹」」

瞬間、豪風が魔物2体を吹き飛ばした。

「うしっ！　行くぞアリー！」

意気揚々と洞穴から飛び出す修。そして慌てて付いていくアリー。
続いて卓也とココもオークキングに向かって走っていく。

「フィオナはこのまま、この卵を守ってて」

「大丈夫ですか？」

「もちろん。この前もちゃんと倒したのを見たでしょ？」

軽く笑って優斗も洞穴から一歩を踏み出す。

――とは言っても神の雷じゃ広範囲すぎるか？　森とか出来る限り傷つけちゃいけなさそうだし。

広範囲の魔法を使うのはさすがに駄目だ。

採取系を請け負っているギルドに怒られる。

なら、もっと狭い範囲で使えてＡランクの魔物を倒せる魔法。

「……これ、うろ覚えな上に不完全版なんだよな」

昔は必死に覚えた記憶があるけれども、いかんせん子供の頃の記憶だ。

実際にやってみても完全版ではなく、不完全なものが出来上がった。

どうやら覚えていたのは不完全版の詠唱であり、それがイメージとして記憶の底に繋がっているから実際に出てきた魔法でも不完全版だった。

「まあ、でもこれならいけるか」

オークとカースは他がきっちりと引き受けてくれていて、こっちに向かってきているのはシルドラゴンのみ。

優斗は一度、大きく息を吐いて……吸う。

『天空の戒め解き放たれし、氷れる黒き虚無の刃よ』

勢いを増して迫ってくるシルドラゴン。

だが、気圧されずに優斗は紡ぐ。

『我が力、我が身となりて、ともに滅びの道を歩まん』

右手に黒い光が集う。

そしてその場に押し留められるように球状になった。

『神々の魂すらも打ち砕く――』

球を砕くように握り締める。

瞬間、優斗は振りかぶった。

黒き光が一筋の本流となって、シルドラゴンへと向かう。

「――神滅斬』

稲妻状の刃がストン、とシルドラゴンを両断した。

叫ぶこともなく、何かをするわけでもなく、切られたことすらも分からずに絶命させた。

「よし」

真っ二つに切り裂き、倒した。

優斗が振り向けば、唖然とした表情のフィオナがいる。

「……優斗さんといると、Aランクの魔物は簡単に倒せそうな気がするから怖いです」

「これも努力してる結果です」
優斗が胸を張って答えると、フィオナは表情を崩して小さく笑った。
「卵は大丈夫そうですね」
「はい。何も問題はなかったので」
フィオナがやさしく卵を撫でる。
優斗も彼女に倣って卵に触れてみた。
その時だった。
「えっ？」
「きゃっ！？」
卵が一際大きな光を発する。
何事かと二人が思うのも束の間、卵の殻が割れる。
光で眩しい中、その中心にいたのは、
「……子供？」
「……赤ちゃん、でしょうか？」
それも……人の形をしている。
おおよそ1歳ぐらいだろうか。
「龍神って龍じゃないの？」
「いえ、龍神と祭られているのは確かに龍なのですが……すみませ

ん。私も小さな頃の姿までは知らないです」

二人して混乱していると、魔物を片付けた他のメンバーが洞穴に集まってきた。

「卵は無事か？」

「どうなりましたか？」

まず修とアリーが訊いてきた。

「……無事、というよりは無事に産まれた」

ちょい、と優斗が指差す。

「赤ん坊？」

「かわいいです」

卓也とココが疑問と感想を述べる。

次第に光も弱まってきた。

赤ん坊の目もうっすらと開き、

「……あいっ！」

可愛らしい声をあげて、優斗とフィオナの姿をしっかりと捕らえた。

よたよた、としながら立ち上がろうとする。

「あ、危ないです！」

「ちょっと待った！」

一番近くにいた優斗とフィオナが赤ん坊に駆け寄った。

「セーフ、です」

一足早く辿り着いたフィオナが赤ん坊を抱き寄せる。

「まったく……」

ほっ、と優斗は一息つく。

焦らせないで欲しい。

ただでさえよく分からない状況なのに。

けれど龍神の赤ん坊は、フィオナをじっと見るとさらに全員を混迷に突き落とす。

「どうしたんだろ？」

優斗が赤ん坊の視線が気になって疑問を口にする。

すると次の瞬間、

「ま～まっ！」

そして優斗を見て、

「ぱ～ぱっ！」

なんて言葉を。

幸せそうに言ってのけた。

名前、決めます

森から帰った一行は、とりあえず図書館にある一冊の本を借りてきた。
それをアリーが筆頭にカフェテラスで読み進めていく。

「龍神は自らを育ててくれるものと同じ種族に生まれるみたいです。早ければ数ヶ月、遅ければ数年の後、母親の龍神がやって来て子供を引き取る。それまでは龍神の子供の親となった種族のものが責任を持って育てる」

パタン、とアリーは本を閉じた。

「これがおおよその概要というものですわ」

「放っておくということは？」

そんなことする気もないが、とりあえず優斗は訊いてみた。

「恐れ多くてできません。大変名誉なことなのですから。何よりも赤ん坊を捨て置くというのは、さすがに……」

「だよね」

政治的にも倫理的にも問題がありすぎる。

「とりあえず、埒があかないからエリスさんに相談しに行こうか」

龍神の赤ちゃんを抱きかかえたフィオナに合図する。
自分たちはこの子のパパとママらしい。ただ、突然そんなことになってもどう判断していいかが分からない。
なのでエリスに知恵を貸してもらうことにする。

「アリーも王様に話を通しておいてもらっていい？　結構重要そうなことだから」

「了解しました」

アリーが頷くと、修が立ち上がる。

「そんじゃ、一旦解散すっか。これ以降は優斗とフィオナの問題だしな」

気楽にそんなことを言う修。
それがどうにも優斗は気に入らない。
両手に握りこぶしを作ると、それで修の頭を挟み込む。

「いったい誰のせいで大変なことになってると思ってるんだ、おい？」

グリグリと万力のように締め付ける。

「い、痛い、わ、悪かった俺が悪かったから、ギブギブギブ！！」

修が優斗の腕をタップする。
少しは気が晴れたので、優斗は拳を収めてフィオナと一緒に歩いていく。

「極力、こっちでどうにかするから安心しといてね」
後ろにいる友人達に振り向きながら声をかけ、二人と赤ん坊はトラスティ家へと向かった。

◇　◇

「貴方達、そこまで進んでたのね」
家に帰ってきたフィオナを見るや、エリスの第一声はとんでもないものだった。
確かに若干茶色がかってはいるが黒髪。
そして瞳は赤みがかった黒。
ぱっ、と見れば二人の子供と言われても納得する。

「……いろいろと待ってください」
全力でエリスを押し留める。
からかっているのは分かっているが、それでも言い訳をしなければならない。

「誠心誠意、説明をさせていただきますのでちゃんと聞いてください」

そうしてエリスを交えて今日あった経緯を話していく。

「女の子の龍神の赤ちゃん？」

「はい」

たいして慌てる様子もなくエリスは３人を見比べる。

「もしかして選ばれちゃったの？」

過去、そういった人たちが存在しているのはエリスも知っている。
直近ではおよそ３０年前ぐらいだったはず。

「そのようなんです」

フィオナが頷く。

――とりあえずは。

フィオナも優斗も嘘を吐くタイプでないのは百も承知だ。
しかし確認してみないことには始まらない。
エリスは赤ん坊に近づいていく。

「ねぇ、この人は誰？」

ピッ、とエリスが指差した先には優斗。

「ぱーぱ」

赤ん坊が答えた。

「じゃあこっちは？」

続いてエリスはフィオナを指差す。

「まんま」

紛れもなく赤ん坊は『パパ』と『ママ』だと言った。

「あら、すごいわね」

「……言葉をそこそこ理解しているのかもしれないですね」

「そうみたいね」

二人が両親だというのは間違いなくなった。

それなら、とエリスは自分を指差す。

「私はママのお母さんだから“ばあば”よ」

「ばーば？」

首を傾げながらはっきりと口にする赤ん坊。

「そうそう、よく言えたわね」

「あいっ！」

エリスに褒められて、赤ん坊がフィオナの腕の中で嬉しそうにはし

やぐ。

「良い子じゃないの。この子」

「そうですね」

頷くフィオナ。

が、ここでエリスが一言。

「それでこの子の名前は何にするか決めたの？」

爆弾を落とす。

「え？」

「お母様！？」

大慌ての二人を内心で楽しみながらエリスは続ける。

「育てないの？」

「それを相談しに来たのですが」

優斗が説明するがエリスは意に介しない。

「パパとママになっちゃったんだから育てなさいな。安心しなさい、学生生活をおろそかにしろと言う訳じゃないし、私がしっかりとフォローしてあげるから」

「いや、でも……」

なにかしら不安があるのか、優斗が食い下がる。

「心配しないの。こういうのって出来ないところには来ないようになってるんだから。貴方達なら育てられるから、この子も二人を両親に選んだのよ」

「そう……なのですか？」

フィオナはまじまじと赤ん坊を見る。

「もちろんよ。でなければ龍神の子供を育てた記録がいくつも出てくるわけないでしょう」

「……そうですね」

言われてみれば、そうだ。

ということはつまり、自分と優斗はこの子を育てられるという意味になる。

「頑張ってみましょうか……」

そう呟いたところでフィオナはハッ、とした。

「優斗さんはどう思います？」

今、零れたのはあくまで自分の心境だ。

けれどこの子を育てるには自分だけでは駄目。

優斗の了承も得られないと。

「フィオナは今、育てたいって思ったんだよね？」

「はい」

「……そっか……」

優斗は少しだけ考える。

自分が味わってきたのは一般的な子育てとは言わない。

無論、それが理解できているということは、一般的な子育てぐらいは知っているし、自分の理想の父親像というものだってある。

けれど、

――できるかどうかと言われれば微妙。

なにせ子育てなどやったことがないのだから。

――でも、ね。

それはフィオナだって一緒だ。

そして彼女はやる気になっている。

「なら、僕も覚悟を決めるよ。フィオナが頑張るなら僕も頑張る」

優斗はマイナスイメージを振り切って、彼女と共に子育てすることに決めた。

「はいっ！」

フィオナが元気よく返事をする。

「話はまとまったわね？」

エリスの問いかけに二人はこくん、と頷く。

「それなら親として最初の仕事。この子の名前を決めちゃいなさい。相談も提案もしてあげるけど、決定するのは貴方達よ」

「名前……か」

そう言われて、考える。

「何か良いのはないでしょうか？」

「龍神の子供だからリューナとか、そういうのはどう？」

“リュージン”の子供だから“リューナ”。

「安易すぎません？」

「そうかしら？」

「シャルロッテというのは？」

「「却下」」

優斗とエリスに同時に駄目だしされる。

「ん～、リューネは？」

「お願いですから“リュー”から離れてください」

「フランソワはどうでしょう？」

「フィオナはもうちょっと乙女的な名前から離れようか」

西洋っぽくない顔立ちで、その名前は辛過ぎる。

何か由来でもある名前を……と、優斗は考えようと思ったときに気付いた。

「……あっ、そういえば気になったんですけど」

あまりに大きな問題がありすぎて忘れていた。

「龍神というのはこの世界で信仰のある種族なんですよね？」

祀っているという言葉があったのだから、神様のような存在なのだろうか。

「そうね。神聖な種族として崇めているもの。いくつかの宗教でも神獣として扱われているわ」

「……そうですか」

エリスの説明を聞いて。
一つ、思い浮かぶ。

――とりあえず提案するだけしてみるか。

「じゃあ、僕からも名前を一つ」

昔に読んだ小説でこの名前があった。
説中では、その名前の意味を説明していて……それがこの子には合っている気がする。

「マリカ」

優斗が名を紡いだ。
エリスが興味深そうに尋ねてくる。

「どういう意味なの？」

「茉莉花――マツリカと呼ばれる花の別読みなんです」

そう、名前に意味を込める。
その中でもポピュラーなのが花にまつわる言葉だ。

「僕達の世界には花言葉というものがあります」

「それはこの世界にもあるわよ」

エリスが付け加える。
そうなんだ、と優斗は感心しながら言葉を続けた。
「じゃあ、細かい説明は飛ばしまして花言葉だけ言いますね」
優斗はエリス、フィオナ、赤ん坊を見回すと名前に込めた意味を告げる。
「清浄無垢」
先ほどのエリスの会話を聞いて思い浮かんだ。
「他にも愛らしさ、愛嬌、素直などあるんです。だから僕はこの花が意味する言葉のように、この子には育ってほしい」
と、ここまで言ったところで急激に恥ずかしくなってきた。
なぜだがものすごく語ってしまったような気がする。
「ど、どうでしょうか？」
却下されたところでどうこう、というわけでない。
ただ、案外真剣に考えた名前を吟味されるというのは緊張する。
「私はこの名前が良いと思いました」
「こっちの世界でも違和感はないし、私も良い名前だと思うわよ」
そして最終確認。

「二人は……この名前がいいのね？」

うん、と頷く。

それを見てエリスは、あらためて赤ん坊の名前を告げる。

「じゃあ、この子は今日からマリカ。“マリカ＝フィーア＝ミヤガワ”ね」

「フィーア？」

聞きなれない単語にフィオナが首を捻った。

「ユウトさんの爵位名よ。これからはフィオナも名乗る場合があるかもしれないのだから覚えておきなさい」

「えっ！？」

突然のエリスの言葉に驚きを隠せないフィオナ。

「それはそうよ。この子の両親ってことは夫婦よ、夫婦」

エリスが言ったことを二人は頭の中で反芻する。

ポン、と同時に顔が赤くなった。

「それともユウトさんが婿養子ということで“マリカ＝アイン＝トラスティ”にする？　どっちでもいいわよ」

こういった類の話には優斗もフィオナも耐性はないが、それでもいち早く立ち直った優斗が訊く。

「ど、どっちを名乗ったほうが問題あります？」

「どっちもどっちじゃないかしら。一長一短よ」

まだ火照り覚めやらぬ頬を手で扇ぎながら、優斗は判断する。

「なら、時と場合で使い分ける方向にしません？　基本的には爵位の低い僕のほうを使う方向でいいので」

「そうね。そうしましょう」

優斗ならば臨機応変に対応してくれるだろう。

「あとは――」

と、ここで玄関から慌てて家の中に入ってくる音が聞こえた。

ドタドタを騒がしい音を響かせながらリビングに近づいてくる。

この家をこのように誰にも咎められず闊歩できる人物など、優斗もエリスもフィオナも知る限り一人しかない。

「りゅ、龍神を育てることになったというのは本当か！？」

その唯一の一人、マルスが慌てた様子で帰ってきた。

始まりの一つ

物音を立てて帰ってきた夫をエリスは嗜める。

「騒々しいわよ、あなた」

「落ち着いていられるわけがないだろう」

王城で働いていた時に王より知らされた出来事。
それを聞いて慌てないわけがない。

「この子がそうなのか？」

フィオナが抱きかかえている女の子。
突如乱入してきたマルスに首を傾げている。

「ええ。今しがた名前が決まったのよ。マリカと名付けたわ」

優雅に紅茶を飲みながらエリスが答えた。

「……えらく落ち着いてるな」

「もうフィオナとユウトさんが親に決まっちゃったのだからね。それならしっかりと育てるのが至上の命題でしょう？」

エリスが諭すように言う。

「……それもそうか」

確かに自分が慌てたところで何かが変わるわけでもない。
マルスは落ち着こうとする。
が、エリスはマリカの注意を引くと、マルスを指差した。

「いい、マリカ。これがママのお父さん、“じいじ”よ」

「エリス！？」

落ち着きかけた気分が台無しになった。
しかし、そんな彼のことなど露知らず、マリカはマルスを見た。

「じーじ？」

「そうよ。よく言えたわね」

エリスが褒め称える。

「ほら、あなたも初孫なのよ。ちゃんと言えたのだから褒めてあげなさいな」

エリスがそうマルスに振る。
現在、彼の視界には今日突然に出来た孫がいた。
おそるおそる近づいていくと、なぜかマリカがきゃっきゃっとはしゃぐ。
そんな初孫の様子に少しだけ警戒心を解くと、

「え、えらいぞマリカ」

やさしく頭を撫でてみた。

「あうっ！」

返事なのか叫んだだけなのかマルスには判断できなかったが、それでも喜んでいるマリカの姿に少し顔が綻んだ。

「……あの、エリスさん。そろそろ話を戻してもいいでしょうか？」

と、そこでマルスが帰ってきてから傍観していた優斗が話を切り出した。

「あっ、それもそうね。先ほどの話の続きといきましょうか」

エリスがあらためて優斗に向きなおす。

マルスもそれに倣った。

「それでマリカを育てるにして、どこで育てるかなんですが……」

「まあ、この家でしょうね」

あっさりとエリスが答えた。

「お願いしてもよろしいでしょうか？」

優斗はマルスとエリスに伺いを立てる。

「迷惑を掛けろと言ったのだから、存分にかけていいのだよ」

「ありがとうございます」

優斗が頭を下げた。

その後、何点か話すことがあり、そのことについて詳細を詰めた。

時間はそろそろ２２時を過ぎようとしていた。

「ぁぅ……」

フィオナに抱かれているマリカがうつらを漕いだ。

「あら、もう眠いのね」

エリスは立ち上がるとフィオナを促す。

「フィオナ。今日はあなたが一緒に寝てあげなさい。寝かしつける方法は教えてあげるから」

はい、とフィオナは返事をして立ち上がった。

「僕もそろそろ帰りますね」

次いで優斗も立ち上がった。

「泊まっていってもいいのだよ？」

「いえ、大丈夫ですよ」

その場にいる全員に手を振って優斗は踵を返す。

すると、だ。

寝そうになっていたマリカが急にぐずりだした。

「……ううう」

その様子に優斗も気付く。
帰ろうとしていた足を止めてフィオナに近寄る。

「どうしたの？」

「あの、突然マリカが泣き出したんですが」

優斗が顔を覗き込む。
が、マリカは突然ぐずるのをやめた。

「えぅ」

「だいじょうぶ……かな？」

「おそらくは」

二人してエリスに確認を取ると「たぶんね」と言われる。

「それじゃ今日は帰るから」

「はい、それでは」

玄関に向かおうとする優斗。
そんな彼を急に掴んだ小さな手があった。

「ぱーぱっ！」

フィオナから身を乗り出さんばかりにぎゅっ、と優斗の服を掴む。

「あぅぅ」

そして小さく唸った。

「ど、どうしたんだろ？」

「わかりません」

赤ちゃんのアクションが何を指すかなど1ミリたりとも分からない二人。

だが、エリスが何かに気付く。

「あっ、もしかして」

エリスはマリカを覗き込んで、

「マリカはパパが帰っちゃうのが嫌なの？」

そうエリカに問う。

じわり、とマリカの瞳が余計に涙で滲む。

イエスと言っているようだ。

エリスはマリカの意思を汲み取ると優斗に提案……というより命令する。

「というわけだから泊まっていきなさい、今日は」

一瞬、エリスの言ったことに優斗は戸惑うが、すぐに結論を出す。

「そうですね」

頷いた。

「ユウト君。それなら少し付き合ってもらえないだろうか？」

すると良い機会だとばかりにマルスが飲む仕草を見せた。

「あなた、またなの？」

少し不満そうにエリスが口を尖らせる。

「孫が出来てしまったのだからな。こういう日は祝いたいものだ」

しかしマルスにそう言われてしまい、エリスは反論をこれ以上しなかった。

「秘蔵の一本を持ち出そう」

そう言って笑ったマルスに優斗も笑い返して、

「ご相伴、お預かりいたします」

◇　◇

二人して乾杯をすると、優斗が頭を下げた。

「ありがとうございます」

「何がだね？」

「前に『迷惑をかけていい』と言ってくれたことです。だからマリカをこの家にお願いしようと思いましたから」

幾分、気が楽に提案を言えた。

「気にすることはない。フィオナも母親なのだからな。それに君の責任でもない」

偶然が重なった結果、二人が親になったのだ。

誰かを責める必要などない。

「ならマリカの父親として『ありがとうございます』と伝えておきます」

「そうか」

酒を口にする。

滑らかな味わいの葡萄酒が臓腑に染み渡る。

「それにしても、私もついにおじいちゃんか」

しみじみとした言葉がマルスの口から出た。

「フィオナが学院に入ってなければ、実際にそうなっていただろうがな。しかし唐突にそうなると驚くものだ」

「……貴族というのは結婚も早いのですね」

「ああ。幸いにして娘は魔法を使う素養があったからな。それを伸ばすために学院に入り、それにより婚姻も遅れている。普通の貴族ならばフィオナぐらいの歳ですでに子供がいる者もいるのだよ」

むしろ、この歳で結婚していない貴族の娘は少ないほうかもしれない。

「なら、僕はフィオナに感謝しないといけませんね。彼女に魔法の素養があったおかげでフィオナに会えたし、エリスさんに会えたし、マルスさんに会えましたから」

「そう言ってくれるのは、うれしいものだな」

「そうですか？」

「ああ、そうだとも」

二人は同時に葡萄酒を口に入れる。

あまりお酒を飲んだことのない優斗でも美味しいと思えた。

「それにしても、君はこれからどうするつもりだい？」

「どういうことですか？」

「今日のマリカの態度を見ると、あの子は君が一緒に住んでいなけ

ればまた泣き出すぞ」

なんとなくだが、間違いないと感じる。

「……どうしましょう？」

「簡単なのはユウト君がここに引越して一緒に住むことだが」

「大丈夫なのでしょうか？」

自分なんかが公爵家に住む、ということに対してやって来る問題は無視できないものではないはずだ。

しかしマルスは平然と言ってのけた。

「なに、問題はない。まあ、龍神を育てるというのは国にとっても『そこが龍神の選んだ土地』としてプラスイメージになるから、今回のことはある程度ではあるが流布される。だが親の秘匿性は保たれるように国がバックアップに回る」

「それもあるのですが、皆さんは？」

「私は息子が欲しかった。エリスは君を気に入っている。フィオナは言わずもがな、だ。この家にとっても君が来てくれることは歓迎すべきことだよ」

マルスの言ったことに優斗の胸が“ドクン”と高鳴った。

――結果が出なければお前はこの家にいる価値がない。

よく言われ続けていた台詞。
何度も何度も繰り返し、聞き飽きたもの。
それが実の親からもたらされていた言葉。
けれど今、この人は。
全く違うことを言ってくれた。

――ああ、嬉しいもんだな。

“結果を出していない自分”でも求めてくれて歓迎してくれているのは。
ただそれだけのことが、これ以上なく嬉しい。

「そう言っていただけて嬉しいです」

ただ、今ここで決めてしまうことでもないので。

「一応、明日の朝にでも皆さんと相談して結果を出そうと思います」

「ああ。そうするといい」

指輪と家族と得られたもの

「……ん……」

朝日が目に入って、優斗は眠りから覚める。
普段とは違う天井が目に映る。

「……」

寝起きはとても悪いほうで頭の回転もそこそこに悪いが、さすがに自分がどこにいるのかは覚えている。

「……フィオナの家か」

のそのそとベッドから這いずり出た。

――今日は僕がここに住むのか……相談しなきゃ。

普段はゆっくりと頭の回転が上がっていくが、さすがに今日はそういうわけにもいかない。
無理にでも普段の状態に戻ることが必要だ。

「……んー、と……」

どうしようかと回転不足の頭で考え、やらないよりはいいだろう、といつもは絶対にやらない行動をしようとする。

「……伸びでもしてみるか……」

両手を組み合わせ、伸びをしようとした瞬間だった。
左手の指に違和感があった。

「……ん……？」

ぽけっ、としながら指を見てみると……そこにあったのは。

「……ゆびわ？」

左手の薬指に見たこともしたこともない指輪が嵌まっている。
一歩遅れて事の重大さに気付いた。

「いや、なんだこれっ！？」

眠気も消し飛び、頭の回転数も一気に上がった。

慌てて着替えてフィオナたちに会いに行く。
幸い、優斗以外はすでに食事の広間にいた……のだが、なぜかフィオナの周りに集合していた。
マリカはエリスが抱いている。

「あっ、優斗さん」

朝のあいさつすらも忘れてフィオナが困った表情を浮かべている。

「もしかして……何かあった？」

「まーちゃんと一緒に寝てたんですが、朝起きたら指輪が……」

まーちゃん、というのはマリカの愛称だろう。
そして指輪というのは、

「もしかしてこれ？」

優斗は左手をフィオナに見せる。

「は、はい！　それです」

フィオナも左手の薬指に指輪が嵌まっていた。

「これ、取れないんですよ」

フィオナが取ろうとするが、少し動いたところで止まってしまう。
優斗もやってみたが、外れない。

「……いや、まあ……なんとなく理由はわかるんだけど」

二人はエリスに抱かれているマリカを見た。
視線が自分に向いたのが嬉しいのか、はしゃぐマリカ。

「どうしましょうか？」

「指輪の意味もまだ分かんないから、なんとも言えないんだよな」

マルスもエリスも詳しい知識を持ち合わせていないので、何か言うこともできない。

と、ここで家政婦が客人の存在を知らせた。

マルスが尋ねると、アリーの名前が出てきた。

何でも王城に来て欲しい、とのことらしい。

元々、登城するマルスはもちろんのこと、優斗、フィオナ、エリスにマリカもだそうだ。

優斗がここにいたのは予想の範疇で、寮まで行く手間が省けたとは馬車の中でエリスが話していた。

「昨日、お二人と龍神の子供について急いで調べたところ、いくつか分かったことがありましたので、そのことについて父様からお話がありますわ。そこまで堅苦しい話にはならないと思いますので、そこは安心なさって」

とアリーは言うものの、トラスティ家に優斗が全員で登城して王様から話を伺うなんて相当なことだ。

堅苦しくはないかもしれないが、国にはそこそこ重要なことなんだろう。

◇　◇

謁見の間に通される。
優斗にとっては2回目だ。
いつものように王様がいて、傍らには王妃。
前回と違うのはアリーが王様側ではなく自分達を連れてきた、ということだろう。

「父様。公爵家トラスティ及び、ユウト・ミヤガワ様をお連れいたしました」

王様と王妃、そしてこの場にいる近衛騎士の前では優斗は学生でも子爵家でもなく、異世界からの客人として立場で招かれているらしい。

「アリシア、ご苦労。わざわざお前が行くことでもなかったろうに」

「いいえ、父様。わたくしは現場にいましたし、ユウトさんにフィオナさんはわたくしの大切な友人。そんな彼らを呼ぶのですからわたくしが行くというのが当然ですわ」

キッパリと友人発言したアリーに王様を目をぱちくりさせたが、「そうかそうか」と朗らかに笑った。
が、すぐに表情を切り替える。

「今回呼び立てたのは他でもない、龍神の赤子のことだ」

その場にいる全員の視線がマリカに集まる。
マリカを抱きかかえているフィオナを緊張し、マリカは不思議そうにした。

「さっそくだが龍神の赤子を見せてもらってもいいかね？」

王様がそう言うと、フィオナは頷く。
ゆっくりと王様へと近寄っていってマリカを見せる。

「もう名前は決まったのか？」

「はい。マリカ、と名付けました」

「そうか。いい名前だ」

マジマジと王様がマリカを覗き込む。
が、マリカはそんな王様の長い髭が気になったのか、

「だっ！」

掛け声一つ、右手を伸ばして王様の髭を掴む。
後ろではマルスとエリス、優斗の血の気が引いた。

「ま、まーちゃん！」

フィオナがやめさせようとするが、王様が制した。

「よい。赤子はこうでなくてはな」

しばらく髭で遊ばせる。
そしてマリカが満足して髭から手を離すと、王様は笑って話を続けた。

「さて、ユウトにフィオナよ。二人とも指輪が左手の薬指についてるのではないか？」

「は、はい。朝起きたら指輪が嵌まっていました」

「それは龍神の指輪というもので、人間が龍神を育てることになったときには全員が受け取っているものだ」

「外せないのですが」

「龍神が龍神の母の元へ戻るまでは外せないらしい」

ということは、下手したら数年はこれを付けていることになる。

「なに、精霊すらも扱えるというご利益のある聖なる指輪だ。無理に外すこともないだろう」

それならば別にいいのだが。

優斗は安心する。

「そして、ここからは龍神を育てた何人かの人間が記した本から分かったことなのだが……」

王様は優斗とフィオナの二人を見た。

「分かっている限り、君たちが一番若い親ということになる。今までは若くても２０代後半なのだが」

なぜか今回はこの二人になった。

「選ばれるのに何か共通点とかがあるのでしょうか？」

「卵が産まれた瞬間にいる必要があるのは分かるのだが、それ以外はわかっていない。ただ、少なくとも人間が龍神を育てる場合、なぜか卵を見つける場にいたのが婚約者同士や夫婦だということ。卵のある現場に複数名いたとしてもそれは変わらないらしい」

「そうですか」

そこも違う。

自分達はまだ婚約者どころか恋人ですらない。

「あと重要なのは一緒に住まなければならない、という点だ」

「どういうことですか？」

本当は今日の朝、しようとしていた話題がここに出てきた。

優斗は尋ねる。

「どうやら龍神は自分が住んでいる場所に親も一緒に住んでいないと癇癪を起こすらしい。幸い、歴代で育てていたものは物分りがよくて別々に住んでいても、すぐに同じ家で住むことにしたらしいが、別々に住んだらどうなってしまうのかわからない」

優斗、フィオナ、マルス、エリスは４人で納得する。

確かに昨日は優斗が帰ろうとしたらぐずりだした。

帰っていたら癇癪を起こしていたかもしれない。

知らずして回避したことに安堵すると同時に、心配ごとも増えた。

「……それは毎日帰らないといけないものでしょうか？」

「いや、あくまで“最終的に帰る場所”がそこであればいい、らしい。だから何日も家を空けたところで心配はないし、そこらへんの物分りは良いのだろう」

王様の返答に優斗もフィオナもほっ、とする。

「もちろん、ユウトもフィオナも学生が本分だということは我も分かっている。そしてまだ遊びたい盛りということもな。ということでマルスとエリスにも来て貰ったのだ」

王様は続いてマルスとエリスに視線を向ける。
二人は黙って臣下の礼を取って傅いた。

「マルス。龍神が赤子をこの地に置いたということは、この地が龍神にとっての聖地として認められたということだ。その重要性は承知しているだろう？」

「はっ！」

「そして龍神の赤子、マリカはお前達の孫になる。特にエリスはユウトやフィオナよりもマリカと関わる時間も多くなるだろう」

だからこそ、

「しっかりとフォローしてやってくれ。それは祖父と祖母にしかできないことだ」

王様の言葉を受けてマルスとエリスは顔を上げる。

「陛下の優しき言葉、しかと承りました」

「龍神の赤子、マリカはトラスティ家が責任を持って育て上げます」

その後、数十点もの確認事項を決めて5人は帰りの帰途へ向かうことになった。

マルスはそのまま仕事をしようと思っていたが、王様の配慮によって帰宅を許された。

「というわけで、今日明日中にでもユウトさんを引越しさせないといけないわね」

帰り道の馬車でエリスが確認を取るように告げた。

「本当は今日の朝にでも引越しについて相談しようと思っていたのだが、マリカが癇癪を起こしてしまうとなったら話は別だな」

「そうですね」

フィオナが頷く。

抱いているマリカは今、馬車に揺られてぐっすりと寝ていた。

「あっ、ちょっと待ってください。僕に関しては引越しを急がなくても大丈夫ですよ。もともと荷物は少ないですし、衣類も最低限しか持っていませんので。夏休み中にでもゆっくり持ち運びをしようと思います。一応、8月いっぱいまで部屋は使っていいことになったので」

「そうなの？」

「ええ。むしろ僕のことよりもマリカを育てる道具を揃えるのが先決でしょう」

自分は必要な都度、寮から取ってくればいいがマリカはそうもいかない。

「それもそうね。服とかたくさん着飾りたいもの」

「ベビーカーとかも必要でしょうか？」

「マリカはやんちゃみたいだから、あったほうが便利よ」

あれこれとマリカを育てるのに欲しい物が決まっていく。

女性主導であれこれ話しているうちに、トラスティ邸宅へと辿り着いた。

「それじゃ、僕は寮のほうに一旦戻ります。着替えと引越しをあいつらに伝えに」

「わかったわ。あまり遅くならないようにね」

「ええ。わかってます」

◇　◇

「――というわけで引っ越すことになった」

優斗は寮にいる修、卓也、和泉を自室に呼び出すと昨日から今日に関しての詳細を話した。

「またずいぶんと急な話だな」

昨日から慌ただしいと思ったら、自分が必死に勉強してる最中、こんなにも面白いことがあったとは。

真面目に勉強していなかったことを少し後悔する。

「和泉は昨日いなかったから、余計にそうだろうね」

こんなに早い展開でいろいろなことが決まるとは優斗も驚く一方だ。

「つーか和泉は追試、大丈夫なのか？」

「そこそこ心配なんだけど」

修と卓也がツッコむ。

「今は休憩中だ。クリスがなんか呼び出された。おそらくは優斗たちのことだとは思うが」

「まっ、そうだろうな。そこそこ重要なことらしいし」

「みたいだね」

話を聞きながら着替えをバッグに詰め込む優斗。

「これからもこっちに遊びに来れたりはできんの？」

「ちょくちょくはね。ただ、仮にも赤ん坊を育てるわけだから、頻繁に泊まったりはできないよ」

「そりゃそうか」

「さすがにね」

優斗はバッグをパン、と叩く。

今日の準備は完了だ。

「それじゃ、今日はまだやることがあるから行くね」

「はいよ」

修たちは気軽に返事をする。

最後に優斗は４ヶ月ほど過ごした自室を見てから……３人と目が合った。

「落ち着いたら遊びに行ってやんよ」

「楽しいことがあったら、いつものように呼び出しするから」

「頑張れよ」

修、卓也、和泉と三者三様で送り出してくれた。
優斗は笑って、頷いた。

「行ってくるよ」

◇　◇

荷物を持ってトラスティ家の門を通る。
バルトに一言、挨拶をしてから玄関へと辿り着く。
ノックをしてからドアを開けた。

「失礼します」

中に入ると、途端に小さいものが駆け寄ってきたのが見えた

「ぱーぱっ！」

すごい勢いで来たので優斗はバッグを置くと勢いそのままに飛びつくマリカを抱きかかえる。

後から続いてフィオナとエリスがやってきた。

「お帰りなさい、優斗さん」

「お帰り。マリカはちゃんとパパにお帰り、って言った？」

「あいっ！」

優斗に抱かれているマリカが大きく返事をした。

「……」

一方で優斗は少し呆けていた。

――お帰り、か。

少しこそばゆかった。

家に帰ったことで得られる“お帰り”が。

……嬉しかった。

「優斗さん？」

返事も何もないことにフィオナが不思議がる。

優斗は取り繕いながら、それでも久方ぶりに使う言葉を大切にしながら口にした。

「ただいま戻りました」

海と友達と生徒会長

カタン、カタンと。
樹で作られた車輪が回る。
大きい作りの馬車は今、リライト王国沿岸にある海へと向かっていた。
御者台には優斗とクリスが乗っている。
他は全て馬車の中だ。

「大丈夫ですかね？」

中の様子が気になっているクリス。

「まあ、護衛として来てるみたいだから気を張るのはしょうがないとは思うけど……」

「それでも、もっとリラックスしてほしいですね」

「そうだね」

今日は1泊2日で行くことになった旅行の初日。
優斗とクリスは朝、集合したときのことを思い出していた。

「このたび、アリシア様及び公爵様、龍神様の警護担当として参りましたレイナ＝ヴァイ＝アクライトと申します」

片膝をつき、頭を垂れる。

レイナが地面を向けている顔を上げると、そこには唖然とした表情の貴族たちと変なものを見るような目の異世界組がいた。

「と、とりあえず立っていただけますか？」

代表してアリーが伝えた。

「はっ！」

きびきびとした動きでレイナが立ち上がる。

「あと、その口調と動きをやめていただけると助かりますわ」

「し、しかし私は護衛として――ッ！」

レイナが反論する。

「まず、わたくし達はなぜ貴女が護衛として来られたか知らされていないのです。それから説明していただけますか？」

「畏まりました」

レイナから話を聞いてみる。

どうやら貴族の中でも上流が集まっており、さらには龍神の赤子までいるこの面子。

特に問題はないと思ってはいるが、念のためということで近衛騎士

団長の娘で同じ学院に通っている実力1位のレイナに話が回ってきた。
というのが彼女から伝えられたことだ。

「皆様にはお伝えされてると思いましたが、驚かせてしまい申し訳ございません」

そして、今へと至る。
置いていくのもどうかと思うので、レイナも馬車の中にいる。
最初は御者も自分がやると言い出したのだが、それは優斗とクリスが丁重に断った。

「護衛で来られたということは、やはりある程度の話は聞かれているのですか？」

「はい。もともと公爵家と親しいとされているミヤガワ君やウチダ君、ササキ君にトヨダのことも知っていましたが、異世界から来た方々というのは先日に教えていただきました」

アリーの問いにレイナが答える。
しかし彼女の口調にアリーがふぅ、と小さくため息を吐いた。

「先ほども言いましたが、普段のレイナ様はそのような口調ではないでしょう？　わたくし達は友達と旅行に来ているのです。レイナ様も一緒にいらっしゃるなら護衛という形ではなく友達として、そ

して学院の先輩としていていただけるとこちらも気が楽になるのですが」

「し、しかし――」

「面倒だな、お前は」

今度は和泉が馬鹿にするように言った。

「なんだと！？」

「そんな堅苦しい護衛なら別にお前じゃなくていいんだよ。お前よりも腕の立つ護衛なんて他にいるしお前より強い奴だって勇者の修や優斗がいるんだから。けれどお前が護衛として行け、と言われたんだろ。そこを考えろ」

ハッ、とした表情をレイナが浮かべた。

「さっき優斗が言ってたけどな、ここにいる面子は将来の国政に関しても重要な役割を果たすのがたくさんいる。公爵も王族も勇者も異世界人もいる。お前は将来的に近衛騎士を目指してるんだろ？」

レイナは素直に頷く。

「ならば将来的に守る立場の中心になり得るお前に少しでも俺らの雰囲気に慣れてほしい、というのが今回の件の一端じゃないか、ってな」

「……そ、そうなのか」

深く、深く頷く。

「わたし達は公爵だから友達とかいなかったです。でも、だから友達とだけで行ける旅行がとっても楽しみで。レイナ様も――いや、レイナさんも協力してくれると嬉しいです」

ココが憧れの存在であるレイナにそう伝えた。

「つまりオレらが求めてるのは護衛じゃなくて生徒会長ってこと」

「ついでに護衛もしてくれると助かる、って話だ」

なあ、と修が言うと護衛される最筆頭アリーとマリカが返事した。

「あいっ！」

「そうですね」

「まとまりそうですね」

「そうだね」

「ユウトさんは……いえ、ユウトはいつ護衛が将来的なものに繋が

っていると気付いたのですか？」

クリスが優斗を呼び捨てにした。

それに少し驚きながらも優斗は答える。

「まさか、何も気付いてないよ。そうであったらいいって思っただけ。まだ何の情報もないんだから」

「では、先ほどイズミが仰っていたのは？」

「僕の口からのでまかせ。それっぽい道筋を立てれば大抵は納得するから」

「確かに。中のいる方々は皆、納得されましたね」

「僕らのときは修のバカが突拍子もない方法で垣根を取っ払ったけど、レイナさんは堅物そうだから。納得するような理由をもらわないとさすがにね」

「ユウトはよく考えていますね」

「和泉とか修とか頭を使わないでいるのと一緒にいるとね、自然と考えなきゃいけないことが多くなるんだよ。それはクリスも実感してるでしょ？」

優斗がそう言うと、クリスは確かにと頷いた。

「それもそうですね」

◇　◇

今回、泊まることになっているのはクリスの家が持っている避暑地の一つだ。
荷物をそこにおいて泳ぐか別のことをするか話したが、二日もあることだから初日は釣りをしてみよう、ということになった。
近くには川があるということなので、そこへ向かう。

「ほ、本当にこんなものを針に刺さなければならないのですか？」

「そりゃ餌だし」

アリーを始め、クリス以外の貴族の方々は餌をつけるのに四苦八苦している。
レイナも爵位を持っており、子爵という立場なのだが彼女は平然と餌をつけていた。
なんとか全員がつけ終わると、それぞれ少しバラけて釣り糸を垂らす。
優斗とフィオナだけはマリカを交代で見ることにして、今は優斗がマリカの面倒を見ている。

「おっ！」

釣りを始めて数分。

「来たぁ！」

まず修の竿に当たりが来た。
体長３０センチほどの鮎みたいな魚がついている。

「よっしゃ、まずは一匹ゲット！」

手際よく竿を持ち上げて鮎を引き寄せる。
そして自らの手に収めると素早く針を外してバケツに放り込んだ。

「うしっ、みんなどんどん釣るぞ！」

修の掛け声一つ、全員がより一層竿に集中し始めた。
この場所は当たりだったのか、他のメンバーにも当たりがすぐに来た。

「あわわっ！」

ココなどはおっかなびっくり竿を引いて魚を手繰り寄せたり、

「これは大きいですね」

クリスは大きさに満足しながらつりをしていた。
その中でもとりわけ大きい魚を釣ったのがアリー。

「あの、あの、シュウ様！」

予想外の強い引きに慌てるアリーに、修が素早く駆け寄った。
アリーの身体を包み込むように後ろから手を回して一緒に竿を握る。

「一気に引くぞ」

「は、はいっ！」

暴れまわる魚を目の前にして、二人して一緒に力を込める。
すると水面から出てきたのは８０センチほどの魚。
二人で同時にキャッチする。
予想外に重くて尻餅をつく。
ピチッ、と腕の中で暴れる。
呆けた表情で互いに顔を見合わせる。
笑いがこみ上げてきた。

「ふふっ」

「ははは っ！」

パタパタと周りの連中が集まって驚いたり褒め称える。

「アリー」

「はい？」

修は右手をあげる。
アリーは首をかしげながらも、同じように右手をあげた。
修は彼女が手を上げたのを見るとパン、と音を鳴らせてハイタッチした。

◇　◇

「うまいな」

「おいしいですね」

「イズミ、邪魔だ。早くその野菜を食べてくれ」

「生徒会長が食えばいいだろ」

「おい、卓也。肉が足らないぞ」

「お前らも少しは手伝え！」

バーベキューには大抵、焼くばっかりの係が存在する。
そしてそういう場合は基本的に卓也が就任される。
ただ、それだけでは可哀想なので優斗とクリスとレイナ、ココが手伝っている。

「まーちゃん、ゆっくりと噛んで食べてくださいね」

「あい」

ゆっくりとフィオナがマリカの口に運ぶ。

「卓也、魚を焼いてくれ！」

「自分で焼けっ！」

慌ただしく料理が進む。

バーベキューをやったことがあるのは異世界組だけ。

というよりもレイナと最近料理を始めたフィオナを除く貴族は満足に自分で料理を作ったこともないため、今回のバーベキューは焼いている肉を取り分けたりひっくり返したりするだけにしても、自分で作る料理としても簡単で新鮮であった。

◇　◇

そして夜。

男子組と女子組に別れて別々の広間で寝ることになった。

となると、だ。

始まるのは修学旅行のような夜の会話。

「それで優斗はどうなんだよ？」

「何が？」

「フィオナとどこまで進んでるのかってことだよ」

先陣を切って卓也た尋ねた。

「期待に応えられずに残念だけど、まだ何もしてないよ」

「キスは？」

「やってない」

「じゃあ、手もですか？」

「繋いでないよ」

「お前、俺が言うのもなんだが……大丈夫か？」

和泉に心配される。

「僕らはそんなにカップルに思え……ごめん、今の疑問なし」

抱きついておいて何を、と心の中でツッコミを入れたのは全員。

優斗自身も客観的に見たら『付き合ってるだろ』ぐらいは思っているはずだ。

「……まあ、お前らなら時間の問題だと思うけど」

卓也が言うと周りが納得した。

次いで彼らの視線が向いたのは、

「クリスは？」

「自分ですか？」

クリスは少し驚いた表情を浮かべると微笑を浮かべ、

「自分は婚約者がいますから、何とも言えませんね」

「「「「婚約者!?」」」」

爆弾発言が飛んできた。

「はい。一応ではありますが婚約者がいますよ」

唖然とした顔にクリスの笑みが深くなる。

「自分が学院にいますので結婚はまだですが、卒業したら結婚します」

「うわぁ、貴族っぽいな」

「貴族ですから」

「会ったことは?」

「1度だけですね。この夏にまた会うことになっているんです」

「よくそれで結婚できるな」

あらためて違う世界の違う常識なのだと認識させられる。

向こうじゃ王族や皇族ですらも一般人と結婚できる時代だというのに。

「これでも公爵家の長男ですから。他の貴族でも自分の意に沿わない結婚は多々あります。これでも自分はある程度自由に選ばせてい

ただいているほうなのですから、幸せなほうかと」

「そういうものか」

「だったらアリーはどうなんだ？」

ふと気になった修が問いかける。

「彼女は王族ですからね。ある程度の地位は必要になります。最低でも公爵の血筋か城内でも権力のある方との結婚になるかと。少なくとも彼女の夫になることは国王になるということなのですから」

「大変そうだな」

「時に意に沿わない結婚を強いられることもあるかもしれません」

国の利益のため。

という言葉で結婚せざるを得ない場合もあるかもしれない。

「そんな時は修の出番かな」

「俺？」

優斗のフリに疑問を浮かべると、和泉が解説した。

「異世界出身で勇者の刻印持ってて伯爵の爵位を持ってる。アリーがどっかの誰かの貴族が嫌だって言ったらお前が婚約者でも結婚でもしてやれ」

和泉がそう言うと、修はまんざらでもなさそうな表情で、

「しゃーないな」

一つ、頷いた。

「んじゃ、俺も気になったんだけどよ。和泉はなんでレイナと相性が悪いんだ？」

彼の好みを考えると意外だ。

「彼女、お前のド真ん中だろ？」

優斗と卓也が頷く。

確かにそれは疑問だった。

「いや、なんかゲームじゃ好きだったんだが、現実にいると……少しうざい。そういうのってあるだろ？」

ゲームでは妹好きだが、リアル妹はうざいとか。

そういった類。

「ああいう性格、ゲームだから許せるんだ。リアルは勘弁被りたいもんだ」

◇　◇

「マリカちゃんはちゃんと寝てますよね？」

「ええ。もうぐっすりです」

女子も女子で並べた布団の中央に集まる。

「フィオナさんも大変ですね。急にお母さんになるなんて」

暗闇の中、ココの言葉にフィオナは首を振る。

「でも可愛いですよ。まーちゃんが無邪気に笑ってたりするのを見てると、疲れが飛んでいきますから。これが母親になる人の気持ちなんだなって、少し分かった気がします」

「それに何かあってもフォローしてくれる、献身的でやさしい旦那様までいますものね」

さりげなく加えたアリーの言葉にフィオナとレイナが驚きの声を上げる。

「旦那様がいるのか！？」

「ア、アリーさん！？」

「この間、決め事のうちにあったではないですか、対外的にユウトさんとフィオナさんを婚約者だったり夫婦にすると」

今回選ばれた二人は今まで龍神の子供を育てた人たちに比べると違

いがある。
その違いがどう働くかわからない以上、できるかぎりは今まで育ててきた人たちと対外的だけにしても似せていこうとするのは必然的な流れだろう。

「そ、それはそうですけど、あくまで非常事態になったときですから」

「ではそのような事態になったら臨機応変に対応しろ、ということか？」

「ええ。時と場合によって夫婦になったり婚約者になったりするそうですわ。マリカちゃんがいる以上、大抵はユウトさんの――フィーア家の奥様というのがフィオナさんの設定になるのではないかと」

本当のことを言うと優斗が婿入りしたときの書類、フィオナが嫁入りした書類、婚約者として認める、ということを書面として王族の印を押された書類。
優斗とフィオナには言っていないが、そういった類の書類がすでに用意されている。

「マリカちゃんの存在を知っている方でも、ユウトさんとフィオナさんは婚約者同士という設定らしくて。わたし達はそれに合わせる必要性があるって教わりました」

「むしろ、その数々の設定を嬉々として望んでいたのはフィオナさんのご両親でしたわね」

二人とも優斗はお気に入りなので、娘の婚約者など以ての外――と思うどころか進んで二人をそうしようとしている節がある。

と、ここでフィオナがこれ以上いじられるのが恥ずかしくなったのか、話を変える。

「わ、私はともかくとしてアリーさんやココさんはどうなんですか？」

「なに？　お二方にもそういった話があるのか？」

次々と出てくる乙女話にレイナも内心が躍る。

「アリーさんはシュウさんとどうなんですか？」

「シュウ様とは別に……何事もなく過ごしておりますわ」

「でも優斗さんが言ってましたよ。アリーさんはシュウさんを狙ってるって。そこのところ、どうなんですか？」

フィオナにそう言われて、アリーはやっぱり、という表情を浮かべた。

優斗は無駄に相手の心の機微に聡い。

おそらくは最初に出会った瞬間からバレていたのではないかと思う。

「なんというか、掴み所がないのです」

「掴み所がない？」

レイナが聞き返す。

「例えば恋愛物語があるとして、それに近い状況になるとします。そういった場面になって一押ししたところで、何か反応を期待して

も……一向に反応がないのです」

「……ああ、なんとなくわかるかも」

ココが神妙に頷く。

「脈がないかと思えば先ほどの釣りの時のように後ろから包み込むように竿を一緒に握ってくれたりと、ほとほと難しいのですわ」

普通の恋愛として判断ができない。

暖簾に腕押し、と言ったところか。

「なんかもう、一方的に押したとしても無駄なような気がしますわね」

「確かにそうかもしれません」

全員で深く頷く。

「ココさんは誰かにありますか？　たとえばタクヤさんとかは？」

問われてココは頭に卓也を思い浮かべてみる。

「ん～……ないです」

「ないのですか？」

フィオナが不思議がった。

優斗ほどではないにしろ、卓也だって良い方だとは思っているからだ。

「こう、なんていうか……良い方なのは分かるんですがそれだけ、というか。かっこよさが見えないので……」

惚れる要素が見当たらない。

「例えばシュウさんみたいに顔がいい、ユウトさんみたいに優しい、という面を見つけられてないんです。だから恋愛対象なんて無理ですよ」

なんとなく可哀想な気もするが、これがココの今の卓也に対する評価なのだろう。

続いてはレイナに話を振る。

「レイナさんとイズミさんは最初から仲がよろしかったですわね」

彼女とは幾度か面識はあるが、彼女と和泉がまともに会話をしているというのが自分としては驚きだ。

「いや、あれのどこが仲が良いと」

「イズミさんを初対面で変人だと思わないのは稀だって優斗さんが仰ってましたよ」

「わたくし達のときは……壮絶でしたから」

今でもあれは忘れられない。

顔合わせをしたら、唐突に頭を叩かれ、起き上がったと思ったらクリスに女装させようとのたまった。

そこからさらに椅子ごと蹴られて壁に飛んでいったのだ。

「あの出会いと比べたらレイナさんとイズミさんの出会いなんて普通すぎますわ」

巨大タコは食べれませんでした

旅行二日目、最終日。
快晴。
ということになれば。

「海だな」

「そうだね」

「最終日、か」

「うん」

優斗と卓也はため息を吐く。

「何があると思う？」

「溺れてるのは前にやったから、僕はオーソドックスに海から巨大生物登場に一票」

「ナンパに1票」

「やっぱり二つともあるに1票」

二人は目を合わせるとげんなりした。

「気をつけよう」

「だね」

◇　◇

「みんなも貴族の家柄となっているのですから、息をするように賞賛ができなければいけませんよ」

水着に着替えている女性陣を待っている間、そんな心得をクリスが説いてきた。

「めんどい」

「かったるい」

「恥ずい」

「照れる」

修、和泉、卓也、優斗の順に勘弁の願いを申し出た。

「そんな子供みたいなことを言わないでください」

「だってな～」

あ～だこ～だと騒いでいるうちに女性陣が到着する。

「お待たせいたしました」

アリー、ココ、レイナがやって来る。

「フィオナとマリカは？」

優斗が二人がいないことを気にした。

「マリカちゃんの着替えもありましたから、先に言っててくださいと」

瞬間、嫌な予感がした。

「……迎えに行ってくる」

「どうしたのですか？　待っていてもすぐに来ますよ」

「そうしたいんだけど、嫌な予感は大体当たるから」

フィオナは美人だから余計にそう思う。

「ちょっと行ってくるよ」

「いってら」

「頑張れ旦那」

「行ってこい夫」

茶化されながらも優斗は歩き出した。

「さて、フィオナとマリカは……」

やって来そうな方向を見れば、小さくではあるが二人の姿が見える。
そしてその側には案の定というかなんというか……変なのが纏わりついていた。

◇　◇

「いいじゃん、俺らと一緒に遊ぼうよ」

「い、いえ、ですから友達とも一緒に来てますので」

「そんなのといるより俺らといるようが楽しいよ～」

「ほら、妹さんも一緒に遊んであげるから」

「こ、この子は妹じゃなくて……」

フィオナはほとほと、困ったことになったと思った。
どうやって話せばこの二人はいなくなってくれるのだろうか。
どうしていいか分からなくて悩んでいるときだった。

「ぱ～ぱっ！」

手を繋いでいたマリカが手を離して走り出す。

「えっ？」

と前を見てみれば、そこにいたのは……旦那様。

「やっぱりね」

ひらひら、と手を振って優斗がやって来た。
そして駆け寄ってくるマリカを抱き上げる。

「優斗さん！」

これ幸いにフィオナも優斗に駆け寄った。
当然、ナンパ男二人にしてみれば気分はよくない。

「あんた、この子の友達？」

「だったら俺たち、この子と遊びたいんだ」

なんてナンパ男が言ってくるので優斗は一刀両断する。

「夫ですよ」

「……は？」

「……おっ……と？」

驚いた表情を二人が浮かべる。

「1歳になる娘もいる貴族の妻をナンパするなんて良い度胸ですね」

優斗に言われてナンパ男たちは子供と二人を見比べる。

よく似ていた。

「す、すんません！」

「あまりに美人だったんでつい！」

ヘコヘコと頭を下げ始める。

「僕の妻はこういうことに慣れていないんですからうまく断れないんですよ。確かに若いので娘を妹と勘違いするのも分かりますが、今後は気をつけてください。あと僕たちの友人たちも貴族ですので、うっかり声をかけないように」

「しょ、承知しました！」

回れ右をしてナンパ男二人が走って去っていく。

フィオナが安堵の息を吐いた。

「……助かりました」

「ナンパなんて初めてでどうしていいか分かりませんでした」

「フィオナは美人なんだから気をつけないと駄目だよ」

少しばかり顔を赤らめながら優斗が言う。

「えっ！？」

息をするように相手を褒める。

ということをクリスは言っていたが、やってみてわかった。

――ぜったい無理。

他人モードなら何とでも言えるが、今は絶対に無理だった。

どうしたって顔が赤くなった。

「だ、だからフィオナは美人だし水着も似合ってるから、その……よく声を掛けられると思うし、そういうときははっきりと断るか指輪でも見せれば相手も引くと思う……し」

白のビキニにパレオを着けたフィオナは、気をつけなければその姿に吸い込まれそうになる。

それほど魅力的だった。

「あの……えっと……ありがとうございます」

基本的に他の貴族と違って優斗は滅多に容姿について言及しない。

だからこそ、彼の言葉が真実だと思えて嬉しい。

彼から『美人』だと思われていることが本当に良かったと思える。

この水着も褒めてもらえてよかった。

頑張った甲斐があった。

――それに『僕の妻』って言ってもらえた。

昨日はアリー達にからかわれたりしたが、彼から直接言われると…

…心から喜んでしまっている自分がいる。

◇　◇

戻ってくるとそこには卓也とココしかいなかった。

「他の人たちは？」

「アリーは泳げないから修が教えてる。レイナは和泉を引きずって遠泳」

「振り回されてるな、あの二人も」

あの和泉を振り回すとはやるな、と感心する。

「3人も行ってきたらいいよ」

「優斗は？」

「僕は子育て」

いつも以上にマリカの面倒を見る。
今日はそうする一日にしようと決めていた。

「フィオナは海とかあまり来たことないだろうし、遊んでくるといいよ。マリカの面倒は僕が見てるから」

「……でも……」

優斗とフィオナを差し置いて、というのは気が引ける。

「友達と初めて一緒に来たんだから、遊ぶのも大事なことだよ」

そんなフィオナの心情を察した優斗が嗜める。

「子育てだけじゃ疲れるからさ」

専業主婦じゃないのだから。
優斗だって相応の負担は持つつもりだ。

「そ、それなら……」

決意したような表情をフィオナがする。
優斗は笑って送り出した。

「うん。遊んでおいで」

「マリカを遊ばせる場合は２０分ぐらいで休憩は長めに入れる、だったっけ」

海の家でエリスに教えてもらったことを再確認する。

「マリカ、ちょっと海に行ってみようか」

「あい」

理解しているのかどうかは分からないが、返事をしたマリカと一緒に波打ち際まで行ってみる。

「ほ～ら、ざぶーんざぶーんってすごいね～」

「あうっ！」

マリカは引いていく波が面白いのか、つたない足取りで波を追いかける。

優斗は強い波が来れば抱き上げたり、絶対に手は離さないように気をつけながら押しては返す波と遊ばせた。

――うん。

優斗は一つ、頷く。

――ちゃんとこの子のことを喜ばせてあげたいと思ってる。

自分はあの二人とは違う。
子供を道具なんかにはしない。
龍神だとしても関係ない。

――大切な娘として……。

マリカを育てる。
あんな扱いを受けてきたからこそ。
理想としての両親の形がある。

――それを目指すんだ。

だからその一歩として。
まずはマリカと。
もっと仲良くなろうと思ったんだ。

◇　◇

「はい、顔つけて」

修の合図で足をばたつかせながらアリーは顔を海につける。

アリーの手は修が握っている。

「顔上げる。バタ足も終了」

バシャ、と音を立ててアリーが顔を上げた。
そのまま立ち上がる。

「そんじゃ、ちょいと一人で泳いでみるか」

「はいっ！」

手を離すと修は5，6メートルほど距離を取った。

「バタ足だけで来てみな」

修の合図と共にアリーはバタ足でまっすぐ修を目指す。
息継ぎなど習っていないので、足だけをばたつかせて修に迫っていく。
指先が修にヒットした。

「ど、どうですか？」

「OKだ。次は息継ぎとクロールの練習でもしてみるか」

「はいっ！」

二人きりだというのに相変わらずの修だが、それはそれでいいか…
…と思ってしまうのは、アリーの惚れた弱みなのかどうなのか。

◇　◇

「なんだ、だらしがないなイズミ」」

「……殺す気か、お前は」

大きく肩で息をしながら和泉はレイナを睨みつける。
なんだかんだで競争しろと言われて無理やりやらされたが、遠泳とは聞いていない。

「ユウトやシュウと同じ世界から来たのだろう？　ならお前だってすごいと思うじゃないか」

「あの二人と一緒にするな。天然チートと努力型化け物だぞ、あの二人は。向こうの世界でもスポーツテストで普通に全国屈指の実力の持ち主だ」

あんなのと同列に思われては適わない。

「とはいっても、俺は平均より運動能力劣ってるし、卓也は平凡だけどな」

つまり普通という単語の基準は卓也だ。

「じゃあイズミとタクヤはＡランクの魔物は倒せないのか？」

「無理。勝てるわけがない」

「異世界から来てるのにか？」

「だから基準をあいつらで考えるな。いくら魔法適正が高いからといって神話魔法を平然とぶっ放すのはあの二人だけだ」

「そ、それもそうだな」

今まで異世界から来て“勇者の刻印”を持たなかった人物は、基本的に卓也か和泉ぐらいで落ち着く。
上級魔法は使える、ぐらいで。
優斗が例外中の例外だ。

「ならばお前は上級魔法を使えるのか？」

「使えるわけない」

なぜか自慢げに和泉が言うので、レイナはため息をついた。

「自慢することじゃないだろうに」

◇　◇

「そろそろ戻る？」

ビーチボールでバレーをしていると、卓也が提案した。

「ほら、レイナは死に掛けの和泉を連れて戻ってきたしアリーと修も戻ってきてる。ここらで一旦休憩したほうがいいと思う」

「そうですね」

フィオナとココが頷いた。

優斗とマリカは海の家でカキ氷を食べながら皆の様子を見ている。

3人とも優斗の元へと集まった。

「何を食べてるんですか？」

「いちご味のカキ氷。フィオナも食べてみる？」

「はい」

フィオナが頷くのを見るとマリカが優斗の手にあるスプーンを取ろうとした。

「マリカ？」

「あ、あ、あう！」

何かアクションを示している。

「食べたいの？」

首を横に振った。

「ん～、と。……ママに食べさせてあげたいの？」

「あいっ！」

勢いよく頷いた。

優斗がマリカにしていることを真似したいらしい。

「でもマリカ一人じゃ無理だから、パパと一緒にやろうね」

「あうっ！」

スプーンをマリカに握らせて、その上から包み込むように優斗が手を握る。

そしてカキ氷をすくう。

「はい、あ～ん」

マリカに教えるため、優斗が普段じゃ絶対に言えないことを言う。

「あ～」

マリカが真似した。

くすっ、と笑って優斗が前を見る。

「……」

顔を真っ赤にしたフィオナがそこにいた。

なんで、と思うがすぐに気付く。
優斗も顔が赤くなってきた。

「ま～ま？」

食べないフィオナがどうしたのかとマリカが小首を傾げる。

「あっ、まーちゃんごめんね」

顔を前に出してスプーンを捕らえる。
ぱくっ、と食べた。
冷たくて甘い。
顔の火照りも一緒に取れたらいいと思うが、そうもいかなかった。

「こいつらの可哀想なところは鈍感を貫けないところだろうな。別の視点から見ればこの行動は恥ずかしい、というのが鈍感な奴らと違って分かるから」

卓也が状況分析する。
だから余計に照れているのだろう。

「……うるさいよ」

これは確かに恥ずかしかった。
マリカと同じ要領でやることじゃない。
と、ここでアリー達とレイナ達が戻ってきた。
そしてさらに優斗とフィオナがからかわれたのは一興というものだろう。

◇　◇

海の家で割高の昼ごはんを食べ終わる。

「まだ食べれるけど、どうすっかな？」

「やめとけ。どうせこのあとも動くんだから」

運動なのか、それ以外なのかは別として。

「何かあるのですか？」

アリーが気になって卓也に尋ねた。

「あると言えばある」

「どういうことでしょうか？」

要領を得ない卓也の返しに、さらに突っ込んだことを訊く。

「まあ、そうだな。例えば――」

卓也が何かを言う瞬間だった。

海の遠方、遊泳禁止ラインよりも遠くに“何か”が現れた。

大きな波音を立てて登場するは、

「巨大タコ」

途端、海水浴場がざわめいた。
海の中にいるものは一斉に陸を目指し、腕に覚えがあるものは逆に海に近づいていく。
海の家にいる優斗たちはと言えば。

「でかいね」

遠距離だから分からないが、下手したら２０メートルを超えてるのではないだろうか。

「食えるか試してみようぜ」

「身が引き締まってなくてまずそう」

「ふ、二人とも！　どうしてそんなに落ち着いてるんだ!?」

レイナは優斗と修の振る舞いが信じられない。魔物が現れたというのに。

「慌てる必要……あるか？」

「ないよ」

「だよな」

何も脅威を感じない。

「レイナはどれくらい強いんだっけ？」

「学院で1番だよ」

「俺ら出張んなくていいんじゃね？」

ランク的にもBランクかCランク。

優斗や修がいなくてもいいはずだ。

「いや、さすがに私だけだと勝てるか分からないし、よしんば勝てるとしても骨が折れるから一緒にやってくれると助かるんだが……」

「あれなら俺らじゃなくていいだろ。和泉も卓也もいるし、他もなかなかの実力者ばっかりだぞ」

上級魔法を使える人材が多数いるメンバーを“なかなか”と言えるあたり、さすがは“勇者の刻印”を持っているだけはある。

「それに、ほら。周りにいる冒険者みたいなのも応戦に向かってるみたいだし」

特に役に立ちそうではないが。

「し、しかしだな」

「設定したラインを突破されたら手を出すから」

それでも、と思っているレイナに修が海上を指差す。

「あのブイがあるだろ。あそこに掛かったら俺と優斗も参加する」

けれど逆にあそこに届くまでは、

「それまでは手出ししない」

自分達が片付けてもいいが、それじゃ駄目だ。

「いつだって俺たちがいるとは限らないからな」

優斗はマリカを抱えなおす。

「そんで超えたらどうする？」

「試そうと思ってるのもあることだし、それでも使ってみようかと」

「なんだ？　重破斬？」

この前は神滅斬を使っていたので、今度も似たようなものでも使うのだろうか。

「ここに生命を寄せ付けなくさせる気か？　お前は」

「じゃあ竜破斬」

優斗が修を睨む。

「龍神と竜で違いはあるし、使うべきときがあったら使うけど……次にマリカの前で言ったらぶっ飛ばす」

「冗談だって」

なんとなく縁起が悪いような気がするのも確かだ。

「んで、どうすんだ？」

「精霊を呼び出そうかと思ってるんだ」

「……大丈夫なのか、それ？」

「感覚的にはいけそうな気がするし、威力の設定もしやすいから基本属性のものならギリッギリで上級魔法にまで抑えられる……はず」

神話魔法まではいかないと思う。

「もともとこの世界にいるものらしいしね」

「ふ～ん」

「とりあえず、和泉がどうにかするでしょ」

先ほどタコが現れたときにシートまで戻って何か取っているのを見た。

「あいつ、何か造ったのか？」

「おそらくね。ただ趣味の範疇で作ってるみたいだし、どれぐらいの威力かは分からないよ」

「撃てっ！」

男の呼び声に応じて幾人かが炎の球を飛ばしていく。

しかし、いくつも当たれども下級魔法だからかタコにダメージを与えるほどの威力はない。

アリー達も遅ればせながら彼らと同じ位置まで辿り着く。

「レイナさん、どうするのですか？」

「この中で火の上級魔法を使えるのは？」

「わたくしとクリスさんです」

「そのほかは中級までは使えるな？」

全員が頷く。

「では一斉に攻撃だ」

各々が詠唱を始める。

特に集中を要したのはアリーとクリス。

「「求めるは火帝、豪炎の破壊」」

いくつもの火球が生まれ、その中でもとりわけ大きい火球を筆頭にして、

「放て！」

合図と共に一斉に飛んでいく。

すると、だ。

レイナ達の放った魔法が目に入った巨大タコは、足の一本を大きく持ち上げると海面に叩きつけた。

大きな水の壁が火球を飲み込んでいく。

しかし中級魔法以上のそれは水の壁を突破し、威力は弱まりながらも巨大タコに着弾。

「――ッ！」

少しよろめく。

効いた、と思う一方で威力を削られたのも確かだ。

――なら、風か？　土か？　水か？

一度目の攻撃をある程度防がれて焦りが生まれる。

地ならば攻撃が届かず不可能。

風だと威力が弱い。

水ならば、と思うがこちらも破壊力には欠ける。
優斗のように基本属性から派生させた派生属性魔法を使えるのはここにいない。
どうする、とレイナは頭を回転させる。

「おい、生徒会長」

唐突な呼びかけにレイナが横を向く。

「今のをもう一度だ」

珍しく和泉が進言した。

「しかし……」

「水の壁なら俺が突破してやる」

断言した。
しかしレイナは判断しきれない。
チラリと修と優斗を見た。
優斗がこれぐらいなら、とアドバイスする。

「あれで防がなきゃいけないってことは、脅威に感じたってことだから。それでもダメージがあることだし和泉の提案も間違ってないよ」

和泉がそう言うのなら、突破できるのだろう。
どうやってかは分からないが出来るのはわかる。

「けれど決定権はレイナさんにある」

決めるのは彼女だ。
和泉を信じるのか、信じずに別の方法を試すのかはレイナしだい。

「……本当に突破できるんだな？」

確認するようにレイナが問いかけた。
和泉は軽い口調で答えた。

「できなかったらクリスが女装するって言ってるぞ」

「えっ！？　なんで自分が！？」

唐突に名前を呼ばれるわ、変なことを言っているわで慌てるクリス。

「うっせ。婚約者なんているリア充はそんなことして嫌われろ！」

いつものようなバカな光景に皆の表情が少し和らいだ。
……レイナも判断を決める。

「わかった。もう一度、やろう」

レイナが宣言すると、和泉はポケットから拳銃を取り出した。
タコが現れたときに念のために持ち出したものだ。

「拳銃か？」

修が珍しげに見る。
銃という存在を知らないこの世界の人たちは頭にはてなマークが浮かんでいる。

「いつでもいいぞ」

セーフティーを外し、右手を巨大タコにロックする。
レイナはよく分からないがとにかく、準備は大丈夫らしい。

「全員、さっきと同じだ」

レイナの合図でもう一度、同じ魔法を唱える。

「放て！」

火球がタコに飛び込んでいく。
和泉はまだ何もしない。
先ほどと同じようにタコが足を振り上げる。
その瞬間だった。
和泉が引き金を引いた。

――ドン――と。

連続して銃声が６発響く。
視認すらも出来ない銃弾は瞬く間に火球を追い抜く。
そして水柱があがった。

「開け」

ただ、その言葉を和泉が紡ぐ。
瞬間だった。
銃弾から魔方陣が浮かび上がり、岩石が６つ海上に現れた。
そして水の壁を質量を持った岩石が破砕していく。

その岩石で開いた空間を火球が抜けていった。

「いった……」

水の壁を抜ければそこにあるのは巨大タコの身体。
火球は全てが違わずに当たる。

「倒し……たのか？」

威力が軽減されてない魔法が当たったのだ。
さすがに倒れてもおかしくない。
しかし、最初に異変に気付いたのはフィオナだ。

「……膨らんでいませんか？」

全員がよくよく見てみる。
確かに身体が大きくなってきている。
……嫌な予感がした。

「爆発するんじゃ……」

ココが全員の思っていることを代弁する。

「どうするレイナ！？」

問いかける卓也。

「え、えっと……」

どうする。

と、数秒考える。

けれど今は迷う場面でも考え抜く場面でもない。

「まったく」

逆に優斗と修の判断は早かった。

レイナが迷ったと見るや、すぐに前へと躍り出る。

優斗は前に出ながら抱えているマリカをフィオナに預けた。

「この場面で迷ったら負けだぞ」

修が一言伝える。

時間がなさそうなのだから一つのベストを模索するより、幾つかのベターを瞬時に考えて実行したほうがいい。

「最悪、ミスったらフォロー頼むよ」

「しゃーないな」

二人はたったそれだけ言葉を交わして構える。

最初に優斗の左手にある指輪が反応を見せた。

――できる。

元ネタの魔法では追加で召喚されるのだが、この世界では魔法と精霊は分かれているものらしい。

ならば最初からこの詠唱で間違いはないはずだ。

感覚でわかる。

少し気になっているのは、自分の使う魔法はこの世界に比べて詠唱がかなり厨二病っぽいんじゃないかと常に思うぐらいだ。

とはいえ、イメージと繋がる詠唱がこれなのだから仕方がない。

あきらめて左手を前に突き出して紡ぐ。

指輪が少し輝いた。

『具現せよ精霊の結晶』

魔法とは少し違う、精霊の使役。

魔法というのが魔方陣によって魔力が属性付与させられた形というのなら、精霊というのは魔力を魔方陣に通すことによって精霊という元々そこにいる“モノタチ”に協力してもらうということ。

『舞い降りし疾風の神子よ』

薄く緑色をした女性が魔方陣より現れる。

とはいえ距離が離れており、かろうじて姿が確認できるか、といった具合だ。

他の人たちは魔法を使おうとしているため、優斗以外は気付けない。

指輪の輝きが増す。

『我らに仇なす意思を切り裂かん』

竜巻が突然海上に現れて巨大タコを切り刻む。

細切れになったが、それでも爆発する気配は衰えない。

「修」

「はいよ」

ぐん、と右手を振り上げる。
それだけで竜巻の中心に水柱が上がった。
細切れになったタコの破片が水に包まれる。
水の中で小規模な爆発がいくつも起こるが全て水が威力を吸収し、さらに風が壁となっているので傍目には特に大げさなことになっていない。
全ての爆発が終えると優斗と修は精霊の使役と魔法を解除。
水柱はゆっくりと海に戻っていき、竜巻もすぐに視界に映らないぐらいに霧散した。

「終了っと」

修がパンパン、と手を叩いて終わりを告げる。
唖然としているのはレイナ。
他のメンバーも未だに多少の驚きは隠せない。
卓也と和泉を除いて。
そしてマリカだけはただ一人、目の前の光景を喜んでいた。

「……また聞いたことのない詠唱が出てきましたね」

「シュウ様も気軽にあれほどの魔法を使うのやめてほしいですわね」

威力的には上級で収まっているが、やっていることはとんでもない。

「……ユウトもシュウも本当にすごいのだな」
レイナが今一度、確認するように口にした。
「正直に言うけどレイナがしっかりしてれば俺らは出張る必要なかったんだよ」
「す、すまない」
修の物言いに縮こまるレイナ。
「いや、さすがに最後の爆発は予想外だし」
「それもそうだったな」
タコが爆発って何だよ、とは確かに思った。
「けれど君たちは対応してみせた」
「いつでもフォローする準備はあったからな」
「……そうか」
それでも自分だったら対応できていなかっただろう。
火球が当たった時点で少し安心してしまった。
これがもっと凶暴な魔物だとしたら、護衛対象を窮地に追いやってしまったかもしれない。
勉強になった、と一つ頷く。
「いや、しかしこうでなくてはな。追いかけ甲斐があるというもの

だ」

ビシッと指を突き出して優斗と修を指し示す。

「お前ら、絶対に追いついてやるから覚悟しておけ！」

一方で指を指された二人は、頼もしい姿のレイナを見て肩をすくませて小さく笑った。

◇　◇

帰りの馬車。

今度は修と卓也が御者をやっていた。

他のメンバーは戦闘があったり遊んだりしていたので、馬車の中で大抵は眠っている。

その中で起きていた優斗とレイナは小声で会話する。

「イズミの拳銃？　というのもすごかった。銃弾というものに魔方陣が込められているのは属性付与の応用なんだろうな」

素晴らしいものだ、とレイナが感嘆する。

「だが、ユウトの詠唱は何なのだ？　聞いたことがない」

「ようは精霊召喚だからね。魔力も魔方陣も使うけど、厳密に言えば魔法じゃないよ」

「……本当に何でもありだなユウトは」

「これはマリカの親になった副産物。さすがに最初から使えたわけじゃないよ」

優斗は膝の上で眠っているマリカの髪の毛をやさしく梳く。
そのとき、カタンと馬車が軽く跳ねた。
その小さな揺れで右隣に座っていたフィオナの頭がポスン、と肩に乗っかる。
優斗の視界にフィオナを可愛らしい顔が直近で映る。

「――ッ！」

表情が少し固まった。
レイナはそんな優斗に笑う。

「何をそんなに緊張している。奥様だろう？」

「奥様だろうとなんだろうと美人の顔が近くにあったら緊張するんだよ」

優斗のそんな言い方にレイナはころころと笑う。
おかしかった。
巨大タコが現れても「食べれるか？」なんて会話をしていた男が、女の子の頭が肩に乗っただけで狼狽しているというのは。

「意外な弱点の発見だ」

踏み出す一歩

夜、トラスティ家にて。

「あなた、またユウトさんと飲んでたの？」

呆れたようにエリスが言った。

「少しだけだ」

「それにしたって1週間に4回も5回もやってれば限度があるわ」

「念願の夢だったんだからいいじゃないか」

そんなことを言っても毎度付き合わされる優斗の身を考えて欲しい。

「それにしたってユウトさんだって迷惑でしょう？」

「一緒に暮らしているのだから遠慮なんて必要ないだろう」

「……遠慮、ねぇ」

確かにそうは思うけれども。

「私はもう彼を息子のように思っているよ」

「でも、あなた。それは……」

マルスから聞いたこと。

優斗の身上。

うかつにそういうことを言ってはいけない気がしていた。

「それが彼のためになると思っている」

けれどマルスは引かない。

「フィオナの恩恵があろうとも彼は私を信用してくれた。ならば私は彼の信用に応えるためにもそうしている。とはいっても、彼にはまだ遠慮があるようだがな」

同じ家に暮らしているからこそ、余計に感じさせられた。

「互いに踏み込まなければ駄目なんだと、つくづく思わされているよ」

◇　◇

「金がない」

「……唐突にどうしたの？」

いきなりトラスティ家に来たかと思えば、卓也が変なことを言い始めた。

「金がないんだ」

「定期的に貰ってるじゃない」

異世界組のお金は王様のポケットマネー、つまりは税金によってまかなわれている。

「手持ちが全くないんだ」

「何に使ってるの？　修や和泉じゃあるまいし、卓也が金ないっていうのは珍しいね」

「……落とした」

卓也ががっくりと肩を落とした。

「卓也らしい」

優斗はちょうどリビングにいたエリスに訊いてみる。

「エリスさん、何か割のいいバイトとかあります？」

「……」

反応がなかった。

考えているのか、視線はこっちに向いているのだが焦点が合ってい

ない。

「エリスさん？」

「え？　な、何かしら？」

「あの、何か割のいいバイトってあります？　卓也が金を落としたらしくて」

今一度、優斗が尋ねるとエリスは少し考えて、

「ギルドでも行ってきたら？　タクヤさんでもできる仕事があるはずよ」

「へぇ、そうなんですか」

卓也に視線を向ける。

「どうする？　行ってみる？」

「ああ、行こうか」

善は急げと立ち上がる。

「フィオナ。悪いけど、マリカのことお願いね」

庭でマリカと日向ぼっこしていたフィオナに出かけること伝える。

「はい。行ってらっしゃいませ」

「ユウトさん、無茶なものは選んじゃ駄目よ」

エリスが釘を刺す。

優斗は苦笑した。

「わかってますって」

◇　◇

ギルドまでの道のり、卓也がこんなことを言ってきた。

「なんていうかお前ら、同じ家に住んでるのも板についてきたな」

「そう？」

「ああ。フィオナの両親もよくしてくれてるみたいだな」

「うん。マリカを育てるのにもすごく参考になってる」

よくフォローしてもらっている。

「あの二人はどういう存在なんだ？」

「……尊敬できる人たち。あれが親なんだと思える素晴らしい人た

ちだよ」

「お前にとっても？」

卓也が突っ込んだことを訊いてきた。

「……分からない。少なくともマルスさんとエリスさんが両親だったらよかったな、と思ったことはあるよ」

そうしたら、こんな自分にはなっていないだろうから。

「そっか」

これ以上は卓也も何も言わなかった。

少ししてギルドに辿り着く。

「ここかな？」

「みたいだ」

大きな看板に『ギルド』と書いてある。

中に入ってみる。

なんとなくイメージ的に汚れてる、粗暴といったものがあったのだが、どうしてなかなか綺麗なつくりをしていた。

二人は受付に向かう。

「ギルドに初めて来たのですが……」

「それではご案内させていただきます」

受付の女性に説明を受ける。
クエストランクやプレイヤーランク、などなど。
基本的にＲＰＧと変わらなかったのは二人にとって幸いだった。
特に尋ねることもなくライセンスを受け取る。
この世界のクエストランクはＳ、Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｇと８段階。
優斗たちが受けれるのはＥランクまでだ。

「討伐でもやるか？」

クエストが貼り付けてある掲示板を見る。

「薬草採取でいいよ。ほら、これなら前に行った森にあったから」

ランクはＦランク。熱冷ましの薬草の採取。
そこそこお金になって危険がないということで、これにすることにした。

「あったか？」

「あった。これで数も問題なし」

パパッと薬草を回収してすぐに帰る。

修や和泉のように余計なことをしない。

「修たちがいないと、特にトラブルなく帰ってくれたな」

「まあ、特に修がいないからね」

トラブルを呼ぶ災厄人物の修がいない以上、この二人で行動して問題が起こることは稀だった。

さっそうとギルドに戻って薬草を渡す。

「よし、換金も終了。優斗はこのあと帰るのか？」

「いや、ちょっと商店街まで足を伸ばすよ」

せっかくお金が入ったのだから、少し買い物をしていこうと思っている。

「そうか。それじゃ、今日はありがとうな」

「はいよ」

気軽に答えて優斗は足を商店街へと向ける。

「さて、と」

歩き出す。

「何を買おうかな」

◇　◇

「ただいま戻りました」

夕刻、買い物を終えた優斗はトラスティ家に帰ってきた。

「お帰りなさい、優斗さん」

「あ～い」

律儀にフィオナとマリカが迎えに来た。

「マリカはママの言うこと、ちゃんと聞けたかな？」

「あいっ！」

元気な返事のマリカ。

フィオナに本当？　といった視線を向けると頷かれた。

「それじゃ、良い子のマリカにパパからプレゼントだよ」

夕食も終わりフィオナがマリカを寝かしに行った。
しばらくリビングでのんびりしていると、エリスが話しかけてきた。

「さっきフィオナが何か持ってたけど、何を買ってきたの？」

「クレヨンと画用紙です。さすがに娘にプレゼントを一個も買ってないのはどうかと思ったから」

あの歳ぐらいの遊び道具としてはちょうどいいと思う。

「あら、ちゃんとまーちゃんのために頑張ってるのね」

「父親ですから」

当然のように優斗が言った。
エリスはそれを聞くと……少し真面目な表情を作る。

「それじゃ、今度は私たちと頑張ってみる気はない？」

エリスの発言に優斗は要領を得ない。
疑問の様相を呈した。

「ユウトさんはこの家で暮らし始めてどれくらいかしら？」

「3週間ですね。今日でちょうど」

とても早く思えるほどに時間が過ぎている。

「対外的には私とユウトさんはどういう関係かしら？」

「義理の親子、といったところでしょうか」

おそらくそれが一番適しているだろう。

「ならそろそろ、呼んでもらいたいものよ」

エリスが告げると優斗の表情が厳しいものになった。

何を言いたいのかは分かる。

分かるが。

「……マルスさんから話を聞いたりはしてないんですよね？」

「いいえ、聞いてるわよ」

「それでも、ですか？」

「その通りよ」

優斗の態度からあまり良い話題でないのは確かだが、それでも引くわけにはいかない。

「意地悪をしているつもりはないわ」

「わかってます」

そういう人でないことはよく分かっている。
一緒に住む前からエリスのことは知っているし、冗談と真面目な話の使い分けができることだって分かる。
だからこそ問う。

「なぜですか？」

「私はあなたを本当の息子のように思いたいからよ」

エリスが断言した瞬間、優斗の表情が崩れる。

「疲れるわよ、その生き方は」

今の優斗は気の休まる時間を持っていない。
常に何かしら緊張の糸を張らしている。

「……知ってます」

「この家でくらい、息を抜いたっていいじゃない。それが“家”というものよ」

「それができる生き方をしてきていないって知ってるでしょう？」

マルスから自分のことを聞いているのなら。

「なら、それができるよう努力なさい」

「……厳しいですね、エリスさんは」

「遠慮はしないって決めたもの」

昨日から考えていた。

マルスがああ言った以上、自分だってそうする。

そうしたいと思ったのだ。

「前にマルスが言ったかもしれないけれどね、あなたがいるおかげでフィオナは話すようになった。明るくなった」

まるで別人だ。

「マルスだってそうよ。あなたがいることで、帰ってお酒を飲むことを楽しみにするようになった。今だってマリカのおかげで孫バカ手前よ」

夢の一つが叶った。

たぶん、優斗と一緒に酒を飲み交わす時間が本当に幸福なのだろう。

「私だってそう。あなたと会って、マリカが来て、目まぐるしく変わる毎日が本当に楽しいの」

だから。

その気持ちを優斗にも知ってもらっていたいから。

「ユウト」

もう遠慮はしないと決めた。

「もう一歩だけ、私たちに歩み寄りなさい」

こっちから目一杯に踏み込んでも、最後の一線を越えるのは優斗自身の意思が必要なのだから。

けれども優斗はいつものように軽く頷いたりはしない。

いや、できない。

「……怖いんですよ」

気持ちを吐露する。

ごまかしたりはしない。

真剣に考えてくれているからこそ、自分も真面目に答える。

「きっとその一歩は、僕の保ってる限界ラインを超えるものです」

最後の最後。

エリスからしたらわずかばかりの人生かもしれないけれど、それでもそれが自分を“自分”として保たせている。

――気持ちはあるけど。

そうしたい、という気持ちはあるけれども。

有り余るほどに思っているけれど。

くしゃり、と顔が泣き笑いを浮かべた。

「それを超える勇気を僕は持ってないから」

涙は出ない。

バカみたいだけれど、涙なんて最後に流したのは最後がいつかは覚えていない。
覚えているのは、涙は流さないと決めた誓いだけ。

「……少し、勘違いしてたわ。あなたも弱い心を持っているのね」

いつでも平然としている。
にこやかに笑っている。
強く、優しく在る。
それが優斗に対するエリスの評価だった。
けれどもそれが今、崩れる。
“強い”のではなく、“強くいた”ということなのだろう。

「強くないといけなかっただけです。そうしないと駄目だったから」

「ここはあなたのいた世界じゃない」

「知ってます」

でも、変えられないんです。
そう付け加えて優斗は笑う。
けれどその笑顔は、優斗の心を知ったからこそ印象が変わる。
なんだか悲しくなってエリスは優斗に近づくと抱きしめた。

――この子はずっと、こうしてきたのね。

大人と立ち向かうために必要だった強さ。
強固な意志。
まともな世界で過ごしているなら、そんなものは必要ないというのに。

「……ちょっと苦しいです」

「我慢なさい」

「……はい」

ただ、言われるがままに優斗は抱きしめられる。
フィオナの時とは違う、温かさが身体に染み渡る。
なんとなく、これが“親”なのだと実感した。

「……親の温かさというのはこういうことを言うんですかね？」

ふと、思う。
これが親の温かさだと言うのならば。
自分はできているのだろうか。

「僕はマリカにこの温もりを与えられていますか？」

優斗の問いにエリスは泣きそうになる。

――どうして、この子は。

こんなことすら分からないのだろう。
そして恨みそうになる。
それを教えてこなかった優斗の両親に。

「もちろんよ」

エリスは頷いた。

すると優斗は安堵の表情を浮かべた。

「よかった」

自分は親らしいことができている、と。
そう思えた。

「不安だったの？」

「実感をしてこなかったわけですから」

理想はある。
そうする努力もする。
マイナスイメージも振り切ってはいる。
けれど、不安がないと言えば嘘になっていた。

「でも、だからこそ良い親で在りたいと思ってるんです。あんな両親から産まれたからこそ、そういう教育を受けてきたからこそ、僕は絶対にそうなりたくない。ただ、それだけなんです」

そう告げる優斗に。
エリスはもう限界だった。
どれほど辛い状況だったなんかなんて想像もつかない。
人の汚いところばかり見てきたのも本当なのだろう。

――それなのに。

優斗はこんなにも純粋な芯を持っている。
涙が溢れてきた。
少しでも擦れたりすれば、もっと楽だったろうに。

「泣かないでくださいよ」

「……バカよ、あなたは」

「……その通りです」

「本当にもう、どういう言葉を掛けていいか分からないわ」

「すみません」

情けないように頷く優斗。

「でも、それでも何か言えるとしたら」

本当の強さを持っている優斗に。

――こんなに頑張りやのこの子に。

伝える言葉があるとするならば。

エリスは抱きしめている優斗の肩を持って真正面から見つめた。

「ユウトのためにこれだけ泣ける私は、やっぱりユウトのことを大切に思ってるって実感したわ」

優しく微笑みを浮かべるエリス。

その表情は、ただ美しく。

大きな母性がにじみ出ていて。

それが一重に優斗に向けられていて。

「……ッ……！」

心を揺さぶった。

なぜか目頭が熱くなる。

顔を下に背ける。

「ユウト？」

「……どうして……ですかね」

決めたことだった。

「もう、泣かないって決めてたんです。泣いても何も変わらないから、泣くことに意味はないって……」

思っていたのに。

「……思ってた……のに……！」

込み上げてくるものが止まらない。

「バカね」

エリスはもう一度、優斗を抱きしめる。

「泣きたいなら泣けばいいのよ」

あやすように頭を撫でた。

「私は受け止めるわ。優斗の気持ちを」

絶対に。

「ありがとう……ございます」

優斗の瞳から零れる涙をエリスは受け止める。

“大人”としてではなく。

“母親”として。

マリカの父親に懸命になろうとしている優斗に見習って。

自分も頑張って優斗の母親になる。

これが彼に対する自分の一歩だ。

「エリスさんの踏み出した一歩は、すごいですね」

「そうかしら？」

「僕を泣かせるんですから、相当なものです」

優斗もエリスも泣きながら笑う。

「これで少しはユウトも勇気、出たかしら？」

今一度、エリスが尋ねた。

「……そうですね」

自分を泣かせるぐらいに踏み込んできたエリス。

そして自分のことを思って泣いてくれた彼女に。

応えたいと思う。
今ならきっと、言える気がした。

「言葉だけになってしまうかもしれないけど、それでもこの一言で一歩を踏み出そうと思います」

大きく深呼吸をして。
言おう。

「ありがとうございます、義母さん」

お茶会に誘われて

「ユウトとフィオナさんにお願いがあるんです」

珍しく単独でトラスティ家に来たクリスが唐突に切り出した。

「どうしたんですか？」

「ユウトには旅行に行ったとき、夏に婚約者と会うことは話しましたよね？」

「うん、聞いた」

「明後日、その婚約者と会うことになったのですが一緒に会っていただけないでしょうか」

クリスが珍しくしてきたお願い。

もちろん、突発な上に意味は分からない。

「……説明、よろしく」

「はい」

クリスは頷くと事の発端を話し始めた。

「初めて会ったときは両家の顔合わせということもあって互いの両親随伴でしたが、今回はどちらの両親もいません。そして早いうちに僕の知人を知っておきたい、という話になりましたので、今回はお茶会をするということになりました」

クリスも初めての経験なので、急に知人を交えてのお茶会など多少の違和感は感じるが、婚約者と会うというのはこういうことなのだろう、と割り切って頷いた。

「それで彼女が初対面でも安心してお茶会をできる人を選ぶとなるとユウトとフィオナさんが適任かと思った次第です」

「……まあ、確かに」

優斗も納得する。

「修と和泉は論外だし、アリーは王族だからどうしたって緊張する。残るは卓也とココだけど……卓也はテンパりそうだし、ココはそれに引きづられそう」

クリスも苦笑していることから、優斗と同じ意見なのだろう。

「というわけで、お二人にお願いしたいのです」

◇　◇

そしてお茶会の日。
クリスが迎えに来たので、優斗とフィオナも準備をして玄関に向かう。

「まーちゃん。ちゃんとお母様――バーバの言うことを聞いてくださいね」

「あい」

「夜には帰れますので、それまで良い子でいてくださいね」

「あい」

「それから――」

フィオナがあれやこれやとマリカに注意するべきことを教える。
初めてマリカを伴わずに出かけるのだから心配するのは分かるが。

「……フィオナ。心配しすぎ。エリスさんがいるんだから」

瞬間だった。
マリカを抱いているエリスからデコピンが優斗に飛ぶ。

「いつっ！」

「ユウト。今、なんて言った？」

凍えるような笑みを浮かべてエリスが迫る。
エリスが何に対して怒っているのかは分かるので、優斗も至極冗談めいて言葉を返した。

「なんでしょうか、義母さん」

ただ、それだけ言えば。
エリスの表情は温かなものへと変化する。

「それでいいのよ」

「お相手は子爵のご令嬢というわけだけど……」

一応、クリスに再度確認を取る優斗。

「清純無垢な女性です。間違えても事前準備なしにイズミと関わらせたくないですね」

和泉の扱いが可哀想だとも思うが、自業自得なので優斗もフィオナも特にツッコミは入れない。

「性格はどんな感じなのですか？」

「ん～……タイプとしてはアリーさんに近いと思います。アリーさんを幼くして、慌てる感じが追加された性格ですね」

少なくとも嘘はつけないタイプだろう。

「僕たちはどういう設定で会えばいいのかな？」

「そういえばそうですね。名乗るときに困ります」

友人同士か婚約者か夫婦か。

「……結婚は決定的ではありますが決定ではありませんし、万が一に決裂したとしても、それまでに彼女がマリカちゃんと会う機会がないとは言い切れません。彼女はマリカちゃんが龍神の子供ということも知らないでしょうし、何より指輪を見られたら言い逃れできませんし……」

左手の薬指に同じ指輪をしているのは、さすがに何かあると勘繰られる。

「夫婦ということでお願いしてもよろしいでしょうか？」

「了解」

「わかりました」

フィオナの家からそこまで遠い距離ではなく、軽く打ち合わせをしているうちにクリスの住んでいる家まで辿り着く。
最初に目にする庭園。そこにあるテーブルに一人の女性がしきりに落ち着かなそうに待っていた。

「クリス、あのガッチガチに緊張してるのがそうだよね？」

「はい。自分の婚約者のクレアです」

待ち合わせ時間までは３０分以上もあるから、クリスとしては3人でゆっくり婚約者を待とうとしていたのだが、予想が外れた。

――こんなに早く来ているとは。

少々驚きながら、クリスは近寄っていく。

「クレア、久しぶりですね」

隣まで近づいてクリスが話しかけると、勢いよく婚約者――クレアは立ち上がった。

「ク、ククク、クリス様、お久しゅうございます！」

緊張のあまり、口が上手く回っていない。
クリスも優斗もフィオナも苦笑した。

「あ、あの、あの、こ、この度はわたくし達のためにお、お

越しいただき、ありがとうございます！」

９０度にもなりそうな勢いで頭を下げる。

なんというか、優斗が今まで関わってきた貴族とは毛並みが違っていた。

「クレア。今日は緊張しないで済む友人に来ていただきましたから、落ち着いてください」

「ひゃ、ひゃい！」

しかし、これではさすがに緊張しすぎだ。

優斗はフィオナを伴って近づくと警戒心をできるだけ抱かせないようにさわやかに笑う。

「クレアさん。まずは深呼吸をしてみましょう」

「……へ？」

優斗の第一声にぽかんとするクレア。

「クリスもフィオナも一緒に」

意図を察したクリスとフィオナは軽く頷く。

「息を吸って」

優斗の合図でフィオナとクリスがゆっくりと深呼吸をし始めた。

クレアも慌てて同じようにする。

「吐く」

ゆっくりと3人が息を吐く。
もう1度、同じ事を優斗はさせるとパン、と手を鳴らした。

「それでは自己紹介をさせていただきますね。ユウト＝フィーア＝ミヤガワと申します」

「妻のフィオナです。本日はお招きいただき、まことにありがとうございます」

恭しく二人が頭を下げた。

「二人とも学院でのクラスメートなんです」

クリスはクレアの肩に手を置く。

「ユウト、フィオナさん。こちらが自分の婚約者のクレアです」

クリスが紹介するとクレアは先ほどよりもゆったりとした形で頭を下げた。

「よ、よろしくお願いします」

4人してテーブルを囲む。

「クレア、まず最初に言っておくことがあります」

とりあえずこれだけは言っておかなければならないと思う。

「自分達の付き合いは貴族階級の垣根を越えたところにあります。階級が下でも蔑んだりしませんし、階級など関係なく愛称で呼びますし、呼び捨てで呼ばれたりします。一般的にはおかしいかもしれませんがそこは了承してください」

「わかりました」

クリスの説明にクレアが頷くと優斗は早速切り出した。

「クリス、今日のところ口調はどうしたらいいですかね？　クレアさんが緊張するならこのままで通しますけど」

なにぶん、初対面なのでどこまでしていいのかが分からない。

「いえ、まずは普段の口調に戻ってください。ユウトの口調に耐えられなかったら……まずいです」

問題児はもっと他にいるのだから。

「わかったよ」

言われた通り、パッと口調を変える優斗。

「クレアさん。僕はこれからこういう口調で話すけど大丈夫？」

「は、はい」

いきなり言葉使いが変わったことにクレアは驚きはするものの、嫌悪感は抱いていない様子なのでひとまず安心するクリス。

「ただ、どういうことか、その……」

「クリスが仲良くしてる友達にはもっと言葉が乱雑なのがいるんだよ。そいつらは誰が相手でも口調を変えないから、そういうのが駄目な人だと厳しいなって」

下賤だと蔑まれでもしたら、クリスの嫁となるにしてはかなり致命的になる。

「だ、大丈夫です！　頑張ります！」

どういう意味で頑張るのかは分からないが、少なくともそういう人たちとも付き合っていく気があるのは良いことだ、と優斗は思う。

「とりあえずこの二人は初級レベルです。今後、こういうことが増えてくるとレベルが上がっていきますので心の準備はしておいてくださいね」

「……ち、ちなみに、上級レベルだと、どういう方が？」

「王族が出てきます」

「……お、お、王族って……ど、どうしたら！」

ワンテンポ遅れてまたまた慌てるクレア。

「今日はアリーさんを連れてこなくてよかったですね」

もし連れて来たりでもしたら、彼女は緊張のあまり失神でもしてしまいそうだ。
クリスも苦笑いしながら頷いた。

「本当です」

◇　◇

当たり触りのない会話はしていくうちに、少しずつクレアの緊張もほぐれてきたようで、こんなことをクリスに訊いてきた。

「クリス様は学院ではどういう生活をされているのですか？」

「自分ですか？　自分は普通に……」

と、ここで気付く。

「普通に……？」

ここ最近の自分の学院生活に普通なんてところはあっただろうか？

「普通？」

思いの外、悩むことになった。

「クリス様？　どうされました？」

「いえ、ここ数ヶ月で“普通”という言葉がずいぶんと遠のいたと思いまして」

特に和泉のせいで。

「事情があってクリスが和泉って友達の家庭教師をすることになったんだけど、それが大変だったってことだよ」

「連れ回され、振り回され、大変な日常です」

「そ、そんな方とご友人を？」

心配そうにクリスを見るクレア。

「なんだかんだ言っても、楽しいですから」

そうだ。

一緒にバカ騒ぎに巻き込まれるのは楽しい。

これに関しては真実だ。

時折、後処理は面倒だが。

続いてクレアが気になっていたのはクリスが連れてきた友人達。

「……それで……その、ユウト様とフィオナ様はご夫婦なのだと伺いましたが……」

「何か気になることがありますか？　何でも仰ってください」

同じ女性ということもあり、親身になってフィオナが話を聞く。

「結婚生活とは……どういうもの……でしょうか？」

両親は年齢が離れすぎているし、同年代で夫婦生活を送るというのはどうなのか。

これはこれから結婚するクレアにとって重要なことだった。

「夫は優しいですし、一緒にいることは本当に幸せです。ただ2学期に入れば学院生活と育児を両立させなければなりませんし、大変さはありますね」

「お、お子様がいらっしゃるのですか！？」

驚いた。

学院に通っている方なのにすでに子供がいるとは。

「1歳と少しになる娘がいるよ」

「そういう場合、家政婦などにお任せするのですか？」

「いや、うちはフィオナの母親がフォローしてくれるから。やっぱり親族に育ててもらうのが娘のためにもなると思って」

さらに龍神という特殊性も相まっているため、迂闊に任せられないのが現状だ。

「ユウト様が貴族ということは、フィオナ様のご実家も貴族なのですか？」

続くクレアの問いかけに今度はクリスが答える。

「彼女の実家はトラスティ家。公爵ですよ。ユウトは子爵の家系だから、爵位としてはクレアと同じですね」

「それでよく結婚が許されましたね」

少なくとも侯爵ぐらいでないと公爵の結婚は許されないと思っていた。

「フィオナさんのご両親は寛大な方なんです。フィオナさんが気に入ったのなら貴族だろうと平民だろうと平然と結婚させますよ」

クリスの説明を聞きながら……クレアはある一つのことを思い出す。

「あっ！　それで思い出しました。クリス様。わ、わたくし達の結婚のことなのですが……」

「何かありましたか？」

こうしているから破棄ということはなさそうだが。

何かしら問題が起こったのだろうか。

「早まりそうなのです」

「……どういうことですか？」

クリスが学院を卒業するまでは待つ、という話だったはずだが。

「わたくしも詳しくは分かりませんが、遅くとも年末……早ければ1ヶ月後にでも、と」

「早くなりすぎじゃない？」

あまりの早まりに優斗も疑問を抱いた。

「わたくしもそう思うのですが……」

「クレアさんは本当に何か聞いてないの？」

「いえ、ただ、クリス様の周りが……ということは聞きましたが」

両親が話しているところをうっかり聞いただけなので、詳しくは知らない。

「周り？」

「はい」

「クリスさんの周囲に何か変化があったのでしょうか？」

フィオナも一緒になって考え出す。

クリスもクレアも意図が分からずに困っている。

優斗も考えて……ふと、気付く。

「……周囲に変化と言ったら」

一つ、思いついた。

「クリス。初めてクレアさんと会ったのはいつ？」
「ユウト達と会うほんの少し前ですよ」
「……なら、そういうことかな」
これなら筋道が通っている気がする。
「優斗さん、何か分かったのですか？」
「多分だけどね」
優斗が全員に説明するためにぐるりを見回せば、フィオナだけではなくクリスもクレアも興味津々に優斗を見ている。
優斗は自分の予想を話し始める。
「クリスが誰かに取られることを危惧してるんだよ」
「どういうことでしょうか？」
「僕らに会うまでクリスに友達はいなかった。ようは一人ぼっちだったんだけど……」
「確認されると胸に刺さるものがありますね」
ただ、事実なのだから仕方がない。
「僕らと出会ってからクリスの周りには人が増えた。それは僕とか和泉だけじゃなくてアリー達、女の子も一緒にいるようになった」

ここが結婚の話が早まった焦点だと見る。

「アリー、ココ、フィオナに最近だとレイナさんか。王族に公爵に近衛騎士団団長の娘っていうのは、クリスの相手としては上等だと思わない？」

このうちの誰と結婚しても利点は多々あるはずだ。

「わ、私は優斗さんの妻です！」

フィオナが慌てて宣言した。

あくまで夫婦という設定なのだけれど、ほとんど反射的に発したフィオナの言葉に優斗は顔を赤くする。

けれど優斗は無理やりに話を進めた。

「あー、フィオナ。嬉しいけどちょっと論点がずれてる。重要なのはクリスの周囲に上等で上級な女の子がいるってこと」

そういう事実があるのが問題。

「クリスが王子系イケメンってことを考えると、この中の誰かと恋仲になってしまう可能性はある」

「そ、そうなのですか！？」

今度はクレアが泣きそうになりながらクリスに問いかける。

「ありません！　ありませんから落ち着いてください、クレア」

クリスはクレアを宥めながら優斗に続きを促す。

「この結婚がどういう利益を生むのか、どういう状況下で行われるかは知らないけれど、その3人のうちの誰かと付き合ってしまったらこの縁談は無くなってしまうかもしれない。特にアリーだった場合は問答無用で破棄という形になるだろうね」

王族なのだから。

「というわけで、誰かと恋仲になってしまう前に結婚させてしまおう、というのが今回の本筋じゃないのかな」

「……そうですね。ユウトが言っていることで合ってそうな気がします」

「それで、どうするの？」

「どうする、とは？」

「僕が言ったのはどうでもいいとして、クリスはどうしたいの？」

自分が言ったことはあくまで予想だ。

正直、どうでもいい推理でしかない。

「早められたのが嫌なら、今まで通り学院を卒業してから結婚……ってレールに戻ることもできると思うけど？」

“チーム”のメンバーの力を使えば容易い。

「ユウトは自分が頷いたら、絶対にやり遂げますよね」

「クリスが本当に嫌ならね」

まるで軽口を叩くように告げた優斗に、心で感謝を述べながらクリスはクレアを真正面に見据えた。

「クレア」

名前を呼ばれてビクリ、とクレアの身体が跳ねる。

「貴女は今回の結婚、どう思っていますか？」

「わ、わたくしは、両親の言うままに……」

「自分は貴女の気持ちを聞いているのです」

テンプレートのような台詞をクリスは叩き切る。

「会って2回目です。そのような男と最短で1ヶ月で結婚など嫌ではありませんか？」

「嫌ではありません！！」

いきなりの大声にクリスだけでなく優斗とフィオナも驚いた表情を浮かべた。

「こ、これでもわたくし、クリス様と婚約することになってから、結婚生活を送るとしたらどんなことをしてあげよう。そればかり考えておりました！」

唖然としている3人に尚もクレアは言葉を続ける。

「確かにわたくしとクリス様の婚姻は両家の思惑が重なってのことですが、それでもわたくしは……」

この人なら、と思えたからこそ。

「愛ある生活を望んでおります」

しっかりと断言した告白に優斗とフィオナから拍手が起こる。

「なんというか……照れくさいですね」

珍しくクリスの顔が赤みを増した。

うん、と一つ頷く。

「ユウト。心は決まりました」

貴族同士の結婚というものは平民と比べておいそれと離婚などできない。

3、4割ほどは仮面夫婦になってしまうものだが、どうしてか彼女とは良い結婚生活を送れると思えてしまった。

それに女性にここまで言われて退くのは男らしくない。

「年内に結婚します」

「そっか」

「ただ、学院との兼ね合いやクレアのこともっとよく知りたいですから、年末までは延ばすつもりです」

「わかったよ」

優斗は手を上げた。
クリスはそれに力強くハイタッチする。

「頑張れ」

「ええ」

ただ、それだけの言葉と動作で。
二人は可笑しそうに笑った。

パーティー初参加ということは……

夏休みも終盤に差し掛かる。
優斗とフィオナ、そして卓也は目の前の光景に少し頭を抱えていた。

「貴族のパーティーってもうちょっとセレブな感じがしたんだけどな」

彼らがいるのは王城の側にあるパーティー会場。
本日は小さいながらもパーティーが行われたので、そこで異世界組を慣れさせるためにも参加することになった。
着慣れない燕尾服などを纏わせて全員が会場にいる。
アリーは先ほどから接待を続け、ココとクリスは挨拶回りに行っている。
フィオナはこの場では優斗の婚約者としてやってきているし、何よりあれだこれだと訊かれ始めたらボロが出そうなので、優斗の隣にいる。
修と和泉といえば、さっきから必死で料理を食べていた。

「それはあいつらのせいだって。あれがパーティーの品位を下げてる」

貴族デビューなので知っている人などほとんど皆無。
注目されることもほとんどない。
なのでお目付け役のアリーとクリスがいなくなってこれ幸いと、料

理を食べ続けているわけだ。

「そろそろ止めにいきます？」

「そうだね。周りに注目される前に……ん？」

「あっ、レイナさんですね」

見慣れた先輩がヅカヅカと二人の元まで歩いていく。
そして勢いよく拳を修と和泉の頭に見舞った。

「二人の頭を殴って黙らせた。さすがだ」

「彼女がいると僕らの負担が減って助かる」

本当に。

「そういえば今日、マリカはどうしたの？」

「お母様に預けてきました」

◇　◇

「またお母様にまーちゃんを預けることになってしまいましたね」

「いいのよ。2学期も近いのだからまーちゃんだって貴方たちがいないことに慣れないといけないわ」

「あい」

こくこくとマリカが頷いた。

「ユウトは会場で何か困ったことがあったらフィオナでもマルスでもいいから訊きなさい」

「分かりました」

優斗とフィオナ、マルスで会場に向かって歩いていく。

「緊張することはない。ユウト君ならば問題ないはずだ」

「そう言っていただけるのはありがたいんですが、心配事はちょっと別にありまして」

「……ですね」

さすがにアリーとクリスとココは親も来ていないから、挨拶に大変だろうと思う。

ということはつまり、バカ1号と2号の手綱が無いわけで。

優斗は自分のことだけで手一杯だろうし、フィオナも基本的には優斗のフォロー役だ。

ついでにフィオナがどうしてフォロー役ができるのかと言えば、今まで愛想よく過ごしてきていないので、あまり声を掛けてくる人がいない。

今回は逆にそれが優斗には助かった。
でも、目下の問題はあの二人だ。

「どうする？」

「どうしましょう」

◇　◇

「何をやっているか、お前達は！」

アリーとクリスに様子を見てくれ、と言われれば案の定だ。
説教してもらうためにもアリーとクリスの元へ引きずっていく。

「腹が減った」

「だからしゃーない」

「しょうがなくない！」

二人を引きずりながらレイナは思った。

――ユウトたちはこいつらの面倒をいつも見ていたのか。

このマイペース二人の相手をするのには根気が必要だろう。
少し同情しそうになる。

「お前達は今日、パーティーが何たるかを勉強しに来たのだろう？」

「飽きた」

「飽きるな！」

怒鳴りながら前にいる男性とすれ違う。

「ん？」

その時だ。
ピクリ、と修が反応した。

「どうした、修？」

「なんか……変な感じが……」

ほんの僅か、毛筋ほどの感覚がピリッと来たような気がした。
引きずられながら周りを見てみるが、特に変わった様子はなく修のアンテナに引っかからない。

「気のせいか？」

違和感とも呼べないほどの代物だ。
慣れない場所で少し神経質にでもなってしまったのだろうか。
少し考えてバカらしいと一笑する。

――神経質とか俺のキャラじゃないし。

「何かあったのか？」

「いや、気のせい」

「ゆっくり会話する暇あったら自分で歩け、馬鹿者！」

レイナが掴んでいた襟首を離す。

ベシャ、と地面に落ちる。

「痛いぞ、会長」

「そうだそうだ」

「ほう、お前らのためを思って説教はクリス達に任せようと思っていたが、どうやらお前らは私の説教が所望のようだな」

「いえ、俺はアリーの説教がいいです」

「俺もクリスの説教のほうがいい」

「……説教されないようにする、と答えないのが本当にバカというか……」

レイナは眉間を揉み解す。

なんとなく保母さんのような気持ちになってきた。

「とりあえず、シュウもイズミも誰にも挨拶をしないのは問題だろう。試しにアリーにでもしてみろ。今ならさほど時間を取らずにで

きるだろう」

たくさんの貴族と話していたが少し落ち着いたのだろうか。
アリーのそばにはフィオナの父親、マルスがいて彼と穏やかに談笑している。
レイナ達がそばに行くとアリーが気付く。

「よっ、アリーにフィオナのおじさん」

「シュウ様、レイナさん、イズミさん。パーティは楽しんでいますか？」

「そのことなのですがシュウとイズミがパーティではあるまじき行為をしていたので、アリシア様に説教していただこうかと」

「レイナさん。今はわたくし達に聞き耳を立てている方もいませんし、いつものようにアリーでいいですわ」

「いえ、騎士を目指したるもの、公私の分別は弁えようかと」

「そうですか。では仕方ありませんね」

無理に強制するものでもない。

「それはそうと、シュウ様――」

何をしてらっしゃるんですか、と問いかけようとした時だった。

テーブル中央のところでガシャン、とお皿が割れる音がした。

同時に起こった悲鳴。

周囲がざわめいた。

「何が……」

修は状況を把握しようとして、

「……っ！」

咄嗟に振り向いた。

真後ろに大柄な男が立っている。

そして振り上げた手には鉈のようなものが握られていた。

「イズミ！　レイナ！　アリーを守れッ！！」

◇　◇

「フィオナ、卓也。何か食べる？」

「そうですね。少しお腹は空きました」

「オレも何か摘むものがほしい」

「取ってくるよ」

優斗は壁際から中央のテーブルへと向かう。

「頼む」

「3人分になりますし、私も一緒に行きますね」

フィオナも優斗のあとを付いて行く。

「シュウさんとイズミさんはどこに連れて行かれるんでしょうね？」

「あの様子だとアリー、クリス、レイナさんの誰かが説教するんじゃない？」

「かもしれません」

くすくすと二人で笑いあう。

「とりあえず、肉とかを手に入れれば大丈夫かな」

「そうですね。あとはタクヤさん野菜好きですから野菜も多めに」

中央のテーブルまで辿り着く。
自分で取り分けて料理を食べる貴族はそこまで多くない。
料理を持ったウェイターが動き回っているし、従士を使って食べ物を取らせるものもいる。
とはいえ珍しい光景とも言えないのがこの国の特徴でもあった。

「さて、取りますか」

「そうですね」

お皿を持って料理を取ろうとした瞬間だった。

「――ッ！」

ゾクリ、とした。
一瞬にして膨れ上がった背後からの殺気。
反射的に隣にいたフィオナを突き飛ばす。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴をあげるフィオナ。
手で持っていたお皿が空中に投げ出される。
けれど彼女が声を出したのと同時。

「……っ……！」

何かが優斗に刺さった。

「ははっ、始まった始まった」

慌てふためく周囲をよそにラッセルは笑みを浮かべる。
悲鳴が起きたということは修か優斗、そしてフィオナの3人のうちの誰かはすでに死んでいるだろう。
いい気味だ、とラッセルはほくそえむ。
修は自分に対して敬意を払いはしないし、優斗は大舞台で不正を働いた。
フィオナもフィオナで将来の夫に対する態度ではない。
優斗に至っては前回、わざわざ罰を与えようとしてやったのに運良く助かったらしい。
ならばここで前回の分も兼ねて灸を据えなければならない。
今回のパーティーに3人が共に参加するのが分かってから、ラッセルはとあるギルドチームに依頼を頼んだ。
凄腕チームに頼んだので金は嵩んだが問題は無い。
しっかりと仕事をしてくれれば。

◇　◇

右肩に痛みが走る。
異物が肉を裂いて突き進んでいくが、その感触が唐突に無くなった。
――もう一回かッ！
振り向きながら右腕も振り上げる。
ナイフが自分を目掛けて突き進んできた。
肩が痛むがどうでもいい。
迫ってくる刃をタイミング合わせて握り締めた。
ナイフなどの刃物は刃を引くことによって対象物を切る。
つまりナイフの刃を全力で握ったところでナイフ本来の切れ味を発揮することはない。
「……お前、やるなぁ」
優斗と相対する男。ひょろ長い男の視線が優斗を貫く。
男がナイフを引き抜こうとする。
優斗は刃から手を離した。
いくら切れにくいとは言っても、切れないわけじゃない。
手のひらは横一文字に傷ができて血が溢れていた。
「優斗さん！」
フィオナが優斗に駆け寄る。
「す、すぐに治します！」
「いや、いい。そんな猶予を与えてくれるわけもない」
それに男が使っているナイフ。

何か違和感がある。

「おい、お譲ちゃん。このナイフに切られたら普通の回復魔法じゃ駄目なんだよ。呪いが掛かってるからな」

意気揚々にひょろ長い男は笑う。
周りは事態に気がついて大騒ぎで出入り口に向かっていた。
特に気にする様子なくひょろ長い男は優斗とフィオナに相対する。

「つっても、魔法で治せないってだけで自然治癒はしちまうんだけど」

「おしゃべりだね」

「そりゃ暗殺失敗しちまったからな。予想外だったぜ、まさかあのタイミングに防がれるなんてな」

「それで？　狙いは何人？」

「言うと思ってるか？」

「暗殺が失敗した以上、殺害対象以外はいなくなったほうが都合がいいだろう？」

挑発するように優斗が鼻で笑った。

「そりゃそうだが、人質っていうのも必要でね」

「他人なら切り捨てる」

「なら友人でも人質にさせてもらおうか」

◇　◇

振り降りてくる銃を1歩横に踏み出してかわす。
2撃目は……来なかった。

「よくぞかわした」

「狙いは俺か？」

大男が一つ、頷いた。

「シュウ・ウチダ、ユウト・ミヤガワ、フィオナ・アイン・トラスティ。以上の3名だ」

「……殺し屋か？」

この世界なら、こういう存在がいても問題ない気がする。

「暗殺者だ」

「いや、そんだけ大暴れしといて暗殺者ってなんだよ」

暗殺っていうのはもっと緻密に密やかに行われるものではないのか？
心の中で修がツッコミを入れる。
現に周囲の貴族達は慌てて外へと逃げ始めている。

「それでは他の人物は出て行っても構わないでしょう？」

気付けば修の隣まで来ていたアリーが大男に堂々たる態度で告げた。

「……そうだな」

大男が頷くが、そこでひょろ長い男が優斗たちと一緒に合流した。

「ちょっと待てって。それじゃ逃げられちまうかもしれねぇだろ」

混乱に乗じて逃げられてしまっては元も子もない。

「対象以外も何人か残せって」

「……ということだ。ここにいる人間は残ってもらう」

◇　◇

貴族達が出て行くのを確認したあと、内側から鍵を閉められる。
いざとなれば壁でも壊して逃げることも出来るだろうが、生憎と建

物は易々と魔法では壊れないように特殊な魔方陣で守られているので、普通の魔法であれば少々時間を喰ってしまう。
それ故の施錠だ。

「今回の件、お前らに以来したのはラッセルだよな？」

なんとなく暗殺対象の3人で依頼したのが誰だか分かる。
闘技大会の時もそうだったが、あまりに明確すぎて逆に疑いたくなるが。
とはいっても、こんな予想をしなくても今回ははっきりとしていた。

「そんなこと訊かれて頷くバカがいるかっての」

「つっても、本人がそこにいるんじゃしょうがないだろ」

修たちが視線を会場の隅にやる。
格好つけるように腕を組んで壁に寄りかかっているラッセルがいた。

「やあ、諸君」

優斗たちに向かって歩いていくる。

「この私が君たちを断罪しに来てやったよ」

聞いた瞬間、優斗たち全員の頭にハテナマークが灯る。
意味が分からないといった表情の彼らにラッセルは意気揚々と説明を始めた。

「平民の分際で貴族の私に対する横柄な態度。闘技大会という場で不正を働くという不埒な行為。そして私の妻になるというのにそれ

を理解していない行動。その全てが万死に値する」

だが、説明すらも説明の体をなしていない。

「……意味、わかる？」

「いや、わかんね」

「私がいつ彼の妻になるんです？　可能性がありません」

「父として彼に娘を嫁がせるなど絶対にありえない。というよりユウト君の婚約者又は夫婦ということを知らないのか？」

「バカも休み休み言ってほしいですわね」

「というか、あいつが今、一番立場が低いって知らないんじゃ？」

「かわいそうです」

「いや、俺は人間として無様だと思う」

「……ラッセルがあれほどだとは私も知らなかった」

何か薬でも使ってるんじゃないかと思うぐらいに訳の分からない話に全員でため息を吐く。

「何をこそこそ話しているんだい？」

「いや、どうしたらそういった結論に辿り着くのか分からなくてな」

代表してレイナがラッセルに対応した。

「まず妻にすると言っているフィオナをどうして殺す？」

「別に本当に殺すわけじゃない。私はこういう物を持っているのでね」

懐から水色の透明なガラスに入った小瓶を見せる。

「万能薬？」

「そうだ。死んだ者すらも蘇らせる霊薬。将来の妻にはこれぐらいの教育が必要だと感じたのでね。死ぬほど痛い目に会わせようと思ったのだよ」

ラッセルの説明をレイナはもとより、全員が理解するのをやめる。

もう、本当に可哀想な人なんだと割り切るしかない。

「……馬鹿なんだな、お前は」

心の底からレイナが諦めた表情を浮かべた。

「何だと！？」

「お前、子爵だろう？」

「そうだ」

それを誇るように胸を張るラッセル。

だが、

「ここにいるのは子爵に伯爵、そして公爵に王族だぞ。少なくとも子爵のお前は同率で立場が一番悪い」

「なっ！？」

レイナが言ったことに驚くラッセル。

「ど、どうしてだ！？　貴様らは田舎者だと言っていたじゃないか！！」

修たちを指差すラッセル。
まあ、確かにそう言ったのだが。

「この際、幾つか勘違いしてるようだから教えてあげる」

優斗は嘲るように笑った。
もう面倒だからネタ晴らししてもいいだろう。
ラッセルにしても暗殺者2人にしても。
まともに外に出してやるつもりなど毛頭ない。

「お前らはこの国の『勇者』って知ってる？」

「何ヶ月か前に亡くなったじいさんだろ？」

ひょろ長い男が答える。

「それじゃ、新しい勇者は？」

「条約もある。安全だからこそ勇者を未だに呼んでいないという話

がある」

今度は大男が答えた。

優斗はそれを鼻で笑う。

「条約？　安全？　バカだろう、お前ら。いつ、どんなことがあるかもしれないのに『勇者の刻印』を持っているものを召喚しないわけがない」

優斗はちらりと、視線を向ける。

「修」

名前を呼ばれて修は当然のように『勇者の刻印』を浮かび上がらせた。

「こいつが今回、異世界から呼ばれた勇者だ」

ほとんど驚愕と言っていいほどの表情を浮かべた3人に優斗はさらに告げる。

「だから僕らが閉じ込められたんじゃなくてお前らが閉じ込められた。さらに言えば、ここにいるメンバーで異世界出身が修だけだと思うなよ」

ラッセルと暗殺者たちを心理的にどんどん追い詰める。

そして、優斗が何よりも気に食わないのは、

「それにお前はフィオナを将来の妻だとか言ってるけど――」

ほざくな。

「現時点でフィオナは僕の妻だ。そんな彼女がどうやってお前の妻になるんだよ」

圧倒的な挑発。

闘技大会の帰り道、2回目はないと誓ったからこそ。

肩から血が出ていようが、手のひらから血が出ていようが関係ない。

完膚なきまでに潰す。

「そ、そんなもの全て嘘だ！！」

「いいえ、事実です。なんなら王家で保管している書類でも見せてあげますわ」

涼しい顔でアリーが答えた。

「ユウト君とすでに夫婦だということを知らなかったとはいえ、フィオナの親である私の前でそこまでの醜態を晒して、どうしてフィオナを妻にできると思ったのかが知りたいものだ」

「たぶんですけど、単純な彼のことですから死の淵にいたフィオナを助けた、とか暗殺者に狙われていた彼女を救った……とか、くだらないストーリーで妻にできると思ったんじゃないでしょうか」

「ふん、くだらんな」

さらにマルスがラッセルを圧迫させる。

堪らずに視線を背けて暗殺者2人を縋るように見た。

「……勇者がいたとしても、だ。２人がかりで勝負を挑めば勝てる可能性も――」

「ああ、悪いけどここいいる奴ら全員が上級魔法使えるし、簡単には人質にならない。優斗にいたっては俺と同じレベルだ。勇者の俺に一人で勝てないとしたら、どうしたって優斗にも勝てねぇよ。勇者が二人いると考えとけ」

大男の話に途中で割り込む修。

「で、でもさっき怪我させたぜ？」

「あいつはエンジンかかるの遅いからな。尻上がりで調子上げる奴なんだよ。ちなみに俺も優斗も魔物は事実換算でＡランクぐらいだったら余裕で倒せるから。前にあいつが仕掛けたカルマって魔物を瞬殺したのも優斗だぞ」

だから優斗を殺したいと思うなら。

「あいつ殺したいんだったら最初の一撃で仕留めとけ。それが出来なかったお前たちの負けだ」

こうして彼らが勝てない理由を数々列挙してはみたものの。

「けどここまで言ってもあんたらは逃げないんだろ？」

「仕事だ」

大男が憮然と答えた。

「まあ、どっちにしたって許さないし逃がさない。俺らに手を出したんだ。素直に帰れると思うなよ」

修が一歩前へと出る。

「フィオナと僕らが対象らしいから、他の人たちはフィオナを守って。僕と修はこいつらを片付けるから」

「で、でも優斗さんは怪我が……」

肩から血が滴っている。
掌からもだ。

「だいじょうぶ。すぐに終わらせるから」

優斗はそう言って安心させるように笑う。

「貴様らが武器を持っていないというのは僥倖なのだろうな」

「武器？」

ああ、そういえばと修も優斗も思う。
大男が言った意味とは別の意味に捉えて。

「確かに神話魔法をぶっ放して会場を大げさに壊すのは気が引けるな」

「そうだね」

神話魔法とか物騒な単語が出てきて、ひょろ長い男から冷や汗が出

る。

「こ、この差は大きいんじゃね？」

とはいえ、威力を温存して戦ってくれるのであれば、まだ勝ち目も

――

「そんじゃ武器でも出してみるか」

「だね」

「はっ！？」

なんだその気軽さは。。

疑問のよそに優斗と修の前に魔方陣が現れる。

慌てて大男とひょろ長い男が構えた。

だが、遅い。

「グングニル」

「布都御魂」

詠唱は無い。

けれども、一言告げた言葉。

それだけで。

目の前の魔方陣が変化する。

幾重にも折りたたまれていき、形状が浮かび上がってくる。

そして修の前には槍が、優斗の前には刀が体を成していた。

「……マジかよ……」

ひょろ長い男は一歩後ずさる。
経験から分かった。
あれらは別格だ。
自分が持っている武器とは存在からして違う。

「おいおい、勇者ってここまで非常識な存在なのかよ」

「……」

魔方陣が武器と成して物体化するなど聞いたことがない。

「とりあえず、宣告な」

神の槍を携えた修が腕を引いた。

「長々と時間をかけるつもりはない。一瞬で終わらせてやるよ」

「殺しはしない。けれど、死ぬほど痛い目にあえばいい」

それは合図だ。
戦うための宣戦布告。
圧倒的なプレッシャーが暗殺者二人を襲う。
反射的に後方へと下がった。

「「甘い」」

けれど修と優斗にとって、決して安全圏に飛びのかせてはいない。

同時に腕を振るう。

◇　　◇

修は引ききった腕を前へ向けて神槍を投げる。

「……」

槍は一直線に大男へと向かう。
避けてる時間はなかった。
大男は鉈を使って槍を弾こうとする。
現実、鉈は槍に当たった。
しかし、

「……っ！」

次の瞬間、どういう訳か槍が肩に突き刺さっていた。
そのまま肩に刺さったまま壁に叩きつけられる。

「……ぐっ！」

衝撃で咳き込んだ。

「あんただったら肩に槍が刺さろうと死なないだろ」

軽い足取りで修が大男に近づいていく。

「……どういうことだ？」

「何が？」

「槍は弾いたはずだ」

「だろうな」

「2本あったのか？」

「いや、違う」

そういうことじゃない。

「この槍は“必ず当たる”んだ。絶対に避けられねぇよ」

神槍グングニル。

かわすことは出来ない。

「……そうか。それほどの武器か」

「ああ。なんつったって勇者が使う武器だからな」

そう言って修は笑った。

「それならば仕方ない」

これほど圧倒的に負けたことはない大男だったが、それでもここまで実力差があると悔しいでもなく、清清しくなった。

◇　　◇

布都御魂を横になぎ払う。
雷一閃。
長刀と呼ばれるレベルの刀から雷の斬撃が向かっていく。
それは秒速１５０キロにも達する斬撃。
人の身体では反応するのも難しい。

「……あがっ！」

つまりはひょろ長い男がかわせるわけもない。
そのまま壁まで飛んでいく男を尻目に、優斗はラッセルに視線を向けた。
たとえひょろ長い男が気を失っていなくても修が向こうに歩いていった以上、どうせ何も出来やしない。
それよりもこの男をどう処分するかが優斗にとっては最優先事項だ。
幸いラッセルは自分達のやり取りに腰が抜けたのか、へたり座っている。
布都御魂をラッセルに突きつける。

「ま、待て！　お前は怪我をしてるんだろう。だったらこれを使え

ば――ッ！」

「いるわけがないだろう」

確かに血は流れているし、かなり痛むのも確かだ。だが万能薬を差し出して終了させようとするその根性がいけ好かない。

切っ先で小瓶を割る。

「それで？　小瓶は無くなったわけだけど？」

「き、貴様！　なんて事をするんだ！」

ここに来ても上から目線を変えないラッセル。

フィオナを取り囲んで守っていたレイナも呆れて優斗に提案をしてきた。

「ユウト、私がこいつを叩き切ってもいいだろうか？」

見ていて本当に不愉快になった。

「それでもいいけど、良識ある義父さんがいるからそれはやらないでおこう」

マルスがいるので、さすがにこれ以上の無理無茶無謀はできない。

逆に言えばいなかったらやっている。

「義父さん。こいつの罪ってどうなります？」

「……正直に言えば、分からない。成金のパリーニュ家のことだから、いくら息子が罪を働こうとも金を積んでどうにかしそうな気が

するのも確かだ」

「そうですか」

「……は、ははっ！　そうだ。私は罪に問われない！」

こんな状況なのに心を持ち直したのは凄いといえば凄いのだが、今はどうしてもうざい。

「少し黙ってろ」

ラッセルの足元に刀を突き刺す。
あと数ミリで太ももに当たっていた。

「……っ！　……っ！」

半分、なみだ目になりながらラッセルは頷いた。

「いきなり調子に乗ったりして、死にたいのか？」

優斗の脅しにラッセルが今度は首を横に振った。

「まあ、ブタ箱からすぐに出てきたとしたら、だ。これだけは覚えておけよ」

優斗は先ほど、暗殺者との相対したときでも出さなかった彼本来の殺気を前面に押し出して告げる。

「次に“何か”をしたら、問答無用でお前を殺す。もしフィオナに

手を出したら……消し炭すらも残らないと思え」

ラッセルの耳朶に響くは慈悲も何も無く、ただ単純に事実を述べた台詞。
その圧倒的な恐怖にラッセルは……意識を手放した。

◇　◇

王城の一室で治療を受けての帰り道。
卓也、ココ、クリスには修たちが状況を説明してくれている。
マルスも後始末で忙しい。
けれど優斗は怪我人だったため、フィオナが連れ添って一緒に帰っている。
暗殺者二人とラッセルに話を聞けば、これ以上襲ってくるのはいない、とのことなので2人で帰ることができている。

「腕、痛いですよね」

「そうでもないよ」

魔法での治療が効かないので縫うことになってしまったが、痛み止めを飲んだりしていれば痛むことはない。

「そういえば遅くなってしまいましたが、助けてくださってありがとうございます」

「当然のことをしたまでだよ」

「それでも、言いたいんです。あそこで助けてもらわなかったら、私は死んでいましたから」

2撃目こそ優斗を狙っていたが、初撃の狙いはフィオナだった。優斗が防がなければ確実に彼女は死んでいたはずだ。

「それなら受け取っておこうかな」

お互い、顔を見合わせて笑う。

「あ～、でもこれでしばらくマリカを抱き上げられない」

「2週間ほどで抜糸だって言ってましたものね」

「右の肩に手のひら。しばらくはフィオナにも迷惑を掛けちゃうな」

「いいんです。存分に迷惑を掛けてください」

「そうは言ってくれても、さすがに気は引けるよ。できるかぎりは自分で頑張ろうと思うけどね」

「駄目ですよ。不用意に頑張ったら怪我が悪化してしまいます」

「でも」

「でも、なんて駄目です」

そう言ってフィオナは少し前に出ると、くるりと振り返った。

「頼ってください。家族なんですから」

ふわりとドレスが翻る。
優しい笑みがそこにあった。

「そ、それに」

少し顔を赤くしてフィオナが続ける。

「わ、私は優斗さんの、つ、つつ、妻ですから、お、夫を支えるのは当然ですっ！」

言い終わった頃には真っ赤になっていた。
それはまるで完熟したトマトみたいに本当に真っ赤で、普段は一緒に顔が赤くなりそうなのに今回に限って優斗は可笑しくなった。

「ゆ、優斗さん！」

「いや、ごめん。すごく嬉しくて、すごく可愛くて、そしたら笑っちゃった」

さっきまでシリアスなことをしていた反動だからだろうか。

いつもは使えない言葉も、するりと出てきた。

「ありがとう、フィオナ」

こんな自分だけれども。
あまり良い所がない自分だけれども。
いつかフィオナと本当に夫婦になれたら、と。
こんなにも可愛い妻がもらえたらどんなに素晴らしいか、と。
実は今、思ってしまいました。

どちらにとっても予想外

久方ぶりに教室に入る8人。
優斗は右手を三角巾で吊るしながらの登校だ。
昨日の事情を知らないクラスメートから「どうしたの？」などと訊かれて、言葉を濁してうまくかわす。
席にかばんを置くとクリスと修が寄ってきた。

「昨日は大変でしたね」

「本当だよ」

一番の重症が自分の怪我だけだというのは上出来だと思う。

「自分は今朝方、相手方の事情も大筋は伺いました」

「今のところ、ラッセルってどうなったの？」

「状況で言えば最悪なのではないでしょうか」

「お金でどうこうなりそうって話は？」

「さすがにあのレベルまでやってしまっては無理な話になっているそうです」

3人は小声で話し込む。

「王族、公爵に対する危険行為。龍神の両親に選ばれた二人と王国の勇者に対しての殺害未遂。一族どころか親族もろとも投獄されても文句は言えません」

「あらためて罪状を並べると大変そう」

「国家転覆でも図ったのではないか、と取り調べている人は勘繰っているそうです」

「暗殺者の二人は？」

「あちらも実行犯と言えばそうなのですが」

少なくとも片方。

「大男に対しては情状酌量の余地はあるそうです」

「どういうことだ？」

「あまり暗殺者っぽくなかったでしょう？」

「確かに」

修と優斗は頷く。

「それもそのはずです。暗殺なんてやったことなかったのですから」

クリスはそのまま話を続ける。

「暗殺対象にしてもフィオナは公爵の不貞の子、ユウトとシュウは田舎者で不良ということで話を通していたらしいですから」

無駄に律儀なためなのか、話を鵜呑みにしてしまったらしい。

「引き受けた以上は依頼を遂行しようと思っていたらしいですけど、最初からそんなことを聞いていたら突っぱねていたって言っているらしいです」

とはいえ、どうしてそんな男が暗殺なんてものを引き受けたのだろうか。

「でも、確認する間もなく請け負ったってことは……金か？」

「そうですね。大男の暗殺者、名をゴウと呼ぶらしいのですが、息子の法外な治療費を支払わなければならなかったらしいので、今回は苦渋の決断として仕事を請け負ったらしいですよ」

「まあ、確かにあんなクソ真面目で大雑把な暗殺者がいてたまるか、って話だ」

あれが本筋の暗殺者というのなら、世界はもっと明るくなっている。

「今のところは牢屋に入れられていますが、今後の判決次第では多少でも罪は軽くなるかもしれません」

「えらく簡単に軽くなるんだね」

「彼が捕まったと知るや幾人かが別人じゃないのかと詰め寄ってきたそうです。少なくとも周りの住民には慕われていましたし、彼のような人物が犯罪に手を染めるしかなかった場合は、国家にも責任があるという考えですから」

「王族が危険に晒されても？」

「その王族が統治している国がいけないのですからね」

なんというか面白い考えの国なのだ、と二人は何度も頷く。

そして別の席では。

「ユウトさんも左手一本ではやはり大変ですわよね」

「そうですよ」

フィオナの席にアリーとココが集まっていた。

「ここはフィオナさんが妻として支えてあげるべきでは？」

アリーやココは夫婦だ何だと言っているが、本当のところ結婚どころか婚約もキスも手すらも繋いでいないような清らかな関係だ。

けれども、夫婦設定を受け入れている二人。

しかも互いが互いを憎からず想っているのは傍から見ていても分か

る。
そこがまた彼女達の琴線に触れるのだろうか。
恋愛小説みたいで面白い、と。
一応は婚約者というパターンもあるのだが、彼女達の中では基本的に無視されている。

「昨日の帰りに頼ってくださるようには伝えましたが」

「甘いですわ。ユウトさんはそう言っても無理をされるお方。そこを事前に察知してフォローするのが妻としての役目でしょう」

アリーが力説する。
なんとなくフィオナも彼女の説明が正しいような気がしてきた。

「そ、そうですね」

「妻として夫を支える。これが家庭円満の秘訣ですわ」

「そうですよ！」

「はい」

アリーとココがノリノリなので、フィオナも頑張ろうと気を張った。
おそらく、いまだかつてこれほどまでに無駄な王族のカリスマ性はないだろう。

◇　◇

つつなく始業式も終わり、軽い説明を受けて学院を後にした一行は、時折行く大衆食堂へと向かっていた。

「卓也、ちょっとトイレ行ってくるから適当に頼んどいてね」

「わかった」

優斗がトイレに向かった。

卓也は何を頼もうか、と悩んでいたところでココに捕まる。

「なに？」

「ちょっと協力してくださいね」

卓也の耳に手を当てて、ごにょごにょと喋る。

「オッケー。おもしろそうだから乗った」

卓也はそう言って自分の分と優斗の分を頼む。

「卓也、頼んでくれた？」

「もちろん」

「サンキュ、助かる」

優斗が席について雑談に加わると、少しして料理が出てきた。
多種多様な料理が出てくるが、

「御膳定食のお客さんは？」

「あ、こいつです」

「豪勢なのがきた」

「昨日頑張ったご褒美だ」

アリーとココがフィオナに意味ありげな合図を送る。
最近、特にアリーは変な感じで修の影響を受けてきているような気がしてならない。
言葉のチョイスだったり今みたいなことだったりと、良い意味で王族っぽくなくなってきている。
とはいえ、料理はお箸を使うものが出てきた。
確かに左手でお箸を使って食事をするのも大変だろうとフィオナも思う。
一度深呼吸をしてから、切り出す。

「あ、あの、優斗さん」

よろしければ、食べるのを手伝いましょうか。
と、伝えようと思ったのだが。
隣を見れば、

「……ん？　フィオナ、どうしたの？」

左手で器用にお箸を使ってオカズを口にしている優斗がいた。

「い、いえ、その……お箸使うの、お上手ですね」

「前にこいつらと『利き腕と逆の手で何個の豆を隣の皿に移せるか』っていう勝負をしてさ。負けたのが悔しくて必死に精進したんだよね。おかげで集中すれば左手でも問題なくお箸を使えるようになったんだよ」

相変わらずの努力者というかなんというか。

こんな無駄なことにもそんなことをしているとは思わなかった。

フィオナは優斗の役に立てなかったことにシュン、とするしアリーとココは異世界3人をブスッとした視線で睨む。

優斗は食事を取るのに集中しているし、修は視線に気付かない。

卓也とクリスは苦笑して、和泉は我関せずといって黙々と食事をしている。

まあ、なんとも可笑しな食事になっているものだと、苦笑いしている二人はしみじみと思った。

◇　◇

その後も色々なところに回って遊んでいたのだが、優斗も無駄に能力が高いのでフィオナの手を煩わせるようなことはなかった。
その度にフィオナのテンションが少しずつ落ちていく。
そして解散、となった頃には、

「……」

驚くくらいローテンションになっていた。

「あ、あの、フィオナ？」

自宅までの帰り道。
どうしてフィオナのテンションが低いのかが優斗には分からない。
が、このままだとマリカも怯えそうなので、とりあえず会話をしてみる。

「どうしたの？　体調でも悪い？」

「……いえ」

「楽しくなかった？」

「……いえ、楽しかったです」

とは言うものの。

――こ、言葉と口調が合ってない。

本当にシュン、としている。
これではもう埒が明かないと思い、優斗は直球で尋ねる。

「あの、何が原因なの？」

優斗が真摯に問いかける。

フィオナは俯いていた顔をあげ、ちらりと優斗を見る。

「昨日、言いました。優斗さんを支えると」

「うん」

「でも優斗さんは一人で何でも出来るから」

「……はい？」

そこからどうして今の現状に繋がるのかが優斗には分からない。

「お昼のときも食べさせてあげようと思ったのですが、優斗さんは難なくこなしてしまいますし」

「それは、まあ……できることだったし」

「別に私が支えなくてもいいんじゃないかと思ってしまって」

そしてまたフィオナは下を見て俯く。

優斗はとりあえず、彼女の話した内容を頭の中でまとめる。

――えっと、つまりフィオナは……あれなのかな。

自分の役に立つことができなかったから、落ち込んでいる。

――僕のせいで落ち込んでるのか？

予想外の理由だったとはいえ、自分のせいでフィオナが落ち込んでいるのはどうにかしたい。

――でも、どうやって喜ばせる？

おそらく優斗の役に立ってこそフィオナは喜ぶ。

テンションも上がる。

けれども帰ってる途中で手助けを必要とする動きなんてしない。

ということはつまり、現在している動きの中で無理やりフィオナの手を借りようとしなければならない。

現在していることと言えば、

――歩く……だけだし。

ビックリするぐらいに無理な気がしてきた。

と、ここで親子連れとすれ違う。

マリカよりも少し大きな子供が転ばないように母親と手を繋いでいた。

――ん？　転ばないように……。

ふと、気付く。

自分の今の状態で転んだら、確かにまずい。

怪我が悪化する恐れがある。

現在の行動の中で最大のリスクと言えばそれだ。

――じゃあ、それを回避するには。

顔が赤くなる。
が、今の自分にはこれぐらいしか思いつかない。
家に着くまでの時間の問題もある。
――やるしかない。
気合と根性を入れて口にした。
「あの、フィオナ」
「……はい？」
「じ、実はさ、遊んでたから、少し疲れたんだよね」
「……はい」
「それで、ね。左右のバランスが違うからなのか、さっきからうっかり躓いて転びそうになってるんだよ」
まだ優斗の真意は伝わらないのか、フィオナはしょんぼりとしている。
「実際に倒れたら怪我が悪化するだろうし、そうならないためにも誰かが支えてくれると、その……助かるんだけど」
「……はい」
反射的に頷く。
が、ここでフィオナもようやく認識したのかビクッとしながら優斗を見た。

「ゆ、優斗さん。今、なんと仰いました？」

自分の聞いたことが間違いないのか、フィオナが確認する。

「だから誰かが支えてくれると、えっと……助かるなと思って」

優斗が左手で頬をかく。

けれどフィオナは嬉しさのあまり、その左手を取って右腕を絡ませた。

「えっ！？　ちょ、フィオナ！？」

予想外の事態にあせる。

優斗が提示したのは、あくまで手を繋ぐことであって腕を組むまでは予測していない。

逆にフィオナから言わせてみれば、優斗を支えるのでしっかりと支えるためには腕をしっかりと持ったほうがいい、という考えで腕を組んだ。

しかもそれまでが落ち込んでいたから、ハイテンションで腕を組むことを躊躇わせなかった。

少なくとも1分ほどは照れずにいるだろう。

「これで優斗さんが倒れそうになっても心配はいりません」

自信満々に言うフィオナ。

だが、優斗としては左腕に柔らかいものやら何やらで気が気でない。

「ふふっ、ようやく優斗さんの役に立てました」

ニコニコと。
それはもう眩しいばかりの笑顔になるフィオナ。
もちろん、あと３０、４０秒もすれば自分がやっていることに気付いて顔を真っ赤にさせること頃合。
けれどもフィオナは顔を赤くしながらも決して組んだ腕を解くことはせず、そのまま家まで帰った。
当然、その姿を見たエリスに散々からかわれることになるのだけれども。
それはまた、別の話。

「……ふむ」

優斗は手のひらは何度か握り締めて、肩を回す。
痛みはない。
何かが張る感覚もない。

「うん、問題ないですね」

「ありがとうございました」

頭を下げて病院を出る。
何かすることもなかったのでそのままトラスティ家へと帰る。
広間に足を運ぶとエリスとマリカがそこにいた。

「もう大丈夫なのね？」

「ええ。完全復活です」

問題ないとアピールすると、マリカが遊んでいた積み木から目を離して優斗を見ていた。

「マリカ、おいで」

優斗が呼ぶと意気揚々とマリカが駆け寄ってきた。

「ぱ～ぱ！」

飛び込んできたマリカを優斗はしっかりと抱き上げる。
今までより重いと感じたのはマリカが少しばかり成長したことと、
優斗の右腕の筋力が落ちたこともあるのだろう。

「フィオナはもう出たんですか？」

「ええ。最後までマリカのことを気にしてたけど」

「相変わらずですね」

苦笑して、マリカを抱いたまま椅子に座る。
フィオナは今日、平民で初めてできた女の子の友人と一緒に遊びに行っていた。

「楽しんでくれればそれでいいんだけど」

「そうですね」

元々はココとの繋がりからで出会って、フィオナ、ココ、その女の子、そして卓也が護衛として一緒に買い物をしているはずだ。
どうしてそうなったのかと言えば、ラッセルが金でもどうしようもないことになったからだ。
つまりラッセルがいなくなってからというもの、平民を見下す貴族グループが衰退を辿っていた。
そういう奴らは平民が貴族と気軽に話そうとしていても口出しをしていたが、ラッセルがいなくなったことによってそれが出来なくな

った。
ようはラッセルという傍若無人な矢面に立つ人物がいなくなったから、うかつに自分が槍玉に挙げられてはいけない、ということだろう。

「ユウトはどうするの？」

「マリカの面倒でも見てますよ」

「あら、それじゃあ暇なのね？」

「……なにを頼む気です？」

「クッキーを作りすぎちゃったのよ。だからマルスに届けてほしいなって」

テーブルの上に山ほどのクッキーがあった。
小さい袋詰めにされてあって、だいたい１５袋ぐらいはありそうだ。

「多すぎません？」

「まあ、マルスに渡せばどうにかなるでしょう」

「適当ですね」

苦笑しながら優斗は頷いた。

「マリカと一緒に行ってきますよ」

大きな紙袋を片手にマリカと一緒にトラスティ家の門をくぐる。

「おや、ユウトさん。お出かけですか？」

「はい。マルスさんにお届けものをしてきます」

「マリカ様もご一緒に？」

「ええ」

と、ここで抱いているマリカが紙袋に手を伸ばした。

「どうしたの？」

「あ～ぅ」

そのままぐいぐいと手を伸ばしていくので、紙袋を近づけるとマリカがそこからクッキー袋を一つ取り出した。

ここでやっとマリカがどうしたいのかに優斗が気付く。

「あい」

マリカはクッキー袋をバルトに向ける。

「……マリカ様？」

「バルトさんにマリカからどうぞ、ですって」

バルトがマジマジと見ると、袋がクッキーだと知って顔が綻ぶ。

「これはこれは。ありがとうございます」

「あうっ！」

王城まで辿り着く。

かなりの頻度で行っているから、門番と軽く挨拶程度で中に入れる。

「マルスさんって確か、国防大臣だからこっちの方で良かったはず」

とはいえ、そこまで詳しく知っているわけでもない。

前に一度くらい聞いたことがある場所を頼りに向かう。

「ちゃんと聞いておけばよかったな」

フラフラと城内を歩いていくと、前方に幾人も引き連れた人物が現れた。

「あ、王様だ」

さっと隅に避けて頭を下げる。

とはいえ、さすがに赤ん坊を引き連れて城内にいたらさすがに王様

の目にも留まる。
それがマルカとなればさらに、だ。

「おお、ユウトではないか」

思わず名前を呼ばれたので、頭を下げたまま優斗は返事をした。

「ご無沙汰しております」

「面を上げよ。ここにいる者たちはお前の素性を知っている。マリカのこともな」

王様がそう言うので、優斗は顔を上げた。

「マリカも元気か？」

「この上なく」

「そうか。それはよかった」

と、ここでマリカが動く。
先ほどのバルトの時と同様に紙袋に手を伸ばした。

「マ、マリカ！」

止めようとするが遅い。
マリカが紙袋からクッキー袋を取り出して王様に突き出す。

「これは？」

興味津々に王様が袋を見つめる。
観念して優斗は説明をした。

「……クッキーです。エリス様が作りすぎたため、マルス様に渡すように頼まれたものなのですが……」

そして罰が悪そうに伝える。

「どうやらマリカは王様にも差し上げたいようで……」

おそらく、髭のおじさんとして覚えていたのだろう。
王様は柔和な表情を浮かべる。

「おお、これはありがとう」

マリカから袋を受け取ると、中からクッキーを一つ食べる。
王様なのだからもうちょっと危機感を持て、とも思ったがマリカが直接渡しているのだから問題ないとも思ったのだろうか。

「ふむ、美味い。エリスにも感謝の意を述べておこう」

「ありがとうございます。エリス様も喜ばれます」

「ああ、あとアリシアにも顔を出してくれると助かる。先ほどまで公務であったから今は暇をしているだろう」

「わかりました」

「では、公務が残っているのでな」

もう一つクッキーを取り出しながら王様が去っていく。
ふうっ、と息をはく。

「マリカ。あの人は一番偉い人なんだから、おいそれとクッキー渡しちゃ駄目だよ」

「あい？」

マリカが首をかしげた。
この上なく可愛らしいが、意味がわかってないのは明白だった。

「……ま、いいか」

問題なかったことだし。

◇　◇

続いてアリーの部屋の前に辿り着く。
従士にお目通りを願うと、簡単に通された。
お一人では珍しいですねと言われ、マリカも一緒ですよと言ったら苦笑された。

「ユウトさん、いらっしゃってたのですね」

「ちょっと用事があってね。それでさっき王様からアリーが暇してるって聞いたから寄ってみた」

「ありがとうございます。公務が終わってどうしようかと思っていたところでしたので」

メイドがテキパキと動いてお茶の準備が終わる。

「……がっつりと話す気満々だね」

「暇ですから」

「そういうとこ、本当に修の影響を受けたって思うよ」

アリーが席に着いたので優斗も座ろうと思ったが、席につく前にマリカがしたいことが分かったので、紙袋からクッキーの袋を取ってマリカに持たせる。

そしてアリーの前まで歩いていく。

「あら、どうしたのですか？」

「あいっ！」

マリカが元気よく両手を突き出した。

「えっと……クッキーですか？」

「エリスさんからのクッキー。作りすぎたからってマルスさんに処分頼む途中でね。ちょうどいいからアリーにもおすそ分け」

「ありがとうございます。マリカちゃんもありがとう」
アリーがマリカの頭を撫でるとマリカが満足そうにした。

そのあと、ついでに優斗も処理しようと思って2袋ほど追加でテーブルの上に出した。

「フィオナさんとココさんは今頃、お友達と買い物中ですものね」
クッキーをかじりながら羨ましそうに呟いた。

「羨ましいの？」

「……まあ、一緒にいるのが平民の子ですから、王族のわたくしが加わったら遠慮しそうな気がしますので気が引けますけれど、羨ましいことには変わりありませんわ」

「そうかもしれないね」
貴族はギリギリ大丈夫かもしれないが、王族は恐れ多いと思ってる人は多いだろう。

「シュウ様も今日はイズミさんとクリスさんと一緒に遊んでいるそうですし」

「クリスの家で何かやってるって言ってたな。クリスの胃に穴が開

かなければいいけど」

「ふふっ、それもそうですわね」

あの二人と一緒に動いて真面目にどうこう、ということは絶対にないだろう。

「ユウトさんがいなかったら今日は暇で死んでましたわ」

「まあ、ちょうど良かったってことだね」

とはいえ自分もマルスにクッキーを渡したら暇だ。
マリカとどこかに行くにしても、アリーが一緒でも問題はないはずだ。

「それじゃ、一息ついたら一緒に町にでも行く？」

優斗の提案に目をぱちくりさせる。

「いいのですか？」

「マルスさんにクッキーを届けたら暇だしね。暇人は暇人同士、遊びに行ってもだいじょうぶでしょ」

優斗が茶目っ気たっぷりに言うと、アリーが小さく笑った。

「それもそうですわね」

◇　◇

アリーが着替えている間にマルスのところへと辿り着く。
取り次げばすぐに会えることになった。

「おや、ユウト君にマリカじゃないか。どうした？」

「マルスさんにプレゼントです」

マルスは義父と呼ばれなかったことに少し落ち込むが、ここが王城だということで気を取り直す。
優斗はマリカに一袋だけ渡して、あとはテーブルの上に置く。

「エリスさんからマルスさんにクッキーの差し入れです。どうにか処分してくれと言っていましたよ」

「あいっ！」

そして今まで通り、持ってるクッキー袋をマリカがマルスに手渡す。

「おおっ、ありがとう」

孫に直接手渡されて表情が緩むマルス。

「わざわざすまないね」

「いえ、暇でしたから」

「このまま帰るのかい？」

「先ほどアリーと会ったので、そのまま彼女と一緒に遊びにいこうと思ってます」

「そうか。くれぐれも粗相のないように」

「大丈夫ですよ。アリーの許容範囲を超えるような粗相なんて僕にはできませんから」

修や和泉にも耐えれる彼女だ。
優斗がどんなことをやったところで粗相のうちに入らないだろう。
マルスもそれを理解してか、笑った。

「それもそうだな」

そしてマルスの執務室から出るとアリーが待っていた。
そのまま市街へと出る。

「なんていうか珍しい組み合わせだね」

「そうですわね。いつもはほとんど家庭教師ペアですから」

「あうっ」

その中でマリカが優斗の腕の中で主張した。

「ああ、ごめんごめん。マリカも一緒だもんね」

だからペア、というのはおかしい。

「マリカちゃんって抱いてみたりするとやっぱり重みがあるものでしょうか？」

「抱いたことなかったっけ？」

「ありませんわ。あまり赤ん坊と接する機会もありませんし」

「じゃあ抱いてみる？」

ひょい、とマリカをアリーに向ける。

彼女ならマリカも嫌がりはしないだろう。

「えっ、いいのですか？」

「ものは試しって言うから。とりあえず抱いてみたらいいよ」

マリカを一度下ろして、アリーの側に預ける。

アリーが恐る恐る、といった感じで抱き上げた。

「あっ、思ったより重いですわね」

「見た目年齢で1歳ちょっとだし、会ったときより何キロかは増えてると思う」

マリカはマリカでアリーに抱っこされてきゃっきゃっと喜んでいる。

「しばらく抱っこしてあげて。マリカ楽しそうだから」

「そうですわね」

◇　◇

「あれ？　あれってユウトくんじゃない？」

平民の女の子――リーネがふと前を見ると馴染みのクラスメートの姿があった。

アイスクリーム屋でお金を支払っている。

釣られてフィオナ、ココ、卓也が視線をアイスクリーム屋に向けると、確かにそこには優斗の姿があった。

優斗はそんな４人に気付かず近くにあるベンチに向かった。

カップを２つ持っていて、片方をベンチでマリカを抱いているアリーに手渡す。

「もう一人はアリシア様よね？」

「そうです」

「だろうな」

「抱いてる赤ん坊ってアリシア様の子供……って、そんなわけないか。そうだったら一大ニュースになってるもんね」

なんとなく、隠れるように優斗たちを監視する４人。

「なんか食べ比べしてるな」

「時折、赤ん坊にも食べさせてるね」

「……」

傍目から見ても仲良さそうにアイスを食べていた。

「赤ちゃんが何者かはわかんないけど、あの２人ってもしかして“そういう関係”なの？」

◇　　◇

「ユウトさん、気付いてます？」

「あれに気付くなっていうの無理じゃない？」

「ですわね」

４人組が建物の影から自分達を覗いている。
異様な光景と異様なプレッシャーとが相まっているので、見られている２人には簡単に気付かれる。

「完全な姿を現してないけど、あれってフィオナ達だよね？」

「おそらくそうですわ。何をしているのやら」

紙カップを潰してゴミ箱に捨てる。

「問い詰めます？」

「別にいいでしょ。害はないし」

４人組ということは平民の女の子もいるだろう。
だったら、無理に王族が向かってギクシャクさせても可哀想だ。

「次はどこ行く？」

「わたくし、平民の方々が行く小物屋にはまだ行ったことがありませんから行ってみたいですわ」

「りょうかい、じゃあ行ってみようか」

優斗はマリカをアリーから預かって歩き始めた。

◇　　◇

「移動しましたね」

「追うわよ」

「マジか？」

「当然でしょ。こんなに面白いことないじゃない」

「……」

リーネは乗り気だ。

ココもそこそこ。

卓也は無言を貫いているフィオナが怖くて、乗り気になれない。

◇　　◇

「あれほどヘタクソな尾行もないと思う」

「もしかして見つかるのを待ってるとかじゃ？」

「いや、さすがにないって」

何をしたいのか分からない尾行連中を引き連れながら目的の場所へとたどり着く。

小物専門の雑貨屋、といったところか。

ガラス製品からネックレス、ブレスレットまで安物の光物は揃っていた。

しばらく2人で物色していると店員が話しかけてきた。

「彼女へのプレゼントをお探しでしょうか?」

店内には優斗たちしかいない。

ということは、この言葉は自分達2人に向けられたものだろう。

マリカを抱いているのも余計にそう思わせたのかもしれない。

「あら、そう見えます?」

アリーが調子に乗って優斗の開いている左腕にそっと右腕を絡ませようとする。

長年の社交の経験からか、流れるような動きだった。

「おいこら、アリー」

ペシッとチョップをかます。

「“これ”は従妹なんで。それで“これ”には妻へ送るプレゼントを一緒に見繕ってもらっているんです」

「そうですか。それでは何かありましたら、お声をお掛けください」

「ありがとうございます」

一礼して店員が去っていく。

「わたくしを“これ”呼ばわりするなんて」

「悪ノリするアリーが悪い」

軽く額を触りながらイタズラしてやった、といった表情をするアリー。

「けれどよくもまあ、さらっと嘘がつけますわね」

「それができる性格だから仕方ない。それにしても、アリーも出会った頃は清純だったのに、どうしてイタズラとかするようになってしまったんだろうね？」

顔を見合わせて、笑う。

「僕らのせいか」

「そうですわ」

小さく笑い声をあげる。

「それで？　奥様に何か買ってあげるのですか、わたくしの従兄様？」

また悪戯めいた表情で訊いてくるアリー。

「何か買うことにしましょうかね。僕の従妹が僕の大事な奥様に何が合うか見繕ってくれるそうだから」

◇　　◇

店内の2人は仲良さげに回っている。
先ほど店員がやってきた時も2人で笑い合っていた。

「むぅ、やはりアリシア様はユウトくんとデキてたのか」

「いやいや、それはないから！」

慌てて卓也が否定した。

「そうなの？」

「いろいろと事情はあるが、とりあえず優斗とアリーがくっ付くことだけはない！」

「じゃあ、どうして2人っきりで？」

「……」

なんとなくフィオナからの無言の圧力が強まった気がする。
慌てて卓也が弁明した。

「それは……ほら！　アリーは友達少ないし、たまたま予定が合ったのが優斗だったんだよ」

「確かにそう言われると納得せざるを得ないわ。アリシア様と対等に接してるのって貴方たちぐらいだものね」

普通は気後れするものだ。

「というか、別にアリーは王族とかどうとか気にしないぞ」

「向こうはそうでもこっちは気にするものよ」

「まあ、無理にとは言わないが」

◇　◇

買うものを買ってお店を出る。

「気付いたらいなくなってしまいましたね」

「会計してるころには距離を開けたみたい」

まだ側にいるかもしれないが、別にどうということはない。
優斗は二つの袋をアリーに見せる。

「片方はフィオナさんへのプレゼントって分かるんですが、もう一つは何です？」

「こっち？」

現在、優斗の手には2つの袋が存在している。
片方はフィオナへのプレゼントなのは選んだアリー自身が知っているのだが、もう片方はいつの間にか優斗が買っていた。

「こっちはアリーへのプレゼント」

「えっ？」

素で驚きの声を上げるアリーに優斗は袋を渡す。

「見てもいいですか？」

「どうぞ」

アリーが袋の中を確認する。

「サイコロ？」

正方形の物体が九分割されているものが入っていた。

「こっちでの名称は分からないけど、僕らが知ってる名前としては

ルービックキューブって言うんだ。修がこれ得意だから、教えてもらうといいよ」

再度、アリーが驚きを表す。
いつも思うが優斗はどうして、こうやって気が回るのだろうか。
さりげなくフォローだってするし、今みたいに修との切っ掛けを作ってくれる。

「……本当、シュウ様がいなかったら、ユウトさんに惚れてしまっていたかもしれませんわね」

「残念ながら僕は奥様に操を立ててるよ？」

茶目っ気出して言葉を返すと、アリーも笑って、

「でも王族の夫にするには身長と顔が少し足りませんわ」

「ちょっと待て」

冗談を言い合う。

「ユウトさんは本当によくわたくし達のことを考えてくれますわね」

「まあ、大切な仲間だからね」

しかも大半は同年代とのコミュニケーション不足だから、できる限りのことはしたいと思うのだ。

アリーをしっかりと王城まで帰すと、そのまま帰途に着く。
まだ6時にもなっていないが、マリカは腕の中でぐっすりだ。

「ただいま戻りました」

「お帰り、ユウト」

広間に行くとエリスが迎えてくれた。
優斗はマリカを広間にある小さな布団に寝かせる。

「フィオナは？」

「閉じこもってるわよ」

平然と答えるエリスに優斗は軽く頭を抱える。

「……うわぁ」

「何かあったの？」

「何かあったわけではないんですが、何となくはわかります」

おそらくはアリーと出かけていたのが何かの原因だ。

「夕ご飯までには機嫌を直しておきなさいよ」

「わかってます」

とりあえず優斗はフィオナの部屋に向かう。

彼女が閉じこもる、ということは怒っているのか落ち込んでいるのか。
なんとなく怪我をした次の日のことを思い出した。

――最近、フィオナは情緒不安定になりやすいなぁ。

と、腕を組んだ日のことを思い出しているうちにフィオナの部屋の前にたどり着く。
コンコン、とノックした。

「フィオナ？」

「……」

「フィオナ、聞こえてる？」

「聞こえてません」

「聞こえてるじゃないか」

こういう妙なところで律儀なのが本当にフィオナらしい。

「どうして尾行してたフィオナが怒ってるのさ」

「……」

「見てたから分かると思うけど、アリーと遊んでただけだよ？」

「……知ってます」

じゃあ、なんで閉じこもってる。

「もしかしてアリーと一緒に出かけたこと怒ってる？」

「怒ってません！」

いや、怒ってるし。

「フィオナ。言ってくれないと何がいけないのか分からないよ」

「……」

まただんまりか、と優斗が思ったときだ。

「……嫌だったんです」

ぽつり、とフィオナが答えてくれた。

「アリーさんと優斗さんが二人で遊んでいるのを見るのが、凄く嫌でした」

なぜか心がキリキリと痛んだ。

「まーちゃんも一緒にいて、なんというか……私の居場所を取られた気がしました」

「誤解だよ」

「あと、何かプレゼントをあげてるのを見たら、なんかもうその場所にいたくなくなってしまって……」

そんなフィオナの様子を察して、卓也がその場で解散させた。
フィオナはそのまま帰ってきて部屋に篭って、この現状が出来上がったということだ。

「優斗さんとアリーさんが友達同士で遊びに来てるんだって頭では理解しているんですが、感情が納得いかなくて……」

「……そっか」

優斗の中に不意に嬉しさがこみ上げた。
今日の出来事をそんな風に思ってくれているとは知らなくて。
驚いた反面、嬉しくなった。

「ドア、開けてくれないかな」

優しい声音で再度、話しかける。
数秒、間が開いたが鍵の解除する音が聞こえてドアがゆっくりと開く。
優斗の目の前にはうつむいているフィオナの姿が見える。
3週間前、自分の役に立てなくてしょんぼりしていた姿にやっぱり重なって見えた。

「手、借りるね」

優斗はフィオナの右手を取ると、その上に小さなアクセサリーを乗せた。

「はい、プレゼント」

「……ネックレス？」

銀色のチェーンに繋がれた、ハート型のネックレス。

「フィオナへのプレゼントだよ」

「……なんで？」

「今までフィオナにプレゼント、したことなかったし。アリーと小物屋に入ったとき、ちょうど話題になったからさ」

まあ、貴族にあげるものにしては大した値段のものじゃない。

「安物で申し訳ないんだけどね」

と、ここで先のアリーとの一件に関して弁明しておく。

「ちなみに先に断っておくけど、アリーにプレゼントしたのはおもちゃだから。修の気を引けるようにってあげたんだよ」

つまり自分にとって女性へのプレゼントというものは。

「だから、えっと……女性モノのプレゼントをしたのはフィオナが初めてだから」

別に着けなくてもいいから。

「貰うだけ貰ってくれると嬉しいかな」

照れ隠しに頬を掻きながら伝える。

どうだろう、とフィオナを見つめていると、彼女の瞳から涙が溢れてきた。

「え？　いや、なんで泣くの！？」

突然すぎてパニックになる。
今の流れで泣く場面はなかったはずだ。
フィオナは泣いたまま優斗の胸に飛び込んだ。
そしてぎゅっと抱きつく。

「あの……どうしたの？」

涙を流しながら抱きつかれるのにもデジャヴを感じながら、優斗は背中に左手を回して右手で優しくフィオナをあやすように頭を撫でる。

「嬉しすぎて涙が出てきました」

「……なら、よかった」

ほっと優斗は安心する。
少し抱きしめる力を強くして、何度も右手がフィオナの頭を往復する。
と、ここで時間が掛かっていたためにエリスが様子を見に来た。

「ユウト、引きこもりは手強い？」

気楽に尋ねたが、目の前で繰り広げられているのは義息子と娘の抱擁シーン。

「あらあら、ごめんなさいね」

「うわっ――！」

優斗はパッと手を離したが、フィオナは抱きついたまま離れない。

「……あの、フィオナ？」

「もうちょっと、このままいさせてください」

爆弾発言にエリスは歓喜の表情、優斗は驚嘆の表情を浮かべる。

「ユウト、あとでまた声を掛けるから」

スキップでもしそうな勢いでエリスが広間に戻っていく。

優斗はどうしようと思いながらも、もうどうしようもないところまで来てしまっているのだから、しばらくフィオナの好きなようにさせようと甘んじて抱きしめられていた。

決して一方通行ではなく

クラスの中フィオナたちが浮かなくなった。
というのは様々な要因が思い浮かぶ。
ラッセルのこと然り、フィオナたちが優斗たちと絡むようになってからとっつきやすくなった、ということもある。
特にフィオナは顕著だろう。
ということは、だ。
彼女、そして彼らの魅力に参る方々も出てくるわけで。

「申し訳ございません」

フィオナが頭を下げた。
目の前にいる男子生徒はがっくりとうなだれているが、フィオナはその横をするりと抜けて教室まで戻る。
いささか疲れた様子で優斗の隣に座る。

「フィオナはこれで今月、何人目だ？」

「5人目じゃないか？」

「すさまじい勢いで撃墜されてくな」

告白して玉砕した男子生徒に合唱する男子メンバー。

「ちなみに他だとクリスが４人、修も４人、ココが３人だね」

優斗たちのグループに告白して玉砕した人数、今月で累計１６人である。

「イケメンと美女はいいよな。顔がいいから告白されて」

羨ましそうに卓也が言った。

「自分は年末に結婚をするので、非常に困っているのですが」

「興味ねえ」

「わたしは心もちゃんと見てくれないと付き合う気にはなれないです」

「他人に何を言われたところでどうでもいいです」

四者四様だが、フィオナは特に酷い言い様だ。

「それでもいいじゃん。されてないよりいいって」

とりあえず羨ましい。

「わたくしなんて告白してくれる男子はいませんし」

残念そうにアリーが言う。

「アリーは確かに美人だけど、王族はチャレンジャーすぎるって」

「それでもわたくしだって女の子なのですから、告白されることに憧れたりはしますわ」

乙女の夢というものだろう。

「それじゃデートもしたことないのか？」

和泉の質問に少し考えて、姫にはあるまじくニヤリと笑った。

「いえ、デートならこのあいだ、ユウトさんとありますわ」

からかうようなアリーにほとんどは反応しなかったが、一人だけ思うように反応した。

「や、やっぱりデートだったんですか！？」

悲しそうな表情を浮かべるフィオナ。

「……違うって」

対して優斗は疲れた表情を浮かべると、アリーに近づく。

「アリーは最近、僕に対して調子乗りすぎじゃない？」

ニッコリと笑いながら優斗は両方の拳をアリーの側頭部に当てると、そのままぐりぐりと締め付ける。

「い、イタタタ、痛いです！」

前回、一緒に遊んでからというもの、アリーの優斗に対する気軽さがさらに増している。

「だ、だってユウトさんって気楽に話せるんですもの」

頭を締め付けられながらアリーが答えた。
ココもそれに同意する。

「ああ、それはあります」

クリスも納得し、

「そう考えるとユウトだって良い物件だと思いますが、どうして告白されないのでしょうね？」

「そこらへんは上手く立ち回ってるから」

上手く入り過ぎないように考えている。
仮に上手く立ち回っていなくても、告白されるかどうかは全くの別問題だが。

「けれど、ちゃんと考えたらユウトさんてスペック高いですよね」

しみじみとココが言った。
クリスが優斗の情報を列挙してみる。

「異世界出身で子爵で神話クラスの魔法が使えて精霊も従えられる。
さらに龍神の父親で柔和で温和で誰に対しても礼儀正しい」

ふと全員が無言になった。
ぐりぐり攻撃から開放されたアリーが軽く涙目になりながら改めて感想を言う。

「……案外シャレになってませんわね」

「スペックを知られたら引く手数多でしょうね」

大半のことが隠されているとはいえ、知られたら大変なことになるのは間違いない。

「特にオリジナルの詠唱で神話クラスの魔法を使えるなんて御伽噺レベルの存在ですから。国内どころか国外からの有名貴族、もしくは王族から縁談が来てもおかしくないレベルですわ」

「へぇ、そうなんだ」

まるで他人事のように優斗が返した。

「実際にそういう話になればかなりの出世になるかと思いますが、落ち着いておりますね」

「別に国外からの縁談が来たってどうこうしようと思わないし」

そういうのは自分の手にあまりそうな気がする。
というかそんなどうでもいい話なのに、隣を見るのが怖い。

「……」

隣から感じるプレッシャーをとにかくどうにかしたい。

話を逸らすように優斗は卓也を見た。

「そ、それを言うなら国外縁談で上手くいきそうな人を選ぶべきだと思うよ、僕は」

「例えば？」

「卓也とかね」

「オレ？」

「修はリライトの勇者様だから国外に婿入りする縁談は論外、和泉はうっかり変なものでも発明して他国に渡したりしたらガチで国際問題になりかねない。僕もそういうのは無理だし、残る人物を考えたら卓也が一番の適任だよ」

少なくとも異世界組で考えたら卓也がベストだ。

「でもタクヤさんって周りに比べると少々、見劣りしません？」

ココが辛らつに、まるで事実かのように言う。

けれど優斗は否定した。

「たぶんね、それは見間違いだよ」

基準点が自分達だから低いと思うのだ。

「強さだって僕と修から比べたら下に見られるけど、普通に比べたら圧倒的な実力だよ。それに守り関係に関しては卓也のほうが充実してる」

もともと攻撃に向いている性格でもない。

「あとなんだかんだで世話焼きだし、奥さんになる人は羨ましいよ」

「そうだな。俺らの世話役だからな」

「卓也がいなければ誰が俺らを世話するというのだ」

「……喜んでいいのか悩むな」

異世界組が最後にした流れるような会話に、クスクスと笑い声が漏れる。

◇　◇

優斗とフィオナはマリカの世話があるからと先に帰る。

残った面子はまだ話していた。

「けれど皆さんもあと数年もしたら、こういう話は冗談で済ませられないくなりますからね」

結婚一番乗り予定のクリスが諭すように言った。

「ユウトさんとフィオナさんは上手くいってくれるといいんですけど」

「上手くいくだろ、あいつらなら」

「ユウトさんはいいとしても、フィオナさんはユウトさんじゃないと駄目でしょうし」

「ん～、それってどっちかと言うと優斗のほうだろ」

ココの感想にまず、卓也が異を唱えた。

「どういうことです？」

見ていると明らかにフィオナは優斗じゃないと駄目に感じる。
逆に優斗はフィオナじゃなくても問題はなさそうに思える。

「優斗なんだけどな、あいつが今まであんなに女の子を近づけるのってなかったんだよ」

知り合ってから一度もあいつの『テリトリー』と呼べる場所に入った女の子はいない。

「なぜでしょう？」

クリスの問いに、次いで修が話し始めた。

「優斗は俺ら仲間に対して兄貴っぽい感じするだろ？」

「そうですね」

そのように感じることは多々ある。

「前に言ったことあるけど、部活っていう集まりがあるだろ。そこでもある程度は面倒が良くてな、男女分け隔てなく同じように面倒を見てたんだ」

あくまである程度、だ。

自分達を相手にするほどではない。

「けど女の子に対してはある種の壁みたいなのを作る。あくまで良い人止まりでいるように」

自分も他人も恋愛感情を抱かないようにさせている。

それがさっき、優斗の言った『上手く立ち回っている』ということだ。

もちろん、それが悪いとは言わない。

「色々と理由もあるしな」

「聞いても大丈夫なのですか？」

アリーが尋ねると修たちは頷いた。

「前に優斗の境遇の話はしただろうけど、あいつは自分の両親って酷かった。詳しく話に聞くだけでもシャレになってない。だからなんだろうけど、優斗は常々言ってたんだ。『自分は愛情のある家庭』を作るって」

絶対に親のようにはならない、と。

「だから……なんだろうな。あいつは絶対的な純愛主義者なんだよ。初恋を実らせて結婚する、なんて馬鹿なことを本気で実行しようとしてる」

だからこその壁だった。

「普通、そんな奴はそうそういないだろ？　でも優斗はそうなんだ」

そのために自分を律していた。

「でも、そんなあいつの壁をフィオナが簡単にあいつの予防線を突破するんだよな」

いくら自分達もけしかけたとはいえ、あそこまで簡単に突破するとは思っていなかった。

「一緒にいることも多かったし、フィオナは純粋だからってのもある。それに容姿だって優斗の好みにストライクだってこともあるんだろうが、それでも凄えもんだよ」

逆に言えば、そういう女性じゃないと壁を突破できないのかもしれない。

そして最後に和泉が締めるように話し始めた。

「だからフィオナには優斗でないと駄目、だけでなくて優斗もフィオナでないと駄目だ」

決して一方通行ではない。

「国外の縁談の話があったが、あいつは興味を示さなかった。おそらく女の子じゃ、フィオナ以外に異性としての興味は持つことがないんじゃないだろうか」

6人は一緒に帰っている優斗とフィオナの姿を頭に思い浮かべる。

「なんだかもう、早くくっ付けって思うのはオレだけじゃないはず」

「同意します」

「納得だ」

「ですわね」

「もはやあれで付き合ってないってネタだろ」

「ときどき、空気が甘すぎて逃げたくなりますもんね」

◇　◇

「優斗さんは確かに良い物件ですものね」

納得はしたくないが理解は出来る、といった表情をフィオナが浮か

べる。

「興味ないって言ったはずだけど？　それを言うならフィオナだって告白されてるし」

「それこそ興味ありません」

フィオナにとってはチームの皆以外に評価をどれだけ得られようと興味はない。
特に恋愛沙汰など以ての外だ。

「でもフィオナの魅力が周りにも伝わってきてるから告白されるんだよね……」

そう考えると、なんか胸がもやもやとする。

「……あー、もう」

いや、正直に言えば嫌だった。

「優斗さん？」

「いや、ごめん。なんとなくフィオナの魅力を知ってるのは自分だけだって自惚れてた」

フィオナの良いところを知っているのは自分だけの特権なのだと。
チームの仲間にすら分かっていないことだと。
うっすらと思っていた。
申し訳なさそうな優斗にフィオナは小さく笑みを零した。

「いいえ、優斗さんだけです。私の良いところも悪いところも全部知ってくれているのは」

優斗の言っていることは間違っていない。

「無口だったときの私を知っていて、買い食いもしたことがない私を知っていて、まーちゃんを育てることが本当に楽しいと思っていることを知っているのは優斗さんだけです」

修だって卓也だって和泉だってクリスだって。
こんな自分のことを知らない。

「優斗さんだけなんです」

安心させるようなフィオナの笑みに。
ほっ、としている自分がいることに優斗は気付く。

――ホント、フィオナには助けられてるよな。

感謝しても足りないくらいに。
でも、それでも言葉にしたいから優斗は伝える。

「……うん。ありがとう」

去年の夏ぐらい、だっただろうか。
ゲームの中でこんな台詞が出てきた。

『大切な人が襲われてたらどうする？』

主人公があまりにも名言っぽく言っていたので、自分達だったらどうする？　なんて話をしていた。

「相手を倒す」

と言ったのは修。

「殺す」

と端的に言ったのは優斗。

「落とし穴でも掘る」

と、ちょっとずれたのは和泉。

「卓也は？」

優斗に問われて、少し考える。

「俺は――」

◇　◇

１０月に入りそうになった頃。

用事のなかった優斗、フィオナ、卓也、修がアリーの部屋に集まった。

「交換留学生？」

「ええ。わたくしは昨日、その方とご挨拶をしたのですが……」

何か困ったような表情をアリーが浮かべる。

優斗が問いかける。

「何か問題が？」

「……隣国のリステル王国第４王女様なのです」

「へぇ、それはまた凄いのが来たね」

「わたくし一人では手に余りそうなので、ユウトさん達にも手伝ってほしいのですが」

どういう意味だ、と誰しもが疑問になる。

「まず、なんで王女様が来るんだ？」

「我が国との友好の一環として……と、聞いてはいますが、情報の一つとして大事をしでかしてしまい、逃げるように留学してくるとも聞いております」

「どんな王女なの？」

「良く言えば強気な方。悪く言えば……浄化されたラッセルでしょうか。決して悪い方ではないのです」

いや、ラッセルの浄化版って。

「……嫌な予感しかしねえんだけど」

「同感」

何はともあれ会ってみないと何とも言えない。

ということで、そのまま会いに行くことになったのだけれども……。

「なに？　あんた達がアリシア様の言ってた異世界から来た奴らってこと？　馬鹿っぽいわね」

ショートカットで栗色の髪の毛。
つり目で強気な表情。
美少女と言って問題ない容貌。
それに相まって似合っている声。
だが、彼女の第一声で優斗たちはアリーが言ってたことを納得させた。

「か、彼女がリステル王国第４王女リル＝アイル＝リステル様ですわ」

アリーが冷や汗を浮かべながら紹介をするが、リルはそれを無視して優斗たちを吟味するように見回した。
最初に目をつけたのは修。

「勇者はあんただっけ。顔は良いけど、お兄様ほどじゃないわね。同じ勇者なのに気品からして違うわ。まあ、実力でもお兄様のほうが圧倒的でしょうけど」

続いて優斗と卓也。

「他は所詮、平民でしょう？　そんなのと仲良しこよしで一緒にいるなんて吐き気がするわね」

最初っから強烈なあいさつだった。
修が頭を掻きながらアリーに尋ねる。

「こいつケンカ売ってるのか？」

「こういう性格なのです」

諦めてるのか、何も言い返さないアリー。

「俺、こんなのの面倒なんて見ねえぞ」

修が興ざめしたようにその場を後にした。

「何よ、あれ。あんなのが勇者なんて信じられないわね」

変なものでも見るような目つきのリル。

アリーは慌ててこの場を終わらせる。

「と、とりあえずリル様が何かお困りになりましたら、わたくし達がフォローいたしますので。それでは今日のところ、この辺で失礼いたします」

頭を下げてぞろぞろと部屋を出て行く。

誰が何と言うまでもなく、大変なことになりそうなのは間違いなかった。

先に出て行った修に追いついて、先ほどのリルについて話をする。

「さっき彼女のお兄さんが勇者って言ってたけれど」

「リステル王国は代々、王の親族の中から一番優秀なものが勇者として選ばれるのです」

「強いのか？」

「勇者といえどシュウ様たちみたいに異世界から来た利点、というものはございません。せいぜいわたくしより少し強いといったところではないでしょうか」

「じゃあ、あんまり強いわけじゃないのか」

あれだけ自信満々に言っていることだから、さぞ強いのだろうと思っていたのだけれども拍子抜けだ。

「……シュウ様。シュウ様とユウトさんが例外的なだけで、わたくしとて国の中では強いほうなのですよ」

基本属性の上級魔法を全て使える人間などそうそういない。

呆れたアリーに悪い、と修が悪気なく謝る。

「それで、リル様についてはどうするのですか？」

フィオナが話を切り替えた。

「あいつの面倒見るなんて俺は却下……っていうか、あいつに面倒を見切れるのはアリー、クリス、優斗、卓也ぐらいだろ。他の奴らだったら何かしらで切れる」

「かもしれませんわね」

「じゃあ、オレらで何かあったら対応するしかないか」

問題ごとは起こしたくない。

「基本は卓也が担当だからね」

「は？　何で？」

「だって一番暇なのがお前だよ」

名前を挙げた面子を考える。

アリー、王族。

優斗とフィオナ、育児。

卓也……特になし。

「あ～、確かに」

「なるべくフォローはするけど、基本は頼んだ」

「はいよ」

とはいえ、あの高飛車なお姫様のお守りをしなければならないのだと思うと、吐く息が重くなってしまうのは仕方がないことだろうと卓也はしみじみと感じていた。

自分はどうするのだろう、と卓也は考える。
修みたいに主人公キャラじゃないから倒せない。
優斗のように大切なもののためならと躊躇なく殺せるわけもない。
和泉の考えにだけは至れないけど……。

――だとしたら。

オレはたぶん。
この答えが一番自分らしい。

「――オレは守る。何があっても守り抜いてみせる。そうしたらお前らがどうにかしてくれるだろ？」

そう言って笑顔を浮かべた。

◇　◇

毎日が本当に大変だった。
リルが同じクラスというのはこちら側の配慮なのだが、やっぱりというかなんというか、かなりの問題児だ。
隣国のリステルでは侍従も校舎の中にも入れるらしいが、リライトでは認められていない。
何をするにも一人でするしかないのだが、生粋のリステル育ちであり王女のリルはあれだこれだと文句を言う。
少なくとも卓也は従者として本当にこき使われていた。
他国の王族だからこそ許される振る舞いでもあるが、他国に来ているのにこの振る舞いをしているというのはいささか空気が読めないとも思える。

「飲み物がないわ！」

「すぐに用意します」

「もっと美味しい食べ物はないの！？」

「すみませんが他にないので、これで我慢してください」

「服が汚れたわ」

「すぐに用意するのは難しいので、申し訳ないけどアリーさんなどに言ってもらってもよろしいでしょうか」

などなど、1週間。

優斗もアリーもクリスも疲れているが、卓也がその中でも一番に疲れていた。

週の後半からは基本的に卓也が呼ばれるようになった、というのも原因だ。

「お疲れ」

「災難だな」

「お疲れさまです」

修とココと和泉が飲み物を持ってきてくれた。

「基本的には卓也任せになったとはいえ、不意打ちがあるから気は抜けないんだよね」

優斗たちはそれぞれ、飲み物に手を伸ばす。

「何でもやってもらう、というのは貴族や王族の基本ですからね。自分もここに入ったときは苦労しました」

「私やココさんは親が貴族としては変なほうに入るので、自分で色々とやらされていましたが普通はクリスさんのような方々ばかりですものね」

「郷に入っては郷に従え、ということわざがあることを知らねぇんだろうな、あいつ」

はぁ、と全員でため息をつく。
張本人は窓際の席でぼぉ、と外を見ている。
そして胸元でペンダントのようなものを握っていた。
が、ふと周囲を見回した。

「タクヤ！！」

名前を呼ばれて卓也がげんなりする。

「頑張って行ってこい」

修に背中を叩かれ、しぶしぶながらリルの席へと向かう。

「何か用でしょうか？」

「あなた達、明日は暇なのよね？」

そう言ったリルの視線の先には優斗たちがいる。

「全員暇かと言われたら分からないです」

「じゃあ、生徒会長は暇なの？」

「それも聞いてみないと分からないですね」

「まったく、使えないわね」

あまりにも理不尽な物言いだが、卓也は心の中で忍耐の二文字を浮かべる。

「それなら時間がある人は明日、あたしの家まで来なさい。そこから馬車を出して特別にお兄様と会わせてあげるわ」

「なんで俺らまで一緒に？」

「護衛は必要でしょう？　少なくとも王族であるあたしが出かけるんだから」

「なんてことを言ってたんだけど……」

「……うわっ、行きたくねぇ」

「シュウ様。そういうことは口に出さないでください」

誰しもが思っていることなのだから。

「申し訳ありませんが、自分は婚約者と会う予定があるので……」

「わたしも予定があります」

「なんか嫌な予感がするし、僕は行こうと思う。フィオナは悪いけど、マリカのことお願い」

「それはいいのですが、嫌な予感……というのは？」

フィオナはもちろんのこと、周りも疑問に思った。

「なんでこっちに来て1週間しか経ってないのに王子と会おうとするのか、ということ。アリーが言ってた『しでかした』っていうのが事実だとするなら、問題がこっちの国にまで来たら厄介だし」

「ただのブラコンじゃねぇの？」

「それがベストの回答。あくまで最悪のことを考えたのがさっきのやつ。というわけで修も嫌だろうけど来てね」

「……しゃーねーな」

「そう言われましたらわたくしも念のため、一緒に行ったほうがよろしいですわね」

「俺も行くか」

暇だからな、という理由で和泉も付いて行くようだ。

「それなら是が非でもレイナさんには来てもらわないといけませんわね」

アリーがそう言うと、和泉を除く全員が笑った。

一方で笑っているアリー達を見て、リルは思う。

――何がそんなに楽しいのよ。

喋っている内容までは分からないが、楽しんでいることぐらいは笑い声を聞けば誰だって分かる。
同じ王族があんな風に笑っていることが奇異に思えるが、それがリライト王国の風土というものだと割り切る。

――明日、お兄様から朗報が聞ければいいのだけれど。

自分がここにいる理由もなくなるのだから。
ふと、視界に卓也が映る。

――それなら、タクヤぐらいは一度リステルに来させてやってもいいわね。

丁寧に話したりはできないが、この1週間は従者のように働いてくれている。
当然だとは思うが、それでもこれは他国で受けた恩だ。
返してやるのが礼儀というものだろう。

――どうしようかしら。

胸元のペンダントを握り締めながら思いにふける。
小さく、笑みが零れた。

「なんだよ、俺たちがどうにかするって」

「だってそうじゃん。お前らが助けてくれるから、俺は『大切なものを守る』って選択肢を選べるんだから」

「……その考えはなかったよ」

「けど卓也らしいんじゃね」

「そうだな。それならば、時が来たときには」

「落として倒して殺してあげるのか」

そんな状況を全員で想像して、大笑いした。

◇　◇

というわけで翌日、馬車に揺られて国境沿いに向かっているのが7人。
リルを筆頭として優斗、修、卓也、和泉、アリー、レイナ。
2台に分かれ、片方にはリル、レイナ、卓也、和泉。
もう片方には優斗、修、アリーが乗っている。
リルと同じにならなくて気が楽な優斗たちだったが、そのせいか手綱さばきを失敗して馬車の車輪が歪んだ。
リルがまた、あーだこーだと言いそうだったので和泉に先に行っておけと合図する。
場所はアリーが知っていたので、残されたほうも問題はない。
分かった、と和泉が頷いて馬車を先に走らせる。
そして20分後、リルが指定した国境にたどり着いた。
何もない、どちらの国にも属さない草原に、栗色の髪をたなびかせたイケメンが立っている。
リルは颯爽と馬車のドアを開けるとイケメンに飛びついた。

「お兄様！」

飛びつかれたイケメンは最初こそ柔和な表情を浮かべたが、すぐに険しい表情になる。

「リル。悪いがまだ討伐はできていない」

「……っ！　そ、そうですか……」

「3日前も空に逃げられてしまって、今は捜索隊が探しているところだ」

二人して深刻そうな表情を浮かべているが、後ろにいる卓也たちには何のことだかさっぱりわからない。
イケメンの視線が卓也たちに向いた。

「これは、リルの学友か」

さわやかに挨拶をするイケメン。
リルにそっくりな奴かと思えば予想外。
兄妹でどうしてここまで違うのか、と卓也は問い詰めたくなる。

「私はリルの兄でイアンと言う。妹が迷惑をかけているとは思うが、よろしく頼む」

王子だというのに頭を下げるイアン。

「ほん――」

本当にな、と和泉が言おうとしたところでレイナが高速でわき腹に肘打ちを入れる。
代わりに卓也が答える。

「いえ。オレたちはもリル様の護衛として来てますから、ご学友なんて大層なものじゃないです」

謙遜しているように言っているが、つまりは友達なんかじゃないと暗に言っている。
が、その隠された意味に気付かないイアン。

「いや、そんなことはないはずだ。リルも皆と一緒にここまで来れて心強いと思っているはず」

ニコっと笑うイアン。
レイナが卓也に続き言葉を交わす。
「もうしばらくしたらアリシア様もいらっしゃいます。それまではこのまま、この場所で待とうと思うのですがよろしいでしょうか？」
予想外な名前が挙がってイアンは驚くが、すぐに笑みに戻して、
「そうだな。アリシア様にも少し話したいことが――」
『ここにいたか！　第１王子に第４王女ッ！！』
イアンが穏やかに返そうとした瞬間。
突如、空より声が振ってきた。
卓也も和泉もレイナもイアンも。
全身が総毛立った。
「なんだ！？」
全員が上を見た。
漆黒の竜がものすごい勢いで地面に向かっている。
「さすがというべきなのか、どう思うべきか」

「……優斗の嫌な予感が当たり、か。しかしこんな早々に来るとは優斗も思っていなかっただろう」

漆黒の竜が地面へと降り立つ。
大きさとしては１０メートルほどなのだが、威圧感は今まで見たことのある竜種とは比べ物にならない。
レイナとイアンは前に出て剣を抜く。
和泉は二人のフォローに回ろうと銃を抜き、卓也は震えているリルを後ろへと押しのける。

「……っ！　な、何を――ッ！」

「黙ってろ！」

冷や汗が出る。
圧倒される。
これは今まで卓也たちが見てきた魔物よりも強い。
しかも現状で一番の問題は最強の戦力というべき修と優斗がまだたどり着いてない。
どれぐらいの時間で来れるのかも把握できていない。
ならば、と。
和泉がまずは口を開いた。

「なあ、そこの黒い竜」

言葉を話せる魔物なら、少しの時間稼ぎくらいできるはずだ。

『なんだ？』

「悪いが、俺たちはどうしてあんたみたいな竜に王子と王女が襲われているのか知らない。よかったら理由を教えてくれ」

黒い竜は少し思案する仕草を見せるが、揚々と語り始めた。
どうやら自分の優位性を理解しているようだ。

『なに、簡単な理由だ。我に生贄を捧げるのはもうできないと言ってきたのだ。ならば王女を生贄にすれば数年はやめてやろうと言ってやり、こやつ等は納得した。そして第４王女を差し出してきた…
…ふりをして我を殺そうとしてきた。その筆頭だったのが第１王子、こやつだ』

「なぜ生贄が必要なんだ？」

『人間の肉、特に女の肉は上手い』

つまりは……なんだ。
女を食す竜を倒そうとしたのだが、イアン達は討伐に失敗しており逃げてきた。
イアンはそのまま勇者として討伐するために残り、イルは国外のリライト王国へと逃げていった。
そして状況報告するために会った瞬間、めでたく襲撃されたというオチか。
和泉は小さく舌打ちする。

――神がかり的な運の悪さだな。

優斗たちがいないのが、さらに拍車を掛ける。

『さあ、理由も分かったところで我を騙したのだ。貴様ら全員喰っ

てやろう』

予想以上に時間稼ぎができなかったことに和泉が焦る。
しかも標的はなぜか全員に摩り替わった。
黒い竜の目つきが変わる。

『――死ね』

黒い炎弾が、竜の口から生まれる。

「全員、避けろ！！」

レイナが声を張った。
イアン、和泉が左右に避け、卓也はリルを連れて下がる。

「イアン様！　お一人なのですか！？」

レイナが避けながら訊く。
彼一人でこの魔物を倒せるわけもない。討伐隊は近くにいないのだろうか。

「……ああ。黒竜――ダークネスドラゴンに悟られないためにも一人で来たのだが」

イアンの返答にレイナは舌打ちする。
狙われているのが分かっているのなら、どうして一人で来た。
国境ならば安全だとでも思ったのか、この兄妹は。
それに感覚で理解させられる。

――この魔物はSランクだ。

Sランクの魔物は、上級魔法を十分に扱える熟練者が最低でも6人いなければならないレベル。
最低でそのレベルなので、Sランクに数えられていても討伐必要人数が10人にも20人にも跳ね上がる魔物だっている。
少なくとも目の前の魔物は……6人程度じゃ倒せそうにない。

『王子と騎士は反応が良いようだが……』

黒竜が翼を振るう。
それだけで中級魔法規模の風が渦巻いた。
狙いは……和泉。

「イズミ！　避けろッ！」

レイナが気付くが、遅い。

「……ぐっ……！」

直撃を受け、10メートルほど吹き飛ばされる。

「貴様！　よくもリルの学友を！！」

イアンが剣を神々しく光らせながら切りつける。
が、鱗に薄い傷をつけるのみで、致命傷にはならない。
お返しとばかりに黒竜が左前足を振るい、イアンの右腕をへし折りながら身体ごと吹き飛ばす。

「お兄様！」

「バカ、お前は逃げるんだよ！」

リルが吹き飛ばされたイアンの下へと向かおうとして、卓也が必死に止める。

「タクヤ！　リル様をそのまま逃が――」

直後、今度は黒竜の尻尾がレイナに飛んでいく。

ギリギリで剣を腕との間に挟み、威力を軽減させたが膂力が人間とは明らかに違う。

力そのままに剣を折られレイナも２０メートルは吹き飛ばされる。

「……くそっ！」

空中で体制を立て直し着地をするが、吹き飛ばされるほどの衝撃を受けているせいか迂闊にもよろけて膝を着く。

しかしその数秒が命取りになる。

黒竜はすでに卓也たちを向いていた。

そして口にはすでに何かが渦巻いている。

「ドラゴン……ブレス？」

竜族が使える風の魔法。

衝撃波がそのまま敵へと向かう技だが、Ｓクラスの竜が使うとなれば上級魔法の中でも高威力の魔法と匹敵するのは必然だ。

レイナは撃たせまいと身体に鞭を入れて駆け出すが……遅い。

――間に合わない。

和泉を吹き飛ばし、イアンを吹き飛ばし、レイナをも吹き飛ばす。

全てはこの一撃をリルに見舞うために行ったことだ。
護衛で来たのにこの言葉しか使えないのが自分で腹立たしくなるが、
それでも叫ばずにはいられなかった。
たとえ間に合わないものだとしても。

「逃げてくれ、タクヤ！！」

別に大切ってわけじゃない。
出会ってから1週間しか経ってない。

――なんだけどな。

けれども1週間も従者の真似事をしていたからだろうか。
こんな状況だからだろうか。
彼女を守らないといけないって思ったんだ。

――あの時、笑い話になって終わった話のように。

◇　◇

黒竜が吼えたと同時に、イアンに向かおうとしていたリルが恐怖を浮かばせた。

「逃げてくれ、タクヤ！！」

レイナが叫ぶ。
暴れていた体が突如として静かになるが、彼女を引っ張って逃げる

には時間がなかった。

――どうする。

黒竜が何か魔法を放とうとしている。
何をどうしたって喰らう。
じゃあ、何もせずに黙って喰らえばいいのか？

「……ざけんな」

ふざけるな。
何も足掻かずに諦められるわけもない。

――オレは修や優斗じゃないけど。

チート性能じゃないし。
馬鹿げた努力もしてない。
それでも同じように異世界に来たんだから。
守られるだけの、あいつらのお荷物になるのはごめんだ！

「求めるは――」

優斗は言ってた。
できると信じているから頑張れると。
なら信じろ。
修ほどの才能はなくとも。
優斗ほど努力はしていないけれど。
これは使えると。
発動できると信じぬけ。
これ以上、あいつらに心配かけさせないためにも。

――リルを絶対に守りぬけ！！

右手を前に突き出す。

「求めるは聖衣、絶対の守護ッ！！」

卓也が唱えた瞬間、彼の目の前には白く光り輝く防護壁が生まれる。
聖属性の上級防御魔法。
使えるかもと思われ続けて、使えなかった魔法が卓也の眼前に輝く。
直後、衝撃波が守護の壁が衝突する。
その衝突の重みが卓也の右腕に圧し掛かる。

「……この……ッ！」

気合で耐える。
後ろにはリルがいる。
耐え切れなかったら死ぬのは自分だけじゃない。
卓也は右腕を力の限りに突き出す。
その姿を見て、リルは怯え困った表情を浮かべながらも弱々しく悪態をついた。

「あ、あたしは守ってくれなんて言った覚えない」

「お前の都合なんて知るか！！　オレが守りたいんだよ！！」

叫ぶ。
このやり取りでさえ、今は自分を発奮させる材料だ。

「オレは絶対に守るって決めたんだ！」

しかし、向こうの威力が強まる。

圧迫された結果なのか、右の腕には裂傷が走り爪先からは血が溢れた。

痛みで悲鳴をあげそうになるが、耐えて左手を添える。

「ねえ、もうやめてよ。死んじゃうよ」

泣きそうな表情をリルが浮かべた。

こんな顔もするのかと、卓也は少し驚く。

「そうなったらお前も一緒に死ぬから絶対にやめない。それに似合わないぞ、そんな顔」

言って笑う。

虚勢だろうがなんだろうが、今は笑みを浮かべるべきだ。

「あと、ちょっとだから」

「……何が？」

「あとちょっとで……修たちが来る」

親友がやってくる。

「き、来たってどうしようもないじゃない！　お兄様でもやられてしまうのよ！」

イアンとてリステル王国の勇者だ。
実力はある。
だけどれども、

「残念ながらうちの勇者と一般人、二人の親友は規格外でね。あれぐらいでもサクッと勝っちゃうんだよ」

裂傷が肩まで届く。
それがどうした。
自分が限界まで頑張るんだ。

「嘘とか思うかもしれないけど」

ドラマのように。

「本当なんだ」

アニメのように。

「きっと、あいつらがどうにかするから」

なんとでもしてくれる。

「……ったく」

直後、傍らを走りすぎていく姿が見えた。
見慣れている影が一つ、二つ、三つ。

「……ホントにさ」

ベストなタイミングっていうのを弁えてる。
謀ったかのように来るのはもはや、一種の天命だろう。
呆れるように笑う。

「最高だよ」

一番、カッコいい瞬間に。
一番、やって来てほしい瞬間に。

「最高だよ、お前らは！」

あいつらは颯爽と。

「「「　求めるは風切、神の息吹！！　」」」

やって来るんだ。

◇　◇

優斗と修とアリーが３人同時に風の上級魔法を放つ。
３人分の威力を喰らえば、黒竜といえども５０メートルは飛ばされる。

その隙にアリーは和泉とイアンの様子を見に行き、優斗と修は卓也たちに近づく。
ポン、と卓也の肩を優斗と修が叩いた。

「よく頑張ったね、卓也」

「さすが守りに関してはお前が一番だわ」

「遅いんだよ、バカ」

卓也が軽口で返す。

「ごめんね。道が混んでたんだ」

「ヒーローは遅れてくるもんだろ?」

「バーカ」

笑い合う。
が、修が不意に真面目な表情を浮かべた。

「全員、無事か?」

ぐるりを周りを見回す。
まずは遅れてレイナが合流した。

「私はまだ戦える」

「アリー、他はどうだ?」

「和泉さんは特に外傷ありません。ノビてただけなのでビンタしたら起きられました。イアン様はすぐに治療が必要ですわ」

和泉が頭を振りながらやって来る。

イアンはアリーに支えられながら優斗たちのところまでたどり着く。

「とりあえず事情は分からんが、あの竜をぶっ飛ばせばいいんだよな？」

「そうだよ」

簡潔に言えばそういうことだったので、卓也が頷く。

「まだ戦えそうなのはレイナと和泉だけど……どうする？　別に僕と修だけでやってもいいけど」

むしろ一人で相手をしたとしても余裕はある。

「借りは返す主義だ、私は」

「さすがに今回は俺も同意見だ」

レイナは当然のように、そして和泉は珍しく瞳をギラつかせた。

関係ないのに巻き込まれたのだ。

やり返すに決まっている。

「分かった。んじゃ、アリーはそいつらの子守を頼む。卓也はアリーのフォロー。怪我してやばいだろうけど気合でなんとか守れ」

名指しされた二人は頷く。

が、さすがに黙っていられない御仁がいた。
イアンだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　リステルの問題を君たちにやらせてしまうわけにはいかない。それに黒竜の強さを見ただろう！？逃げてくれ！」

レイナ達に同意を求める。
さきほど、手も足も出なかったのだ。
彼らが来たところで状況が変わるとも思えなかった。
しかし、アリーが絶対の意思を込めて告げる。

「イアン様。わたくし達に手を出した以上、わたくし達の問題にもなっているのです」

大切な友人たちに攻撃をしかけた魔物なのだ。
国という問題で量る必要もない。

「そういうこと。悪いんだけどよ、俺らの仲間に手を出した時点であいつは敵だ」

「しかしっ！」

それでもイアンは引き下がらない。
だからアリーは申し訳ながらも絶対の自信を持って宣告する。

「それにシュウ様はリライトの勇者なのですから、平気ですわ」

告げたと同時に遠くで黒竜が動き出すのが見える。
修はイアンを見ると、腰にある剣に目をやった。

「けどアンタの俺達を想う気持ちを貰っとくよ。剣、借りていいか？　同じ勇者だから使えるだろ？」

唐突に言われて驚くが、イアンは訊かれたことに素直に答えた。

「あ、ああ」

「この剣の名前は何て言うんだ？」

鞘ごと剣を受け取る。

「聖剣、エクスカリバー」

「おお。カッケー名前じゃん」

自分達の世界にある剣と同じ名前だ。

受け取ってから修たちは歩き出す。

「……む、そういえば先ほど剣が折れてしまったな」

魔法を使えばいいが、騎士を目指す者として剣がないのは不安でもあった。

「簡単に折られるの？」

「そうだな。力だけで持っていかれた」

「レイナさんって刀を使ったことある？」

「剣の形をしているものは、大抵は触っている」

それなら、と優斗は手を前にかざす。

魔方陣が生まれ、折りたたまれていき、一振りの刀と成す。

「布都御魂。普通のより長いけど、レイナさんならどうにかなるでしょう」

優斗はレイナに手渡す。

「前にも見たと思うけど属性付与として雷。一応は神剣の類になるから折れないと思うよ」

これを見たのは2回目だからレイナも平然と受け取る。

しかしレイナは後ろを見ずとも、だんだんと遠ざかっていくイアンとリルが驚愕の表情を浮かべているのが手に取るように分かる。

苦笑しながらレイナは前方を見据える。

優斗たちが来たからだろうか。

神剣を手にしたからだろうか。

先ほどまでは恐ろしかった相手だが、今はもう恐怖を感じる必要性がない。

むしろ早く倒したいとさえ思う。

それは和泉も同じだ。

二人は視線を交わして頷く。

「さて、と」

大技を使っている最中にカウンターで喰らった魔法のダメージが抜けず、未だふらついている黒竜の前まで来ると優斗と修が一歩前に出る。

そして修は預かった聖剣を黒竜に向けて突き出した。

「俺達の親友を傷つけてくれた礼だ」

「問答無用」

「絶対的に」

「完膚なきまで」

「倒してやるよ」

「殺してやるよ」

「タ、タクヤ。先ほどユウトが魔方陣を出したらそれが剣になってたわ」

目を点にしてリルが驚いていた。

「そうだけど」

「どうしてそんなに落ち着いてるの！？」

「いや、言っただろ。規格外だって」

そう伝えたはずだが。

「限度ってものがあるでしょ！」

「俺に言われたって困る」

あいつらの限度がどれくらいなど自分が知るわけもない。

「それにあんただって聖魔法使ってたじゃない！　しかもあれって高位神官じゃないと使えない魔法よ！」

「一応、俺も異世界から来てるし」

それぐらいの利点は貰ってもいいだろう。

「……なんなの？　あんたたちって、とんでも集団なわけ？」

「俺を混ぜないでほしい。あの二人と一緒にされたら、さすがにへコむ」

とんでもレベルが違いすぎる。

一方でイアンもアリーから治療を受けながら質問をする。

「リライトの勇者ともう一人の人物はどれほどの強さを？」

「……正直なところは分かりませんわ。全力を出しているところを誰も見たことがありませんから」

「そうだな。あの二人で勝負するくらいしか見れないんじゃないか」

「しかしながら彼らの話を察するに黒竜程度ならば、シュウ様かユウトさん一人で対応できてしまうのでしょう」

「リライトの勇者は強いと言われているが……そこまでか」

「おそらく歴代の中でも指折りの勇者なのだと思いますわ」

さすがに黒竜を一人で相手できる、という勇者はリライトでもそういなかったはずだ。

「ならばもう一人の彼は？　先ほどリルが言ったように、とてつもないことをやっていたが」

自分はあんな魔法、知らない。

「前にシュウ様も同じ事をなさっていましたから、おそらくはこの世界にある魔法の一つだとは思うのですが正確なところは分かりかねています」

修はあれでこの世界の魔法に忠実だ。

勇者の刻印の導きによって、そのような力を教えられてたのかもしれない。

だが、優斗は別だ。

「とりあえずユウトさんについては、御伽噺に出てくる大魔法士とでも思ってください。それが一番納得できますわ」

彼だけは常識の枠に収めるのは無理だ。

なにせ使っているのは異世界の魔法なのだから。

◇　◇

ふと修は思い出す。

「なんか、去年話したこと思い出すな。卓也が守って俺らがなんとかするってやつ」

「……ん？　ああ、あの話か」

ふらついている黒竜を前に余裕綽々で話す。

「殺すに倒す。それじゃあ和泉は埋める係だね」

「なんの話だ？」

さすがに去年に話したことなので、レイナは知る由もない。

「くらだらない与太話だよ。とはいえ、それに従うのも面白そうだね」

ゲームの台詞から取り出した、どうでもいい話。

それでもなんとなく、あの話の流れに乗ってみようと思った。

「それじゃ、あの竜をどうにか取り押さえといて。1発で殺すから」

「承った」

「はいよ」

「わかった」

3人が頷く。

そして興味深げに和泉が優斗に訊く。

「今回は何を使うんだ？」

「極大消滅呪文を元にした、なんと宮川さん初のオリジナル詠唱で

す」

というのも、参考の魔法をそのまま使おうと思ったら使えなかったので、改良が必要だっただけなのだが。

「やっばい。カッコよさそうじゃん」

「楽しみにさせてもらう」

「期待させてもらうか」

修、レイナ、和泉それぞれが笑みを浮かべながら飛び出す。
優斗はそのまま、場で陣取る。
最初に切りかかったのはレイナ。
右側から黒竜の右足に切りかかる。
多少はふらついていても視界に映っているはずなのだが、黒竜はよけるそぶりすら見せない。
それが間違った判断と知るのは切られた瞬間。

『……なにっ！？』

「神剣だからな。貴様の鱗など容易く切り裂ける！」

いとも容易く鱗も肉も切り裂き、そのまま2撃目を入れてバックステップで後方へと退く。
その間に和泉は6発の弾丸を竜を囲むように地面に撃ち付けた。

「開け」

言葉とともに、弾丸から魔方陣が浮かび上がる。

「冗談で覚えておいた落とし穴を作る地の中級魔法。使い方によってはこうもできる」

同時に黒竜を中心として地面に穴が生まれた。
巨体ゆえに沈み込むこともないが、それでも足が埋まるくらいは陥れられる。

『小賢しいわ！』

翼を羽ばたかせ空を飛ぼうとする。
が、そんなことを許すわけもない。

「単純なんだな、お前って。甘えよ」

風の魔法を使って上空にジャンプしていた修が聖剣を構える。

「頼んだぜ、エクスカリバー。切り裂け！」

怒号と共に煌いた聖剣が光る刀剣を伸ばし、黒竜の右翼を根元から切り落とす。

『――ッ！！』

黒竜の悲鳴が轟く。
しかし、それに負けない声で修が叫んだ。

「決めろよ、優斗！」

右手の前に一つの魔方陣が浮かび上がる。

『古より伝わりし浄化の炎』

続いてもう一つの魔方陣が左手より生まれ、二つの魔方陣が重なるように浮かび上がっていき、両手を合わせると共に、

『混じりては終焉の氷結』

魔方陣が弾けた。
しかし続けて紡いだ詠唱と共に、

『刹那にて砕きは纏い上げ』

弾けていった魔方陣が集い、今度は足元に先ほどより大きな陣として生まれ変わる。

『求めるは月をも穿つ一弓、消滅の意思』

合わせた両手が白く輝いた瞬間、優斗は手を左右に開く。
左手に光る弓が現れ、右手には弦をを引いた状態になっている一筋の光る矢が存在していた。
そして初めて作った魔法の名前を小さく告げる。

『虚月』

右手から矢が離れた。
放った瞬間、矢は極大の光を纏い地面すらも削りながら黒竜に向かう。
そして突き刺さる。

「……よし」

一瞬だった。
修に翼を切られ、悲鳴をあげていた黒竜に矢が刺さり貫き後方から押し迫る光に触れられた瞬間、まるで存在しなかったかのように跡形もなく消滅した。

「はい、終了」

パンパン、と手を叩く。

「やっぱ4人もいると楽だね。魔法だけ使えばいいんだから」

「だな」

「あの魔法、俺には絶対に向けるなよ。いいか、絶対だ」

「え？　フリ？」

「違う。お仕置きであんな魔法使われたら俺の身が持たない」

手加減したものでも喰らいたくない。

「それもそうだが……私としては1発ぐらいはいいんじゃないかと思うぞ」

4人で笑いながらアリー達のもとへ戻ると、案の定というかなんというか、驚愕の表情を浮かべたイアンとリルのお出迎えを受けた。

「これ、サンキューな。使いやすかった」

「いや、それは構わない……のだが」

もう、何て言ったらいいのか分からなかった。

特に優斗と修だ。

自分の聖剣を使って黒竜の翼を切り落とすし、優斗に至っては神話魔法……なのだろうか。少なくともそれと同じ威力の魔法を平然と使う。

何がおかしいか、と問われたら何もかもがおかしかった。

ただ、それでも気になることが一つ。

「もし君たちが全力で戦った場合、どうなる？」

イアンは視線を優斗と修に向ける。

唐突に問われたことに首を傾げる二人だが、少し真剣に考えてみる。

そして結論を出した。

「たぶん……でよろしいですか？」

「ああ、構わない」

「世界がやばいですね」

優斗の一言にイアンとリルは絶句する。

他の面々はなんとなく、そんな予感がしたので驚きはしなかった。

「世界……というと、この世界全てということか？」

「ええ。修はともかくとして、僕の最強の魔法となると……下手したら扱いきれませんし、扱えきれなかったら世界滅亡です」

平然と言う優斗にイアンはアリーを見た。

「アリシア様が言ったことがよく分かった。確かに御伽噺の存在だ」

「でしょう？」

「この二人は使えば国家統一も夢ではないと思うのだが……」

「他国の貴方ならばそう思われるでしょうが、無理ですわ」

「なぜ？」

「だって当の二人が……」

アリーが修と優斗に視線を送ると、

「だるい」

「面倒」

という返答がくる。

アリーは苦笑して、

「ということなので、この二人は自国防衛限定です。平和主義者のお二人ですので、無理に他国を侵略して戦争など行おうものなら、リライトがこの二人に滅亡させられてしまいますわ」

「そうか」

他国の王族としてはほっ、と一安心する。

「では憂いも無くなったことで話を変えさせてもらう。リル、お前はこのまま国に帰るか？」

話を振られてリルが驚く。

「え？」

「お前を狙っていた黒竜は倒された。ゆえに狙うものもいない。帰ってきても問題はないが」

「……」

リルはちらりと卓也を見る。

「タクヤ、お前はどう思うの？」

「オレ？」

卓也はなぜ自分に話題を持ってきたか分からなかったが、素直に答える。

「別にどっちでもいいよ。残りたかったら残ればいいし、帰りたかったら帰ればいい」

卓也のその答えにリルが少し憤慨した。

「で、でもお前はあたしを守るっていったじゃない！」

「それはお前が黒竜に襲われたんだから、１週間ぐらい従者の真似事してたらそう思ってもいいだろ」

それぐらいの情は持つ。

「だ、だからあたしがリステルに帰ったら守れないのよ！？」

「でも誰かに狙われることなんてもうないだろ。それにお前が残ったってオレはもう従者の真似事なんてしないし、別に平民に守られたくもないだろ」

あんだけ貶しているんだから。

「それは……」

ぐっ、と押し黙るリル。

「さらに言うなら、オレは平民ってだけで他人を貶す奴は嫌いなんだ。短い期間だと思ってたから我慢もできたけど、今のまんまだったらオレはお前に関わんないよ」

「え……？」

「それに皆も同じだと思う。生まれだとか血筋だとか興味ない連中が集まってるんだ。別にオレらとお前は友達じゃないし、お前が残るって言うならオレらと関わることはほとんどない。もし俺らが理由で残ろうと思ってるなら、素直に帰ったほうがいいって」

卓也に言われてリルは他の面々を見てみる。
あからさまに顔を背けたり侮蔑の視線を向けたり、苦笑いや困った表情をしていた。
卓也が言ったことが真実だと彼らが示していた。

――あいつらはあたしが客だから面倒見てた。それ以上でもそれ以下でもないってことね。

けれど、そこらへんは分かってる。
自分だって理解して扱われていた。
それでも驚いてしまったのは。
卓也までそうだったとは……思っていなかった。
彼だけはどうしてか違うと思ってしまっていた。
なぜだろう。
卓也に侮蔑されるのはすごく嫌だった。

「だ、だったら」

リルは力強い瞳を卓也を見る。

「なんだ？」

「あたしが変われればいいのね？」

「……はぁ！？」

唐突な宣言に卓也が驚く。

「あたしが変われば問題ないわよね？」

「いや、それは確かに問題ないけど……変えられないだろ、普通はそういうの」

「変わってやるわよ」

力強く言ってのける。

「できるのか？」

「そう思うのなら、証明してやるわ」

リルは胸元にあるペンダントを取る。

「お兄様。これからすることに対しての証人として見ていてください」

リルの行動が何を示すか分かったのか、イアンは顔をしかめる。

「そこまでするのか？」

「あたしの本気を見せないとタクヤは納得しません」

「……まあ、問題になるとは思うが自分でどうにかしろ」

「分かってます」

他の人たちには分からないやり取りがされる。

「タクヤ、少し屈みなさい」

「……？　わかった」

とりあえず、素直に屈む。

すっ、と卓也の首にリルがペンダントをかけた。

「これ、なに？」

「め、目を瞑りなさい」

「いや、その前にこれ――」

「いいから、目を瞑りなさい！」

リルに押し切られて、しぶしぶ目を瞑る卓也。

「……ふぅ」

大きく深呼吸をしてリルは宣言する。

「これより、タクヤを生涯の隣人とすることを誓います。彼の者にいかなる困難があろうとも、側に寄り添い支えることを誓います。彼の者がいかなる災厄になろうとも、信じ続けることを誓います。彼の者にいかなる不幸が降りかかろうとも、助け続けることを誓います」

そして前に一歩出て、卓也の頬にキスをする。

頬に触れた感触に驚いた卓也が目を開き、状況を確認した瞬間に顔を真っ赤にして一歩下がった。

「え……!?　はぁ!?　い、今のなに!?」

「言ったじゃない。本気を見せるって」

「なんだそれ!?　これの何が本気なんだよ!?」

「私の国に伝わってることよ」

「こっちはこの世界に来て半年ちょっとしか経ってないんだ!!知るか!!」

あまりの出来事にテンパっている卓也。

「知るか……って何よ!!　せっかくキスまでしたんだから!!」

あ～だこ～だと口ケンカを始める二人。

それを尻目にアリーはイアンに訊いてみた。

「あれ、どういう意味があるのです？」

「古来より大切な人に送る言葉、とされている。自分の物を送ると同時に告げることで『貴方が大切です』という意味を持たせる、生涯に一度しか使えない言葉なのだが……」

そこで困ったようにイアンは頬をかき、

「最近はプロポーズによく使われている」

「……あ～、なっとく」

「たしかに、そう取れますわね」

「というかそういう意味だと思ってたよ」

「そうだな」

「俺もそうだと思っていた」

言い合っている二人をしみじみと見る。

おそらくリルの意味合いとしては前者とはいえ、

「出会って1週間しか経ってないのに、何がそうさせたんだろうな？」

「卓也が守ったのが原因じゃね？」

「つり橋効果かな？」

「どういう意味だ？」

レイナが訊く。

「今回の場合は黒竜に襲われて心臓がドキドキしているのを、卓也にドキドキしていると錯覚したこと」

「……なんとなくロマンがありませんわ」

「それじゃ、どうするよ？」

「運命でいいだろう」

「いいのか、それで？」

「いいんじゃね？」

「そうだね。少なくとも吊り橋効果って言うよりは良い理由だと思う」

未だに舌戦を繰り広げている二人を見ながら、優斗たちはそんな風に二人をほほえましく観察していた。

王女様、誓います（後書き）

今回の詠唱はＴＯＤ２を使ってます

運命の出会い（嘘）＆（本当）

つい先日の昼休みのことだった。
運命的なことがあった。

「あっ……」

学院の階段で躓いて落ちかけた。
反射的に目を瞑る。
そして衝撃。
けれど、予想に反して衝撃は軽かった。

「あれ？」

瞑っていた目を開けば、自分は倒れておらず、誰かが身体を支えてくれていた。
支えてくれている手を辿って顔を見ると、知らない顔の男性だった。
視線が合うと、彼は笑みを浮かべた。

「大丈夫ですか？」

「は、はい！」

ゆっくりと彼は自分を起こして立たせると、支えている手を離した。

「危ないですから気をつけてくださいね」

そう言って、その人は友人と歩いていった。

途中で一緒にいた友人から「ギャルゲだとフラグだな」とか自分には色々と分からないことを言われて、友人の頭を小突いていた。

落ちたことと助けられたことに驚いて後姿を見てるだけしかできなかった。

あっ、と感謝の言葉を忘れていたことを思い出すが、もう姿は見えない。

「2年生だったよね」

服装からして一つ上の上級生だということが分かる。

「ちゃんと……お礼を言わないと。いえ、お礼はしなければいけないわ」

◇　◇

翌日、お礼としてクッキーを持って2年生のクラスを周って見た。
そして、あるクラスにある集団で見つけた。
有名なクラスだった。王女様がいるクラスだったから。
教室の中に入ろうかどうか悩む。
上級生のクラスに単身で乗り込むのは初めてのことだった。
どうしようかとドアの前で少し悩んでいると、声を掛けられた。

「どうかなさいましたか？」

振り返って後ろを見る。

「……あっ……」

王女様だった。

「ア、ア、ア、アリシア様！？」

「誰か探しているのですか？」

驚く自分に、にこやかに笑みを浮かべながら王女様は再度尋ねてくれた。

「い、いえ！　アリシア様のお手を煩わせるようなことでは……」

「そんなに緊張されないでください。今のわたくしと貴女は上級生と下級生という間柄ですわ」

そう言われても無理なものは無理だ。

緊張で背筋が伸びる。
それに王女様はもう一度笑って、

「とりあえず教室に入りましょう」

自分の背中を軽く押して教室の入っていった。
幾人かクラスの人たちが自分を見たが、すぐに目を逸らす。
すぐに興味をなくしたようだ。

「それでどなたをお探しなのですか？」

「え、えっと……あの人、です」

指差す。
王女様はその先にいる集団を見て、私を従えながら躊躇なく歩き始めた。

「ユウトさん、お客様ですわ」

「客？」

「ど、どうもです」

王女様の背中から顔を出す。
けれどユウトと呼ばれた昨日助けてくれた人は眉根に少し皺を寄せたままだった。

――あれ？　もしかして覚えてないのかな？

衝撃的な運命の出来事だったのに。

「優斗。昨日の階段で助けた子だろ」

昨日、一緒にいた友人がそう言ったことで助けれくれた人は「ああっ」と納得したように手をポン、と打った。

「昨日は災難でしたね」

「い、いえ。助けていただいたのにお礼も言わずにすみませんでした」

「それを言うために来たんですか？」

「はい」

「そんな。ちょっとした出来事だったんですから、お礼を言われることでもありませんよ」

「そ、それでも助けていただきましたし。あとこれ、お礼の品です」

手に持っていたクッキーの袋を渡す。

少し驚いた表情を助けれくれた人はしたけれど、すぐに笑顔になって受け取ってくれた。

「ありがとうございます」

「そ、それで、ですね！　もし放課後、時間があればもっとちゃんとしたお礼をしたいと思うんですけどどうですか！？」

緊張のあまり、一気にまくし立てて話してしまった。

助けれくれた人どころか、周りの人たちまでポカンとした表情をしている。
けれど、その中でも助けれくれた人はすぐに表情を戻すと、

「すみませんが、放課後はちょっとした予定がありますので。それにお礼ならクッキーだけで十分です。これ以上は貰いすぎになってしまいますよ」

やんわりと断った。

「そ、そうですか。それでも最後にもう一度、ありがとうございます」

断れたことに小さくショックを受けながら頭を下げて、その場を立ち去る。

◇　◇

クラスの友人にそういうことがあったと話す。

「あんた、そうやってすぐに運命と関連付けるのやめなさいよ。毎回、それで間違ってたじゃない」

「今回は本当よ。あれこそ運命の出会いだわ」

「……はぁ。曲がり角でぶつかったぐらいで運命感じるくらいだから、言っても無駄だろうけど」

友人がため息をつく。

「ちゃんとクッキーだって受け取ってくれたし、これは好感触」

「はいはい、言ってなさい」

呆れたように言われるが、問題はない。

あの出会いは運命なのだから。

◇　◇

というわけで放課後、尾行してみることにした。

“ちょっと”した用事なのだから、時間は余っていると考えていい。

助けれくれた人が少し遅れて学院から出たので、もう用事は終わったのかとも思ったけれどそうとは限らない。

様子を見て、もう用事が終わっていると見計らってから声をかけることにする。

一定の距離を開けて追っていたのだけれど、時折振り返ってきた。

そして少し首を捻る。

顔が見えないくらいの距離で人通りが多いのに、どうして違和感を

もてるのだろうか。
それがすごい。
さらに見えるか見えないかギリギリの距離を保つと、さすがに振り返ることはなかった。
と、途中で彼が話しかけられていた。その隙に近づいてみる。
話しかけたのは中年の男女と赤ちゃんだ。
赤ちゃんは彼に抱きついていった。

「二人はどちらに？」

「ちょっとした用事でね。王城に行くことになったのよ」

「それならマリカは預かっておきますね」

「いいの？」

「ええ。あとは帰るだけですし」

「それじゃお願いね」

「はい。義父さんも義母さんも気をつけて」

そう話して中年の夫婦は離れていった。
父さんと母さんと言っていたことからあの二人とは親子ということが分かる。
ということは、あの赤ちゃんは妹なのだろう。
そのまま数分ほど追いかけて、彼に偶然を装って話しかけることにした。

「ぐ、偶然ですね。用事ってもう終わったんですか？」

かなり自然に話しかけたのだが、彼は少し考えた様子を見せると、

「貴女でしたか。僕を追いかけていたのは」

いきなり真相を突いてきた。
ギクリ、とした表情が顔に出てしまったのだろうか。
自分の顔を見て彼はさらに納得の表情をする。

「殺気でも敵意でもなかったので違和感ぐらいしか感じませんでしたし、途中で違和感はなくなったので気のせいだと思ってたんですが」

間違ってなかったんですね、と付け加えられた。
彼の言葉に驚きと同時に尊敬を覚える。
何度も似たようなことをやってきたが、バレたのは初めてだ。
とはいえ、状況の旗色は悪い。
運命の相手なのだから、どうにか好転するとは思うけど。

「なぜ追ってきたんですか？」

「ど、どうしてもお礼をしたかったので」

「それは結構だと昼休みに言いましたよね？」

「そう……ですけど」

「はっきり言いますが、そこまでやってもらうことでもありません。僕と貴女は出会ったばかりで親しき仲でもないのですから」

真面目な表情で彼は自分を諭してきた。
それを彼が抱いている赤ちゃんは何か思ったのだろうか。
彼を見て、

「ぱ～ぱ？」

そう言った。

「……パ、パパ？」

突然の言葉にあんぐりと口を開けて彼を見た。

「ええ。この子は僕の娘ですが」

「……い、妹ではなく？」

「娘です」

断言された。
ということは、だ。

「奥さんも？」

「います」

これまた断言された。

「そ、それなら運命の出会いじゃないじゃないですか！！」

「……はい？」

彼が首を傾げる。
けれど自分は彼が運命の相手じゃないのなら、もう話す必要性も感じなかった。

「運命の出会いじゃないならいいです。さようなら！！」

そのまま踵を返して彼の元から去る。
歩いている途中、

「なんだったんだろうね？」

「あい？」

「マリカも分からないよね」

なんて苦笑して会話していたのが聞こえた。

◇　◇

そのまま寮に戻って友人に今日の顛末を話した。

「というわけで、運命の出会いじゃなかった」

「だから言ったじゃない」

「あ～あ、次こそは運命の出会いだといいなぁ」

「……あんた。今回も駄目だったのにこりないわね」

「いいじゃない。私はドラマチックな運命を求めてるんだから」

「……それじゃ一生、彼氏なんて出来ないわよ」

◇　◇

一方で優斗は優斗で、家の中で困っていた。

フィオナがマリカを抱きしめながらグチグチとマリカに言っている。

「何が『上手く立ち回ってるから』なんでしょうね。クッキーだってもらって……。まーちゃんもそう思いますよね？」

「あいっ！」

「ですよね」

マリカに肯定？　の返事を貰ったのかフィオナは、じとっとした目で向かいのソファーに座っている優斗を見る。

「あの、フィオナ？」

「……」

「フィオナ？」

「……」

「フィオナさん？」

「フィオナです」

「あ、そこは反応するんだ」

反射的に答えてしまってフィオナは顔を少し赤くするが、それでも視線は変わらない。

「フィオナって最初はいっつも話しかけたってだんまりなんだよね。なんか恒例のパターンになってる気がする」

「……優斗さんのことだと単純ですから」

フィオナの言葉に小さく笑うと、優斗は立ち上がってフィオナの隣に座った。

「何度でも言うけど、彼女は助けれたお礼にクッキーをくれた。僕と放課後会おうとしたのは僕を運命の出会いだと思ったから」

「わ、私のほうが優斗さんと運命の出会いをしてます！」

「……っ！」

不意打ちをくらう。

フィオナは素直な分、ストレートな物言いをしてくる。

いつになっても慣れないものだと優斗は思う。

「そ、そうだね。僕もそう思う。それにね、さっきマリカと一緒に帰ってきてるとき偶然に彼女と会ったけど、マリカが娘だと知ったら『運命の出会いじゃない』って言って帰っちゃったよ。もう会うことはほとんどないんじゃないかな。だからフィオナが気にすることは一切ないよ」

優斗がそう言うとフィオナは目をぱちくりさせて、そしてゆっくりと頭を彼の肩に乗せて目を伏せた。

優斗の身体がビクッとしたが、フィオナは言葉を発した。

「ごめんなさい」

「何が？」

「毎回、同じことやってますよね」

「そうだね」

「進歩、ありませんね」

「問題ないよ。それにマリカも今のママが好きだもんね？」

「あいっ！」

フィオナの腕の中にいるマリカが元気良く返事した。

「ほらっ。夫も娘さんも今のフィオナがいいって言ってるよ?」

優斗の言葉にフィオナはマリカを見て、そして優斗を見る。
優しい瞳をしている優斗と視線が合う。

「いいんですか?」

「もちろん」

優斗が頷くとフィオナもようやく笑顔を浮かべた。

「じゃあ、このままでいますね」

黙ってられない時もある

学院にも保護者会、というものはある。
その際には午後にある授業も保護者は見られるのだが。

「というわけで明日、見に行くわね」

「マリカはどうするんです？」

「もちろん連れて行くわよ」

「……マジですか？」

「マジよ」

真剣にエリスが答えた。

「何か問題があるんですか？」

どうしてなのか分からなくて、フィオナが訊く。

「……平穏に過ごしたい」

「ユウト、そんなもの異世界に来た時点で捨てなさいよ」

「それを言われると困りますけど」

「それにお友達のせいで平穏なんてないんだから、別にいいじゃない」

「……ごもっともです」

まったくもって反論できない。

「ただ、マリカを連れてくるなら僕のことを『パパ』と呼ばせないように気をつけてくださいね。その都度、嘘を考えるの面倒ですから」

優斗が言ったことにマリカが泣きそうになる。

おそらく『パパと呼ばせないで』に反応したのだろう。

「あぅ……」

「ち、違うよマリカ！　パパはマリカのパパだからね」

それに気付いた優斗は慌ててマリカをフィオナから預かって抱き上げる。

「ぱ～ぱ？」

「そうだよ。マリカのこと、嫌いになんてなってないから」

「あいっ！」

ぎゅ～っと抱きしめられて安心したのか、にこにことするマリカ。

それに安堵してほっ、と一息つく。

「大変ね」

「義母さんのせいじゃないですか」

◇　◇

参観できるのは実技の時間だ。

実技の時間は割と自由に動けることもあって、親と話す生徒の姿もちらほらと見られる。

優斗たち異世界組は親もいないので比較的のんびりといられるが、学院に通わせている親にとっては色々とあるため、子供だちも少し必死になっている。

学院の成績が良ければ出世コースにも乗れる。

文武両道ならばなおさら、だ。

貴族の両親には体面というものもある。

ので、今回の参観は普段よりもピリ、とした緊張感の中で行われている。

ちなみに優斗たちの出番を終わっており、のんびりと他の生徒の試

合を観戦中だ。

「おい、優斗。あれ見てみ」

修が向いている場所を見てみる。

そこにいたのはリルと卓也とアリーと、

「……何やってんの、あの人たち」

イアンとアリーの父親――王様だった。

「あれって一応、リステルの勇者とうちの国の王様だろ？」

「そのはずだけど」

「王様はいいとしても、そんな簡単に勇者って国から出てこれるのか？」

「知らないよ。もしかしたら伝えることが会って来ただけかもしれないし」

和やかに談笑しているところから察するに、そこまで大事な話になっていないと信じたい。

というより彼らの周りにいる貴族の親たちがイアンとリルとアリーと王様の姿に気付き、話しかけようとしているほうが、一つでも粗相があればこっちのほうが大事になりそうな気がする。

「フィオナのおばさんは？」

「もう来てるよ。さっきからフィオナが話してる」

視線を移せばフィオナたちも和やかに話していたが、リルたち同様に周囲にいる貴族親子が機会を伺っている。
公爵ともなれば接点を欲する下位階級の貴族も多いのだろう。
特に自分の息子がフィオナと恋仲や婚約でもすれば儲けものだ。

「優斗」

「なに？」

「めっちゃマリカがお前を見てる」

視線をマリカに固定させると、確かにじっと優斗を見ていた。

「行ってやったほうがいいんじゃないか？」

「だね。あの場所には行きたくないけど、行かなかったらマリカが泣くだろうし」

このままずっと留まったとしたら、マリカに泣かれかねない。
それだけは避けたかった。
優斗は腰をあげるとフィオナたちに近づく。
エリスがそれに気付いた。

「ユウト。さっきは格好良かったわよ」

「ありがとうございます」

エリスが親しげに話しかけ、それで唐突に現れた優斗に周囲の視線が集まる。

値踏みされているような嫌な視線だった。

「今のうちに慣れておきなさい」

「大丈夫です。こういった視線にはもう慣れています」

「……そうだったわね」

優斗の過去を思い出してエリスが少し暗くなるが、それを壊すようにマリカが優斗に手を伸ばした。

「あぅっ。あうっ」

「マリカがあなたに抱いてほしいって言ってるわよ」

昨日のことがあったからなのか、いつもより懸命にマリカが手を伸ばしている。

「エリス様。さすがに授業中ですので」

「“エリス様”？」

「……いや、本当に勘弁してくだい。周りに人がいるのですから」

「関係ないわね」

優斗は声を小さくして、

「……エリスさん」

「誰のことかしら？」

「……義母さん。今は授業中だから勘弁してくれませんか？」

「大丈夫よ。さっきフィオナだってマリカを抱いたけど文句言われなかったもの」

「……分かりました」

こういった場合はエリスも引かない。
諦めてマリカに優斗は手を伸ばす。

「おいで、マリカ」

「あいっ！」

マリカを抱きあげて、小声でエリスに優斗は尋ねる。

「何がしたいんですか？　義母さんは」

「さっきから周りが鬱陶しくて嫌なのよ。フィオナと仲が良い男の子がいれば落ち着くかと思って」

「……甘くありません？　僕は今のところ、平民ですよ」

「だって……」

と、ここで息子を引き連れた男性が寄ってきた。
息子はラッセルの取り巻きの一人だった。
どうやら優斗が親しげなのを見て、邪魔しに来たのか様子を見に来

たのかどっちかだろう。

「初めまして、トラスティ公爵奥方様。私は――」

ごちゃごちゃと自分と息子の説明をし始める。

「ほら来た」

「まったく、面倒ね」

相手に気付かせないぐらいに毒づいて、エリスは顔に笑みを浮かべる。

「男爵。申し訳ありませんが私は娘の様子を見に来ておりまして、こういったことはパーティでやっていただけませんか？」

笑みを浮かべながら一刀両断するエリス。

「しかし平民の相手をしている暇があるならば、こちらの相手をしていただいてもよろしいのでは？」

しかし相手も引かない。

息子がラッセルの子分だったとあって、父親も同じ考えの人間だった。

「平民？　それは一体誰のことを仰っているのでしょうか？」

「そちらの男のことですよ。息子から聞きましたが平民のくせに公爵や王族と親しげに話している礼儀のなっていない愚か者のことです」

テンプレのような台詞をよくも初対面の人間に言えるものだと優斗は感心したが、エリスは違った。
義息子にしてフィオナの相手だ。
それを貶すなど以ての外だった。
今まで、何を言われても耐えられると思っていたが、さすがに初めて頭にきた。

「何を勘違いしているのか分かりませんが、この場に平民なんていらっしゃいません。ここにいるのはミヤガワ子爵の長子、ユウト＝フィーア＝ミヤガワ。さらに言えばフィオナの婚約者で私の将来の息子になる子ならいますが、いったいどこのどちらと勘違いなさっているのかしら？」

挑発する笑みを携えて愚か者を見るような視線を向ける。

「し、しかし息子は彼が平民だと！」

「ならばアリスト王もあそこにいることですし、訊いてみますか？
それに息子さんから聞いてらっしゃるから知っておられると思いますが、ユウトはアリシア様と仲がよろしいのでアリスト王とも名前を覚えられるほど面識があります。是非ともご随意に」

そこまで言われると、さすがに引き下がるを得なかったのかすごすごと消えていく。

「……ああ、もう、面倒だったわね」

「やりすぎです」

「しょうがないじゃない。ユウトを貶されたらプツンと来てしまったんだもの」

「そこに関してはありがたいですが、公爵の奥方なんですから耐えてください」

「わかってるわよ。次はできたら気をつけるから」

と、続いて近寄ってくる影があった。
またか、と思った優斗とエリスだったが姿を見て驚く。
とたんに頭を下げた。

「よい。ここにいるのはアリシアの父親だ」

王様が優斗たちに寄ってきたのだ。
周りも注意深く観察していた。

「このあいだ、エリスが焼いたクッキーをマリカから貰った。ユウトには伝えたが美味かったぞ」

「ユウトからもそう伝え聞いております。お口に合い光栄でございます」

「ユウトもアリシアと遊んでくれてありがとう。前にマリカと一緒に遊びに行ったときのことを聞いている」

「いえ、アリシア様に付き合っていただいて、こちらこそマリカが喜んでおりました」

「そうかそうか」

王様が言っているそばから、優斗が抱きかかえているマリカが髭に手を伸ばしかける。
慌てて優斗はマリカの手を押さえた。

「別に髭をで遊ぶくらい構わないが」

「王様はよろしいかもしれませんが、なんでもかんでもやりたいようにやらせていたらマリカのためになりませんので」

「それもそうだな」

王様は小さく笑ってその場を去っていった。
続いて王様が向かった先に大半の注意が向かう一方で、優斗たちにも少なからず注目が残る。
その中で優斗とエリスは苦笑した。

「王様は気さくすぎて逆に困りますね」

「そうね」

◇　◇

――夜。

いつものようにマルスに誘われてテラスでお酒を飲む。

「義母さんが怒って言い返したときは焦りましたよ」

「気持ちは分かる。私でも言い返さないとは言い切れないからな」

「僕は別に構わないんですけどね」

「それほど大事なのだよ。私たちにとってユウト君はね」

「ありがとうございます」

少し照れくさくなって、コップのお酒を煽る。

「でも、これでフィオナと僕が婚約者というのが広まってしまうかもしれませんね」

「何か問題があるのかい？」

「いえ、特にはありませんけど」

「ならいいじゃないか。私達にしたって何も問題はない」

マルスもジョッキに注いである酒を一息に飲む。

「さて、と。これ以上飲むと怒られてしまうから、私は先に戻っているとしよう」

いつもは大体、一緒に戻るのに珍しくマルスが先に戻るといってきた。

「分かりました。僕はこれを飲んでから戻ります」

「ああ。ゆっくりするといい」

マルスが優斗の視界から消えて、一口お酒を含んでから空を見た。
月が満月を描いていたので気分が良くなる。
すると、マルスの代わりに一回り以上も小さい身体優斗の隣に座った。

「優斗さんも飲みすぎは駄目ですよ」

「大丈夫だよ。義父さんのペースに付き合って飲んでるわけじゃないから」

「ならいいんですけど」

安堵したように息をはいて、そしてフィオナは訊く。

「もしかしたら婚約者として学院で扱われてしまうかもしれませんね」

「そうだね」

聞いたのはクラスの極一部かもしれないが、それが広がらないとは限らない。

「いや……ですか？」

「なにが？」

「私が婚約者とみんなに思われることが、です」

「なんで？」

「だってまーちゃんの父親というのも周りに知られたくないようだったので」

「まあ、波風は立たないほうがいいからね」

けれど、と続ける。

「知られたって嫌じゃないよ。面倒だとは思うけど嫌じゃない」

「本当ですか？」

「本当だよ」

優斗は笑う。

「それなら、もし私が本当の――」

「フィオナ。待った」

と、フィオナが言いかけたところで優斗が止めた。

やっぱり嫌なのだろうかと一瞬だけ考えてしまうが、先ほど優斗が否定していたので違うと考え直す。

一方の優斗は立ち上がると窓ガラスへと歩いていく。

「何をやってるんですか？」

そして声をかけた。

「……」

「……」

「これ以上黙ってるなら僕の魔法の実験台にしますよ？」

ぼそりとえげつないことを言うと、

「そ、それは勘弁してほしい！」

「ちょっとした遊び心だったのよ！」

マルスとエリスが飛び出てきた。

「二人して何をやってますか」

「そ、それはだね」

マルスが言いよどんでいると、エリスがばしっと言った。

「娘と義息子のラブラブシーンが見たかったの」

「……ったく、二人とも正座！」

多少は酔っ払っていることもあるのだろうが、普段は修たちにしか言わないことをマルスたちに向かって言い放った。

「出刃亀をするような輩には説教をさせてもらいます！」

そう言って始まった優斗の説教は1時間を要した。

翌日、フィオナにも軽く説教をされて、マルスとエリスは二度としないと誓ったそうだ。

「そうそう、そうすれば精霊を使えるようになるから」

「魔法に似てるようで違うんですね」

「精霊には意思があるからね。彼らの意思を無碍にしちゃいけないんだよ」

「わかりました」

10月に入って少ししたころ、精霊使役の練習をしていた二人に家政婦から来客の知らせが届いた。

「ユウト様、お客様がいらっしゃられました」

「僕に？　誰ですか？」

「リステル第4王女のリル様でございます」

「……え？」

予想外な人物だった。
何しに来たのかが全くわからない。
フィオナと視線が合うが、彼女もよく分からないようだ。
とりあえず家の中に入れると、第一声にこんなことを言ってきた。

「お願いがあってきたの！」

◇　　◇

「へぇ～、あなたたちって婚約どころか結婚してたのね。ユウトのいる場所を聞いてビックリしたわ」

「……あー、色々と理由はあるんですが正式に結婚しているわけではなくて」

「だってこの間、ユウトが赤ん坊を抱っこしてるとこ見たときに訊いたらタクヤとかシュウが二人の子供だって言ってたわよ。それに指輪だってしてるし」

リルが指す先にはフィオナの膝の上にいるマリカ。
さらによくよく見れば二人が同じ指輪をしているのだからそう思うのは当然だ。

「……とりあえず説明しますので」

面倒ではあったが長々とこれからも関わっていくので、できるかぎりの説明を優斗は始める。

「この子がそうなんだ」

「ええ。龍神の赤ん坊なんです」

マリカの説明を聞き終えたところで、リルが思い出したように言った。

「って、そうだった。ユウト、あんたってタクヤ達に対してそんな喋り方じゃないでしょ」

「え？　いや、まあ、それはそうですが」

他国の王族に対して口調が変わるのは当然だ。

「あたしにも普通にしゃべりなさい」

「突然、どうされたんですか？」

優斗が尋ねるとリルは少し顔を赤くしながら、

「あ、あたしはあんた達が平民だからって無闇に下に見るとかそういうのはやめるって誓ってるじゃない」

「そうですね」

「だ、だったらあたしにも、その……」

リルは頬をかきながら、

「友達みたいに接してもらいたいと思うのは……普通でしょ？」

照れくさそうに言った。

同等に扱おうと思ったら、友達になってもらいたいと思うのは必然だった。

「だめ？」

そう訊くと優斗は首を横に振った。

「駄目じゃない」

願ってくれるなら歓迎すべきことだ。

「なら、友達としてお願いを聞くよ」

あらためて聞く体制をとると、リルは力強く言った。

「一緒にリステルに来てほしいの」

そしてどうしてリステルに行かなければならないのか、説明を始める。

「やっぱりというか何というか、あたしがやったことって少し問題

になってるのよね。他国の人間に王族が“誓いの言葉”を使ったことに対して、ね」

「そうなんだ」

「あの言葉は撤回できるものでもないけど、少なくとも説明はしないと納得もしてもらえなくて」

だからこそリステルに一度、戻ることになった。

「それで僕が一緒に行く理由は？」

「念のための護衛、っていうのが一番正しい理由だわ。僅かな可能性ではあるけれど、襲われる懸念もある。まあ、ないだろうけど」

「襲われる？」

「あたし、何人か婚約者候補がいたんだけど、そいつら全部を蹴ってタクヤに誓っちゃったから。もしかしたらっていう可能性があるし」

リルから“誓いの言葉”を得られれば、婚約者候補にとっては婚約者になれるのと同義だ。

ということは他国のタクヤに使ったのなら、逆恨みされる場合もあるかもしれない。

もちろん、未だに婚約者の候補という枠組みからは外れていないのも事実なのだが。

「でもタクヤには悪いけど、当事者だし一緒に来てもらうわ。他の人たちにはあたしのせいで手を煩わせるわけにもいかないから、ユ

ウトだけにお願いしたいの」

「国から護衛を呼んだりギルドに頼んだりしたら？」

「言ったでしょ。あくまで念のためにすぎないって。ほとんど旅行みたいなものよ。それにギルドや護衛よりあんた一人のほうがよっぽど強いじゃない。黒竜を魔法一発で倒したり本気になったら世界がやばいとか言ってるんだから」

優斗以上の護衛なんてほとんど存在しない。

「お願いしていい？」

「……へぇ」

リルの言葉に感嘆した優斗。

それが気になってぶっきらぼうにリルが訊いた。

「何よ？」

「本当に変わったね」

瞬間、リルの顔が赤くなった。

「ち、誓ったって言ったじゃない！」

「分かった分かった」

苦笑する。

「護衛ってことはフィオナとマリカはお留守番だね」

「あ、ちょっと待って。この子が龍神なのよね？」

危ないことになるから二人は残そうと思っていたのだが、リルからストップがかかる。

「そうだけど」

「それなら一緒に来てもらってもいい？」

「どういうこと？」

「龍神の赤子がリライトにいるというのは教えてもらっているけれど、リステルの者で実物を見たのはいないのよ。その情報を本当なのか問われたところで真実だと言い切れる者もいないの」

「それで？」

「むしろリライトが龍神の赤子がいる、と嘯いて信者の方々を呼び寄せようとしているのかもしれない、と勘繰る馬鹿も出てくるかもしれないわ」

「先にそれを潰しておきたいと？」

「ええ。この間にアリーのお父様に話をして、機会があればと言っていたの。それなら今回はちょうどいい機会になると思って」

話した場所が場所なので龍神の赤ん坊の正体までは知らされていなかったが、この子だとは驚きだった。

「それをすることによって得られるのは？」

「より強固な信頼関係。正直な話、あたしがやったことも好転させればリライトとの関係強化に繋がるし、さらに龍神の赤ちゃんを来させられるほど、リライトとリステルの関係が素晴らしいものだと知らせることもできるわね」

両国の関係性を国内にも国外にも示すことができる。

「仲が良いところを国内外に知らせたところで、デメリットはないわ」

と、ここでリルは軽い口調で、

「家族旅行だと思って来たらいいじゃない」

「……もう一度訊くけど、危険はないんだよね？」

「ないわよ。あったとしても１０％もないわ」

「りょうかい。それなら連れてくよ」

「ありがと。そしたらまずは、アリーのお父様に話を通しておかないと」

言葉というのはフラグとして残る

馬車に揺られながら一行はリステルへと向かう。

「初めて他国に行くね」

「そうだな。こんなことで行くとは思ってなかったけど」

卓也としては巻き込まれた感で一杯だ。

「何よ、文句あるの？」

「微妙に大事になりそうなことを軽々とやるなよ」

「仕方ないじゃない。ああするのが一番だと思ったんだから」

「だからって一生に一度しか使えない言葉をそこで使うな」

「なんですって！？」

広くはない馬車の中で卓也とリルが口ゲンカを始めようとする。

そのときだった。

「たー！　りー！」

マリカが大きな声で遮った。

「……今のなに？」

マリカの言葉の意味がわからず、リルが優斗とフィオナに問いかける。

「おそらく卓也の『たー』にリルの『りー』だと思うけど」

「そうですね。そういう意味でしょう」

二人がマリカの言葉の意味を代弁する。

「マリカがケンカするなってさ」

ねっ、と優斗がマリカに同意を求めると、意味を理解してるのかしてないのかわからないが、大きく頷いた。

それで卓也とリルの気概も逸れた。

「マリちゃんに言われたら仕方ないわね」

「そうだな」

◇　◇

そして、それ以降は特に問題もなくリステル王国へと入った４人は王城へと向かう。
話は通してあったので、そのまま玉座へと向かう。
たどり着くとそこにいたのは６０歳は過ぎていそうなおじいさんと呼べる人が座っていて、傍らにはイアンがいた。
優斗、卓也、フィオナは方膝を立ててしゃがみこんで顔を伏せる。

「彼らがリルの学友かい？」

「そうよ」

リルが頷く。
とりあえず父親でも口調が変わらないことに驚く。

「顔をあげなさい。呼び寄せたのはこちらなのだから」

ほっほっほっ、とリステル王が穏やかに笑う。
言葉を聞いて優斗たちは顔をあげる。

「まずは龍神の赤子をみせてもらってもいいかね？」

「はい」

フィオナが立ち上がり、リステル王へと近づいていく。

「マリカと言ったね？」

「その通りでございます」

「証拠を見せてもらってもいいかい？」

穏やかな口調でフィオナに聞く。

フィオナは左手の薬指にはまっている指輪を見せた。

「ありがとう。確かにこれは龍神の指輪だ」

「父親役は彼でいいのかい？」

リステル王が視線を優斗に向けると、フィオナは静かに頷いた。

「君たちの事情はリライト王から聞いているよ。大変だね」

「お父様。事情って何？」

「こちらの話だよ」

言葉を濁す。

けれど視線は優斗に向けたまま、

「ユウト、と言ったね。黒竜の件についてはイアンからも話を聞いているよ。私たちの問題に巻き込んでしまってすまなかったね」

「いえ、大切な友人であるリル様を守ることができて光栄であります」

「そう言ってくれると助かるよ」

微笑みを維持しながらリステル王は続いて、

「君やリライトの勇者がリルの友人というのは私としても喜ばしいかぎりだ」

「……それはどのように受け取ればよろしいのでしょうか？」

「褒め言葉だよ。君たちほどの力を持つ者が友好的であるというのは、隣国であるリステルにとっても喜ばしいんだよ」

リステル王に言われて優斗は少し考えるが、その言葉の意味に気付く。

「侵略される可能性が減る、という観点からでしょうか？」

リステル王は優斗の言葉に少しだけ目を見開いたが、微笑みはそのままだ。

「そうだね。リライト王が今の王であるかぎり心配はないと思うが、それでも不安の種は残るものだからね」

「大丈夫です。その点については心配ないと断言できます」

「ほう。どうしてかね？　君たちならば一国の主になれるだろうに」

「利点がないからです」

どういう意味なのか、という視線をリステル王が送ってきたので優

斗は答える。

「我々は異世界からやってきました。考え方がまず違っています。民主主義で戦争というものを忌避するべきものと考えている我々からしたら一国の主という考えは『大それた話』になります。さらに私やリライトの勇者の幸せというものはもっと素朴なものなのです」

「一国の主というものは幸せになり得ないのかい？　リライトの領土も増えるというのに」

「それは『リライトの幸せ』ということになります。あくまで私の幸せという話になりますが、少なくとも私の幸せは友達と楽しく遊べて、フィオナと一緒にマリカを育てられる環境のことを指します。もしも他国の侵略を私たちの力を頼りにするとするならば、友人と遊ぶ時間はなくなる。さらにマリカの面倒も見れなくなると何一つ利点がありません」

リステル王は優斗の言葉の審議を問おうと目を細める。

けれど彼の言葉に嘘はないと判断したのか、先ほどの微笑みを浮かべた。

「確かに侵略は君の幸せとは程遠いね」

「はい」

リステル王は何度か頷くと、続いて卓也を見た。

「そして君がリルから“誓いの言葉”を受けたタクヤだね？」

「は、はいっ！」

「ほっほっ、緊張しなくてもいいよ。君を問いただしに呼んだわけじゃないのだから」

とは言うものの、この状況で緊張しないほうがおかしい。

「リルのことだ。君に意味など教えずに使ったのだろうし、君に非はないよ」

「お、お父様！？」

「だってそうだろう？　見届けたイアンからもリルが問答無用で使ったと聞いているよ？」

「そ、それはそうだけど、見境なしに使ったわけじゃないわ。ちゃんと考えて使ったんだから。タクヤになら言ってもいいって思ったから」

「おかげで婚約者候補はみな、うな垂れていたようだ」

「別にあんな連中がどう思おうと知ったことじゃないわ」

「確かにどうしようもない連中もいたことは確かだが、幾人かは素晴らしい人物だったのも確かだよ」

「それでも嫌なものは嫌なの！」

「……本当に仕方ない娘だ」

呆れたように笑う。

「タクヤ。こんな娘でよかったら貰ってくれないかい？」

「へっ！？」

唐突に言われてすっとんきょうな声が出る。

「気が強くわがままなところもあるが、これでも可愛いところもあるのだよ」

「いや、でも、他国の王女がオレみたいな一般人と結婚ってまずいんじゃ！？」

卓也の反論の中に「嫌だ」という言葉が入っていないということは、少なくともリルのことを悪く思っていないことが分かる。
それに気付いたのはリステル王と優斗だ。
卓也本人でさえ気付いていないのかもしれない。

「君は王族よりも希少な異世界の人間だ。そしてリライトで下位ではあるけど爵位を持っている。少なくとも嫁がせる先というには問題がないと思っているよ」

さらなるリライトとの友好の架け橋になる。

「だけど出会って１ヶ月も経ってないんですよ！？」

「君の世界ではおかしいのかもしれないが、こっちの世界では顔も知らなかった同士が結婚する場合もあるのだよ」

「け、けれど……」

卓也がちらりとリルを見る。

「何よ、嫌なの？」

「い、嫌ってわけじゃないけど……」

なんだかんだで一緒にいて楽なのは確かだ。

「じゃあ何なのよ！　悪いけどあたし、あんたに誓ってるんだからね！」

彼以外の誰かに誓うことはもうない。

「……うぅ」

「はっきりしないわね！！　イエスかノー、どっちなのよ！？」

痺れをきらせたリルが問い詰めた。

反射的に卓也が答える。

「イ、イエス！！」

瞬間、卓也の運命が決まった。

さらにリルの顔がほっとしたのを卓也以外の人間は見逃さない。

そういうことだったのか、と卓也とリル以外が目配せする。

「ほっほっほっ、それならばリライト王に書状を送らないといけないね。たった今、リライトとリステルの友好の架け橋ができたのだから」

リステル王が頷くと、当人達以外は頷いた。

「いや、まさか卓也が本当に国外の人と婚約するなんて思って無かったよ」

笑って卓也の肩を叩く優斗。

「ビックリですけど、お似合いだと思います」

「リルが他国との架け橋になるために婚約したとなれば他のものも納得するだろう」

それぞれが言葉は違えど祝福？　のようなことを言う。

「えっ？　ちょっ！？」

「言質はリステル王族にリライト公爵、子爵と聞いてるから」

無駄な抵抗はしないほうがいい。

卓也は何かを言おうとして、そして……無駄だと悟ったのか何も言わなかった。

まあ、実際のところは何かを言おうとしたところで、結局は自分だってそこまで嫌がってないのだから反論しても無駄だと思ったからだ。

トラブルなんて無いほうがいい

何だかんだで腹をくくった卓也がリルと二人で先頭を歩いていた。
離れた後ろでは優斗とフィオナ、イアンが話している。

「ねえ、タクヤ。ユウト達の“事情”って何？」

「聞いてないのか？」

「ユウトとフィオナが婚約者でも夫婦でもないってことは聞いてるけど」

それ以外にあるのだろうか。

「さらに言うなら恋人同士ですらない」

「……それはひょっとしてギャグで言ってるの？」

「残念ながらマジだ」

「あれだけラブラブで？」

「あれだけラブラブで」

それが事実だとすると龍神の親になる前提条件が分からなくなってくる。

「あたしは恋人ぐらいなら龍神の親に選ばれるものって思ったんだけど」

「それが違うから、せめて今までの親たちと同じような関係に偽装したってこと」

「そんなこと言っても、あの二人って全盛期の恋人とかと同レベルの甘い空気出してる時ない？」

「たぶん、そこがマリカに選ばれた理由なんじゃないかと睨んでるよ、オレは」

そのまま6人で夕食を取り、本日は王城に泊まることとなった。
フィオナとマリカとリルは一緒の部屋で寝ることになり、男子もイアンが優斗たちに訊きたいことがたくさんあるとのことで一緒の部屋になることになった。
そして食事をした広間から各々の部屋へ向かっている途中で、変に待ち構えている人物に出会った。
後ろには従者を引き連れている。

「お久しぶり。イアン様、リル様」

「うわっ、ガリア侯爵」

気まずそうにリルが顔を背けた。

イアンはやれやれ、と返事をする。

「どうかしたのか？　今日はもう仕事はないはずだが」

「いやだな。リル様が“誓いの言葉”を使った相手を見に来ただけだよ」

そう言って卓也を値踏みするように睨め付ける。

「リル様もこんな輩を婚約者にするのだったら、私を選べばよかったのに」

瞬間、リルが反論する。

「あんたなんて絶対イヤ！　あんたよりもタクヤのほうが1億倍マシだわ」

「まあ、私を選ばなかったことを後悔するのは貴女でしょうが」

そしてガリアの視線が優斗に移り、フィオナと……マリカで少し留まる。

小さく笑った。

「それでは私はこれで失礼するとしよう」

一応、ガリアは小さく頭を下げて通り過ぎていく。

卓也は意味が分からず、

「あれ、誰？」

「元々はあたしの婚約者候補。父親が死んでからあいつが侯爵の地位を継いだんだけど、論外すぎて話にならないわ」

「どういう意味なんだ？」

「頭悪い、短絡的、自己中心的、その他もろもろよ。あいつの父親が優秀だったけど、次に問題起こしたら父親の貯金も使い果たして余裕で爵位降格。それぐらいの酷い奴」

リルがボロクソに言う。

その一方で優斗は嫌な不安を感じた。

「……イアン様」

「なんだ？」

優斗はイアンの耳に口を寄せる。

「マリカのことを知ってる貴族って……どの爵位までですか？」

「ん？　リステルで知っているのは王族の私達だけだが」

イアンの返答に優斗は眉をひそめる。

「……」

「どうかしたのか？」

「ガリア侯爵……でしたね。彼の視線がフィオナとマリカに移った時、笑ったんですよね。しかも笑い方が赤ん坊を見たときに出る笑

いじゃなくて、もっと不快な笑い方で」

悪寒が走った。

「それは私も見ていたが、彼は基本的にああいう笑い方だ」

「ならいいんですが、何となくマリカの正体を知ってそうな気がして」

「気のせいじゃないのか？」

「あくまで気のせい、というならそうですが……」

ふむ、とイアンも考える。

念のためということもあるだろう。

「ならばリル達の部屋には護衛をつけよう。泊まる部屋も隣同士ならば何か問題があればすぐに駆けつけられる」

◇　◇

結局のところ、夜には誰も来なかった。

女性陣はたっぷりと話したところで眠り、男性陣もイアンの質問攻めが終わったところで気付いたら眠っていた。

そして朝、比較的寝坊などをすることのない優斗とイアンが目を覚ます。
ドアを開けて隣を確認すると、護衛兵が問題ありませんと伝えてきた。

「どうやら杞憂だったようだ」

「そうですね。お手数をお掛けしてすみません」

「いや、いい」

卓也を起こし隣の部屋に朝食を食べることを伝えたら、まだ準備に時間が掛かるから先に行っておけと言われた。
念のため護衛兵に朝食を取る場までは護衛をするように頼み、３人は先に出て朝食を取る場へと着く。
しかしそこから、５分、１０分と待つ。

「女性の身だしなみを整える時間はどうにかならないものかと常々思う」

「僕はもう慣れました」

「オレは優斗までの心境にはなれないな」

けど、女性だから仕方ないかと優斗たちは笑う。
そう話していた瞬間だった。

爆発音が響いた。

反射的に3人は立ち上がる。

「今のって……」

「爆発か！」

「場所は！？」

食事場から飛び出してバルコニーへと出る。
真下にあるキレイに並ばれた森林を超えて、５００メートルほど離れた王城域内の広場から煙が見える。
下を見れば今の音と煙に反応して幾人かの兵士が向かっていく姿が映る。
煙でそこにいるのが誰なのかは分からないが、片方は少数でもう片方は2，３０人ほどはいそうだ。

「一体、誰がこんな朝からやっている？」

イアンの疑問も当然だった。
けれど、嫌な予感がする。
フィオナとリル、マリカがまだ来ていない。
優斗は間違いであってくれと願うが、次に起こった現象が優斗の願いを崩す。
竜巻が少数グループから生まれたのだ。
しかも現象が見える少し前に、薄く緑色に光る何かが彼らの眼前に。
そして身体のどこかが白く煌くのが見えた。

――たぶん、あれは……。

龍神の指輪を使ったから。
精霊の召喚を行なったから精霊が現れ指輪が光った。

「……フィオナ、だ」

それに気付いた瞬間、全身から冷や汗が出た。
大切な人が襲われている。

「――ッ！！」

バルコニーから飛び出た。
高さは２０メートルほどあったが風の魔法を使って身体を減速させて着地。
そのまま駆け出す。
イアンがすぐ後ろについていて、卓也も少し離れた場所から優斗を追っている。
走りながら優斗が願うのは唯一つ。

――間に合え。

一秒でも早く、フィオナのところにたどり着く。
それだけが優斗の想っていることだった。

君を失うことに耐えられない

優斗たちから遅れること5分、フィオナとマリカ、リルが部屋を出る。
護衛兵2人も一緒に歩いていると、目の前に完全武装をしている兵士が5人現れる。
疑問に思ったのはリルだった。

――あれって王城勤めじゃないわね。

武装姿が通常の兵士と違っている。
その違いが足を止まらせた。
次いで護衛兵2人も異変に気付く。

「どうかされたんですか？」

一人、フィオナだけがまだ状況に気付いていない。
リルが後ろを見れば、前にいる兵士と同じ服装の奴ら5人。
囲まれていた。

――狙いはタクヤじゃなくてあたし？

ずいぶん堂々と来たものだ。

「フィオナ、ごめん。囲まれた」

リルが緊張感を漂わせ、護衛兵が前後に別れた。
フィオナもそこで初めて状況を把握し、マリカを強く抱き寄せる。
場所的にはすぐ横に窓があり、そこが開いている。
逃げるには打ってつけだ。
リルが視線だけでフィオナに合図を送る。
フィオナが気付き、頷いた。

「――ッ！！」

次の瞬間、二人は同時に窓から飛び出す。
地面までの高さは１５メートルほど。
フィオナは上手く着地したが、風の魔法がそれほど得意ではないリルは十分な減速が出来ずにお尻を強打したが、それでもすぐに立ち上がって走る。
最初は城の中に逃げようとも思ったが、右から左から兵士が出てくるので真正面、森林のほうへと逃げる。
走って走って走って。
城から少し離れた訓練でも使われる広場に出る。
そこで……囲まれた。
３０……いや、４０人はいた
そして武装した兵士の中から、一人だけ小奇麗な格好をした男が出てきた。

「ふん、あんたの仕業ってわけね。ガリア侯爵」

「いかにも。私がやっているよ」

「なに？　あたしを殺したいの？」

「いやいや、最初は君の婚約者を殺そうと思っただけど、君を殺そ

うと思ったことはないよ」

「ならこの状況は何よ」

睨みつけるリルにガリアは視線をフィオナとマリカに留めた。
首を傾げるフィオナだが、彼女が抱いている赤ん坊は普通の赤ん坊ではない。
そう、卓也を殺しに行ったときに聞こえてきたのだ。

「リル様と婚約者の話を偶然聞いてしまってね」

その“話”が何を指すのか。
なぜフィオナとマリカを見てるのか。
リルはすぐに気付く。
あまりの迂闊さに悔しさで顔をしかめた。

「それならば、と思ったわけだよ」

ガリアは欲望を滲ませる笑みを惜しげもなく前面に出した。

「私が龍神の親になろうとね」

「なっ！？」

「ば、馬鹿じゃないの！？　あんたがなれるわけないでしょ！！」

フィオナが絶句し、リルが反論する。

「いやいや、君たちの話を要約すれば龍神の親というものは夫婦や婚約者どころか恋人ですらなくてもなれるというものじゃないか」

つまりは誰にでも可能性はあるということ。

「私は王族を迎えるのと龍神の親、二つを量りにかけて後者を取ったんだよ。この世界で最大の崇拝対象たる龍神。その親ともなれば王族よりも遥かに価値がある」

クックッ、とこみ上げる笑いを堪えきれないガリア。

フィオナを指差す。

「今ならば君も妻に迎えてあげよう。顔は素晴らしく他国の公爵家だ。私の妻になるには分相応。これで仮初めの婚約者、嘘の夫婦を演じる必要がなくなるのだから君にとっても悪い話じゃないだろう？」

そうすることがベストだ、と言うようにガリアは笑い続けている。

その一方でフィオナは心の奥底からふつふつと怒りがこみ上げてきた。

どう勘違いしたら、そういった結論になろうのだろうか。

――仮初めだとか、嘘だとか。

心底、どうでもいい。

自分にとって重要なのは“優斗と一緒にマリカを育てること”だ。

「仮初めの婚約者？　嘘の夫婦？　だからなんだっていうんです」

ガリアがマリカの父親になるなど冗談ではない。

マリカの父親はたった一人。

優斗なのだ。

「嘘だとか偽りだとか、何一つまーちゃんを育てることに関係ありません」

「少なくとも君みたいな女性があんな偽りの夫を持っているのは君にとって苦しく、悲しいことだろう？」

分かっているよ、と言わんばかりのガリアにフィオナは初めて敵意を向ける。

何を分かったように語っているのだろう。

ぜんぜん、全てが間違っている。

――苦しさなんてありません。

楽しい日々ばかりだ。

――悲しさなんてありません。

嬉しい日々ばかりだ。

その全てがマリカと優斗から得られている日々だ。

優斗がいなかったら得られなかった日々だ。

この気持ちは偽りじゃない。

「関係が偽りだったとしても、私の気持ちは何一つ偽りなんてない！」

声を張り上げろ。

宣言しろ。

――初めて私と一緒に遊んでくれた男の子を。

いつでも隣にいてくれる男の子を。

――初めての感情をたくさんくれた男の子を。

いつでも微笑んでくれる男の子を。

――私が。

どれほど想っているのかを。

「私は」

心から。

「私は優斗さんを愛しています！！」

声を高らかに、言い放つ。
そして笑んだ。

「だから私の夫は偽りだとしても優斗さんがいいんです」

「彼は君を想っていないのかもしれないのにかい？」

「優斗さんが私を想っていなくても、関係ありません。私が彼を愛しているだけなのですから」

ただ、それだけの事実が自分の裡にあればいい。

「そしてもう一つ」

龍神の親はなろうとしてなるものじゃない。

「私達の関係が偽りに満ちていたとしても、優斗さんがまーちゃんの父親じゃなくてもいい、なんて理由はどこにもありません。まーちゃんが優斗さんを父親に選んだのですから」

マリカが自ら、優斗を選んだ。

「だからどんなことになろうとも貴方が龍神の父親になることはありません」

フィオナが言い切る。
が、ガリアはそれを聞いてなお、自分が龍神の親になれることを信じて疑わない。

「元々、龍神の赤ん坊をダシにして父親のほうは殺す予定だったんだ。君も私の妻にならないなら死のうか。顔が良くて公爵家だから妻にしてやろうと思ったが、否定するなら生かす必要性もないしね。ただ私が父親になればいいだけのことだから」

ガリアはそう言って手を上げた。

「構えろ！」

彼の後ろにいる兵士が一斉に構える。

けれど3、4割の兵士は戸惑いを隠せない。

いくらガリアの私設兵士といえど、まともな人間はいる。

話を聞いていればあの二人が龍神と母親とういことは理解できた。

赤子とはいえ龍神と、龍神を育てている母親に手を出すなんて大それたことを出来るはずもない。

かといって雇い主に逆らうこともできず、構えるだけ構えて後ろに下がる。

フィオナはリルにマリカを預ける。

リルは魔法が得意ではない、ということなので実質的な戦力はフィオナだけだ。

多対一。

攻撃に出ることなんて考えられない。

――きっと、戦いが始まったらすぐに優斗さんが来てくれる。

2分でいい。

耐え切ろう。

「放て！」

後ろで火球を携えていた魔法使いが放つ。
フィオナは咄嗟に風の壁で直撃を避ける。
しかし、その間にカマイタチがフィオナの左腕を裂く。
深くはないが、血が溢れてきた。
さらに後ろには巨大な岩と火球が見える。
フィオナはすぐに考えを変える。

――ペース配分なんて考えてられない！

最初は2分で満遍なく魔力を使いきろうとした。
けれど無理だ。
人が多すぎる。
少しでもどこかで手を抜いたら死んでしまう。

――全力で防ぎきるしかない。

それが1分後に駄目になろうが、2分を持たなかったとしても。
全ての魔法を防ぎきる障壁を作らないと駄目だ。

――なら、今の私にできる最大の防御は。

優斗に教えてもらった、これしかなかった。

『三界を流浪する天の使者よ。龍神の指輪の名において願う』

唱えている間に左肩もカマイタチで切れる。
けれども、痛みを無視してフィオナは続ける。

『来て』

そして傷ついた左腕を前に突き出す。
指輪からは白い光が溢れていた。

『シルフ！』

名前を呼んだ瞬間、薄い緑色の女性が現れる。
直後、強烈な竜巻がフィオナ達を包んだ。
竜巻は火球も岩をも通さない。
剣を持った兵士も近づけず、何もできない。
けれど３０秒もしないうちに息が荒くなり、身体が崩れそうになる。
風の精霊を統括する大精霊を呼び出したのだ。
しかも全力での防御。
魔力の減りが凄まじかった。

「ちょ、ちょっとフィオナ！！　大丈夫なの！？」

心配そうにリルが訊いてくる。
ちらりと視線を向ければマリカは泣きそうになっていた。

「……まんま」

「だいじょうぶ……ですよ。ちゃんとママが……守りますから」

かろうじて笑顔を見せて、さらに力を込める。

――私は、優斗さんじゃないから。

強くないから。
倒すことなんてできないし、こんな人数を相手にしたら守りきることもできないかもしれない。

――でも、守りきれれば。

1分と少しが経過した。

竜巻の障壁は崩れ始め、ついに火球が小さくなりながらもフィオナの右腕にかすった。

「まだ……まだ……っ！」

頑張る。

振り絞る。

そうすれば来てくれる。

前にリル達が襲われたときも、自分と似たような状況だった。

優斗から話を聞けば、あんなタイミングで現れることができたのは修が勇者で主人公体質だからって言っていた。

――彼は自分を勇者じゃないなんて言うけれど。

勇者っていうのは修みたいな奴を言うんだ、って笑うけど。

――少なくとも私にとっては。

彼は。

――優斗さんは。

誰よりもかっこよくて優しい。

――私の勇者様なんです。

身体が倒れそうになる。
竜巻が消えそうになる。
そのどっちもをを必死に堪えようとして、駄目だった。
竜巻を精霊自身が止めたのだ。

「……どう……して？」

フィオナが問いかければ精霊は消えかかりながら微笑を浮かべて、
ある方向を指差した。
気付けば誰かの叫び声がして攻撃が止まっている。

「……あっ……」

そして精霊が指した先には……彼がいた。

「貴様ら、何をしているッッ！！」

イアンが吼えた。
突然に現れたリステルの勇者に攻撃がピタリと止まった。
優斗はそのままフィオナの元へと駆け寄る。
今にも崩れ落ちそうな彼女はきっと、最後の一滴まで魔力を使い切
っているのだろう。

けれど精霊から指を指された自分を見たとき、彼女は嬉しそうに笑った。
優斗はフラフラなフィオナの身体を抱きとめる。

「……無事でよかった」

よく見れば右腕は少し煤けており、左肩と左腕は切れていた。
心が締め付けられそうになる。

「……私……頑張りました」

「うん」

フィオナに治療の魔法をかけながら、身体をしっかりと抱き寄せる。

「ちゃんとまーちゃんを守ったんですよ。パパがいない時はママがちゃんと守ってあげられるんだって教えてあげられたと思います」

「……うん。ホント、僕の自慢の奥さんだ」

「でも少し疲れたので……あとは任せてもいいですか？」

「……うん。ゆっくり休んで」

魔力を使い果たして気を失ったフィオナを、優斗は優しく寝かした。
遅れて着いた卓也に治療を続けるように頼んだ。
卓也のほうが治療の魔法については実力が上だからだ。
続いて優斗はリルとマリカのところへと向かう。
フィオナが倒れて大泣きしているマリカがいた。
懸命に優斗に手を伸ばしていたので、マリカを預かる。

背中をリズムよく叩く。

「ごめんね。パパ、来るの遅かったね」

そして言い聞かせるように優しい声音で話す。

「けれどママがちゃんと守ってくれたよね？」

「……あいっ……」

しゃくりながらもしっかりとマリカが返事をした。

「もうパパが来たから、マリカは泣かないよね？」

「……あいっ」

先ほどよりも強く頷く。

「マリカはママに似て、強い娘だもんね」

「……あいっ！」

さきほどよりももっと力強く頷く。

「じゃあ、もうちょっとリルと一緒にいてね。パパはやることがあるから」

泣き止ませたマリカを再びリルに預ける。

そして踵を返した。

イアンがガリア達に何かを言っているようだが、優斗にはどうでも

よかった。

「貴様達、何をしているのか――」

「そこにいるので全員か？」

イアンの言葉を遮って伝えた。

まったく声を張っていないのに、なぜかイアンよりも響く。

同時にその場にいた人間の毛という毛が逆立つ。

「どうした？　意味が分からないのか？」

普通に尋ねるように訊いているが、違う。

あまりにも冷え切った声音と感情に。

「……っ！！」

誰も彼もが、言葉を失い恐怖で身を竦ませた。

特にガリアの側にいる人間は身体すら震わせている。

「死にたいのはそこにいるので全員かと訊いてるんだ」

あまりに軽く問われる。

それは彼らの命が優斗にとって本当にどうでもいいものであり、そんな奴らがフィオナ達を襲ったことに心底殺意を芽生えさせているからだ。

「どうする？　今すぐ楽に死ぬか、それとも苦痛に喘いで死ぬか」

簡単な相談事のように訊いてくる。

けれど誰も返事ができない。
誰かが選択してしまえば、すぐにでも始まりそうな地獄絵図に卓也はフィオナの治療を終え、リルに駆け寄り声をかける。

「リル、覚悟だけはしとけ」

「な、何を？」

「今日、リステルが無くなる覚悟をだ」

卓也もリルも優斗の殺気に身体を竦ませているが、おそらくはガリア達ほどではない。
話すぐらいの余裕はあった。

「じょ、冗談……」

「冗談なわけないだろ。あいつがキレたとこは見たことあるけど、ブチ切れたとこはオレも見たことないんだよ。だから下手したら、国ごとやりかねない」

そしてそれが叶えられるほどの実力の持ち主だとリルは知っているはずだ。

「けれど、そしたら国民の命だって」

「悪いけど、あいつにとってフィオナとマリカの命のほうが重い」

「で、でも数十万、下手したら百万人以上の命よ？」

それをあの優しい優斗が奪うというのだろうか。

「オレら全員、結構普通じゃないけどな。イカれてるって話なら和泉でも修でもなく、優斗が一番イカれてるんだよ」

それは生まれてから過ごした教育と、環境がそうさせたものだ。
だからこそ、今の優斗の性格は全ての詳細を知っている卓也からしてみれば凄いと思う。
狂わず、擦れず、親を反面教師にして弱い心を押し隠し、強く在る。
優斗の普段の性格が“あんな性格”なのは、彼の本質の一つである優しさと努力と願望によるものだ。
純粋で一途な芯があるから。
今の優斗の性格がある。

――ただ、それだけに。

何十にも鍵と鎖で奥底に秘めている裏の本質という点では、優斗が群を抜いてヤバい。
もちろん普段はそれが表に出ることは絶対にない。
今回のようなことがないかぎりは。

「……大丈夫なの？」

その問いはリステルの国が、なのか。
それとも優斗が、ということなのかは分からなかったが、とりあえず優斗のことについて答えることにした。

「大丈夫だよ。約束してるんだ」

自分達が無二の仲間になったときに約束していた。
優斗は自分の性格と本質を知っていたから。

分かっているからこそ自分達にこう言った。

「あいつが壊れたら殺してでも止めるって」

優斗がどのように壊れてしまうかは分からないが、少なくとも“今”はまだ問題ない。

「たぶんオレら仲間が殺されないかぎりは壊れないから大丈夫だと思う。案外あいつも耐久力あるから」

「もし、壊れてしまったら……止められるの？」

世界を破壊できる可能性を持っている男だ。

卓也では止められそうにない。

けれど卓也は

「優斗は壊れようがどうしようが絶対にオレらには手を出さない。だからさっきも言ったとおり、殺して止めるんだよ」

優斗はそうしてくれと言っていた。

「けれど“大切”の中でも特別なフィオナとマリカに手を出してるんだ。こう言いたくはないけど、リステルぐらいは無くなる覚悟はしておけ」

その卓也とリルが話している途中でリステル王がこの場にやってきた。

そのことに気付いた優斗が視線を向ける。

少しだけ威圧が収まったのか、ガリアが声を発した。

「わ、私を殺す!?　そ、そんなことをすればリライトとリステルの戦争が起こるぞ!」

優斗は再びガリアを見る。

「だから?」

何だというんだ。

「お前ごときを殺したところで戦争が起こるわけもない。仮に戦争が起こるとするのならリステルごと滅ぼしてやろうか?　そうすれば戦争は起きない」

そう言ったところで優斗はふとやってしまったことに気付いた。

イアンに謝罪する。

「……悪い、言い過ぎた」

怒り過ぎていて言葉が過激になっている。

彼らを許すことは出来ないが、それでも言葉は選ぶべきだった。

「悪いのはあいつらだけ、なんだよな」

「ああ」

優斗は頷くイアンとリステル王の二人に視線を向けた。

「リステル王、イアン。僕は言ったはずだ。僕の幸せは何なのか、と」

初めて謁見したとき、自分の幸せは友達と遊べてマリカをフィオナと育てられることだと。
しっかりと伝えた。

「選べ」

そのうちの一つを奪おうとした輩が目の前にいるのだ。

「僕がこいつら全員を殺すか、お前らがこいつら全員を社会的に抹殺するか。二つに一つだ」

選択肢はこの二つしか残っていない。
けれど空気を読めない男は声を荒げた。

「お、王よ！　私は龍神の親になることが国の利益になると信じて行動に移ったまでです！　仮に彼らを殺したとしても弱気なリライトのことだ、こちらが強気で知らぬ存ぜぬを通せば戦争にはならない！」

ガリアはまるで演説するかのようにリステル王へと話し続ける。

「王よ！　民のためにも彼らを殺し、私を龍神の親に！！　それが一番なのです！！」

けれどもリステル王は、そんなガリアを見て……深く頭を振った。

「ガリア侯爵……いや、ガリアよ。君はなぜ、龍神の赤子がこの国に来たのか分かっていないようだ」

「ど、どういうことですか！？」

少し考えれば分かることなのに、ガリアは問いかける。

「リライト王が我が国ならば、と信用して護衛すらも付けずに送り出してくれたのだ。お前がやっていることは先代から築き上げた信用を壊すものだというのが分からぬか？」

先代からの全て壊そうとしている。

「し、しかし！」

「さらに龍神の父親、ユウトはリステルの災害の一つである黒竜を倒した張本人でもある。その恩人に対してお前がやったことは何だね？　彼を殺そうとし、彼の妻を殺そうとし、娘を略奪しようとしている。しかも妻はリライトの公爵家の血筋であり、娘は龍神だ。いつからリステルはそこまで非情で非道な国になった？」

「で、でも彼らの関係はまがい物で――」

「黙りなさい！！」

ここで初めてリステル王が声を荒げた。

「私はね、今は君をどうしてやろうか、と考えているんだ。本来ならば先ほどユウトが言っていた通り、リステルごと滅ぼされても仕方ないことをしたんだよ。その力が彼にはあるというのに」

彼の幸せというものを聞いておきながら、それを壊そうとしているのはガリア。

もっと大元を辿ればリステルという国だ。

「今は温情だけで生かしてもらっている。それを報いるにはどうするか。そのことを考えるので本当に頭が一杯だ」

極刑ですら生ぬるいとしか思えない。

次いでイアンが優斗に話しかける。

「黒竜のとき、君たちに助けてもらった。そんな恩人たる君の手を煩わせる価値もない人間だし、こんな奴をいつまでもこの地位に置いていた我々の失態だ」

使えないものを使えないとして切り捨てられない。

これはいつの時代でも悪習になっている。

「こいつらはリステルに任せてくれないか？」

「信じていいのか？」

「ああ」

イアンが真摯に頷く。

約束を違うことなどしないと誓う。

優斗はそこに信用をおき、リステル王へと向いた。

「……リステル王」

「なんだね？」

「こいつらの処分は貴方たちに任せます。ですから――」

一つだけやらせてほしい。

「土地を一つ、消滅させることだけは了承してもらいます」

「……どういうことかね？」

問いかけるリステル王に、優斗は周りが寒気を感じさせる冷たい笑みを浮かべた。

「フィオナとマリカに手を出した奴の末路を示すだけです」

◇　◇

フィオナとマリカはリルと卓也とイアンに任せ、優斗はリステル王と数人の近衛兵士と共にある場所へと向かっていた。

「ここですか」

たどり着いたのはガリアの家。

周辺には住居などはなく大きさは1キロ四方はありそうだった。

その土地の中央には無駄に煌びやかで豪勢な住居が存在している。

すでにこの家に伝令は出しており、十数人はいる従者はすでに大切なものを持って逃げている。

けれどもなぜ、出なければならないのか意味は分からなかった。

そんな彼らに向けてリステル王は今朝あった出来事を話し始める。

「今朝、君たちの主であるガリア元侯爵がやってはいけないことを行なったのだ」

いつもにこやかであるリステル王が憮然とした表情をしているのに戸惑う従者たちだが、一人の従者筆頭とも言えるべき女性が勇気を持って話しかけた。

「な、なんでございましょうか？　早朝から兵士と共に出て行ったことに関係がありましょうか？」

「その通りだ。現在、我が国には来賓としてリステルより龍神の赤子が来ている。ガリアは兵を使い、その龍神の赤子を奪い去ろうとした」

瞬間、従者の中にも『信じられない』といった表情をしたものが何人もいた。

さらに凄い者になれば、主であるガリアに対して嫌悪感を露にした。

元々好かれていない主ではあっただろうが、ここまでの感情を見せるの今言った彼の蛮行によるものだろう。

「さらには龍神の両親の殺害を企てようとした。これはリステルだけではなく、世界で見ても大問題だ」

世界中から非難を浴びても仕方のない出来事だ。

「君たちは許せるかい？　この中には龍神に対して信仰深いものもいるだろう？」

リステル王の問いかけに、先ほど嫌悪感を表した男性が断言した。

「許せるわけがありません！」

リステル王は男性に対して頷いた。

「そうだね。私も許せるわけがなかった。だからこそガリア侯爵家をまず、壊すことにしたのだよ。君たちには申し訳なく思うが、彼がやったことを考えたら、これぐらいでも生ぬるい」

と、ここでリステル王は安心させるように、

「もちろん、君たちの就職先に対しては国がバックアップをしよう。ただの被害者なのだからね」

そう伝えたことで、幾人かがほっとした表情をした。

「リステル王。そろそろよろしいですか？」

優斗がガリア家に目を背けずに伝えた。

「そうだね。……君たちは一旦、ここから離れなさい。危ないからね」

従者の半分は疑問だったが、近衛兵士に連れて行かれる。

そして彼らの姿が見えなくなると、優斗が構えを取った。

『天光満つるところに我はあり』

その場にいる、誰もが聞いたことのない詠唱が優斗の口から流れ出

す。

『黄泉の門開くところに汝あり』

右手を前に掲げ、

『出でよ』

天空へ幾重にも重なった魔方陣が生み出される。

『雷の裁き』

そして降りてくる。

『インディグネイト・ジャッジメント』

優斗が唱え終わった瞬間、まず幾つもの雷が降り注ぐ。
それだけであらゆるものが砕け、蒸発する。
けれども終わらない。
天空から一振りの白き剣が振り降りてきて、中心部分に突き刺さる。
クレーターが直径にして５００メートル以上は出来た。
その威力で土が捲れ上がり波のように迫ってくるが、風の魔法で壁を作り防ぐ。
そして十数分後、土煙も晴れてようやく全容が見えると、リステル王と近衛兵士もさすがに唖然とした。

「聞きしに勝る……とはこのことなんだろうね」

家があった場所は深さにして十数メートルほどの穴が出来ており、家の周辺を飾り付けていた森林どころか家の欠片すらも存在してい

ない。
見事な土一色の土地がそこに生まれていた。

◇　　◇

「ほんっとうにすみません！！」

そうしてガリアの家を壊して王城に戻ると、さすがに少しはスッキリしたのか優斗の頭に上った血の気も下がった。
そして思い出すのはリステル王とイアンに対して、あまりにも無礼な態度を取ってしまったこと。

「怒りのあまりにどうかしてたみたいでして、あんな風な口を利いてしまい申し訳ありません！！」

全力で頭を下げる。
これは国際問題になってしまうのか、と本気で考えてしまうくらいに焦っている。

「私は何も気にしていない。非はこちらにあるのだし、元々年齢もそう違わない。君のような異世界人で龍神の父親であり、伝説の大魔法士レベルの人間に敬語を使われると逆に申し訳なく思う」

ひたすらヘコヘコと謝る優斗にイアンが苦笑する。

先ほど、全員を震え上がらせた殺気が嘘のようだ。

「私に対しても気にしないでいいよ。先ほどイアンが言った通り、非があったのは私の国のものが行なったこと、つまりは私の監督不行き届きなのだからね。君に何と言われてもしょうがないことだよ。さらに言うなら、申し訳ないと平謝りしなければならないのは私のほうだ」

言いながら頭を下げようとするリステル王を優斗が必死に止める。そんなこんなで馬鹿みたいなやり取りをしている間に、リル達が合流した。

「ぱ～ぱ！」

「マリカ！」

優斗はリルからマリカを預かる。

「フィオナは？」

「怪我は全部治ってるけど、さすがに魔力の使いすぎ。まだ寝てるわよ」

「精霊術を全力で行使したからね。しょうがないか」

と、話が少し途切れる。

わずか数秒だけだったが、切り替えるようにリルが声を出した。

「あ、あのね」

「なに？」

「……ご、ごめんなさい」

リルが優斗に頭を下げた。

「どうしたの、突然？」

「今回の事件、元はといえばあたしが原因なのよ。あたしがあんた達を連れてきたんだし、あの馬鹿にマリちゃんのことがバレたのもあたしがタクヤにあんな場所で色々と訊いたことが原因だし」

「別にわざとじゃないんだから、気にしないよ」

「それじゃあたしの気が済まないのよ」

自分は彼らを危険にした張本人と言ってもいいのだから。

リルは一歩も引かない姿勢を見せる。

「……ん～、それなら」

優斗は少し考えると卓也を呼び寄せた。

「ま、しょうがない」

長年の付き合いから呼ばれた理由が分かる卓也。

「え？　どうしてタクヤが呼ばれるの？」

「一応、婚約者だしオレも原因の一つだし」

卓也はそう言って直立不動。
優斗はマリカを下ろして後ろを向かせた。

「いつでもいいぞ」

「なら、遠慮なく」

優斗は右手を振りかぶると、卓也を殴りつける。
卓也は数歩後ろにたたらを踏んだが、すぐに体制を立て直す。

「これで勘弁だな」

「そうだね」

互いに笑みを浮かべる。
慌ててリルが卓也に駆け寄る。

「ご、ごめんね」

「いいって。けじめはつけなきゃいけなかったし」

軽く頬をさする卓也。

「で、優斗はこれからどうする？」

「フィオナの側にいるよ」

「分かった。少ししたら、オレ達も見に行く」

「わかったよ」

そう言って優斗とマリカは卓也たちと別れる。
優斗はフィオナが眠っている部屋へと入った。
傷もすっかり治り、すやすやと眠っているフィオナの姿がある。
よかった、と本気で安堵する。

「マリカもお昼寝しようか」

朝からずっと起きっぱなしだし、いろいろとあって疲れているだろう。
マリカを二つあるベッドのうちの片方へと入れる。
そして胸の部分をゆっくり、ポンポンとリズムよく叩くと5分もしないうちにマリカの寝息が聞こえてきた。

それから一時間ほどしただろうか。
フィオナが目を覚ます。

「……ん……」

薄っすらと目を開け、場所を確認する。
そして左右に視線を動かし、優斗を発見した。

「……優斗さん」

「体調はどう？」

「大丈夫です。まーちゃんはどうですか？」

「今は隣のベッドでお昼寝中」

「そうですか」

フィオナは起き上がり、隣のベッドで眠っているマリカの頭を少し撫でると、ソファーへと向かって座った。

「飲み物とかいる？」

「いえ、大丈夫です」

グルグルとフィオナは肩や腕を回す。
痛みはなく、異常は見当たらない。
安心して深くソファーに座りなおす。
と、その時だった。
ソファーの上から優斗がフィオナの身体に手を回した。
突然のことにフィオナの身体が固まった。
思い返せば、優斗から抱きしめられるのは初めてのことだった。

「あ、あの、ゆ、優斗さん？」

「よかった」

「え？」

「フィオナが無事で……よかった」

心の底から心配して、恐怖した。
“フィオナが死んでしまう”と考えた瞬間に。

「優斗さんよりは弱いですけど、私だってそれなりに強いんですから安心してください」

「そうだね」

「でも、もう少し実力はつけないといけないって実感しました。私たちの娘は龍神ですから、今後もああいったことがないとも限りません」

「うん」

「優斗さんも手伝ってください。今回は魔力の使いすぎで倒れましたけど、私はまーちゃんの母親として、ちゃんと守ってあげたいんです」

「もちろん。僕ができることならね」

と、ここでフィオナが小さく笑った。

「どうしたの？」

「いえ、前と立場が逆転したなって思いまして。優斗さんがこの世界に来たころは私が家庭教師で魔法とか教えていたのに、今は優斗さんが先生になってしまいましたね」

「そうだね。時間が経つのは早いものだと実感するよ」

もう半年以上、この世界で過ごして。
馬鹿みたいに遊んで。
騒いで。
笑って。
怒って。

――そして。

大切な人ができた。

――あんな台詞は感動するだけの台詞だと思っていたのに。

今ならあのマンガのヒロインの台詞の意味が分かる。

「フィオナ」

抱きしめる力を強くする。

「1日でも1分でも1秒でもいいからさ」

たった、それだけでいいから。

「僕より長く生きて」

自分より早く死なないでほしい。

「たぶん君がいなくなることに……耐えられない」

心から呟いた優斗の言葉に。

フィオナは自分の手を優斗に重ねながら。

「……はい」

頷いた。

隣にいたいと願う

優斗たちがリライトに戻った週末。
トラスティ家では仲間内での小さなパーティが行なわれようとしていた。
修が音頭を取る。

「それでは、卓也とリルの婚約を祝って……乾杯！！」

「「「「　　乾杯！！　　」」」」

最初に修とアリー、ココが主役二人に絡む。

「いや、まさか卓也とリルが婚約するとは思わなかったわ」

「本当ですわ」

「驚きました」

「お前らも驚いただろうけど、オレが一番驚いてるから」

「何よ！　文句あるの？」

「……ありません」

きつく言い寄られて、反射的に謝る卓也。

続いて和泉とレイナとクリス。

「再来月にはクリスの結婚式もあるから、めでたいことが続くものだ」

「そうだな。私も祝福しよう」

「ありがとうございます。是非とも式には皆さんに出席をお願いいたします」

最後に優斗とフィオナ。

「僕がやったことで二人の婚約が流れなくて、本当によかったよ」

「あとで話を聞いたときは私もビックリしましたけど、無事に落ち着いて胸を撫で下ろしました」

あのあと、リステル王がリライト王に謝罪するだのなんだのとなったのだが、政治的な部分には詳しく介入しようとも思っていないので、優斗の周りは今のところは落ち着いている。

「というか、皆ってお酒を飲めたの？」

ふと気になって優斗が尋ねた。
現在、全員のグラスにはワインやビール、お酒の類を持っている。
すでに2杯目に突入しようとしている奴もいた。

「オレは弱い」

「俺はそこそこじゃね？」

「嫌いではない」

とは異世界組。

「自分は嗜んでいますので」

「わたくしは慣れてますから」

「私は弱いです」

「わたしはあんまり強くないです」

「私は問題ない」

「あたしもアリーと同じで慣れてるわ」

というのが現地組。
お酒に弱いのも少なくはいるようだが、めでたい席なので全員がハイペースで飲んでいく。
そうして1時間もした頃には、

「オレはどうせ、尻にしかれるんだよ、分かってるさ」

「ユウト、シュウ。絶対に勝ってやるからな」

などなど、多種多様な酔い方をしていた。
現時点で酔わずに素面なのは優斗、アリー、クリス、リルのみだ。
他は全員、酔っ払っている。

「いいですか～。ちゃんと聞いてますか～クリスさん」

ココがクリスに絡む。
その横では和泉が、

「……」

酒瓶を片手に無言で酒を飲み続け、

「いいか。私としてもお前はやぶからぼうではない。感謝しろ」

と、誰もいないところに語りかけているレイナ。
先ほどはおそらく優斗と修だったのだが、今は……誰になっているのだろう。

「なんでこう、強気な女の子がオレの婚約者なんだよ。オレに合ってるのは分かるけどさ～」

なぜか泣きながら卓也がリルに語り続け、

「うふふふふふふ」

優斗の隣で笑みを浮かべながらフィオナがお酒を注ぐ。

「これまた、おもしろい具合に酔っ払ってるね」

「これほどタイプが別れると壮観ですわね」

「絡み上戸に無言にわけわからないところに話しかけたり、泣き上戸。フィオナは笑い上戸か」

と、ここで一人忘れていた。

「修は？」

「シュウ様は……」

アリーが隣を見る。

すると修が胡坐から正座になりながら、

「海賊王に、俺はなる！！」

と言ってテーブルを強く叩いた。

そして突っ伏す。

衝撃で優斗とアリーの前にあるグラスが傾いて倒れる。

「あっ……」

倒れたグラスを見て、優斗とアリーは倒れたグラスを直し、そして零れたお酒を片付けようと布巾に手を伸ばし、

「あら」

「ごめん」

うっかり手が重なった。
パッと手を離し、優斗が「やるから」と言って布巾を取ろうとした瞬間だった。
右隣にいるフィオナが優斗の耳たぶをものすごい勢いで引っ張った。

「い、痛たたたたたたたた！」

思わずフィオナの手を払うと、彼女は続いて優斗の首に腕を回してピッタリと優斗にくっ付いた。

「ちょっ！」

「ありーさん！」

「は、はい！？」

フィオナの勢いに思わずかしこまった返事をするアリー。

「ゆうとさんは私のだんなさまなんです！！　とっちゃだめです！！」

舌が回らずにいつもよりも可愛らしい発音のフィオナ。

「えっと……それは分かっていますわ」

「ならいいんです」

アリーの返事に上機嫌になったフィオナは、そのまま優斗に抱きつ

いたままだ。

「ゆうとさんも、ぎゅってしてください」

「あの……フィオナ？　一応、みんなの前だよ？」

「カンケーありません。いまの私は『ゆうとさん分』が足りないのです」

なんだそれは、と優斗は心の中でツッコミを入れる。

が、今のフィオナには何を言っても通用しなさそうなので、諦めてぎゅっと抱きしめる。

「フィオナさんは笑い上戸だけでなく甘え上戸でしたのね」

「普段は一緒にお酒とか飲まないから、知らなかったよ」

よしよし、と頭を撫でながらフィオナを軽く抱きしめる。

「あら？　いつものユウトさんなら顔を赤くなさるのに」

「素面でやられたら赤くなるけど、今は酔っ払いだし」

酔っ払いがやっていること、と割り切ると楽だ。

けれど優斗の話を聞いたリルが卓也をいなしながら口を挟んだ。

「何を言ってんのよ。こないだ、あんたがフィオナ抱きしめてたじゃない。おかげで部屋に入るタイミングわかんなかったんだからね」

あとで行くとは言ったが、どうにも入りづらかったのを覚えている。

「……それは申し訳ない」

優斗もさすがにそれを言われると顔が少し赤くなった。

さらに2時間。

飲み続ける。

素面のメンバーは度数の強いお酒を飲み比べするまでになり、最終的には優斗以外のメンバーが突っ伏すことになった。

優斗は毎晩のようにマルスに付き合っているせいか、ほろ酔い程度で済んでいる。

フィオナは優斗の膝枕を堪能しながら寝ており、それ以外は雑魚寝している。

「さて、と」

片付けでもしようかと思い、フィオナの頭を持ち上げようとして足音がしたことに気付く。

「ラナさん？」

やってきたのはトラスティ家で家政婦長をしている５０代の女性だ。

テキパキと後片付けを始める。

「い、いいですよ。僕達がやったことなんですから、僕が片付けま

すよ」

優斗が慌てて断ると、ラナも微笑んでやんわりと断る。

「ユウトさん。我々の仕事を取らないでくださいな」

「け、けど」

「お嬢様が初めて、こんなにもたくさんのお友達を連れてきてパーティーをなさったんです。嬉しくて、片付けぐらいはしたいのです」

フィオナを視界に入れると、マナはまた小さく笑う。

「それにお嬢様はユウトさんのお膝の上でゆっくりと眠っているようですし、そのまま寝かせてあげてくださいな」

優斗もそう言われてしまうと、躊躇う。

「すみません。お願いしてもよろしいですか？」

「ええ。もちろんです」

言ってからというもの、ラナはものすごいスピードで物音を立てずにテーブルのものを片していく。

そして5分もしないうちにキレイにテーブルの上を片付け、全員に毛布をかけた。

「すごいですね」

「これも家政婦の技ですよ」

「おみそれしました」

互いに笑う。

「最近のお嬢様について、よくバルトさんとも話すのですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。マリカ様が来てからというもの、守衛に関しても人員が増強されましたし、バルトさんもお暇ができまして」

「それでどんな話を？」

「私もバルトさんもお嬢様が子供のころから知っていますから。だからこそ、この半年での変わり様についてよく話しておりますよ」

「良くも悪くも、僕達が変えてしまいましたからね」

「私は良い変化だと思いますよ。何より笑顔が増えましたから」

「そう言っていただけると、自分達もありがたいです」

優斗はフィオナの髪を軽く梳く。

不意に、ラナは内容を変えてきた。

「ユウトさんは……」

「なんでしょうか？」

「この先、何を望みますか？」

ピタリとフィオナの髪を梳く手が止まった。

少し考えて……苦笑した。

「また唐突な話を持ってきましたね」

「かもしれませんね。けれどお嬢様を思えばこその質問だと思っていただければ結構です」

フィオナはきっと優斗がいなくなることを望んでいない。

ラナが子供の頃から接しているからこそ理解できることだが、逆に優斗がどう思っているのかは分からない。

良い人物ということだけは理解しているが。

「難しいです。子供の頃は決められたレールを歩いていただけですし、そのレールが外れた今は……『今』のことしか考えていません」

未来のことなど、考えたこともなかった。

「フィオナが隣にいてくれて、マリカを一緒に育てることが出来て。そしてここにいる連中と馬鹿騒ぎする。そんな毎日が続いてくれればいいと願うばかりで」

この素晴らしい日々が。

続くことを願うから。

「楽しい『今』が大切すぎて、その先のことを考えるのはどうしてもおこがましいものだと思ってしまうんです」

それでも、もし。

「でも、仮にですよ」

仮定の話をするなら。

「今よりも未来のことを望むとするなら」

望むことは一つだ。

「どんな時でもフィオナが隣にいる人生であってほしい、と。そう思うんです」

まるで夢を語るように告げる。
それは本当に、純粋に願っていて。
けれど“夢”だからこそ叶わないと。
そう言っているようにも見えた。

「それならば……いえ、私のような家政婦が口を挟んでいい話でもありませんね。いつか旦那様と奥様に相談されてはいかかですか？」

ラナは何かを言おうとするが……何も言えなかった。
これ以上は自分が口を挟む領域を超えている。

「ええ。ご助言、ありがとうございます」

ラナも去っていき、優斗はフィオナを見つめる。

「僕は君を幸せにできるのかな？」

眠っているフィオナの髪に軽く触れながら、独り言を呟く。

「僕がフィオナをいつまでも幸せにできると信じて……いいのかな？」

そう言って、自嘲するように笑った。

「なんてこと、誰にも分からないか」

理想家じゃないからこそ、そんな素晴らしい未来を信じ続けることはできない。

「“これだ”と思っても、ボタンの掛け違えのようにズレてしまう場合だってあるし」

ほんのちょっとした運命のイタズラで容易くすれ違ってしまうことがある。

「けれどね。例え、この先に何があっても」

何かが切っ掛けで。

離れ離れになってしまったとしても。

「初めての恋が君でよかったって思う」

この気持ちになったことだけは、絶対に後悔しない。
だから口にしようと思う。
こんな友人達が雑魚寝しているような場所だけれど。
普段よりもお酒が入っているからかもしれないけれど。
ラナと話したことが切っ掛けになったかもしれないけれど。

「フィオナ」

それでも声にすることは今、大切だと思ったから。
ありったけの想いを込めて。
思うがままに届けよう。
この言葉を。

「好きだよ」

そしてまた、バカを相手にする

最近、フィオナの機嫌がすこぶる悪い。
というのも、

「フィオナ先輩！！」

意気揚々とやって来る、後輩が原因だ。
先日にあった優斗との婚約者騒動で、フィオナに告白してくる人数は減ったものの、それでも一定の人数は残っている。
その一人が学院の後輩であるラスターだ。
元気よくめげず、悪い奴ではない。
けれどフィオナにとっては邪魔な人間でしかない。

「……なんでしょうか？」

「一緒にお昼ご飯食べましょう！」

「……すみませんが友達と一緒に食べますので」

「いいじゃないですか。一日ぐらい」

「……それを決めるのは貴方じゃありません」

半ば無視する形でフィオナは和泉たちと合流する。
優斗と修にアリーは買出し。
リルと卓也は用事があって席をはずしている。

「それじゃ、お昼は諦めますけど帰るときは一緒に帰りましょう！」

意気揚々と引き返していくラスター。
彼の姿が消えると、珍しくフィオナが机に突っ伏した。

「お疲れ様です」

ココがフィオナの頭を撫でた。

「……これでもう、3日目です。勘弁してほしいです」

「さすがのフィオナもお疲れだな」

和泉がある意味、ラスターに感嘆する。

「フィオナさんほどもてるというのも考えものですね」

「3日目って言ったけど、前の二日間の放課後はどうしてたんです？　ユウトさんはいませんでしたよね？」

確か修と遊んでいたはずだ。

「……初日はアリーさんと帰りました。昨日はタクヤさんとリルさんと一緒に」

「今日はどうするんだ？」

「優斗さんがいます」

「それなら問題ありませんね」

一緒に帰る人がいなかったら、誰かが名乗り出ようと思っていたが杞憂に終わる。

「けれどあの人ってユウトさんを目の敵にしてません？」

「していますね。フィオナさんを騙してる悪党と思ってるのでは？」

「二人の様子を見てそう思うって、相当に目がくすんでるな」

「恋は盲目、と言いますから」

そして放課後。

優斗とフィオナが校門を出たときに、

「なぜ貴様がフィオナ先輩の隣にいる！！」

第一声が轟いた。

「なぜ、って一緒に帰るからですよ」

落ち着いて対処する優斗。

「そんなの、オレは認めてない！」

なんてことをラスターが言うので視線でフィオナに問いかけると、フィオナはうんざりした様子で言った。

「彼が勝手に私と一緒に帰ると言っているだけです」

「それなら帰ろうか」

「はい」

無視して帰ろうとする二人をラスターが止める。

「待て！　オレは認めてないと言っただろう！」

「必要なのは貴方の許可ではなく、フィオナの許可ですよ」

「けれどオレが先約だ！」

「私は貴方と帰ると一言も言った覚えはありません」

フィオナの態度は一貫して冷たいままだ。

「さようなら」

そして別れの言葉を告げて、去る。

さすがにフィオナにこう言われては、彼も一緒に帰ろうと続けることはできなかった。

「大変だね」

「本当です」

フィオナはお昼よりも大きいため息をつく。

「けれど彼もすごいね。僕達が婚約者だって言ったら『嘘か本当か分からないし、いずれオレの婚約者になる』なんて言うんだから」

「……悪意がない分、ラッセルよりは良いのですけど」

「面倒な部分では疲れるね」

「はい」

こっちの意思などお構いなく押してくる。

「とりあえず、切り替えよう。明日は訓練のために森に行くんだから、そのために今日も精霊術の練習をするんだよね？」

「もちろんです」

「なら気分はしっかりとリフレッシュしないとね。陰鬱な気持ちが精霊に伝わっちゃうかもしれないから」

「そうですね」

精霊達も良い気分はしないだろう。

「最初にマリカの面倒見て、気分が落ち着いたら練習にしよう」

「……早くまーちゃんで癒されたいです」

「同感」

優斗だって煙たらがられたり、不躾な視線で見られるのは慣れている。

けれども疲れるものは疲れる。

トラスティ家の門まで辿り着き、門を通ろうとした瞬間だった。

「貴様ッ！　なぜ人様の家に入ろうとしている！」

遠方からラスターが叫んで走ってきた。

「これは予想外」

思わず笑ってしまった。

彼が再び登場してくるとは思っていなかったからだ。

「フィオナはいいよ。先に入ってて」

「いいのですか？」

「いいよ。マリカで癒されておいで」

小さく手を振って、フィオナを家の中へと入れる。

そして始める彼の言葉は、やはり優斗にとっては笑ってしまうものだった。

「おこがましいと思わないのか！　事と次第によっては貴様を切るぞ！」

「僕は別に悪いことはしていないのですよ」

「ふん。悪人の貴様に聞く耳など持つか」

どうやら話を聞いてくれないらしい。

困ったものだと苦笑すると、守衛所からバリーと数人の守衛が出てきた。

「どうされました？」

「見ての通りです」

優斗はちょいちょい、とラスターを指す。
ラスターは威を得たとばかりにバルトに、

「守衛さん！　不審人物が進入しようとしてましたよ」

「それはどちらに？」

「ここにいます！」

どうどうと優斗を指すラスター。
優斗はこみ上げる笑い声を堪えて、自分が現在、彼にどう思われているかどうかを説明した。

「どうやら僕が不審人物らしいです」

バルトとしては優斗がどうして不審人物なのかが理解できないが、
現状では優斗が不審人物というより、

「とりあえず君は剣を納めなさい。今のままでは君が不審人物だ」

バルトに言われ、ラスターはしぶしぶと剣を鞘に納める。

「それでどうしたら、彼が不審人物ということになったのかな？」

「こいつがフィオナ先輩の家に入ろうとしたからです！」

「……？　ここは彼の家でもあるのだよ」

何か問題あるのだろうか。

「はっ？」

「ですから僕はこの家に住んでいるんです」

「そ、そんな、まさか、だってここは公爵家で……」

なぜ平民の彼が住んでいるのだろう。

「何かの間違えでは？」

「毎日、ここから学院に通っているところを見ているので、間違っているとは言えないね」

バルトに断言され、対応に困っているラスターに家の玄関からエリスが顔を出して追い討ちをかける。

「ユウト！！　マリカが待ってるわよ」

その名前を出されると、優斗もゆっくりとラスターの相手をしていられない。

「すぐ行きます」

それだけエリスに伝えて、

「というわけですみませんが、これで失礼しますね」

挨拶もほどほどに家の中へと入っていく。

残されたラスターは三下の敵が言うような台詞を吐く。

「お、覚えてろよ！」

その姿を見たバルトと他の守衛が笑ってしまったのは、しょうがないと言えるだろう。

庭で修練に励んでいるフィオナを見つめる優斗とマリカ、エリス。

「フィオナ、頑張ってるわね」

「そうですね」

「明日は森に行くんですってね」

「ええ。実際に戦わないと得られないものもありますから」

「でも無用に倒すのはご法度じゃなかったかしら？」

「実はこっそりギルドランクを上げてきたので、Bランクぐらいの魔物までなら素材にできる魔物を狩れるようになってるんです」

「あら、さすがね」

と、ここでエリスは一つ気付く。

「マリカはどうするの？」

「最初は危ないので置いていこう思ったんですけど……」

マリカ本人に訊けば、

「やーっ！」

と、ぶんぶんと首を振って嫌がる。

「マリカが嫌がるので連れてきます。どうせなら、前にピクニック気分でリステルに行ったけどできなかったし、明日は少しぐらいピクニックができますから」

「危なくないの？」

先日、リステルで起こった騒動はエリスも聞いている。
そのことがあって今、フィオナが訓練をしているということも。

「何となく、修と同じようにマリカがトラブルを引き寄せる体質なのかもしれないと思っていますが、今回は二人から絶対に離れませんから」

身も心も凍るようなトラブルは起こさない。

「それなら安心ね」

エリスもそれを聞いて安堵する。

「そういえば、フィオナに纏わりついてる後輩ってどうなったの？　さっきユウトが話してた子？」

ここ最近、フィオナがぐったりしているのはその子のせいだとエリスは聞いている。

「ええ。まさか不審人物扱いされるとは思いませんでしたけど」

「チャレンジャーよね。頑張ってるのは買ってあげるけど、無茶は勇気とは言わないわよ」

さらに言えば、うちの優斗に対して同じ扱いを何度もしていたら、エリスのほうが先に怒る自信がある。

「なんとなく、彼との間に一騒動ありそうなのは気のせいで済めばいいんですけど」

「そういうユウトの勘って大体当たってるから、諦めたほうがいいわ」

「ですよね」

これまで何度もその勘が当たってきたのだ。

今回も当たるだろう。

都合のいい解釈ほど性質が悪い

翌日、お昼を前にして意気揚々と出かけようとした優斗たち。
なのだが、

「……なんでいるんですか？」

「フィオナ先輩！　一緒に遊びましょう！」

ラスターがなぜかトラスティ家の前で待ち構えていた。

「すみませんが今日は家族で出かける予定がありますから」

「家族？」

そうは言っても一緒にいるのは優斗と赤ん坊だけだ。
彼女の両親などどこにもいない。
一方でマリカは母親の気分がどんよりしているのに気付く。

「まんま？」

マリカが呼んだ瞬間、ラスターに衝撃が走る。

「ママ、だと!?」

「まーちゃんは私と優斗さんの子供ですけど、何か?」

まったくの無表情でフィオナが答える。

いい加減うっとおしいのだが、ラスターはフィオナの無表情を違う意味に捉えた。

「そ、そうか!　その赤ん坊を使ってフィオナ先輩を騙しているのだな!!」

瞬間、炎玉がラスターの真横を掠める。

「……次にそんなことを言ったら、本気で魔法を当てます」

フィオナの警告だった。

今の言葉は許せないが故の。

さすがのラスターも冷や汗が出た。

しかし同時に考え違いもする。

優斗が無理やり父親をやっているものだと。

「優斗さん、行きましょう」

ラスターを無視して歩き始める。

今日はピクニック兼訓練なのだ。

楽しい日にしたかった。

したかった、のだが。

「どこまで着いてくるんですか？」

呆れたように優斗が訊く。

「貴様らを二人きりにするわけがないだろう！」

「マリカもいますけど」

「そんなことを言っても無駄だ」

何を無駄なのかは分からないが、彼にとっては優斗の言葉自体が無駄なのだろう。
そして彼がいることで機嫌が悪いのが二人いる。

「ほら、フィオナもマリカも膨れないの。せっかく森までピクニックに来てるんだから」

「だって」

「うぅー」

フィオナもマリカも、家族三人で遊びに行けると思っていたのだ。
邪魔者がいるので当然、機嫌も悪くなる。
優斗もそれに気付いているので、無駄だとは思いながらも訊いてみる。

「二人の機嫌が悪いので、帰ってくれませんかね？」

「オレには関係ない！」

「やっぱりそう言いますよね」

逆にラスターだけは今の状況に気付いていない。

――確実に君のせいなんだけど。

こういう鈍感さは、本当にある意味で尊敬できる。

そのまましばらく歩き、見晴らしの良い丘へと出る。

そこで持ってきたレジャーシートを広げて昼食を取ることにした。

フィオナが持ってきたお弁当箱を広げる。

「おお、おいしそうじゃないですか！　さすがフィオナ先輩！」

「優斗さん、まーちゃん。今日はサンドイッチですよ」

なぜか当然のようにラスターがレジャーシートに座っている。

けれどもフィオナはすでに、ラスターを視界に入れていない。

存在すら頭の中から抹消するようにしている。

「ほら、マリカ。サンドイッチだよ」

優斗はサンドイッチの一つを取ると、自分の膝の上に座っているマ

リカに持たせる。

「そうそう、自分で手にとって」

マリカの手を支えながら、マリカ自身がサンドイッチを口元に運ぶのを待つ。
そして拙い動きながらマリカがサンドイッチを口にした。
ちまちまと口に運び、まず一つを食べ終わる。

「うん。よくできたね」

「あいっ！」

マリカもフィオナと同じく、ラスターのことを考えることをやめたようだ。
こういうところも本当に似始めていると優斗は思う。

「まーちゃん。次は何が食べたいですか？」

「あうっ」

マリカが手を伸ばす。

「これですか？」

フィオナが訊くと、マリカが頷いた。

「はい、どうぞ」

今度はフィオナがマリカに手渡す。

マリカは嬉しそうに受け取ると、口にした。
フィオナも顔が綻ぶ。

「そろそろ家での食事、スプーンを一人で食べさせるべきでしょうか？」

「でも、結構ぼろぼろと溢しながら食べるって言わない？　夏の海のときにマリカにスプーン持たせたけど、ちゃんと持てないって分かってたから僕が上から一緒に持ったし、義母さんと相談してから決めよう」

「そうですね」

自前の弁当を食べているラスターが優斗の言葉に反応した。

「貴様、フィオナ先輩のお母様をそのように呼んでいるのか！？」

優斗としては最初、フィオナ達と同じように無視しようと思ったのだが、あまりに大声なのと反応しなかったら掴みかかってきそうだったので、仕方なく対応する。

「そうですけど」

「誰に許可を取って呼んでいる！」

「誰？　って本人からですよ」

「ふん。フィオナ先輩のお母様のことだろうから、お情けで呼ばせたのだろうさ。感謝するんだな」

ラスターの言い分にフィオナの眉根が軽く上がったが、それでも気丈にマリカに次のサンドイッチを尋ねる。

「まーちゃん。次はどうします？」

「フィオナ先輩！　娘さんに是非ともおかずをあげます！」

そう言って手元にある弁当から大きいカツをマリカに差し出す。

が、マリカが嫌がる。

「やーっ！」

「ちゃんと食べないと大きくなれないぞ！」

そういって無理にでも食べさせようとする。

予想外のことに反応の遅れた優斗とフィオナがマリカと慌ててラスターの間に身体を入り込ませる。

「何してるんですか！！」

思わずフィオナから怒声が出た。

「な、何ってフィオナ先輩の娘さんにおかずをあげようと……」

「この子はまだ小さいんです！　大きいものを食べて喉にでも詰まらせたらどうする気ですか！？」

怒るだけ怒ってフィオナはマリカに振り向く。

「まーちゃんは大丈夫ですか？」

「だいじょうぶ。ちょっとビックリしただけだから」
優斗がマリカをあやしながらフィオナを安心させる。
さすがにラスターも悪いと思ったのか謝ってきた。
「す、すみません。フィオナ先輩」
思わずフィオナは睨んだ。
けれど何か言葉を発する前に優斗に肩を叩かれる。
代わりに優斗が落ち着いた声音で話しかけた。
「ラスターさん。貴方は子供を育てたこと、ありますか？」
「ないに決まっている」
「僕達もマリカが初めての子供ですが、細心の注意を払って育てています。義母さんや義父さんや家政婦さんにアドバイスをもらいながら。それでも失敗してないか不安なものです。ですから唐突にそんなことをやられると困ります。分かりますね？」
「……ふん。言われなくても分かっている」
「次はないですよ」
あくまでフィオナとマリカに悪意はないので許してあげるが、さすがに今のは危険だった。これが続くと我慢もできなくなる。
けれどやはり、優斗からの言葉には反発したいのか、
「貴様に言われるまでもない」

自信を持って言い返してきた。

「それじゃ、今日の本題に入ろうか」

弁当もレジャーシートも片付けて、森に来た目的について確認する。

「一応、ギルドランク上で倒すことができるのは素材にできる魔物のBランクまで」

「はい」

「今のフィオナの実力だとBランクの魔物でも下の奴がギリギリ限界、かな？　だからBランクが出てきたら逃げることにしよう」

「わかりました」

頷くフィオナとは逆に、ラスターが優斗に噛み付く。

「おい、貴様。まさかフィオナ先輩に倒せと言っているのではないだろうな？」

「フィオナの訓練に来たんですから」

「馬鹿か貴様は！　女性になんてことをさせようとしている！」

次いでラスターはフィオナに向き、

「フィオナ先輩！　貴女が戦わなくともオレが倒してあげます！」

「……余計なことをしないでくれますか？」

自分のためにしようとしているのに、なぜ彼に止められなければならない。

「大丈夫です。オレはこれでも剣で会長から三本中一本を取れるくらいの実力者です。魔法も上級魔法を一つ使えますし、同学年では敵無しです。学院全体でも十指には入る実力だと自負しています」

「……だから、余計なことをしないでくれますか？」

「分かっています。こいつの実力がないばかりにフィオナ先輩が戦わないといけないのでしょう？　フィオナ先輩が強いのは有名ですから。ですけどオレならそんな心配させません」

本当に話を聞かない。

ビックリするくらいに。

無駄だとは思うがフィオナは一応、事実でもあることをラスターに言ってみる。

「……優斗さんは闘技大会で決勝までいく実力者ですが」

「あんなの偶然に決まってます」

やっぱり、とフィオナは嘆息する。
何をどう言ったところで無駄なのだろう。
特に優斗のことに関しては。

「……お願いですから邪魔はしないでくださいね。私は訓練に来てますから。邪魔したら……貴方を敵とみなします」

今のところはEランクの魔物で素材となる魔物ばかりを倒している。が、さすがに実力差がありすぎて訓練になっているとは言いがたい。

「おい、貴様」

「何でしょうか？」

「フィオナ先輩に戦わせて何も思わんのか？」

「何がでしょうか？」

「自分が戦おうとは思わないのか、と訊いている」

「今日はフィオナが訓練をするから森に来てますから。フィオナが戦うことに思うところはありませんね」

「ふん、腰抜けが」

何と言われようとも、フィオナが決意を持ってきているのだ。
それは優斗にだって止められない。
と、ここで遠方に巨人の姿が見えた。
一つ目ではあるが額に角が生えている。
確かサイクロプスの格下存在であるサイクロスという魔物だ、と優斗は知識を頭の中から引っ張り出す。

「確かBランクだね」

狩れる魔物ではある、が。

「逃げようか」

「いえ、大丈夫です」

「フィオナ？」

「やります」

先ほどのやり取りと違っている。
Bランクは逃げると話したと思ったが、違っていただろうか。

「……さっきも言ったけど、フィオナの実力ならギリギリBランクの魔物が限度だと思う。もちろん、あいつはBランクでも弱い部類にはなるから倒せるとは思うけど、厳しいんじゃないかとも思う」

「分かってます」

「それでも？」

「はい」

どうやらフィオナには思うところがあるらしい。
引きそうにはなかった。

「……分かった。けれど危なくなったら手を出すよ」

「それでいいです」

巨人が優斗たちに気付いた。
ゆったりと近づいてくる。
そこに優斗たちのやり取りを部分部分で聞いていたラスターが剣を抜いた。

「馬鹿か貴様は！　オレが時間を稼ぐから、その隙に逃げろ！」

ラスターが猪突猛進で突っ込む。
が、巨人の右腕一振りで吹き飛ばされる。
さすがに優斗もフィオナもフォローできないほどの早さと鮮やかさで飛んでいった。
綺麗に飛ばされたが、腕の振りに脅威を優斗が感じずに反射的に魔法を使わなかったということは大したダメージでもないはずだ。
ラスターは無様に着地し、片膝をついてフィオナ達に叫ぶ。

「こ、こいつは強い！　今のうちに逃げろ！」

ラスターは再び立とうとするが、立ち上がれない。
予想以上に耐久力もなかった。

フィオナはそんなラスターを一瞥すると、巨人に向かって風の魔法を放つ。
彼のことは嫌いではあるが、死んでほしいとも思っていない。
フィオナの注目がラスターからフィオナに向いた。

「私が相手です」

巨人と一人、対峙した。
優斗はマリカを抱きながら下がる。
一応、風の精霊にお願いして待機してもらっている。
いつでも助けに行けるように。

「求めるは水の旋律、流水の破断」

フィオナが攻める。
水の上級魔法を使って、巨人を斬ろうとする。
が、斜めに傷が薄っすらと出来るだけだった。

「……あまり斬れない」

バックステップで退く。

「それなら」

次に使うのは風の上級魔法。

「求めるは風切、神の息吹」

豪風に巨人が倒れて5，6メートルほど吹き飛ばされるが、すぐに起き上がる。

「これは駄目ですね」

優斗ほど上手く扱えるなら別だろうが、自分ではどうやってもダメージを与えられない。

「だったら至近距離で」

近づいて水の上級魔法を使えばある程度のダメージは与えられると踏む。

巨人の右腕が近づくが、落ち着いて避ける。

――これだけの至近距離なら。

イケると思った瞬間、すぐさま左腕がフィオナに振り下ろされる。

一瞬の思考を突かれてかわす時間はない。

「風の精霊、お願い！」

フィオナは自分の身体と巨人の腕の間に風の精霊を集める。

巨人の腕の力で、身体ごと持っていかれる。

「フィオナッ！」

かろうじて風を圧縮させて防いだとはいえ、吹き飛ばされている。

駆け寄ろうとした優斗だが、それをフィオナに制された。

「来ないでください！！」

フィオナに向かって動こうとした身体が止まる。

「大丈夫ですから」

怪我は負っていない。

まだいける。

――やっぱり、考えが甘かった。

前回もそうだった。

万遍なく魔力を使おうとして無理で。

今回はたった一人が使う上級魔法で倒せるなんて難しかった。

最初は甘い考えで挑んでしまう。

けれど、それが分かったことが実戦から得られたことだ。

「大丈夫です。信じてください」

「……フィオナ」

「まんま」

心配そうな二人の表情に笑った。

優しい笑みが浮かんだ。

「私は優斗さんと一緒にまーちゃんを育てていきたいんです。どんなことがあっても」

何があっても、だ。

「魔物に襲われるくらいで、誰かに襲われるぐらいで。たったそれだけで優斗さんの足を引っ張るなんてごめんです」

優斗の足かせになることだけは我慢できない。

「ちゃんと守ってあげるってまーちゃんに誓いました」

だから。

「だからどんなBランクの魔物ぐらい綺麗に倒せないと」

マリカに安心してもらえない。

「いつだって優斗さんがいるわけじゃないんです。優斗さんがいないからってまーちゃんをさらわれたり、怪我したりさせるのは絶対に嫌だから」

そのために。

もっと強くならないと。

ギリギリで倒せると思われているなら。

「私は今ここで、この魔物を簡単に倒せるくらい強くならないといけないんです！」

フィオナは左手を前にかざす。

龍神の指輪が薄く青色に煌いた。

『青ざめし永久氷結の使徒よ』

途端に周囲に冷気が押し寄せてくる。

『龍神の指輪の名において願う』

願うは氷の大精霊。

『来て！　セルシウス！！』

詠唱が終わった瞬間、アイスブルーの透明な女性が目の前に現れる。

「お願いしますね」

ただ、そう訊くだけで。
氷の大精霊は頷いた。
巨人の足元に氷が瞬間的に現れた。
そして見る見る間に巨人が氷漬けになっていく。
僅か数秒で、凍っている柱が生まれ、そこの中には一瞬で凍死した巨人が存在することになる。
タイミングもあるだろうが、できるなら最初からこうすれば良かったのに、それをしなかった。
フィオナのミスだ。
一応、採点を訊いてみる。

「どうですか？」

「バッチリ僕たちに心配かけたんだから３０点」

「あいっ」

ペシ、とフィオナの頭を軽く叩いて、それが当然だとばかりに優斗とマリカが頷く。

「まあ、フィオナがそこまで氷の精霊とも相性が良いとは思わなか

ったけど」

「私も驚きました」

「けれど、それが発見でもあったね」

「そうですね」

と、ここでラスターが駆け寄ってくる。
どうやらダメージは抜けたようだ。

「フィオナ先輩！　凄かったです。あれって精霊術ですよね。初めて見ました！」

Bランクの魔物を倒したフィオナを褒め称えるラスター。
代わりに優斗を睨みつける。

「それに比べて貴様は最悪だな。フィオナ先輩が強いからといってBランクの魔物と戦わせるなど」

ふん、と鼻息を鳴らして、

「やはりオレが婚約者になるほか、ないようだ」

と、のたまう。
けれど優斗とフィオナは2人での話に入り込んでいる。

「魔力は大丈夫？」

「はい。前と違って今回は精霊が倒せる範囲での魔力を欲してくれ

ましたので、その分を提供するだけですみました」

「良い傾向だね。ちゃんと精霊と対話ができてるんだから」

「ありがとうございます」

「あとは角を取って、ギルドに提出しよう。結構な額になるからマリカにはおもちゃを買ってあげられるし、残りはフィオナのお小遣いにしたら？」

「いいんですか？」

「もちろん。フィオナが倒したんだから」

フォローにフォローを重ねる

無事に採取も終わって帰ることにした。
静かな道をゆっくりと歩いていると、ふと大きな音が響いた。
鳥の羽ばたく音も聞こえてくる。

「何でしょうか？」

「大型の魔物が動いてるんじゃないかな」

「誰かが狩っているんでしょうか？」

「たぶんね」

とりあえず魔物に出会わないように気をつけようと思ったが、音はゆっくりではあるが段々と大きく響いてくる。

「向かってきてますね」

「マリカが狙いなのか？」

ふと身構える二人のところに、大きな音とは違う小さな音が間近に届く。
人影が見えた。

優斗が前に出て、身構える。

が、その人影の正体が分かると驚きの声をあげた。

「「レイナさん!?」」

なぜか生徒会長が全力疾走していた。

「ユウトとフィオナか!」

レイナも驚いていたが、彼らの姿を見て足を止めた。

「何してるの?」

「イズミとクリスと一緒にギルドの依頼をこなしに来ていたのだが、あいつら、自分達の仕掛けた落とし穴に嵌まってしまってな。さすがにAランクのあいつを一人で相手するのには苦労していて距離を置いたところだ」

と、ここでレイナに名案が浮かぶ。

「ユウト、手伝ってくれないか? 修練のために来てるから、サポートだけしてくれればいい」

優斗なら簡単に倒せるだろうが、今回は自分の実力をあげるために来ている。

だからフォローしてもらおうと思った。

けれども後ろにいたラスターが声を張り上げる。

「オレが手伝います！」

レイナは優斗とフィオナとマリカしか視界に入っていなかったが、ここでようやくラスターの存在に気付く。

「ん？　ラスターか。いや、足手まといだ」

ラスターならばフォローすらも出来ない。

「なっ！？　オレが足手まといなら、こいつなんて何の役にも立たないじゃないですか！」

「お前は何を言っている？」

意味が分からなかった。

が、少し考えると理由を思いつく。

「……ああ、そうか」

異世界から来ていることを隠している以上、学院ではそれなりの実力で通している。

優斗の本当の実力を知らないのも理解はできる。

「ユウトも大変だな」

「そうなんだよね」

「イズミからラスターについても話は聞いているが、別にいいんじゃないか？」

ラスターには実力を見せても。
フィオナに纏わりついており、彼女はとてもぐったりしていると聞いた。
優斗を見下しているとも。

「私としてはこいつがユウトを嘗めているのが気に喰わない」

年下で実力も下で、ほとんどのことが下であるラスターだというのに。

「会長！　冗談はやめてくださいよ。オレは会長から一本を取れるぐらいに強いんですよ。学院じゃ１０番以内に強い自信あるんですから」

「……いや、指導レベルで一本を取ったことを誇られても困る」

剣技を教えながらやっているので、それで一本を取ったところで自身を強いと思われても。

「そうなんですか！？」

「あとお前は実力を過信しすぎだ。お前の成績的には二十傑ぐらいだろうと思う……が、だからどうした？」

あくまで学院の表沙汰になっている実力表にすぎない。
優斗や修、和泉など本来の実力を隠しているものがいるのだから。

「世の中には上には上がいる。当然、学院にだって私より強い奴もいるに決まっている。実力なんてものは成績だけで測るものではない」

それを口酸っぱく教えてはいるのだが、どうにもラスターは信じようとしない。

「こいつはな、頭が悪い上に視野が狭い。どれだけ違うと言っても信じない」

「知ってます」

「もうちょっと真実を見る目を養ってくれると良いのだがな」

「戦闘狂のレイナさんが言う？」

「それでも実力を見る目は持っているぞ」

だから闘技大会の時、優斗と戦うのを楽しみにしていたのだ。

「そうだろうけど」

強い者には鼻が利くというかなんというか。

「……なぜ会長がこいつと対等に話しているのですか？」

不審気にラスターが言う。

年上で生徒会長のレイナと同等に話している優斗が気に喰わないのだろう。

自分なんて年上の優斗に上から目線なのに、棚に上げている。

「友人だからな。当然だろう」

本音を言うなら貴族よりも上の異世界からの客人であり、龍神の父親。
実力は“勇者の刻印”を持っていないのに伝説の魔法士クラス。
どこを取っても敬語しか使えない相手だ。
と、ここで足音が近くまでやってきた。

「さて、と。頼むぞ、ユウト。私は早くお前達に追いつきたい」

「だからって本人を巻き込む？」

「しょうがないだろう。他にいないんだから」

「分かったよ」

ラスターがいるから、あまり豪勢な支援はできない。
それでも出来ることはある。

「フィオナは防御を重視して周囲に気を配って。他にいないとも限らない。あとヤバいと思ったら絶対に僕を呼ぶこと。分かった？」

「はい」

「その際、私は一人だが」

「どうにかできるって。さっきも一人だったんだから」

レイナが精進しているからこそ、Aランクの魔物からも簡単に逃げ切れたのだろう。

「お前はフィオナとマリカ以外には厳しくないか？」

「二人は家族。レイナさんは仲間。家族に対する愛情と仲間に対する愛情は違うってこと」

「そういうことか」

そう言われてしまっては仕方ない。

「会長！　やっぱりオレを選ぶべきです。オレならサポートを完璧にこなせます」

これほど言ったところでラスターは出張ってくる。
優斗を目の敵にしているのもそうなのだろうが、自分の実力も把握できていないのも困ったところだ。

「ラスター。お前は本当に――」

「いいって。やりたいって言うならやらせてあげたら？」

「ユウト。しかしだな」

「自分の実力を知るのも、レイナさんの本当の実力を知るのも、魔物の怖さを知るのも、どれも大事だと思うよ」

「甘い男だな。お前は」

「まあ、悪意はないからね」

悪意だったら全力で叩き潰すのだが、敵意なのだから叩き潰すのもかわいそうだ。

あまりにも愚かなことをしたら別だが。

「フィオナ先輩！　もし危険が迫ったらあいつではなくオレを呼んでください！　オレなら絶対にフィオナ先輩を守ってみせます！」

そんな会話を余所にラスターはフィオナへ迫るが、フィオナは相変わらずの無視だ。

「とりあえず僕はレイナさんと彼のフォローをするから。彼については詳しく知らないし、死なないように守るため余計に気をつける。あとレイナさんの手に負えないと思ったら僕が倒すからね」

「そこらへんは心配ないはずだ。シュウもクリスも倒せると踏んだからな」

「なら、大丈夫だね」

あの二人がそう思ったのなら問題ないだろう。
木々の間から問題の魔物が現れる。
その姿を……優斗は見たことがあった。

「これってシルドラゴンだよね」

「よく知ってるな」

「前にサイクロプス、オークキングと一緒に見たことあるから」

「その時はどうしたんだ？」

「和泉とクリス以外は全員揃ってた」

「……相手の魔物も相手が悪かったわけか」

まさかのレイナも魔物が可哀想に思える日が来るとは思わなかった。

「シルドラゴンはどうやって倒した？」

「一切合財を魔力で構成した魔法剣で一刀両断」

その説明だけでレイナは倒したのが優斗だと分かった。

倒し方が明らかに優斗じゃないと出来ない倒し方だった。

「……私じゃ真似できそうにないな」

シルドラゴンが吼えた。

優斗とレイナは平然とし、マリカは吃驚していたがフィオナが宥める。

ラスターは気圧されていた。

さすがにこのランクになると雄叫びでも格下には脅せる効果があるらしい。

「こ、こいつ、強いんじゃ？」

「Aランクなのだから当然だろう」

弱いとでも思ったのだろうか。

「最初に言ったが、お前は足手まといにしかならない。戦わないのも勇気だ」

「バカ言わないでください！　オレはちゃんとフォローできますし、オレがいなくなったらこのヘタレしかいないんですから！」

あくまでやめるつもりはないらしい。

レイナは説得するのを諦めて、考えを倒す方法へと定める。

「さて、と。どうやって倒そうか」

シルドラゴンも相手人数としては４人。

一直線に襲ってくることはなかった。

「切り刻むのは？」

「竜種だけあって鱗が硬い。そこそこはダメージは与えられるがバッサリ切り捨てるのは無理だ」

「なら、口の中ぐらいしか弱点ないんじゃないのかな？」

「そうだな。私が剣を突き入れて中から魔力を炸裂させて爆発させよう」

「できるんだ？」

「イズミの改造のおかげでな。前回の黒竜の時に剣が折られたことを父上に言ったら、属性付与の剣を買っていただいた。さらにイズミの改造も相俟ってかなりの名剣になったぞ」

「それはすごい」

レイナが剣を抜く。

優斗もショートソードを抜き、ラスターも遅れて身構えた。

「二人とも、フォロー頼んだぞ」

レイナが飛び込んでいく。
次いで優斗も駆け出した。
二人の様子にラスターも遅れて駆け出す。
レイナは右から、優斗は左から斬りかかっていく。
シルドラゴンは翼を羽ばたかせ、後ろに下がろうとする。

「させないよ」

優斗が左手を地面に置くと魔方陣が生まれる。
シルドラゴンの背後に岩石が現れた。
突然、岩にぶつかったシルドラゴンは不覚にも腹から落ちる。
その隙にレイナが左の翼の部分を集中的に狙っていく。
ラスターといえば、

「行くぞ！」

なぜか真正面から剣を振りかぶっていた。

「……マジですか」

優斗が予想以上に驚いた。
攻撃を避ける技量があるならいい。
でも、おそらくラスターはないはずだ。
竜の攻撃は尻尾にさえ注意すれば基本的に左右に来ないから、楽だというのに。
それぐらいは考えられると思っていた。

シルドラゴンの口元から炎が溢れる。
炎球だ。
しかもラスターは斬りつけるのに夢中で炎球を避けるそぶりがない。

「本当に世話が焼ける」

ラスターを左から思い切り突き飛ばす。

「な、何をする！？」

誰に突き飛ばされたのか分かったのか、反射的に文句を言うラスター。
けれど優斗には反応してあげる余裕はない。
優斗は左腕の風の魔法を纏わせると、発射から到着まで僅かコンマ1秒ほどしかない瞬間を捕らえて、炎球を下に弾いて地面にたたきつけた。
森である以上、うかつに逸らして燃えたりでもしたらやばい。

「さすがに熱いね」

中級レベルの風魔法なので袖は焦げたが、問題はない。

「なっ、なっ！？」

今、目の前で起こったことがラスターには信じられなかった。
竜が放った炎球を弾き飛ばしたことと、優斗が飛ばしてくれなかったら炎球が当たって、下手をしたら死んでいたかもしれないということ。
恐怖と驚きの目で優斗を見上げる。

「魔物を前に呆けてる時間なんてないですよ」

ショートソードを振るいながら立ち上がるように促すが、ラスターは呆けて立ち上がらない。

「死にたいんですか？」

挑発するような優斗の言葉に、さすがのラスターも立ち上がろうとした。

が、遅い。

シルドラゴンが振り回すように左腕を前に突き出した。

先ほどの巨人よりも強力であろう一撃。

それがラスターに迫る。

「――ッ！」

思わずラスターが目をつぶった。

が、いつまで経っても衝撃が来ない。

「……？」

なぜ、と目を開けば優斗が受け止めていた。

風をショートソードに纏わせて防御力をアップしている。

ここで初めてレイナの怒声が響いた。

「ラスター！　だから言っただろう、足手まといだ！」

華麗に流美にレイナが剣を振るう。

今までラスターが見たことのない速度だった。

「死にたくないなら下がれ！」

シルドラゴンが左腕を戻して身体全体をぐるりと回転させた。
尾が右回りで向かってくる。
レイナが飛んでかわしたが、そのまま優斗とラスターにも向かっていく尾。
今度こそやられたとラスターは思った。

「せー……のっ！」

が、優斗はラスターの首根っこを掴んで無理やりジャンプする。
そして通り過ぎたところで着地。
優斗がラスターの表情を見れば、すっかり闘志の抜けた表情になっていた。

――これはやりすぎたかな？

実感させるとはいえ、お灸を据えすぎたような気がする。
とはいえ彼のような人物にはちょうどいいかもしれなかったと思う。

「これがAランクの魔物の力です。勇気と無茶を履き違えたら駄目ですよ。判断のミスで死んでしまうことがあるんですから」

諭すように優斗が伝える。

「ユウト。邪魔だからどっかにやってくれ！」

ラスターの所為で優斗が満足にフォローをできていない。

「レイナさんが怒ってる理由も自分が一番理解できたでしょう？

実力を過信しないで、これからも精進してください」
風の精霊を使って優しく遠くに放り投げる。
「さて、と。ラスターさんもいなくなったことだし、ケリをつけるよ」
「分かっている」
一体、どういうことなのだろうか。
目の前ではレイナと優斗がシルドラゴンを倒しに掛かっていた。
また優斗がレイナの逆側に回る。
そして一太刀。
それだけで翼が切れて、ポトリと落ちた。
『――ッ！』
シルドラゴンが痛みで叫んだ。
レイナがその瞬間、真正面に動く。
「弾けろ！」
レイナが吼えて剣をシルドラゴンの口の中へと突き刺していた。
ラスターはその光景を見ているだけ。

「……違う」

自分は本来、レイナのフォローをしているはずだ。
なのになぜか駄目出しをされていた。

「……そうじゃない」

優斗ができるのなら自分にだって出来るはずだ。
あいつに文句を言われる筋合いはない。

「……オレは強い」

少なくとも優斗よりはずっと。

「オレは強い」

あんな弱々しい男よりも強い。

「オレは強い！」

ラスターは目の前に手を向ける。

「トドメを刺してやる」

レイナが何をするのかは分からないが、一発で倒せるとも思えない。
ならば追加攻撃をすれば完全に倒せるはずだ。

「求めるは火帝、豪炎の破壊！！」

炎弾が生まれる。
レイナはまだ真正面にいた。
けれどラスターは……放つ。
自分が倒すという思いに駆られて。

レイナは剣を突き刺すと、そのまま剣に魔力を込めた。
込めた魔力に反応して剣先に光が生まれる。
そしてそれが炸裂した。
身体ごと破裂することはないが、シルドラゴンを倒すにはそれで十分だった。
優斗はそれを見て、やっと終わったと安堵したが……視界の端に映る光景に嘆息した。

「……いくらなんでもバカすぎるって」

レイナの背後に向かう。

「ユウト？」

「もうネタの領域だよ、彼は」

優斗はショートソードで斬ろうと思って、思いとどまる。
シルドラゴンよりも大きい炎弾だ。
さすがに斬ったところで、木に着火するのは目に見えていた。

地面に叩きつけるにも大きすぎる。

――ああ、もう。

諦めて相殺することにする。

とはいっても、炎の上級魔法を相殺できるほどの水魔法や氷などの派生魔法――この世界の魔法を優斗は覚えていない。

つまりできるのは、優斗が元いた世界のゲームにある魔法を使って相殺するのみ。

『氷結は終焉』

突き出した右手の前に魔方陣が浮かび上がる。

『せめて刹那にて砕けよ』

巨大な氷が炎弾にぶつける。

けれども大きさに圧倒的な差があった。

みるみるうちに炎弾が小さくなる。

そして氷を半分ほど溶かしたところで炎弾が消える。

「……まったく」

右手を振るう。

氷も役目を終えて砕けた。

「ユウト。鱗を取るのを手伝ってくれ。これが依頼の品なんだ」

「わかったよ」

レイナも炎の上級魔法を撃たれたことは理解していた。
が、すでに無表情なフィオナがラスターに向かっているのが見えたので、自分が言うまでもないと思って優斗と共に依頼の品を取ることに決めた。
優斗もそれを理解してレイナに付き合う。
結果がどうなるのかは分からないが、たぶんこれでラスターとも決着がつくのだろう。

貴方じゃないと

ラスターはへたり込んだ。
自分の魔法が優斗に防がれた。
それが自尊心を削っていた。
フィオナは冷たい目でラスターを見る。
彼女の腕の中にいるマリカも母親の雰囲気を察したからか、大人しい。

「優斗さんの感謝してください。優斗さんのおかげでレイナさんは傷を負いませんでしたし、優斗さんが助けなかったら貴方、下手をしたら死んでましたよ」

ゆったりとした様子でフィオナを見る。
いつものラスターではなかったが、それでも口は回る。

「で、でもあいつがフォローできるなら、オレだって出来るはずで……」

「この状況で、まだそう言いますか」

何も出来ないのにただ、突っ込んでいった。
それならまだしも余計なことをしてレイナに怪我を負わせようとした。

そのどちらも助けたのは、まごうことなき優斗だった。
けれど事実を突きつけられてなお、ラスターは優斗を認めようとしない。

「だってあいつはフィオナ先輩に戦わせるほど軟弱じゃないですか！」

「……貴方の良くないところは人の話を聞かないところ、都合よく考えるところですね。私もレイナさんも優斗さんが弱いなんて言ったことありませんよ」

ただの一言も言ったことがない。

「優斗さんは強いんです」

今、ここにある現実を見ろ。
フィオナはそう言いたかった。

「優斗さんは悪意がないかぎりは甘い人ですけど、私は違います。貴方を立てるようなことは言いません」

「で、でも、あんな奴がフィオナさんの婚約者など間違っている！」

その言葉はフィオナが好きだから出てきたのか、それとも優斗を否定したいが為に言ったのかは分からない。
だが、フィオナは最初からラスターの優斗を否定する言動が気に喰わなかった。
今まで我慢していたのは優斗が大丈夫だと言っていたからだ。
けれども、それだって臨界点がある。
今のでギリギリまで抑えていた堪忍袋が切れる。

「間違っているなんて貴方に言われたくありません。それを言う資格も何もないではないですか」

何でラスターに否定されなければならない。

「それに貴方、私のことを好きだと言いますけど、一体どこを好きになったんですか？　顔ですか？　身体ですか？　それとも家柄ですか？」

「……それは……」

唐突な問いに言葉が詰まるラスター。

「はっきり言いますが、貴方のことを私が好きになることは絶対にありません」

未来永劫、永遠に無い。

「貴方には悪意がありませんでした。ですからはっきりと遠ざけることはしてきませんでしたが、それは優斗さんの厚意もあるからだと気付かないのですか？」

「け、けどそれはフィオナ先輩の心が広いからであって――」

「違います。私は心が狭い女です。友人にだってすぐに嫉妬するし、嫌な気持ちになる。他人なんてどうでもいいって思いますし、優斗さんみたいに優しくありません」

「そ、そんなことないですよ！」

ラスターが力強く否定するが、だからこそフィオナは嘆息する。

「なぜ貴方が分かるんですか？　私の性格なんて何も知らない貴方が。優斗さんを知らない貴方が」

フィオナのことを知っている仲間なら、とてもじゃないが心が広いなんて思わないだろう。

彼が言っているのは彼の理想の中のフィオナ。

「貴方の都合と理想を私に押し付けないでください」

最低限の性格さえ知らないのに、どの口が好きだと言うのだろう。

「それに私のことを少しでも知っているなら、絶対に言っては駄目な言葉を貴方は何度も言いました」

特に優斗のことだ。

「私は婚約者を貶されて、ずっと黙ってられるほど出来た女じゃありません」

「で、でも、婚約者っていってもオレのほうがフィオナ先輩を好きな自信がありますし、オレのほうが絶対にフィオナ先輩を幸せにできます、何よりも大切にできます！」

フィオナがここまで言っても退かないラスターだが、彼の言葉に対してフィオナの心は何も動かない。

「貴方はいつも『優斗さんより自分は強い』とか『優斗さんより好

きだ』とか言いますけど」

それがアピールのつもりなのかもしれないが。

「貴方の言葉は私の心に響きません」

どこにも届かない。

「それに、幸せにできるって言いますけど……貴方は私の幸せが何なのか、知っているんですか？」

「……それ……は……」

またラスターは言葉に詰まる。

「いい加減、止めてください」

フィオナはこれが最後だと思い、自分の想いの丈を語る。

「私の幸せは優斗さんと一緒にまーちゃんを育てること。友達とたくさん話して遊べること。こんな些細な日常が私の幸せなんです」

それは奇しくも優斗と同じ幸せだった。

ほんの半年ほど前までは友達がいなかったからこそ、友達と遊ぶのが楽しい。

マリカを育てることになってからは、この子がすくすくと育っていく様子を見ていくのがとても嬉しい。

「だからこの幸せを奪おうとする人がいるなら相手が誰であろうと容赦はしません」

さすがにここまで駄目出しをフィオナにされて、落ち込まないわけがなかった。
が、気落ちしながらでも訊きたいことは絶えない。

「……なんであいつの肩を持つんですか？」

「婚約者の肩を持たない人なんていないと思います」

「……あいつがそこそこ強いというのは認めます。でもあいつは、フィオナ先輩を守ろうとしなかった。フィオナ先輩が大切じゃないんですよ」

誰が何と言おうと、大切な人が危なかったら守るべきだ。
危険な目にさらしてはいけない。

「人によってはそう思うかもしれませんね」

「どういうことですか？」

ラスターの問いに、フィオナは彼の前で初めて微笑んだ。
優斗のことを考えて。
ラスターが初めて見る表情だった。

「あの人は貴方よりずっと心配性で、私が怪我でもして帰ったらとってもうろたえてしまうと思います」

そういう人だ。

「さっきだって私が吹き飛ばされたとき、心配そうな顔で駆け寄ろうとしたんですよ。けれど私が止めたから彼は駆け寄らなかった」

ラスターはそれでも助けに行くべきだと思っているのだろう。

でも、彼は違った。

「優斗さんは私の想いを汲んでくれたんです。私やまーちゃんが傷つくことを本当に恐れる人だけど、それでも私が戦うと言ったから……」

助けに来なかった。

「貴方の大切の仕方もいいんだと思います。それが大切にされてることだって理解してくれて、喜んでくれる人だっていると思います」

貴族の令嬢には、そういうのが好きな人が大勢いるだろう。

「でも私は想いをしっかりと受け止めてくれて、そして進む道を一緒に進もうとしてくれる。こういう大切がいいんです」

けれどそれは。

「もちろん優斗さんに迷惑だってかけてしまいますし、心配だってさせてしまいます」

彼に良い気持ちをさせていないことも確かだ。

「でも……」

フィオナは心底、嬉しそうな表情を浮かべた。

「不謹慎ですけど、嬉しいんです。大切に想われてるって実感できるから」

優斗に自分がそう想われていると。
感じられる。
それがフィオナには嬉しい。

「……オレにそんな表情を向けてくれたこと、なかったですね」

「そうですね。貴方のことは邪魔としか考えたことありませんでしたから」

フィオナがばっさりと切り捨てた。

「もう少しオブラートに包んでくれると嬉しいんですが」

「私にそれを求めないでください」

またも突き放すように答える。
きっとこれがフィオナの性格の一つなんだとラスターもようやく気付く。
苦笑した。
確かにこんなフィオナはフィオナじゃないと思ってしまう。
これだって“フィオナ”なのに。

「そう……いうことか」

所詮はこれだけの想いか、となんとなく納得してしまう。

「フィオナ先輩」

けれど、それでも『好き』という感情は確かにあった。

だから訊きたい。

「……正直に答えてもらっていいですか？」

「何をですか？」

「あいつよりもオレが早く出会ってたら、オレを好きになってくれましたか？」

仮定の話ではあるが。

もし、そうだったなら。

どうだったのだろう。

少しは考えてくれるかとラスターは思っていたが、フィオナは早かった。

「無理です」

「早いですね」

あまりの早さに悔しさも出てこない。

「どれだけの男性と出会ったとしても、やっぱり優斗さん以外に愛

する人なんて思い描けないんです」

頭を下げる。

申し訳ないと思うが、無理だった。

優斗以外に誰かなんて。

◇　◇

話が終わった頃合を見計らって優斗とレイナが合流する。

ラスターは優斗を一睨みしたあと、先に一人で帰っていった。

残った優斗たちは和泉とクリスを回収して、ギルドへと向かう。

そしてギルドで依頼達成のお金を貰うと優斗とフィオナは和泉たちとそこで別れた。

家への帰路へと向かっている途中で、フィオナがマリカと手を繋いで歩きながらぽつりと話し始める。

「あれだけ怒ったのは初めてかもしれません」

「怒っちゃったんだ」

あちゃ、といった感じて優斗が笑う。

「私だって我慢の限界くらいあります」

じと、と優斗をフィオナは見る。

「優斗さんのことをあれだけ言われて我慢しきれるわけありません」

「ありがとう、って言う場面なのかな？」

「言わなくていいです。私の問題ですから」

ただ自分が我慢できなくだっただけ。

「でも……」

少しだけ、気になった。

気になってしまった。

「優斗さん」

「ん？」

だから少しだけ勇気を出して訊いてみよう。

「もし優斗さんの立場が私になった時は――」

そうなった場合。

自分がたくさん、中傷されていたら。

「優斗さんは怒ってくれますか？」

フィオナの少し真面目な質問に。

優斗は唖然とした表情を浮かべたが、すぐにからかうような笑みに

なった。

「それを訊くのはちょっと卑怯じゃないかな」

「なんでですか？」

「決まってるからだよ。絶対に怒るって」

大切で大切で。

どうしようもないくらいに大好きだから。

「僕はフィオナに関しては、怒るために必要な沸点がとんでもなく低くなるんだから」

自分と同じようなことがあったら、やった人物を魔法を吹き飛ばす自信がある。

「……同じですね」

「そうだね」

「嬉しいです」

「そっか」

なぜか互いの胸に充足感が生まれる。

嬉しくなった。

「あうっ」

マリカが声をあげた。
そして空いている右手を優斗に伸ばした。

「わかったよ」

小さく笑って優斗は小さな手を握る。
そしてフィオナを示し合わせてマリカを持ち上げる。

「あいっ！　あう！」

両手を持ち上げられて空中に浮かんだことに喜ぶマリカ。
その姿に癒されながら、

「今日の夕飯、なんだろうね？」

「ハンバーグって言ってましたよ」

二人はなんてことはない会話を楽しんだ。

初めてだから踏み出せなかった

１１月も中盤となったころ、優斗と卓也とクリスが一同に集まっていた。
事の発端は卓也がクリスに訊きたいことがあったからだ。

「なあ、クリス」

「なんでしょうか？」

「特に知ってもない人と結婚するってどんな感じなんだ？」

自分も同じ状況に置かれたわけだが、特に話が進展しているわけでもなく。かといってリルとの関係が進展しているわけでもない。だからこそ、クリスに訊いてみたかった。

「卓也がそれを自分に訊きますか」

「だって。オレの場合は勢いで頷いた感が多々あるから」

そして卓也は優斗を見る。

「優斗は役に立たないし」

「すみませんね。よく見知った方と婚約やら夫婦やらやっていて」

優斗がおどけて返す。

「だからクリスに訊きたいんだよ。どうなのかな？　って」

卓也の問いにクリスは少し考えると、自分の考えを伝え始めた。

「前にも言ったと思いますが、貴族の結婚というものは双方が愛し合った上での結婚など、そうあるものではありません」

7割ほどは政略結婚だろう。

「家名を上げるため、地位を上げるため、望まれない結婚など多々あります」

「やっぱりそうなんだね」

「特に次女や三女となった女性など顕著でしょう。自らの意思で結婚など」

見捨てられていれば話は別だが。

「穿った見方をすれば、家を興す手段なのですよ。結婚など」

「……」

「……」

正直、これほど結婚というものに冷めた発言を聞いたのは初めてだった。

優斗も卓也も言葉を失う。

「自分は公爵家ですから、選ぶ立場にいました。自分より上など王族ですから。アリーさんをどうこうしようとしない限りは選びたい放題です」

自分が持っている位を望んでいる輩のほうが数多くいるのだから。

「幾人もの候補がいた中で決めたのがクレアです。初対面ではありましたが、クレアなら仮面夫婦などではなく、本当の夫婦になれると思ったからです」

けれどそれは。

「粗暴な言い方をすれば、少しでもマシだと思った女性を選んだだけです」

こう言い換えることもできてしまう。

「おそらく貴方たちの観点から見て問題なのは、そういった結婚を我々が普通と思っていることでしょう。結婚とはそういうものだと割り切っている」

「念のために訊くけど、マジで全員がそう思ってんの？」

卓也が確認を取る。

「貴族や王族など、結婚なんてそういうものとしか思っていません」

「なんかそれって……悲しいね」

「そういうもの、か。リルもそうなのか？」

「分かりかねます。それこそ一番彼女に近しいのはタクヤですから」

「だね。卓也が分かってあげないといけないんじゃないかな」

彼女がその考えで卓也を婚約者と選んだのか。
それは優斗とクリスには答えることはできない。

「でも、その答えが返ってきたら正直……ヘコむ」

「好きなのですか？」

「分からない。まだ好きと断言できるわけでもない」

いいな、と。
そう思っているだけだ。

「けれどクリスが言ったように選ばれたんだとしたら……嫌だと思った」

「それならばお互いに好きになっていけばいいではありませんか。自分とクレアもそうですよ。自分たちは愛ある生活を望んでいますから」

別に仮面夫婦になる必要性はない。
婚約から始まったとしても愛を育んではいけない理由などない。

「少しずつ分かっていけばいいんじゃないかな。卓也はそういうの、

得意だろ？」

根気強く。
それが卓也の強みだ。

「……だな。順序は逆だけど、頑張ってみるか」

卓也は一度、両手で頬を張る。
話して吹っ切れたのか、相談してきたときよりは表情は晴れたように優斗とクリスには見えた。

「それで優斗はどうなんだよ？」

「何が？」

そして話題は次の人物へと移る。

「フィオナと」

「というか、あの状況で互いに好意を持っていないとか馬鹿なことは言わないですよね？」

「互いかどうかは分からないけど、少なくとも僕はフィオナのことが好きだよ」

優斗の返事に卓也とクリスが首をひねる。

「……分かんないってなんだ？」

優斗はフィオナが好き。
ということはすでに告白も済んでいるものじゃないのだろうか。
それならば彼らの仲むつまじい姿にも心底納得できる。

「いや、だって付き合ってるわけじゃないし」

「……はい！？」

「……タクヤ。自分は耳がおかしくなったのでしょうか？」

「いや、正常だろ」

「何が言いたいのかな？」

「言わせんな、馬鹿」

卓也とクリスは二人してため息をつく。

「告ってないのか？」

「うん」

「……つまりあれですか？　別に告白しなくても同棲しているし、マリカちゃんのおかげで夫婦やら婚約者やら言われているから、わざわざする必要もないと」

「いや、だからフィオナがどう思ってるか分からないし」

クリスが大げさに頭を振った。

「……先ほどのタクヤも相当なヘタレだと思いましたが、ここにもいましたか」

こと現状においては卓也以上のヘタレだ。

「言えばいいじゃないですか」

「いや、だって考えてもみてよ。もし僕がフィオナに告白したとして、断られたりしたら悲惨だよ。マリカがいるから家を出るわけもいかないし、一緒にマリカを育ててるんだから嫌でも顔を合わせる」

断るとかねぇよ、と卓也とクリスは視線でツッコミを入れる。

「そこまでネガティブになる理由はなんなんだ？」

優斗はそう言われて少し考え、

「怖いのかもね。初めての恋で」

自分の考えを素直に口にした。

「フィオナと一緒にいれる状況がほんのわずかの可能性でも崩れてしまうと思ったら、うかつに今の状況を変えたくないと思ってるのかも」

それだけじゃない。

「義父さんも義母さんとの関係を崩したくないっていうのもあるんだろうし」

うかつに何かを言って崩れるのが怖い。

「大切なんだ。フィオナもマリカも義父さんも義母さんも。だから今の関係を崩したくない」

「……それでフィオナを誰かに取られたらどうするんだ？」

「フィオナがその人のことを好きなら諦めるよ」

もし、彼女が本当に好きなら。

「でも」

こう言うのは変だけど。

「今まで言ったことに矛盾するけど」

怖いと思っていると同時に、こう思ってる。

「このまま終わりたくないのも確かなんだ」

すごく怖いけれど一歩を踏み出そうと考えてる。

「そろそろ頑張らないと……ね。そのために言わなきゃいけないこともあるし」

今まで彼女に――彼女たちに言わなかったことを。

「それを言って初めて、フィオナと真正面から向き合えるのかなって思ってる」

◇

◇

フィオナとココとアリー、リルも４人で集まっていた。

「それでリルさんはどうなんです？」

ココが興味津々で訊いてきた。

「何がよ？」

「タクヤさんとのことですよ。婚約までしちゃって。いつから好きだったんです？」

「……べ、別に言わなくてもいいでしょ」

少し顔を隠してリルがそっぽを向いた。

「え～、だって気になりますよ」

「わたくしも」

「私も気になります」

便乗してアリーとフィオナも乗っかってきた。

3人の期待の視線を受けて、さすがにリルも黙ってられなくなる。

「……そ、そんな大層な話じゃないわよ」

リルが話し始めたことに目を輝かせる3人。

「黒竜に襲われたときにうっかりときめいちゃっただけ」

あれだけ悪態を突いていた自分を、命を賭して守ってくれた彼の姿に。

「でもリルさんって婚約者候補がたくさんいらしたのですよね？」

そこから選ぼうとは思わなかったのかとアリーは気になる。

「そりゃ婚約者候補がたくさんいたけど、別にいいやつはいなかったし。そいつらよりもタクヤのほうがずっと良い男だし。それにあたしは貴族達の政略道具になるつもりもなかった」

人形のように扱われるなんて我慢できなかった。

「というかアリーとココはどうなのよ」

今度は逆にリルが二人に尋ねる。

「わたしは全然です。婚約の“こ”の字も出てきませんよ」

「シュウ様があれですから」

苦笑するアリーに3人も同じように笑った。

「アリーは苦労しそうね」

おそらく仲間の中で朴念仁ナンバー1の修。
恋愛関係に発展させることは殊更に難しそうだ。

「フィオナさんは進展とかあったりします？」

そして今度の話題はフィオナへと移り変わる。

「いえ、特に何も」

落ち着いた感じで紅茶を飲むフィオナに、アリーは前々から思っていた疑問を訊く。

「ぶしつけに訊きますけれど」

今まで直接に訊いたことはなかったけれど。

「フィオナさんはユウトさんのこと好きなのですよね？」

「ふぇっ！？」

フィオナが手に取っていたカップをガチャリと音を鳴らして落とした。

一瞬で顔を真っ赤にしたフィオナにリルがからかうように言った。

「こないだ愛してるって言ってたわよ」

「え！？　い、いつですか？」

「本当なのですか！？」

突然降って沸いた話にココもアリーもテンションが上がる。

「あたしとリステルに行った時によ。３０人以上に大見得切って言い放ってたわ」

「ふぇ～」

「すごいですわね」

そんな大人数に言うなんて。

と、ここでココは疑問に思った。

「告白はしないんです？」

それを訊くと、フィオナの真っ赤だった顔はすぐに赤みが消えた。

「……いえ、さすがに断られるのが怖くて」

「なんでです？　だってフィオナさんってユウトさんに好かれてるじゃないですか」

「好意を持っていただけてるのは分かるのですが、それは仲間の皆さんも同様だと思いますし」

「「「……えっ？」」」

予想外の返答に3人が面を食らった。

そして次々に声を揃えて否定する。

「違いますわ。全然、違います」

「扱いからして違うわよね」

「ですよ」

明らかに圧倒的にどうしようもなく扱いが違う。

なのに同じに思うって。

あきれる。

鈍いのか、それとも危機感が足りないのか。

「前にも話したと思いますが、ユウトさんは詳細が知られたら大変

な人物です。国内有数どころか国外まで引っ張りだこの争奪戦が起きそうな方です。このまま手をこまねいていたら奪われてしまうこと必至ですわ」

アリーがそう言った瞬間、フィオナが叫んだ。

「それは嫌です！」

珍しく、フィオナが真顔で余裕のない表情になった。

今までならば『優斗さんが決めたなら仕方ありません』と言うのに。

互いの結びつきが強くなったのだろうか？

それとも、より一層に優斗を愛するようになったのだろうか？

どちらにしても反射で言い放ったこの言葉は、おそらく彼女の純粋な本心なのだろう。

そんな彼女の様子にアリーはイタズラを思いついたように笑う。

「幸い、現状ではフィオナさんはユウトさんの奥方です。今のうちに良妻としてユウトさんを捕まえておくのがよろしいのでは？」

アリーの提案にフィオナは飛びついた。

「ど、どうしたらいいですか！？」

あまりにも真剣な様子に少しだけ申し訳ない気もしたがアリーもココもリルも、それ以上に楽しさが勝った。

「じゃあ、みんなで考えましょう」

積極的？　引っ込み思案？

普段の優斗は朝に弱い。
やろうと思えば問題なく起きれるのだが、それは特別な状況になったときだけ。
普段は１５分以上もぼけっとしている。
特に休みの日などはゆっくりとまどろんでいるのが好きだった。

「失礼します」

そんな彼のもとへと向かったのはフィオナ。
音を立てないように優斗に近づき、

「優斗さん、起きてください」

優しく声を掛けるが優斗は起きない。
というわけで、このあいだの話し合いの際に言われたことをやってみる。

「あなた……お、起きてください」

顔を真っ赤にしながら言う。
が、優斗に反応なし。
そして起きなかった場合の次の手段。

「お、おはようのキス……でしたね」

頬と唇の二択らしいが。
とりあえず頬に狙いを定める。

「……よしっ！」

気合いを入れてベッドに手を掛けた。
と、ここでベッドが軽く揺れる。

「……ん……？」

そのわずかな振動で優斗が目を覚ます。

「……」

少しだけ目を開いて……フィオナを目が合った。

「……きょう……なんかあったっけ……」

「……い、いえ、なにも」

フィオナとしては、まさか頬にキスをしようとしていたなどとは言えない。
優斗はフィオナの返答を聞くと、安心したように目を閉じた。

「……おやすみ」

◇

◇

「……うぅ……」

朝は失敗した。
が、次は成功させる。
お昼を食べ終わって優斗は現在、ソファーで寝転びながらマリカを持ち上げている。
ソファーは優斗がまるまる使っているので、ほかに座るものもいない。

「あぅーっ！」

“高い高い”をしてもらって喜んでいるマリカ。
フィオナは二人が遊び終わるところを狙って『ひざまくら』をやってみようと試みる。
だが、

「ユウト、ちょっとそこでお茶飲むから頭あげて」

「向かいのソファーが空いてますけど」

「いいからいいから」

無理矢理にエリスが優斗の頭があった部分に座ってきた。
ひょいっと頭をあげた優斗はそのまま起きようとしたが、額を押されてあえなく後頭部がエリスの太ももの部分に着地した。

「……なんです？　突然に」

「娘に膝枕ってしたことあったけど、義息子にはやったことなかったから」

「義父さんで我慢しません？」

「嫌よ。自分の子供にやるっていうのが重要なのよ。そ・れ・に――」

フィオナをエリスはにやにやと見る。
ただならぬ表情をしたフィオナがそこにいた。

「あら？　フィオナ、どうしたの？」

「わ、分かってやってるんですか！？」

「なんのことかしら？」

エリスがフィオナをからかっている。

これでようやく優斗もエリスがどうしてこんなことをやったのか見当がついた。

「フィオナをからかうためにやったんですか」

「だってあの子ったらさっきからウロウロしながらユウトとマリカのことを見てたから。もしかしたらこういうことやりたいのかな、って」

「ち、違います！」

からかわれていたのに気付いて、フィオナが反射的に否定する。

「部屋に戻ります！」

そしてバタバタと自室へと戻っていった。

「本当に慌ただしい娘ね」

「……義母さん。フィオナをからかうのやめてください」

「だって楽しいんだもの。今のあの子ってからかい甲斐があるし」

「……はあ。僕にまで被害が来るようにしないでくださいね」

「そこらへんのさじ加減は分かってるわよ」

1時間後、落ち着いたフィオナは再びリビングに戻る。
が、優斗とマリカの姿が見えない。
エリスに尋ねる。

「優斗さんは？」

「あそこでマリカとお昼寝中よ」

エリスが指したほうを見れば、二人仲良くマリカのお遊びスペースで眠っていた。
にやにやしながらエリスがフィオナに訊く。

「それで、次は何をするの？」

「や、やっぱりさっきの分かっててやったんですね！」

「だってぶつぶつ独り言で言ってるんだもの。それはもう分かるわよ」

朝からずっと言っていれば気付かないほうがおかしい。

「次はうでまくらって言ってたわね」

「わ、わー！　だ、駄目です！　いくらお母様でも次はやったら駄目です！」

「静かになさい。二人が起きちゃうじゃない」

慌てたフィオナをたしなめる。

「というかさっきから疑問だったのだけど、どうして突然そんなことやろうと思ったの？」

エリスの当然とも思える質問にフィオナは、先日の話をする。

「ふうん。つまりユウトが誰かに取られるかもしれないから、先に既成事実を作ろうとしたのね」

「そ、そうじゃありません。妻らしいことをすれば優斗さんをここに留めておけるって話になって」

「なに？　フィオナはユウトをここに留めておきたいの？」

エリスの直球な質問にフィオナは照れるが、しっかりと頷いた。

「だったら別にそんなことしなくてもいいじゃない。帰る場所とおいしいご飯を作って待っていること。これが旦那に妻を持って一番よかったと思わせる方法よ」

「……そう……なのですか？」

あっけらかんとしたエリスの言葉にフィオナは驚く。

「そうよ。たまに振る舞う手料理なんて、若いときのマルスは泣いて喜んだわよ」

貴族だから料理を振る舞う機会はそうそうあるわけではないが、それでも料理を作ってあげたときは喜んでいた。

「だからフィオナ達は今のままでいいのよ。ときどき、ご飯を作ってあげてるしょう？」

「はい」

「それに、ユウトが帰る場所は“この家”なんだから。無理にどうこうしようと思わなくていいの」

と、ここでエリスはイタズラめいた表情を浮かべ、

「どうしても離したくないのなら、告白でもなんでもして本当の婚約者やら夫婦になればいいだけじゃない」

そう言ったら、またフィオナは顔を真っ赤にして自室へと戻っていってしまった。

エリスは笑う。

「フィオナって変に行動派なのに、妙なところで引っ込み思案なのよね。誰に似たのかしら？」

行動的なのは自分の性格だろう。

ということは、引っ込み思案なところは、

「きっとマルスね」

あと少しが足りない

久しぶりに5人で夕飯の食事をしていた。
普段はマルスの帰りの時間が不定期のために4人が多いのだが、本日は仕事が早く終わったとのことなのでマルスが早々に帰ってきたのだ。
優斗はマルスが早く帰ってきたことで、一つの決心を固めた。

――今日、話そう。

このあいだ、決めた。
自分の過去をちゃんと話すと。
他人に知られたら嫌な過去だけど。
この人達には、知ってもらいたいと思ったから。
優斗は夕飯が終わりフィオナがマリカを寝かしつけに部屋に行くのを見て、マルスとエリスに時間をもらった。

「時間と取ってくださってありがとうございます」

「それはかまわないんだが」

「何の話をするの？」

「僕の昔話をしようと思いまして」

優斗が言うと、二人とも一様に驚いた表情を浮かべた。

「いいのかい？」

「別に話さなくてもいいのよ」

多少なりとも優斗の過去を知っている二人は、気を遣ってきた。
それが嬉しい。

「けれどこれ以上、黙っておくことはできないって思いましたから」

大切にしてくれるからこそ。

「しっかりと話したいんです」

「どう説明したらいいか分からないので、最初から順に話していきたいと思います」

優斗は大きく息を吸って……吐いた。

身の丈話をするのはこれで2度目だ。

さすがに修たちの時とは別の緊張感がある。

「まずは僕の両親のことから話したいと思います。僕の両親はこの世界で言えば、商工の代表でした。そしてその商工を一代で大きくさせた手腕の持ち主でもありました」

晩年に至っては数百億という利益を得ていた。

「真っ当じゃない方法も使って」

不正ギリギリ。

もしかしたら平然と不正をしていたのかもしれない。

「悪党のごとく乗っ取り、幾数もの商工を潰し、その人達の生活を破滅させていました」

そんな両親は当然。

「もちろんですが両親の結婚も愛あるものではありません。政略結婚みたいなものです」

会社の利益になるため、一家の利益になるため。

それで自分の両親は結婚した。

「そして僕はそんな両親から帝王学……とでも言えばいいでしょうか。勉学、運動、芸術の分野などのありとあらゆるものにおいてトップであることを強要されて生きてきました」

物心ついたころには、すでにそうだった。

「幼少のころからずっと学ぶことだけを強要された当時の僕は、今から見れば感情のない人間でしたね」

初めて会ったときのフィオナよりもずっと。

無感動に、無表情に。

ただ生きていただけ。

「失敗をすれば食事も抜かれますし、殴る蹴るは日常茶飯事。誰かに負ければ存在すら否定されてきました。『結果が出なければおまえはこの家にいる価値がない』と」

ずっとずっと、そうされてきた。

「それが当たり前だと思っていましたが、小学校……7歳ほどから通うようになる学校に行けば、さすがに自分の境遇があまりにも違いすぎることに気付きました」

友達と遊んでいる同世代を見るたびに。

自分が彼らと違うものだと見せつけられた。

「そして思うんです。なぜ自分だけがこうなのだろう、と。どうしてここまでされなければならないのだろう、と」

そしてあこがれた。
彼らの生き方に。

「もちろん、友達が作れるわけもなかった。両親ともに僕に友人など不要と思っていましたから」

友人などお前にはいらない存在なのだと。

「そして１０歳になったころ、僕は思いました」

子供の浅知恵みたいなものだけど。

「元凶が両親ならば、この２人が死んでしまえばいい。いっそ殺してしまおう。そう決めました」

今から鑑みれば、あまりにも子供らしい短絡的な考えだった。

「けれど自らが手を汚したことばバレれば犯罪になる。やるならば完全犯罪を行わなければならない。そこからの２年間は暇な時間があれば両親を殺す計画を算段していたような気がします」

自分が殺したことを警察に悟られずに。
いかに両親を殺すか。
ただ、それだけを。

「けれどそんなある日、転機が訪れたんです」

あっけないほどに。
それは来た。

「11歳の年末の頃です。両親に潰された商工の人間が家に上がり込み、包丁を持って暴れたんです。自室にいた僕は、乗り込んできた暴れる彼を取り押さえることもせずに捕らえられました。たぶん、当時の僕でも取り押さえられたと思いますが、僕は抵抗せずにいました。僕を殺そうとはしていなかったので安易に捕まったんです。そして手錠をかけられましたね」

けれどもそれは。
殺さないだけで。
それ以上の絶望を知れ、と視線が言っていた。

「リビングに連れていかれて、始まったのは殺戮です。両親はすでにお腹を刺されて蹲っていましたが、そんな彼らに何度も何度も全身をくまなくメッタ刺しです。命が失われたあとも、何度も。何片にも切り刻まれ、肉片がそこら中に転がりました」

血なまぐさい臭いが。
リビングに充満していた。

「この光景を僕に見せたかったのでしょうね。お前の両親はこんなことをされる人間なんだと。教えたかったのだと思います」

何度も何度も。
両親が刺される瞬間を。
目撃させられた。

「そのあと、彼は満足したように自首しました。僕に一生分の傷を心に負わせたものだと信じて」

あくまで普通の両親で。

自分が普通の子供なら。
彼がやったことは大いに意味があっただろう。

「けれど僕は……何も悲しくありませんでした。殺そうと思っていた両親が死んだ。しかも自分が手を掛けることもなく。よかったとさえ思いました」

自分の手を汚す必要がなくなったのだから。
けれどそれは、決して終わりなどではなくて。

「両親は莫大な保険に入っていたので、僕はそれを受け取ることになりました。ですがその大金をかすめ取ろうとした汚い大人たちが大勢、押し寄せてきました」

養親に、後見人に、親族だから、と。
莫大な遺産に目がくらんだ人々がやってきた。

「僕はそんな彼らを全力で拒否しながら、自ら後見人を立て、全て振り払いました」

そして大人とはなんて汚い存在なんだろうと。
子供ながらに悟った瞬間でもあった。

「何もかもが終わったころには学校も一つ上に上がり、中学校というところに通い始めました」

事件があったから引っ越しをして。
何も知らない土地で一人、生きていく決心をした。

「そこで初めて僕は、自分で何かをするということを行いました。

自分で選んだ部活に入り、自分の意思で遊びにいき、見てみたいと思ったアニメを見て、ようやく生きているという実感を得ました」

それにのめり込みすぎて、軽いオタクになってしまったのは愛嬌というものだろう。

「でも、それは同時に敷かれたレールがなくなり、将来のことが白紙なった瞬間でもあります。自分で考えて未来を描かなかった僕は……将来を想像することができない人間になっていました。明確に願っていたのは両親の死だけなのですから」

子供らしい夢を持つこともなく。

ただ、それだけを考えていた小学校時代。

「けれどいずれ見つかるだろうと楽観的に考え、僕はその日1日1日を生きていき、そして修たちと出会いました」

親友達と出会った。

「それからの日々は……本当に楽しかったんです。次の学校――高校に上がるときも僕はどこに行こうか考えていませんでした。実力的にも財力的にもある程度の学校は狙えました。けれどそんな時、あいつらが言ってくれたんです。どうせだったら同じ学校に入ろうぜって」

簡単に。

まるで普段の世間話のように話してくれた。

「嬉しかった。嬉しくて、嬉しくて、僕は……自分がどういう人間なのかを教えました。彼らなら受け入れてくれると思ったから」

性格も。
過去に起こった事件も。
余すことなく伝えた。

「そうしたら彼らも同じような境遇だと知って、驚きと同時にもっと大きな仲間意識が芽生えました」

唯一無二だと。
一生涯の友人だと。
思えた。

「そして同じ高校へと進学した僕らは楽しく過ごして……あの召還の日を迎えました」

あのスキー旅行での。
召還に繋がる。

「……これが僕の全てです」

全てを言い切ると、優斗は大きく息を吐いた。

「実の両親に殺意を抱き、殺そうとしていたこと。そして助けられたかも知れない両親を見殺しにしたこと。これは……紛れもない事実です」

否定できない自分の過去だ。

「これが昔の僕です」

それはあまりにも醜い、隠したい過去。

「僕の今の性格は、僕が理想としていた性格なんです」

強く、優しく在る。

ある意味で仮面をかぶっているようなものだ。

「本当の僕は臆病ですぐに人を恨み、憎み、殺そうとする……そんな弱虫な性格なんです」

そんな自分を。

マルスとエリスは。

どう思うだろうか。

「……それだけかね？」

マルスは全てを聞き終えると、ただそれだけを訊いてきた。

「はい」

優斗は頷く。

マルスは優斗の頷きに、少しも動揺することはなかった。

「私はそれを知ったところで、君を義息子じゃない……などと言うつもりはない」

言えるわけがない。

「理想の性格？　結構じゃないか。最初は違かったとしても、今は立派に君の性格だよ。そう在りたいと望み続けて得られた君自身だ」

もう立派に優斗の性格なのだ。

それを否定してはいけない。

「私は君の過去を知れて……よかった」

それはマルスが考えている以上に辛い過去だろう。

推し量ることなんてできない。

けれど、

「私は、そんな君が息子であることを誇りに思うよ」

マルスはただ、微笑んでそう伝えた。

そしてエリスは、

「――っ！」

右手を一閃、優斗の頬にたたき込んだ。

「馬鹿じゃないの！？　どうしてそういうことを早く言わないの！！」

怒鳴った。

張られた左頬を触りながら、優斗は少しだけ唖然とした。

まさかビンタをされるとは思っていなかった。

「す、すみません。結構スプラッタな内容もあるので迂闊に話せるモノでもないかな、と。それに二人に嫌われるのが怖かった、というのもありますし」

「さっさと言いなさいよ！　私がユウトのことを嫌うわけないんだから！」

そして初めて優斗がエリスのことを『義母さん』と呼んだ日と同じように、彼女は優斗を抱きしめた。

思わず、涙まで出てくる。

優斗は苦笑した。

「相変わらず、義母さんは僕のために泣いてくれるんですね」

「母親なんだから……当たり前よ」

「……はい」

今はもう、断言できる。
誰にも否定なんてさせない。
優斗にさえ、させない。

「ユウトは絶対、何があってもうちの子だから。それを忘れたら怒るわよ」

「……はい」

「貴方が昔の貴方自身を否定したくても、私は肯定するわよ。その事実があったからこそ、私の大好きなユウトに会えたんだから」

「……はい」

まさか。
肯定されるとは思ってなくて。
……力が抜けた。
あんな過去でもあってよかったのだと。
ほんの少しだけ、思えた。

「ユウト君。とりあえず気になったことがあるのだが」

「なんでしょうか？」

エリスに抱きしめられながら、マルスの質問に答える。

「最初に黙っておくことができなくなった、と言っていたが何か切っ掛けがあったのかい？」

「……はい」

話そうと思った理由は、たった一つ。

「フィオナと真正面に向き合いたいんです」

ただ、それだけ。

「正面を向いて彼女を見ていきたいから」

「だというのに、フィオナには言わないのかい？」

「……直接言おうとも思ったんですが、上手く話せる自信がなくて。義父さんと義母さんから言っていただけると助かります。大切なのはフィオナが知ってくれる、ということですから」

そう。

ただ、自分の過去を知ってくれる。

それだけでいい。

この件だけは上手く話せる自信がなかった。

「内容が内容なだけに、怖がらせたくないんです」

彼女は純粋で。

優しいからこそ。

怖がらせたくない。

「大切な女性だからこそ……絶対に」

けれどそれは。

『大切な女性だから』というのを言い訳にして。

フィオナだけに自らの口で伝えられないのは。

彼女にだけは嫌われたくないということ。

『二人――エリスとマルスに嫌われるのが怖いから』というのも本当だろうけれど。

やっぱり一番は。

『フィオナにだけは嫌われたくない』から。

だから。

彼女にだけ伝えられない。

そしてそれは。

彼が自分で言っていた。

優斗が弱虫だという証なのかもしれない。

今、エリスがフィオナに話している。
優斗はその間、テラスでマルスと飲んでいた。
あくまでいつものように過ごしている。

「本当に良かったのかい？」

「……分かりません。ただ、僕が説明するよりは良かった、と。思うしかないです」

手に持ったグラスからカラン、と氷が音をさせた。

「どの判断が正しいかなんて分からないですよ」

「……そうか」

だから『正しいと思う』選択をしただけだ。
その時だった。

「――ッ！」

テラスへと繋がる窓が開かれた。
振り向く優斗とマルスの視界にいたのはフィオナ。
手が震え、険しい様相をしている。
彼女の様子から、エリスから話を聞き終えたのは判断できた。

「フィオ――」

「私はっ！」

話しかける優斗を。
フィオナは遮った。
唇を噛みしめ、ぐっと目を伏せる。

「……私は……」

泣きそうになる。
声が震えた。

「……私は……っ！」

嫌だった。
大切な優斗の話を本人から聞けないなんて。

「……どんなに怖い内容だったとしても……優斗さんから直接聞きたかったです」

父も母も優斗から直接聞いているというのに。
自分だけは、伝え聞いた。

「……私は……直接話すほどの価値もないんですか？」

泣きそうになりながら問うフィオナ。
その様子に優斗は考えるよりも何よりも先に、否定の言葉を放った。

「違う！」

そうじゃない。

「……違うんだ」

言わなかったじゃない。

――できないんだ。

君に上手く話すことができなくて。
どうやってもありのままの自分しか伝えることができなくて。
少しでも和らげる話し方ができなくて。
でも、それが言い訳だということも否定できなくて。

「……僕は……」

怖いだけ。

「凄惨なことを話して君を怖がらせたくないんだ」

否定されたくない。

「上手く話せなくて君に嫌われたくないんだ」

大好きで。

大切で。
かけがえのない女性だから。

「幻滅されたり、否定されたりしたら……」

どうしていいか分からなかったから。
せっかく一歩を踏み出そうと思っていたのに。
その一歩の結果を少しでも良い方向に持っていく自信がなくて。
本当に弱々しい一歩を踏み出すことにした。

「……優斗さん……」

情けないぐらいに情けない、優斗の表情。
フィオナが初めて見る優斗の姿。

――こんなに不安そうな優斗さんを見るのは初めてですね。

いつもの強さは見る影もない。
人によっては、普段と違うからこそ幻滅してしまうかもしれないけれど。
自分は違う。

「しませんよ」

フィオナは優斗の頬を両手で優しく触れると、額同士を合わせた。
ほんの数センチのところで視線が合う。

「否定も幻滅もしません。どんな優斗さんでも私は受け入れます」

親を憎んでいたとしても、殺そうとしたとしても、弱虫だったとし

ても。

「例え過去に何があったとしても、です」

自分は受け入れてみせる。

優斗が自分にしてくれたように。

「貴方は私と出会った時、私を受け入れてくれました。無口で話すことが苦手な私を」

けれどもお喋りをしてみたい自分を。

「貴方だって緊張してたっていうのに、頑張って話しかけてくれました。優しく笑って私を受け入れてくれました」

ただ、ただ。

それが嬉しかった。

「だから今度は私の番です」

貴方がしてくれたように。

「辛い過去があるなら私が癒やしてあげます。弱虫な貴方がいるなら私が守ってあげます」

だって。

「だって私たちは――」

誓いも何もしていないけれど。

「――夫婦じゃないですか」

例えそれが。

「仮初めでも偽物でも今は……私は優斗さんの妻です」

ならば自分が優斗を信じないことも認めないことも許さないわけもない。

「だから貴方を支えます」

ここまで言って、やっとフィオナは微笑んだ。

「貴方を支えるのは私だけの特権です」

優しいフィオナの言葉が優斗に染み渡る。

「……ありがとう」

優斗はただ、それだけしか言えなかった。
今思えば、なんで怖がっていたのだろうと思う。
フィオナはこんなにも優しくて純粋で……何よりも強い女性なのに。
頬と額から伝わる彼女からの温もりに優斗の表情が綻ぶ。
が、ここにいるのは優斗とフィオナだけではなく、

「あー、お前たち。こういうことは親がいないところでやってくれると助かるんだが……」

非常に居づらそうにマルスが声をかけた。

「「す、すみません！」」

ぱっと二人が飛び退く。
ついさっきまでのシリアスな状況とは違い、一瞬で二人が茹で蛸になる。
何とも対照的な光景にマルスから笑いが漏れる。

「いや、なに。場所を考えてくれと言っただけだ。私は今のようなことを咎めるつもりは全くないぞ」

「お父様っ！？」

「いや、ちょっ、それは！！」

「はっはっはっ。私はそろそろ部屋に戻るとしよう。二人はこのままここに残るのかい？」

からかうようなマルスの問いかけに、

「戻ります！」

「私もです！」

真っ赤にしながら優斗とフィオナはそそくさと家の中へと入っていった。

マルスはそんな二人の様子を見ながら、再び座ってグラスを煽る。

「なんというか、見ていてもどかしいというのはこういうことなのだろうな」

気分が良かった。

優斗が自分の過去を話してくれたことも、義息子と娘の仲むつまじい様子を見れたことも。

「願わくば、あの二人が本当の夫婦になってくれると私もエリスも安心するんだが」

マルスにとって優斗以上にフィオナを預けるに足る人物など存在しない。

「なんて言っても、時間の問題か」

あの様子を見せられたら。

そう思うのも当然だろう。

最終結論：リア充は死ねばいい

本日、１１月も末日に向かってきたところ。

「しゃあっ！」

意気揚々と修が飛び出して木刀を一閃、振り抜こうとした。

「ぬるい！！」

その太刀筋を受け止めたのはレイナの父、近衛騎士団長だ。
模擬戦を行っているというので修が意気揚々と騎士団長を指名したのが事の発端で、現在二人は戦っている。

レイナの誘いで優斗、修、和泉、卓也は近衛騎士団の鍛錬場へと集まっていた。
どうにも一度、近衛騎士団の方々と修たちを会わせたかったらしい。

「やっぱり近衛騎士団長ともなれば修でも簡単には勝てない……っていうか負けるかな？」

「分からない。いくらなんでも、とは思うがそれで勝つのが修でもあるからな」

「そうか？　オレとしては何とも言えない」

口々に感想を言いながら二人の模擬戦を見る。
勇者と近衛騎士団の団長の戦いというのは、さすがに見ておもしろい。
気付けば始まってから４分弱が経過していた。

「シュウは型など関係ない振り回しているかのような戦い方だが、それで父上とこんなに長い時間やり合えるというのは凄いな」

感心するように言ったのはレイナ。
普段から周りが修のことをチートだのなんだの言っている理由をまざまざと見せつけられているようだ。

「制限時間って何分だっけ？」

「５分だ」

優斗の問いかけにレイナが答える。
にやりと優斗が笑った。

「じゃあ、ここで賭けをしようか。二人の勝負の結果がどうなるのか。賭けるのは、あとでフィオナ達が持ってきてくれるクッキー一枚」

「ほう、面白そうだ。修の勝ちに賭けよう」

最初に乗ったのは和泉。

「オレは引き分け」

続いて卓也も乗っかり、

「ならば私は父上が勝つほうに賭けよう」

レイナが断言し、

「僕も卓也と同じ引き分けで」

優斗が最後に選んだ。
戦いは最初よりも熱く繰り広げられており、修は木刀どころか蹴りなども加えてどうにかダメージを与えようとしていた。
が、百戦錬磨の騎士団長も紙一重でそれをかわす。
代わる代わる行われた攻防は、５分を経過した合図によって終わらせられる。

「あっした！」

修が木刀を納めて頭を下げた。

「私と5分戦えるとはさすがだ」

騎士団長に言葉を貰ってから修は優斗たちのところへ戻ってくる。

「やっぱ強いわ。勝てる気がしなかった」

満足そうに戻ってきた修……だが。

「馬鹿かお前は。勝てなくても勝て」

「何をしているのだお前は。素直に負ければ良いものを」

「僕は修が引き分けるって信じてたよ」

「オレもだ」

和泉とレイナにはボコボコに言われ、優斗と卓也には褒められた。

「……お前ら、俺で賭けてたな？」

「当然。オレと優斗はおかげでクッキーが一枚増量したよ」

イェイ、と優斗と卓也がハイタッチする。

するとそこで、騎士団長の声が響いた。

「続いて、模擬戦を行いたいものはいるか？」

騎士団長の問いかけに間髪いれずスッ、と手を上げた人物がいた。

副長だった。
女性で若干２２歳という若さながら実力と美貌を備え、副長の座を得たということをレイナから４人は散々聞かされていた。
あまり口数が多い方ではないが、的確な指導をしてくれるとも。

「誰とやりたい？」

「あの方との一戦を望みます」

手のひらで示されたのは優斗たちのグループ。
それだけでは誰かが分からないが、視線が１点に注がれていた。

「……えっ？」

優斗は視線が自分と合ったのに気付く。
気のせいだと思いたくて、ゆっくりと左を見た。
和泉とレイナが首を振る。
続いて右を見る。
修と卓也が優斗を指さした。
再び、優斗は副長に視線を向ける。
こくりと頷かれた。

「え？　何でですか？」

「興味があります。貴方様の実力に」

副長はどうやら優斗がこの世界で何をしてきたのか、知っているらしい。
ならば興味を持たれるのは仕方ないとは言える。

「あ～……卓也や和泉じゃ駄目ですか？」

「貴方様です」

断言された。

「いいじゃんか。やってみろよ、俺だって団長とやったんだし」

「副長とユウトの勝負。興味がないと言えば嘘になるな。私がまだ勝てたことがない相手でもあることだし」

「楽しんでこい。女性といえど近衛騎士団の副長。お前が適う相手でもあるまい」

「がんばれよ」

一様に優斗を励ます。

「……はいはい。ここで僕と副長が戦ったほうが面白いんだよね？」

「そういうこと」

全員に、ほとんど同時に頷かれた。

「まったく、女性を相手にするのって苦手なのに」

優斗は文句を言いながらも前へと向かう。
修から木刀を受け取って副長と相対した。
ゆったりとした動きで副長が構える。
たった、その動きだけでゾクリと悪寒がした。

――この人……半端なく強い。

この木刀での勝負。勝てる可能性はあまりなさそうだ。

とはいえ、こういった感覚を得るのは初めてじゃない。

部活で全国上位を相手にしたとき、修と勝負をしたとき。

何度もこの感覚を味わっている。

この時点で、相手が女性だから苦手……という感覚はとうに消えた。

――今回の場合だと、こういった相手に長期戦なんて無理。一発勝負でどうにかするしかないよね。

相手の強さを感じて優斗も気合いが入る。

右手に持った木刀を左脇に締まった。

「……逆袈裟か？」

レイナが興味深そうに呟いた。

「いや、イメージ的には居合いだろ」

呟きに修が答える。

「鞘はないのにか？」

「言ったろ。イメージだって」

優斗が狙っているのは最速最短勝負。

そして日本人が刀を使っての最速勝負を仕掛けるなら……居合いが一番に思い浮かぶところだろう。

「特に修練してるわけでもない木刀での勝負じゃ、長期戦に持っていっても優斗の勝ち目は薄い。つーか、ほとんどない。それなら、もっとも勝つ可能性があるのは相手の実力を把握しきれない最初の一太刀。そこに賭けたんだろ」

修の言ったことは優斗の考えとほとんど相違なかった。

そこはやはり修だ、と言うべきだろうか。

「……っ！」

副長が動く。

優斗も一歩、踏み出した。

副長の振り下ろす木刀と、優斗の横薙ぎに近い木刀の軌道が合わさって甲高い音が響く。

刹那、優斗の木刀が折れた。

模擬戦において木刀が折れることなど、ほぼない。

予想外の状態に周りがざわつく。

副長は多少崩れている体制を戻して告げる。

「……続けましょう」

「いいえ。僕の負けです」

続行を望む副長とは別に、優斗はあっさりと負けを認めた。

「ありがとうございました」

呆然としている副長に一礼してから、優斗は修たちのところへと戻っていった。

「まだ決着、ついていなかったんじゃないか？」

「そうだな。たかだか木刀が折れたぐらいで負けを認めるなんてさ」

「いや、木刀が折れたのは確かだけど……折れた以上の意味があるんだよ」

和泉と卓也がワイワイと言うが、レイナと修は苦笑している。
この二人は分かっていた。

「さすがにあれを避けられるとは思わんかったな」

「副長の人外っぷりが露見した、ということか」

「だよね」

示すように話した3人に、卓也と和泉が首を捻る。
それに気付いたレイナが説明を始めた。

「いいか、二人とも。今のは優斗の木刀が折れただけに見えただろ？」

二人同時に頷く。

「けれどな、あの一瞬で起こったのはそれだけじゃない。折れた木刀が飛んでいった場所、確認したか？」

「……どこだったか？」

「副長に向かってたはず」

「そうだ。ユウトは折れる瞬間をコントロールして折れた先を副長の顔に当てようとした。けれどそれを避けたんだよ、副長は」

「……マジで？」

「マジだ」

卓也の問いかけに、レイナが頷く。

「だろ？　ユウト」

「その通り。あんなの避けられるってどういう反射神経してるんだろ。僕だって反射神経には自信あるけど、かわしきれるか分からないのに」

「いや、私はむしろ折れると思った瞬間に折れた先をコントロールしようとして、あまつさえ当てようとするお前の考えもわからん」

「しょうがないでしょ。ああするしか勝ち目なかったんだから」

と、話していると副長が優斗たちのもとへと歩いてきた。

そして来て早々、

「先ほどの勝負、もう一度できませんか？」

再戦要求をしてきた。

優斗は笑顔でさっくりと断る。

「勘弁してください」

「し、しかし、あれで決着がついたとも言い辛いでしょうし」

「あれは僕の負けです。木刀を折られるだけでも負けに等しいのに、せめてもの一撃とした折れた部分すらもかわされて。完膚無きまでに僕の負けです」

「しかし貴方様ほどの実力の持ち主なら……」

ごにょごにょと話し始める。
何か駄々をこねる子供のように見えた。
後ろで聞いていた修、和泉、卓也、レイナが小声で話し始める。

「なに、あれ？」

とりあえず修がレイナに訊いてみる。
彼女が一番事情に詳しそうだった。

「あ～……副長はだな、その……ユウトたちのファンらしくてな。ユウトと勝負ができる今日をとても楽しみにしていたそうだ」

「なぜだ？」

「彼女は近衛騎士団副長だ。つまりはお前らの詳細を知っているわけで、お前らがこの世界でこなしてきたことに対しても知っている」

「オレらがやってきたこと……というより、優斗がやったことか？」

「その通りだ。シュウもユウトと同じくらいイカれたことはやって

いるが、それ以外も奇行で騒がれてるしな。その点、ユウトは安心だ。こと戦闘においては報告があるだけでもAランクの魔物のカルマ、シルドラゴンの単独撃破。黒竜の共同撃破にパーティーで起こった暗殺未遂事件の解決、隣国リステルでの大立ち回り。さらに使う魔法はオリジナルの神話魔法に精霊術」

ざっ、と略歴を並べてみる。

「戦闘以外でもマリカの父親でもある。いくら副長でも年頃ではあるわけだし、ユウトの詳細を知っていれば興味を持つのは当然だろう」

「それもそうか」

しみじみと卓也が頷く。

◇　◇

それからしばらくして、アリーとフィオナがクッキーを持ってきた。優斗はまだ副長に捕まっており、再戦要求はされていないが魔法に

ついて話すことになっているようだった。
離れた場所でいろいろと手振り身振りを加えていた。

「皆様、お疲れ様です」

アリーが飲み物と一緒にクッキーを配り始める。
フィオナに連れてこられていたマリカもクッキーの袋を手にとっては渡していた。

「おっ、マリカも一緒に来たんだ」

修がフィオナに抱かれているマリカの頭をポンポンと触る。

「一緒にお出かけしたかったので。あと、優斗さんはどこにいます？」

「あいつなら、さっきから副長に捕まってんよ」

修が指さす。
二人で仲良く話している姿がフィオナの目にも映る。

「……そうですか」

勇者である修が一瞬、ゾクリとした。
フィオナは無表情のまま優斗のところへと向かう。

「あれ、やばくね？」

少しばかり焦った表情で修がレイナたちに言う。
けれどレイナは問題ない、とばかりに手を振った。

「大丈夫だ。さっき“ユウトたち”と言ったろう。それにはフィオナも加わっている」

「そうなん？」

「公爵令嬢でありながら世界でも稀な精霊術の使い手だからな。凄い相手には目がないんだ、副長は」

「そういうことか」

とそこにいるメンバーは納得する。

が、その時の優斗たちはというと――

◇　◇

「……優斗さん」

優斗が副長と話しているところにフィオナが来る。

その第一声を聞いただけで怒ってることが把握できる。

「フィ、フィオナ？」

「なんですか？」

「どうして、その……怒ってるの？」

「怒っていませんが」

いや、嘘。

毎度毎度、そういって怒ってなかった例しがない。

その一方で副長はやって来たフィオナとマリカにさらに目を輝かせる。

「マリカ様とフィオナ様ですね」

「そうですが」

「精霊術の使い手として名高いフィオナ様と龍神様。この目で見ることができて感激です」

尊敬のまなざしを一身に受けて、さすがのフィオナも毒気を抜かれる。

「あ、ありがとうございます」

「先ほどからユウト様にも様々な話を伺っていましたが、やはり素晴らしいです。ですから――」

それからずっとべた褒めが続く。

その間にフィオナからクッキーや飲み物を受け取る。
そして2分ほどして、ようやく言葉が途切れた。
が、質問が代わりに飛んでくる。

「お二人は龍神様のために夫婦役をやっていると聞いておりますが、間違いありませんか？」

「ええ、その通りです」

優斗は頷きながらクッキーをかじり、飲み物を口にする。

「では龍神様に無事、迎えが来たあとでいいので私と結婚などはいかがでしょうか？」

「――ッ！」

唐突な言葉に優斗は口にした飲み物を吹き出した。
同時に隣にいるフィオナの威圧が復活する。

「な、なぜにそんな話を？」

脂汗を垂らしながら優斗は慎重に話を伺う。

「父がいい歳なのだから異世界の客人の一人でも婿様にしたらどうだ、と言っていまして。それならば貴方様にでも婿になっていただこうかと」

フィオナの威圧感が増す。
隣にいる優斗の脇腹も抓り始めた。
痛いが、我慢する。

「さ、先ほどは僕たちのファンだと仰っていませんでしたか？」

「ええ。ファンだからこそ婿様になっていただこうと思いまして」

ひょうひょうと告げる副長。

「す、すみませんがご遠慮させていただきます。貴女と家庭を作るイメージができませんので」

威圧と脇腹の痛みで顔が強ばるが、どうにか否定の言葉をひねり出す。

それを告げると、特に傷ついた様子なく副長は頷いた。

「それならば仕方ありません。どなたか良い殿方はいらっしゃらないでしょうか？」

「僕がおすすめできるのはすみませんが、いませんね」

「分かりました」

副長が納得したところで、彼女が部下に呼ばれる。

「すみませんがこれで失礼いたします。また近いうちにお二人からもお話を伺いたいと思いますので、その時は是非」

頭を下げて副長が二人の前から去って行く。

残されたのは優斗とフィオナ。

彼女に抱かれているマリカは先ほどから黙ったままだ。

「あの……」

「優斗さん」

いつぞやのリステルで起こった事件で、優斗が使ったような声音をフィオナが発した。

脇腹を抓る力が強まる。

「どういうことでしょうか？」

「な、なんのことでしょうか？」

「先ほど、求婚されていたように見受けられますが」

「い、異世界の人間なら誰でもいいように話していたと思います」

なぜか丁寧な言葉使いになる優斗。

「でも最初は優斗さんに訊いたんですよね？」

「ファ、ファンだと仰ってましたから」

「優斗さんはあのような方がいいのですか？」

「い、いえ。僕の好みとはかけ離れております」

「けれど美人な方でしたよ」

「ぼ、僕にはもっと美人で可愛い方が妻にいますので」

それを言った瞬間、フィオナの表情が緩んで抓る力も弱くなる。
が、すぐに表情を戻して抓り直す。

「そ、そんなことを言っても無駄です」

それでも嬉しそうな気配は消えない。
これ幸いと優斗は状況の好転を謀る。

「マリカもパパとずっと一緒にいるのはママがいいよね？」

「あいっ！」

黙り込んでいたマリカに話を振ると、マリカは元気よく返事した。

「ほら。マリカも僕の隣はフィオナがいいってさ」

優斗は言いながらフィオナからマリカを受け取る。
ついでに脇腹を抓っている指を外す。

「ママは怖いね～。パパはママがいいって言ってるのに、信じてくれないんだよ」

「あぅ～」

優斗とマリカが二人してフィオナを責めるように言う。
いつのまにか形勢逆転していた。

「わ、私が悪いんですか！？」

「僕だっていきなり言われたところで、はいそうですと頷くわけな

いじゃないか。それに恋愛感情じゃなくて損得で結婚申し込まれてもね」

マリカをあやしながらフィオナを責め立てる。

「ママはパパがそういう人だと思ってたんだって。ショックだね、マリカ」

「あい」

「ちょ、ちょっと待ってください！　そうじゃないんです！」

逆に必死に弁明をするフィオナ。

そんな3人の様子を見ていたレイナたちはと言えば、

「あれ、なに？」

「痴話喧嘩じゃないの？」

修の呆れた言葉に、さらに呆れた様子で言葉を返す卓也。

「リア充死ねばいいのに」

「イズミ。なんだ、その“りあじゅう”というのは？」

「気にするな。ただの妬みの言葉と思ってくれ」

変なところで変なすれ違い

寒空となった12月。
フィオナはアリー、ココ、リル、そして卓也を集めて相談をしていた。

「寒さも強くなってきたのでマフラーと手袋を編んであげたいんです」

「へぇ、いいじゃない。ユウトもマリちゃんも喜ぶわよ」

「それでですね。内緒に編んで驚かせたいんですけど、どうしたらいいですか？」

「……えっと、驚かせたい気持ちはよく分かりますが、どういうことなのですか？」

アリーが逆に問う。

「優斗さんは聡いので、絶対にバレちゃうと思うんです。それでバレないための策を皆さんに提案してもらえたら、と思いまして」

フィオナの言葉に全員が「確かに」と納得する。
彼女が優斗に隠し事を通しきれるとは思えない。

「策って言っても、ユウトさんが近づいてきたら逃げるとか」

「わたくしもそれぐらいしか思い浮かびませんわ」

「あたしも」

「じゃあ、そうしたほうがいいですね」

女子勢が和気藹々と話が進行していく。
が、そこで卓也がストップをかけた。

「オレとしてはお勧めしないな。その案は」

「どうしてです？」

「相手が優斗だからだよ」

卓也の言うことにフィオナ達は聞き耳を立てる。

「フィオナが驚かせたいっていう気持ちも分かるけど、オレは素直に編み物を作ってあげてプレゼントしたほうがいいと思う。優斗の性格を考えたらな。それでも目一杯喜んでくれる奴だよ」

「ユウトさんの性格を考えたところで、今言ったことに何か問題があるようには思えないのですけれど」

こういうイベントに目がないアリーが反対する。

フィオナもココもリルも同様だ。

「甘い。あいつは基本的に全力でネガティブだ。そんなことやられたら、どう勘違いするか分からないって。後に問題になりそうなことは断つべきだ」

「大丈夫じゃないの？　ユウトとフィオナに問題起こるわけないでしょ」

「そうです」

「私もそこまで問題があるとは思えないのですが……」

平然としている女子勢。

卓也は一つため息をつくと、

「一応は止めたからな。問題が起こっても知らないぞ、オレは」

そう告げた。

◇

◇

翌日、優斗が朝起きるとリビングにフィオナがいなかった。
すでに朝食を取り終わってゆっくりしているマルスとエリスが「おはよう」と言ってきたので、優斗も言葉を返す。
フィオナがいないなんて珍しいこともあるんだな、とテーブルについて食事を始める優斗。

「義母さん、フィオナはどうしたんですか？」

「あの子ならもう出て行ったわよ」

「こんな朝早くからですか？」

「あら？　ユウトも知らなかったの？」

「ええ、何も聞いてませんけど……」

エリスと優斗、二人してハテナマークを浮かべる。

「何かしら急ぎの用事でもあったのではないかな。特に気にすることもないだろう」

「そうですね」

「そうね」

マルスに優斗もエリスも頷く。

けれども学校に着いてからというもの。

「フィオナ。今朝って何か用事が――」

「すみません！　用事がありますので！」

優斗が話しかけようとすると、

「フィオナ。あのさ――」

「アリーさんに呼ばれてますので！」

物の見事に、

「フィオ――」

「すみません！」

避けられた。

あまりにも不自然な状況に優斗も困惑する。

「……何かやったっけな？」

自分の過去を思い返すが、それほど大きな失敗はない。
と、和泉が困惑している優斗のところへやってくる。

「どうしたんだ？」

「なんか、フィオナに避けられるようになった」

「何かしたのか？」

「いや、記憶があるうちはやってない」

「そうか……」

そう言われると和泉も手助けのしようがないが、取っ掛かりを見つけるぐらいは相談に乗ろうと思う。

「一緒にいては困る、もしくは一緒にいるところを見られては困ることがあるのか？」

「そんな話を聞いた覚えはないんだけど……」

と、優斗は言ったところで、可能性を一つ思い付く。

「もしかして……」

「何か思い付いたのか？」

和泉が訊く。
基本的には優斗の予想は当たるのだ。

「とりあえずは。ただ、確証が持てないから、もうしばらく待ってみるよ。気のせいかもしれないし」

「……？　まあ、よく分からないが解決できそうならいい」

◇　◇

「それで、首尾はどう？」

「大丈夫です。優斗さんには悟られていません」

「それなら一安心ですわね」

「よかったです」

女子勢が集まって話し合う。

「手編みのマフラーと手袋はどこまで出来ているのですか？」

「まーちゃんの分は完成しました。あとは優斗さんのマフラーですね」

「早く渡して驚かせてください」

「時間が経つほどフォローも苦しくなるしね」

「はい。頑張ります」

こそこそと話し合う。

それを視界に入れてる卓也は、ため息をつく。

――楽しみにしてるのはいいんだけど、優斗のことは考えてるのか？

卓也の視界の端では、優斗が真面目な表情をしながら女性陣を見ていた。

さすがにフィオナの避けられ続けてからというもの、うかつの近付くことはなくなった。

――優斗のやつ、碌でもない方向に考えが及ばないといいんだけど。

優斗のネガティブ思想はチームで一番酷い。

何か問題が起こったとき、プラスに考えることはない。

それが今回も同様だった場合、問題になるのは目に見えてる。

◇　◇

フィオナが優斗を避けてから、数えること5日。
今でもフィオナの態度は変わることがなかった。
家でも学院でも優斗との接触を極力断つようにしていた。
和泉は少し前に相談に乗った手前、心配になって優斗と二人での帰り道で問いただしてみる。

「おい、フィオナは一体どうしたんだ？」

「……あくまで僕の予想でいい？」

「それでいい」

和泉が頷く。

「たぶんだけど、誰かに惚れてるんじゃないかな？」

「……はぁっ！？」

すっ飛んだ発想にさすがの和泉も驚く。

「だから、誰かに惚れた。そう考えると僕と一緒のところを見られて勘違いされるのが嫌なのも理解できるよ」

「いや、ちょっと待て。いくらなんでも発想が突飛すぎるだろう」
優斗にベタ惚れだったフィオナが優斗以外に好きな人ができるなどありえない。
「そうでもないよ。それだったら数日間、僕と接触を極力避けてきたことにも納得できる」
そう答える優斗に和泉は何でそうなる、と問いかけたくなる。
が、優斗のネガティブ発想は今に始まったことではないと考え直す。
――中学のときからそうだ、こいつは。
常に最悪のところに考えを置いて、そこから対処する方法を考え出す。
良い方向に考えることがほとんどない。
それが今は、明らかに裏目に出てる。
「あとは――」
言葉を続けようとした優斗が一瞬、驚いて、困ったような顔をして、すぐに表情を戻した。
その変化を見た和泉は優斗の視線の先を辿る。
商店で楽しそうに買い物をしている修とフィオナの姿がそこにはあった。
「……修、なのかな。フィオナの好きな人って」
「そんなわけがないだろう」

「分からないよ。主人公がハーレムっていう話はたくさんあるし、アリーもフィオナも綺麗どころだから、修のハーレム一員になるっていうことなのかもしれない」

「馬鹿か、そんなわけがないだろう」

和泉がもう一度、否定する。

けれど優斗は踵を返して違うルートで帰り始める。

「まあ、修じゃないのかもしれないけど、それでも僕を避けてるのは確か。今のところ、僕がフィオナに一番近しいのは間違いなかったとは思う。だからこそ相手に勘違いされないために、ね」

足早に優斗は去って行く。

表面上は普通だが、その場にいたくなかったのは明らかだ。

「……とりあえずフィオナのこと、応援しないとね。そのためには僕の気持ちを封印して、それでフィオナとはあくまで『家族』として接するようにしないと」

「待て、優斗！」

和泉が引き留めようとするが、優斗は止まらない。

「ごめん、和泉。ちょっと心の整理をしたいからさ、今日はこのまま一人で帰らせてもらっていい？」

「……そんなこと、させると思うか？」

とてつもない勘違いをさせたまま、帰らせるわけにもいかない。

「フィオナがどういう理由でお前を避けてるかは知らないが、少なくともお前が考えている理由じゃないはずだ」

「それ、論破になってないよ。どういう理由なのかが分からないから、僕が言った理由であるのかもしれない」

「しかし……」

「例え、僕の言っていることが間違っているとしても、唯一分かってるのはフィオナが僕を避けてること。それは覆すことのできない事実で、常識的に考えてポジティブに捕らえることはできない出来事だ」

急に避けられたら、誰だってそう思う。

「だったら……分かるだろ？」

「……お前の言いたいことは分かるが」

和泉としても、そう持ち出されたら納得せざるを得ない。

「とりあえずさ、気持ちを落ち着けたいんだ。だからごめん」

そう言って優斗は走る。

元々、身体能力でも絶対の差がある二人。

すぐに和泉の視界から優斗の姿がなくなった。

優斗は和泉を引き離すと、歩きながらゆっくりと考える。

「フィオナが僕の避けてるなら、僕からもある程度は距離を置かないといけないよね。でないとフィオナがやってることが無意味になる」

今後、どうやってフィオナと接していこうか。

「最初のうちは呼び名を『フィオナさん』に戻して、口調も最初に会った頃にしよう。これをアピールしていけば、フィオナもあそこまで露骨に避ける必要はなくなるはずだし」

うん、と優斗は頷く。

「それで落ち着いたらフィオナを妹的な存在として見ていこう。初恋の相手だし、そういう視点で見ることはなかなか出来ないかもしれないけど、僕なら時間が経てば出来る」

そういう人間だ、自分は。

「マリカもできるかぎり、僕が見てあげないと。マリカのせいでフィオナに迷惑を掛けたくないし、最悪の場合は僕一人で面倒を見ることも視野に入れないと」

責任感が強いフィオナのことだから育てる気はあるだろうが、フィオナの懸想の相手からしたら迷惑かもしれない。

「とりあえずはこれぐらい、かな」

そう言って優斗は胸元を触る。

「……大丈夫。こういうことには慣れてるし」

今更、それが一つ二つ増えたところで問題はない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5883t/

巻き込まれ異世界召喚記

2011年10月14日09時22分発行